岐阜県文化財保護センター調査報告書　第38集

西　屋　敷　遺　跡

東海環状自動車道建設工事に伴う
緊急発掘調査報告書

1998

建設省　中部地方建設局
岐阜国道工事事務所

財団法人　岐阜県文化財保護センター

西屋敷遺跡遠景

西屋敷遺跡Ⅰ・Ⅱ区近景

西屋敷遺跡III区遠景

西屋敷遺跡III区近景

序

本報告書は、平成８年度に実施した東海環状自動車道建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査をまとめたものであります。調査対象の遺跡は、岐阜県関市池尻西屋敷地内に所在する「西屋敷遺跡」です。

本遺跡の所在する関市池尻地区には、ムゲツ氏の氏寺として知られる国指定史跡弥勒寺跡、武儀郡の郡衙と考えられる弥勒寺東遺跡等数多くの遺跡が知られており、古代における重要な拠点でありました。

本報告書では中世から近世の畦畔を伴う水田遺構が検出され、池尻地区西側の生産空間の一端が復元できたものと考えます。当地域では、中濃用水が建設されるまでは、水資源の確保が非常に厳しい土地柄でありました。そうした中、我々の先人達が、自然地形を利用し、水田経営を行って来た実態が明らかになったものと考えます。また、出土した多数の遺物からは、周辺に縄文集落、古墳、古窯跡の存在は言うまでもなく、中世集落の存在等を示唆する材料が提示できたものと考えます。今後、周辺遺跡との関わりが解明されることが期待されます。

なお、本報告書が刊行されるまでには、関係諸機関並びに関係者各位、関市教育委員会、地元地区の皆様からの多大なご支援、ご協力を賜りました。

末尾ではありますが、お世話になりました方々に改めて厚くお礼申し上げます。

平成10年３月

財団法人　岐阜県文化財保護センター
理事長　篠　田　幸　男

例　　言

1．本書は、岐阜県関市池尻字西屋敷地内に所在する西屋敷遺跡（遺跡番号21205-08795）の発掘調査報告書である。

2．本調査は、東海環状自動車道建設工事に伴う発掘調査で、建設省中部地方建設局岐阜国道工事事務所から岐阜県教育委員会が委託を受け、発掘調査は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

3．発掘調査は、八賀晋三重大学教授の指導のもと、平成７年度の試掘調査を安江祥司、大橋弘志、小淵忠司、平成８年度発掘調査を安江祥司、富田雅之、小塩康真、平成９年度整理作業を大橋弘志、小塩康真が担当した。

4．本書に掲載した遺物の実測及びトレースは次の者が行った。

武藤美和子・今尾さち子・小木曽美智・國井　悦子・薮下賀代子・大橋　弘志・小塩　康真

5．本書の執筆分担は、目次に示したほか、文末にも付しその責を明らかとした。

6．空中写真撮影は（株）イビソクに委託して行った。

7．自然科学分析はパレオ・ラボに委託して行った。

8．遺物の写真撮影は佐藤右文氏に委託して行った。

9．発掘調査及び報告書の作成にあたって次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力いただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略、順不同）

八賀　晋・惠良　宏・関市教育委員会

10．発掘調査作業ならびに調査記録及び出土品の整理等には次の者が参加した。

（発掘作業員）　平田　鐘二・奥田美代子・片桐とき江・市橋　弘子・桜井　和子・平田　淳子
増井　育子・柴田　竜彦・清水　亜仁・多田千恵子・助川他づ代・後藤　友幸・細辻　嘉門
松井　昭一・神山　春夫・井上　実・高井　譲・三島　彰・本多　敏夫・藤原　守
高岡　良夫・後藤　謙・太田美代治・長沢　秋雄・藤崎　工・高田　桂子・松岡　初美
奥田しげ子・杉山　陽子・友納千代子・北川　政子・片桐小夜子・後藤　清子・丹羽　輝美
後藤　慶二・平田　静男・山田たつ子・松田登女子・広田　徳子・池田　一男・大角　孝子
鐙家　徳芳・武藤　典子・増井　彩・尾関　正・田島　豪人・下家彩恵子・高橋　妙子
衣笠　正子・松岡喜美子・後藤　次正・永田　茂生・粥川八重子・粥川　満・冠者　栄作
増田　真弓・森　許良・伊藤　守・平光　進・中村　光嗣・佐藤　和江・佐藤鋼二郎
林　重夫・片桐かなえ

（整理補助調査員）武藤美和子（整理作業員）今尾さち子・小木曽美智・國井　悦子・薮下賀代子

11．本報告書で使用した土層、遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』財団法人日本色彩研究所、1996年に拠った。

12．調査記録及び出土品は当センターで保管している。

目　　次

序
例言
第１章　調査の経過……（小塩　康真）……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　発掘調査の経過と方法……4
第２章　遺跡の環境……（小塩）……6
　第１節　地理的環境……6
　第２節　歴史的環境……9
第３章　遺　構……（小塩）……12
　第１節　基本層序……12
　第２節　遺構概要……15
　第３節　Ⅰ・Ⅱ区第１遺構面の遺構……15
　第４節　Ⅰ・Ⅱ区第２遺構面の遺構……19
　第５節　Ⅰ・Ⅱ区第３遺構面の遺構……26
　第６節　Ⅲ区第１遺構面の遺構……31
　第７節　Ⅲ区第２遺構面の遺構……39
第４章　遺　物……41
　第１節　遺物概要……（大橋　弘志）……41
　第２節　土器類……（大橋）……42
　第３節　土製品……（大橋）……90
　第４節　木製品……（武藤美和子）……101
　第５節　金属製品……（小塩）……111
　第６節　石製品……（大橋）……128
第５章　自然科学分析……139
　第１節　西屋敷遺跡の花粉分析……（新山　雅広）……139
　第２節　西屋敷遺跡から出土した大型植物化石……（新山）……145
　第３節　西屋敷遺跡のプラント・オパール……（鈴木　茂）……150
　第４節　西屋敷遺跡出土木製品の樹種同定……（松葉　礼子）……154
　　付　放射性炭素年代測定……（山形　秀樹）……158
第６章　まとめ……160
　第１節　遺構について……（小塩）……160
　第２節　遺物について……（大橋）……162

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……1
第２図　試掘位置図……2
第３図　グリッド設定図……5
第４図　池尻村字絵図……8
第５図　周辺の遺跡……11
第６図　西屋敷遺跡土層断面図……13
第７図　溝セクション図……16
第８図　II区第１遺構面　遺構配置図……17
第９図　TR１・TR２南壁セクション図　…19
第10図　Ⅰ区第２遺構面　遺構配置図……21
第11図　II区第２遺構面　遺構配置図……23
第12図　TR３東壁セクション図・SN４
　　実測図……25
第13図　TR２南壁セクション図　……26
第14図　Ⅰ区第３遺構面　遺構配置図……27
第15図　II区第３遺構面　遺構配置図……29
第16図　SK１実測図　……32
第17図　III区第１遺構面　遺構配置図……33
第18図　III区第２遺構面　遺構配置図……35
第19図　SK２実測図　……37
第20図　SK３実測図　……37
第21図　SK６実測図　……38
第22図　TR１東壁セクション図　……39
第23図　出土遺物（１）……63
第24図　出土遺物（２）……64
第25図　出土遺物（３）……65
第26図　出土遺物（４）……66
第27図　出土遺物（５）……67
第28図　出土遺物（６）……68
第29図　出土遺物（７）……69
第30図　出土遺物（８）……70
第31図　出土遺物（９）……71
第32図　出土遺物（10）……72
第33図　出土遺物（11）……73
第34図　鈴模式図……90
第35図　土錘模式図……90
第36図　出土遺物（12）……93
第37図　出土遺物（13）……94
第38図　出土遺物（14）……95
第39図　出土遺物（15）……103
第40図　出土遺物（16）……104
第41図　出土遺物（17）……105
第42図　出土遺物（18）……106
第43図　出土遺物（19）……107
第44図　出土遺物（20）……108
第45図　出土遺物（21）……109
第46図　出土遺物（22）……113
第47図　出土遺物（23）……114
第48図　出土遺物（24）……115
第49図　出土遺物（25）……116
第50図　出土遺物（26）……117
第51図　出土遺物（27）……118
第52図　出土遺物（28）……119
第53図　出土遺物（29）……120
第54図　出土遺物（30）……121
第55図　石鏃の計測法模式図　……128
第56図　出土遺物（31）……131
第57図　出土遺物（32）……132
第58図　出土遺物（33）……133
第59図　出土遺物（34）……134
第60図　出土遺物（35）……135
第61図　出土遺物（36）……136
第62図　Ⅰ区C29（A地点）の花粉化石
　　分布図　……143
第63図　G23黒色土とC29泥炭の花粉化石
　　分布図　……144
第64図　各地点の試料採取層準　……151
第65図　F22地点のプラント・オパール
　　分布図　……153
第66図　E24地点のプラント・オパール
　　分布図　……153
第67図　D25地点のプラント・オパール
　　分布図　……153
第68図　C29地点のプラント・オパール
　　分布図　……153
第69図　製品別樹種同定一覧　……155
第70図　Ⅰ・II区における遺構面別の
　　器種構成比率　……162
第71図　第II層における地区別の
　　器種構成比率　……163
第72図　第III層における地区別の
　　器種構成比率　……163

表　目　次

第１表　近世における池尻村村況……7
第２表　周辺の遺跡地名一覧……11
第３表　溝一覧表……16
第４表　Ⅰ区畦畔一覧表……25
第５表　Ⅱ区杭列一覧表……25
第６表　Ⅰ区水田一覧表……26
第７表　Ⅱ区水田一覧表……31
第８表　Ⅲ区杭列一覧表……38
第９表　Ⅲ区土坑一覧表……38
第10表　Ⅲ区畦畔一覧表……40
第11表　山茶碗Ｂ対応表……43
第12表　土器類観察表（１）……74
第13表　土器類観察表（２）……75
第14表　土器類観察表（３）……76
第15表　土器類観察表（４）……77
第16表　土器類観察表（５）……78
第17表　土器類観察表（６）……79
第18表　土器類観察表（７）……80
第19表　土器類観察表（８）……81
第20表　土器類観察表（９）……82
第21表　土器類観察表（10）……83
第22表　土器類観察表（11）……84
第23表　土器類観察表（12）……85
第24表　土器類観察表（13）……86
第25表　土器類観察表（14）……87
第26表　土器類観察表（15）……88
第27表　土器類観察表（16）……89
第28表　土製品類観察表……96
第29表　陶製加工品観察表……96
第30表　土錘観察表（１）……97
第31表　土錘観察表（２）……98
第32表　土錘観察表（３）……99
第33表　土錘観察表（４）……100
第34表　木製品観察表（１）……110
第35表　木製品観察表（２）……110
第36表　鉄製品観察表（１）……121
第37表　鉄製品観察表（２）……122
第38表　銅製品観察表（１）……122
第39表　煙管雁首観察表（１）……122
第40表　煙管雁首観察表（２）……123
第41表　煙管吸口観察表（１）……123
第42表　煙管吸口観察表（２）……124
第43表　鉛玉観察表（１）……124
第44表　鉛玉観察表（２）……125
第45表　銭貨観察表（１）……125
第46表　銭貨観察表（２）……125
第47表　銭貨観察表（３）……125
第48表　銭貨観察表（４）……125
第49表　銭貨観察表（５）……126
第50表　銭貨観察表（６）……126
第51表　銭貨観察表（７）……127
第52表　銭貨観察表（８）……127
第53表　石鏃計測表……137
第54表　磨製石鏃計測表……137
第55表　有抉石器計測表……137
第56表　敲石計測表……137
第57表　打製石斧計測表……138
第58表　磨製石斧計測表……138
第59表　石錐計測表……138
第60表　砥石計測表……138
第61表　石器類計測表……138
第62表　池尻・広見地区Ⅰ区Ｃ29（Ａ地点）の花粉化石一覧表……140
第63表　Ｇ23黒色土とＣ29泥炭の花粉化石一覧表……141
第64表　大型植物化石一覧表……147
第65表　試料１ｇ当りのプラント・オパール個数……152
第66表　西屋敷遺跡の樹種同定結果……157

写真図版目次

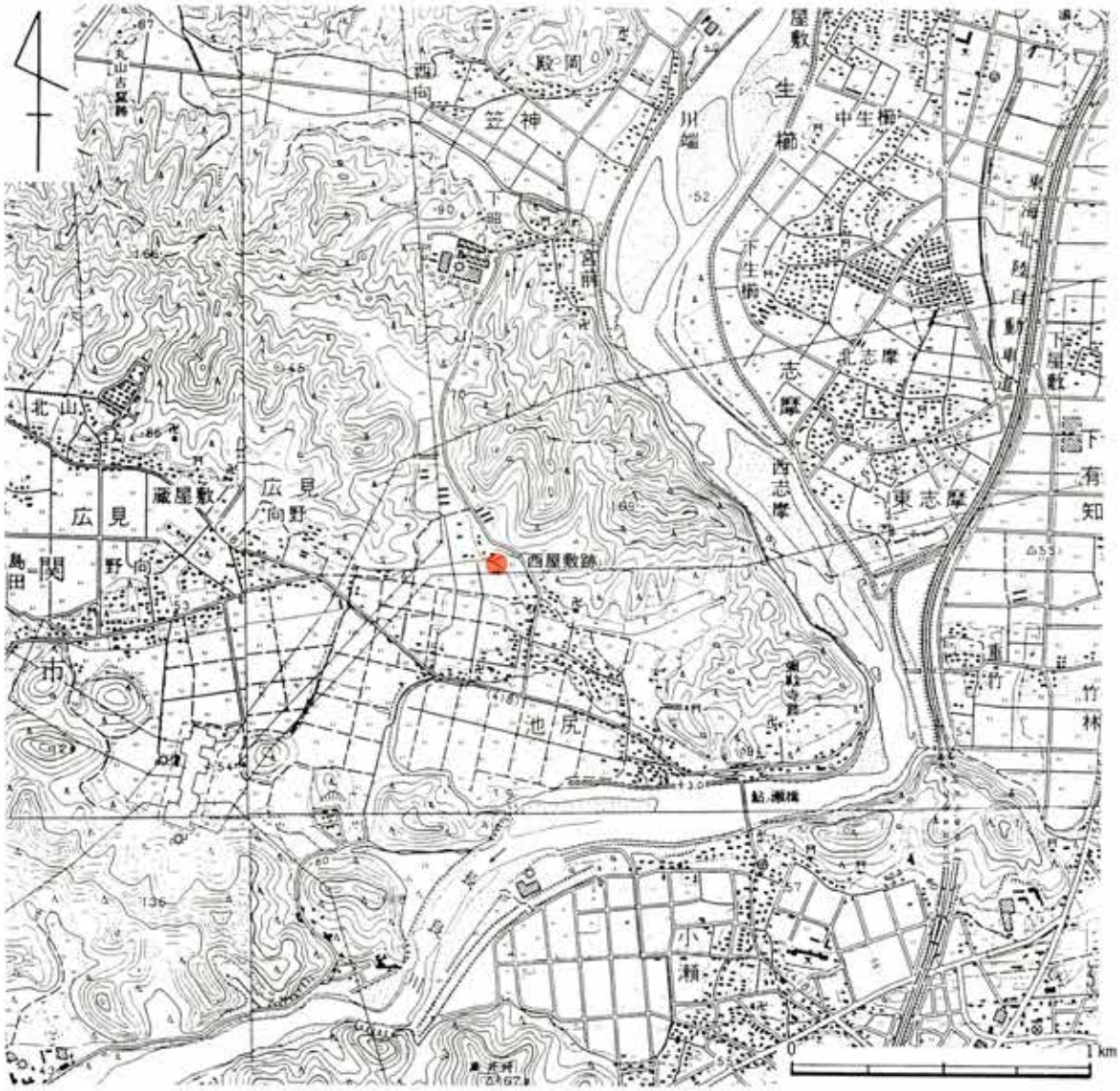
図版１　遺構図版（１）
図版２　遺構図版（２）
図版３　遺構図版（３）
図版４　遺構図版（４）
図版５　遺構図版（５）
図版６　遺物図版（１）
図版７　遺物図版（２）
図版８　遺物図版（３）
図版９　遺物図版（４）
図版10　遺物図版（５）
図版11　遺物図版（６）
図版12　遺物図版（７）
図版13　遺物図版（８）
図版14　遺物図版（９）
図版15　遺物図版（10）
図版16　遺物図版（11）
図版17　遺物図版（12）
図版18　遺物図版（13）
図版19　遺物図版（14）
図版20　遺物図版（15）
図版21　遺物図版（16）
図版22　遺物図版（17）
図版23　遺物図版（18）
図版24　遺物図版（19）
図版25　遺物図版（20）
図版26　遺物図版（21）
図版27　遺物図版（22）
図版28　遺物図版（23）
図版29　遺物図版（24）
図版30　遺物図版（25）
図版31　遺物図版（26）
図版32　遺物図版（27）
図版33　遺物図版（28）
図版34　遺物図版（29）
図版35　遺物図版（30）
図版36　遺物図版（31）
図版37　遺物図版（32）
図版38　遺物図版（33）
図版39　遺物図版（34）
図版40　遺物図版（35）
図版41　遺物図版（36）
図版42　自然科学分析図版（１）
図版43　自然科学分析図版（２）
図版44　自然科学分析図版（３）
図版45　自然科学分析図版（４）
図版46　自然科学分析図版（５）
図版47　自然科学分析図版（６）

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経過

東海環状自動車道は名古屋の都市機能、名古屋と周辺諸都市の機能分担を効果的に進めると共に、現在都市内の交通混雑を解消し、都市全域の道路機能の回復を図るため、計画された路線である。

財団法人岐阜県文化財保護センターでは、建設工事に伴い、関市池尻・広見地区にて、1995年（平成７）６月20日から1996年（同８）３月29日迄試掘調査を実施した[1]。試掘調査区である池尻地区は、長良川段丘上の最も高い位置にあたり、ほぼ全域で大正年間に圃場整備が行われ、現在は水田として利用されている。字坂田東洞から県道上野・関線を横断して字黒田に至る谷間（中濃用水東側地域）に作られた水田は圃場整備が行われておらず、北西側から緩やかに傾斜する山地に近接し、水田１枚



第１図　遺跡位置図

毎に南西に向かって階段状に低くなる。広見地区の調査区は同地区東端にあり、武儀川左岸の沖積地と長良川右岸の沖積地の重なる地域にあたり、以前はかなり起伏に富んだ畑地と小山が見られる地形であった。現在は、中濃用水の建設と圃場整備により水田として利用されるようになった。この時、機械による大規模な掘削が行われており、表土が広範囲にわたって移動していると考えられる。また、調査区における踏査では、中世の遺物が多く採集された。

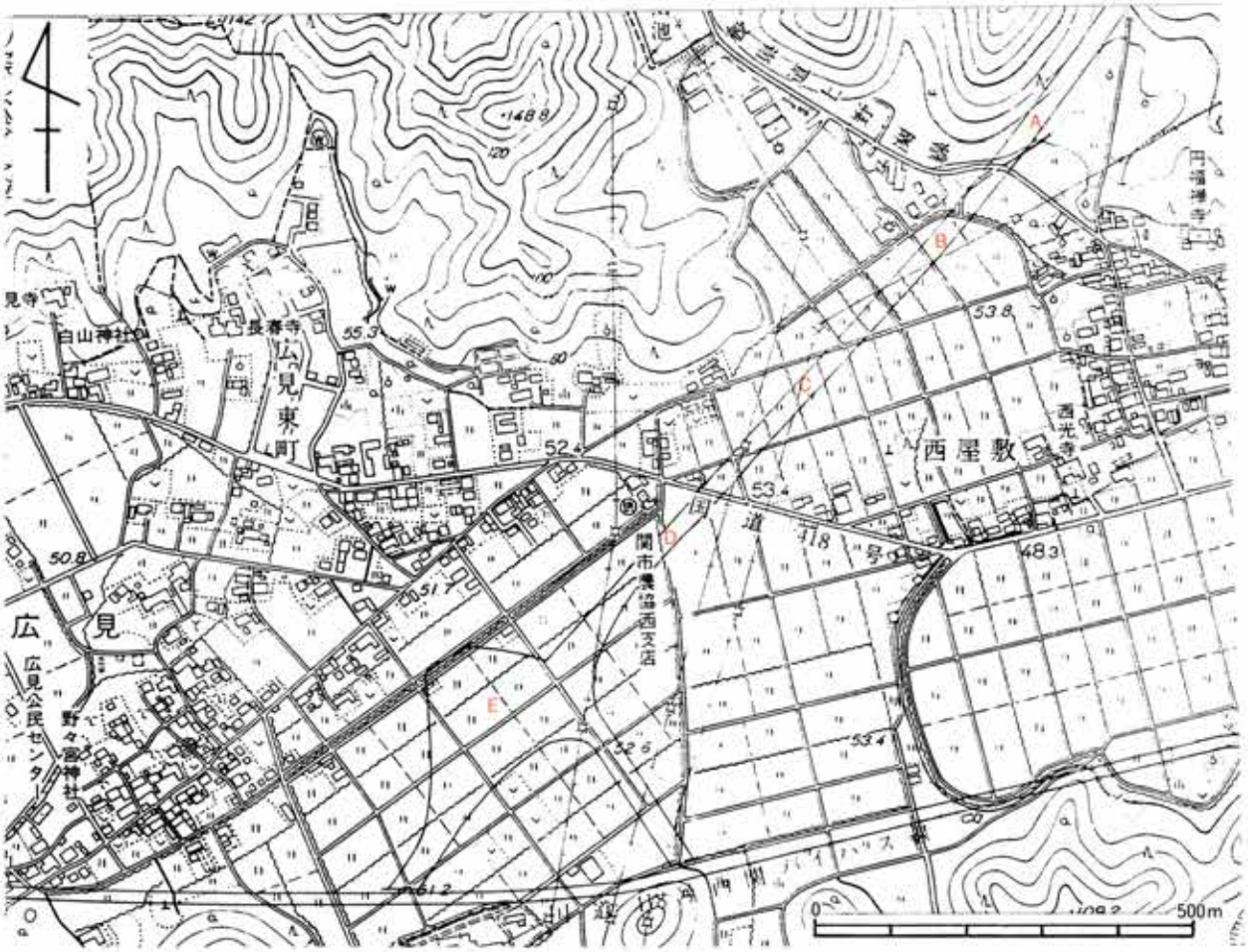
以上を踏まえ、Ａ～Ｄ各地区の試掘調査を実施した。調査内容は以下に示す如くである。

Ａ区　関市池尻字坂田東洞（現在　同）

山の斜面であることから、試掘可能な地域は限られ、南に開けた地域にトレンチを設けた。測量点のわかる範囲でグリッドを３箇所選び、１ｍ×２ｍの面を設定し発掘調査を実施した。崖錐層が厚く、深さ２ｍのところで黒土層が現れたが、大きな角礫を多量に含有する地層で、遺物は検出されなかった。従って、遺跡とは判断し難い。それ以外の地域は、雑木林となっているため調査はしていない。

Ｂ区　関市池尻字黒田（現在　字西屋敷）

調査区の東西、南北に幅２ｍのトレンチを開け調査を実施した。その結果、中濃用水から県道上野・関線までの地域では、約2,500㎡の範囲で中世の水田遺構が存在することを確認した。Ⅳ層では、階段状の水田区画と考えられるものがトレンチ断面に見られ、Ⅲ・Ⅳ層からはイネのプラント・オパール



第２図　試掘位置図

が水田跡の指標となる5,000個／gを大きく越える値で確認されると共に、泥炭層が検出された。III・IV層からは13～14世紀の山茶碗や宋銭、植物遺体が出土する。県道より東側地域では、山からの砂礫の流れ込みである崖錐がとても深く、崖錐の下に入り込んだ地層から、近世陶磁器や山茶碗などが出土した。しかし、何れも破片であり、出土状況から崖錐と共に流れ込んだものと見られ、遺物包含層とは考えられない。

中濃用水西側地域（約2,500㎡）においては、山茶碗、木製品、植物種子（モモの種子）を包含するIII・IV層（黒土層）が広がっている。花粉分析によるとイネ科の花粉が多く検出され、水田であった可能性が高い。遺物の山茶碗は13世紀頃のものがほとんどであった。

C区　関市池尻字新田、字北野畑（現在　字新田）

方眼区画の北端部にて、幅２ｍのトレンチを東西方向に調査した。地形の状況によっては、同様の方法で方眼区画内の西端部を南北方向に開け、トレンチが連結するようにした。

新田の東側では、III・IV層からイネのプラント・オパールが多く検出されており、かつて水田面であったことがわかる。トレンチ断面からは、III・IV層に畦畔の痕跡が見られた。III層は圃場整備後の水田と考えられる。IV層については、出土遺物が山茶碗と擂鉢に限定されるため、中世の水田遺構と考えられる。V層からはイネのプラント・オパールがかなり多く検出されてはいるものの、遺物の出土もなく包含層とは考えられない。

新田の西側では、現在の耕作土から30cm程掘り下げると地山層に達する。時代不詳の溝が数条見られたり、性格不明な掘り込みが認められるが、覆土が攪乱状態であることや耕作土が入り込んでいることから、遺跡とは判断できない。

D区　関市池尻字北野畑（現在　同）

南北40ｍ、東西20ｍのトレンチを開けたが、遺物、遺構共に確認されなかった。遺跡の可能性は低い。

E区　関市広見字昭和新田（現在　同）

20ｍグリッド中の北西部の３ｍ×３ｍを掘削した。現在同地区は起伏の少ない地形で水田地帯となっている。Ⅰ・II層からは、近現代の陶磁器や山茶碗が出土するが、ほとんど圃場整備によって移動した土であるので遺物包含層とは考えられない。III層は、磨耗した縄文土器が数点出土するのみである。縄文時代の黒土であると考えられるが遺物包含層とは判断できない。土器の出土状況や土坑の検出状況から考えて、同地区は、南地域の微高地に縄文・弥生の遺跡があったが、圃場整備によって削平されたものと考える。かつては、丘陵地帯もしくは、小山の一部が存在したと考えられる。遺物の出土状況等からは丘陵地に遺跡が存在したことは否定できないが、可能性は低いと考える。

以上の試掘結果をもとにして、本調査が必要である地域を下記の如く定めた。

B区　関市池尻字黒田（現在　字西屋敷）5,000㎡のうち、

県道上野・関線と中濃用水との間において、2,500㎡　…Ⅰ区と称する。

中濃用水西側において、2,500㎡　…II区と称する。

C区　関市池尻字新田、字北野畑（現在　字新田）において、3,000㎡ …III区と称する。

合計8,000㎡の調査である。

本調査は上記結果に基づき、1996年（平成８）５月から1997年（同９）３月迄実施した。

注

1）本節は安江氏の試掘報告書に基づき、文章を一部加筆、修正した。字名については明治期のものに全て統一したほか、土層についても本調査と統一した。

第2節　調査の経過と方法

調査区は自動車道建設に関わる用地であることから、北東方向から南西方向は220mと長く、南北は50mと短い。調査区内は道路、用水が貫徹し、調査区を分断しているため、県道上野・関線の西側、つまり中濃用水の東側をⅠ区、中濃用水西側をⅡ区、Ⅱ区より80m西側の字新田、字北野畑をⅢ区として調査を実施した。

調査区には多量の湧水が山から流れ込むことや水捌が悪い等の諸状況から、調査に支障を来すことが事前に予想されたため、試掘トレンチをそのまま利用し、更に周溝を巡らした。グリッドの設定は試掘調査から水田遺構であることが確認されているので、10mグリッドを設定した。グリッドは南北方向に北からA～Pとアルファベットの大文字を付し、東西方向に2～8、17～30とアラビア数字を付した。区分の基準は国土座標X＝－54630、Y＝－25800をもとにした。

本調査は1996年（平成8）5月7日より開始し、1997年（同9）3月28日をもって終了した。バックホウによる20～40cmの表土除去後、Ⅰ・Ⅱ区における第1遺構面の調査、第2遺構面の調査、第3遺構面の調査を経て、Ⅲ区の第1遺構面の調査、第2遺構面の調査を完了した。

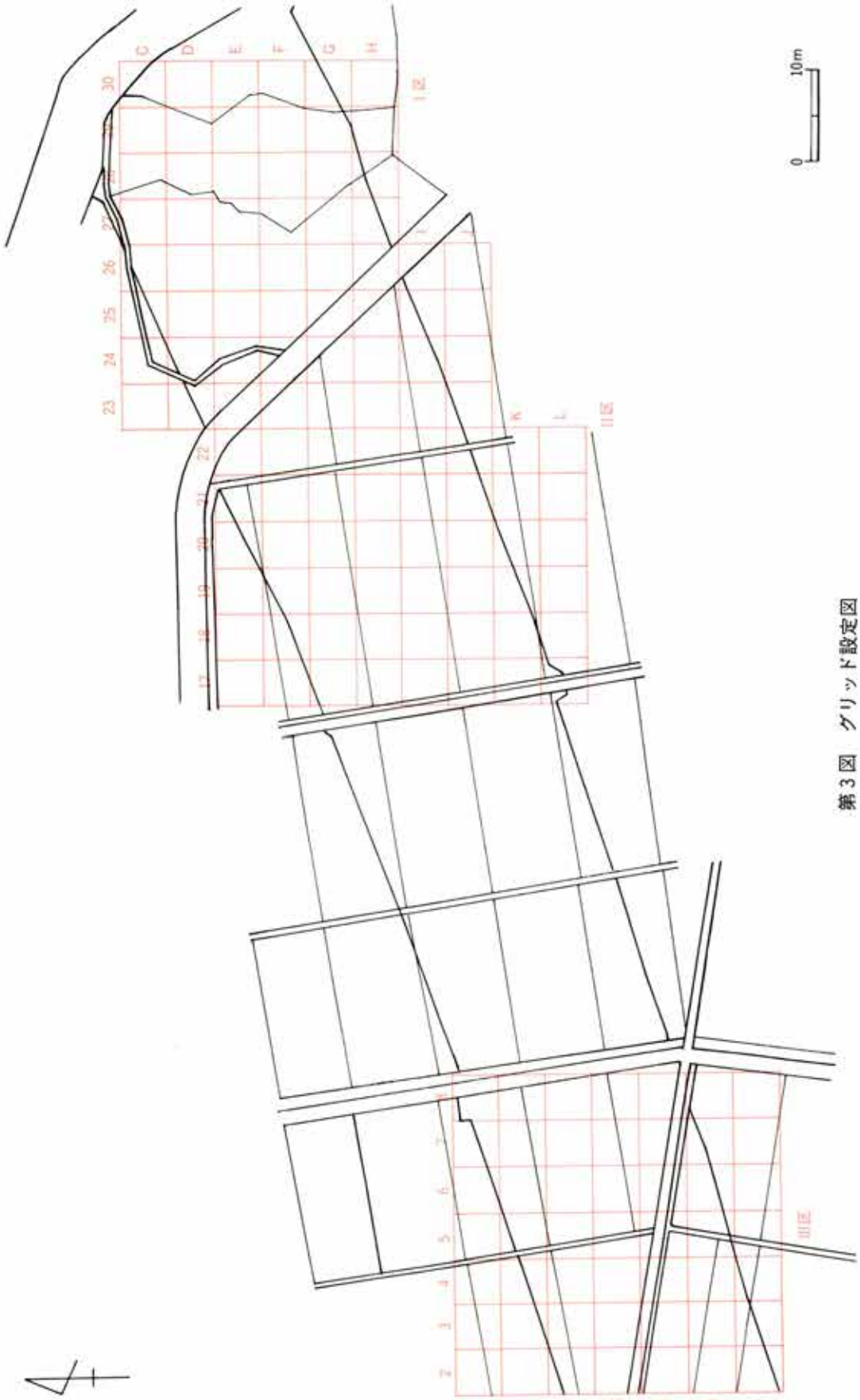
1996年（平成8）10月9日にはⅠ・Ⅱ区の空撮を実施し、同年12月12日には、同区2回目の空撮を完了した。1997年（平成9）1月18日には本遺跡の現地説明会をⅠ・Ⅱ区にて開催した。1月20日にはⅠ・Ⅱ区の後片付けを終え、Ⅲ区に移動し調査を開始した。3月5日には、Ⅲ区の空撮を実施し、全ての調査を完了した。同月28日には現場事務所を撤去し、併せて調査区の埋め戻しも完了した。

遺物取上は表土除去後、Ⅱ層上面からの場合、グリッド毎に一括で取り上げ、それより下層の遺物についてはトータル・ステーションの遺跡システムを使用し1点ずつ取り上げた。遺物総数は破片ながら約2万1千点を数え、時代は縄文から近世迄と広範囲に及んでいる。

遺構検出に際しては、崖錐の影響や残存状況等により困難を極めた。試掘トレンチの土層断面のみでは畦畔の判断が非常に困難であったことから、できるだけ広く平らに掘削することやサブトレンチを入れ確定するようにした。

なお、最終的な調査面積は13,000㎡である。

（小塩康真）



第3図　グリッド設定図

第2章　遺跡の環境

第1節　地理的環境

本遺跡は関市池尻西屋敷地内（字黒田・新田・北野畑）にあり、関市北西部に位置する。同地区北は美濃市笠神、東、南は長良川を隔て関市下有知、同小瀬、西は同広見を境とする。長良川は美濃市より南流し同地区東側を通り、弥勒寺辺りで南西流し南側を流れる。中央には県道上野・関線と市道3―232号線（旧国道関・根尾線＝旧418号線）が走り、南へ鮎ノ瀬橋を渡り小瀬へ、西は広見を経て、武芸川町へ至る。1994年（平成6）には自動車交通量の増加や東海環状自動車道西関インターチェンジにアクセスする道路として、南側に国道関・根尾線（418号線）が新たに建設された。これに伴い南部の宅地造成が進行しつつある。北へは県道上野・関線が美濃市笠神に通ずる。集落は現在の字名からもわかるように東屋敷、中屋敷、北中屋敷等が集落の中心であった[1]。集落は県道（旧418号線）の北側段丘上に位置する。これは長良川の洪水によるもので、南部では度々洪水に見舞われたからであろう。現在の同地区における世帯数は1997年（平成9）8月1日現在、227世帯、人口882人である。なお、寺社には天台宗弥勒寺、臨済宗円福寺、曹洞宗西光寺、白山神社、神明神社、熊野神社、事比羅神社、秋葉神社が存在する。

現在の同地区における土地利用状況は、大部分を水田が占めており、わずかな畑地を数える。1914～16年（大正3～5）には池尻用水の建設と耕地整理が行われる[2]。1952～66年（昭和27～41）には改良工事が行われ、現在の中濃用水となる[3]。両者によって水の供給は確保され、旧国道より南部の長良川河岸の堆積地や広見地区東部も水田化され、現在の景観に至る。

近世の村況[4]は、正保2年（1645）の美濃国郷帳[5]によると、米の石高186石5斗6升8合、畑高204石6斗1升2合と水田より畑作優位であることがわかる。それは、明治元年（1868）12月の池尻村明細帳[6]に「田方養水之儀は、山洞々出水相掛り候得共、干損所ニ御座候」、同2年池尻村明細帳[7]に「当村之儀ハ、溜池水限り天水所ニて干損所ニ御座候」とあるように、水は山からの湧水や天水を溜池から潅漑していたからである。村内には12箇所に及ぶ溜池があり、水田の重要な水源であった[8]。文政3年（1820）には、常時水が供給されるように、助川又右衛門が池尻用水開発を企て開発するが、同8年（1825）、郡上川（長良川）の洪水により破壊されている[9]。以上の様に、現在の同地区における景観は、水の供給が確保されたことにあり、大正期以降の用水建設、耕地整理によって形成されたことが知られる。また、近世における同村は、干損所で水が乏しい状況であったことが窺える。

近世の同村は「男女共農業之外一切余業無御座候[10]」とあり、農業専従村落であったことが知られる。明治期における畑作には、麥、裸麥、養蚕、茶、粟、黍、稗、大豆、蘿匐等の栽培や養蚕が行われていた。そのほか長良川における漁業が知られている[11]。

本遺跡は、長良川段丘上の最も高い位置（Ⅰ区の標高55.9～55.1m・Ⅱ区54.3m・Ⅲ区54.1m）にあたり、最下層は河岸段丘最上部に形成された粘質シルト層が堆積している。この層の上には粘質土が堆積し、谷からの湧水を利用し水田耕作が中世から現代に至るまで営まれてきた。池尻村の米の生産高に関しては、明治元年の明細帳[12]と慶長郷帳[13]とがほぼ一致すること（第1表）や水田面積も合致

することから、中世末期迄遡ることができよう。

本遺跡が水田遺跡であることは自然科学分析で確認されている（第5章）が、明治初年作成の池尻村字絵図[14]からも、当地区が水田であったことは明らかで、村内の水田地帯は東屋敷の北側、中屋敷の北側、西屋敷北・中央部に限定されていることがわかる。絵図は時代が下るが江戸期の状況を示すものと考えてよいものと思われる。絵図には調査区内にあたる字黒田（Ⅰ・Ⅱ区）、字新田、字北野畑（Ⅲ区）の水田区画が明確に記されており（第4図）、Ⅰ・Ⅱ区では北東の山々（通称：大平山　標高170.4m、通称：権ケ洞山　標高152.8m）を背に、南西方向へ徐々に低くなり、長軸の区画はまさに等高線に沿って形成されていたことが明らかである。Ⅲ区においては西側の微高地を境にして、水田が形成されていた。区画の長短からすると水田はほぼ平坦であるが、北から南へと低くなることが窺える。これ以前の同地区に関わる古い絵図は存せず、中世の状況を知ることはできないが、同地区の水田構造を考える上で重要である。先述の如く、基本的に中世においても池尻における土地利用の変化や自然地形を利用した水田の区画、構造等は、近世と大差ないものと思われる。

第1表　近世における池尻村村況

	慶長6（1601）年	正保3（1646）年	天保9（1838）年	明治元（1868）年	明治14（1881）年	明治21（1888）年
水田面積	391石1斗8升	—	16町5反6畝29歩	16町5反6畝29歩	322石9斗4升8合	29町6反9畝28歩7合
米生産高		186石5斗6升8合	186石3斗7升3合	186石3斗7升3合		—
畑作面積		—	20町3反3畝18歩	20町7畝22歩		43町5反1畝2歩
畑作生産高		—	195石1斗8升2合1勺	192石5斗8升8合1勺	628石6斗	—
家　数	—	—	86軒	124軒	—	—
人　口	—	—	339人	521人	605人	—

※慶長6年、美濃一国郷帳。正保2年、美濃国郷帳。天保9年4月日、池尻村明細帳（青山貞一氏『郷土史池尻村』所収文書）。明治元年12月日、池尻村明細帳。明治14年、『武儀郡各村略誌』。明治21年、小瀬・池尻村土地整理面積調書より作成。

注

1）明治初年の池尻村の小字名には、渡り、東屋敷、吉六、蔵師、南大根、北大根、砂倉、大街道、南油田、和田下、南田尻、北油田、寺下、北田尻、北反松、中反松、南反松、高山、西野畑、東野畑、北野畑、西出、藤ノ木、黒田、田嶋、京田、新田、八反田、西市洞、左渡、中屋敷、北中屋敷、鳥居崎、弥勒寺、赤根、西ケ洞、向畑、西宮田、大原、西大原、茶屋前、東市洞、布之田、坂田西洞、坂田東洞、横井、南宮前、寺ケ洞、尼ケ洞、松橋、薬師、小山越がある。

なお、「池尻」の地名の由来は、『新撰美濃志』によると「池水の流れ出るあたりの里」とある。

2）大正3年6月、池尻耕地整理組合と笠神区協定書。同6年12月、用水設置寄附金申込証。同年12月、横越地内用水用地買収契約書。（新修『関市史』史料編近代・現代編、第163～第165号文書、1997年）所収。

なお、関係史料を収めるものには『岐阜県史』史料編、新修『関市史』史料編所収として文書番号を記した。以下、『岐阜県史』は『県史』、新修『関市史』は『市史』と略す。

3）『市史』史料編近代・現代編、第163～第165号文書解説参照。

4）池尻村は江戸時代から明治時代の村名で1889年（明治22）には瀬尻村、1943年（昭和18）に関町、1950年（昭和25）に関市に編入される。

第4図　池尻村字絵図（字坂田東洞、黒田、左渡、田嶋、京田、新田、北野畑、藤ノ木）

5）正保２年、美濃国郷帳（『県史』史料編近世一、第２号文書、1965年、『市史』史料編古代・中世・近世一、第３号文書、1995年）所収。

6）明治元年12月日、池尻村明細帳（『市史』史料編近世二、第110号文書）所収。池尻には西市洞、西ケ洞、東市洞、坂田西洞、坂田東洞、寺ケ洞、尼ケ洞等の字名からもわかるように各洞々が存在し、山からの湧き水、溜池等によって水田耕作を営んでいたものと思われる。中世における水田は溜池等の潅漑施設の設置時期によって年代が確定されるのではないだろうか。

7）明治２年６月日、池尻村明細帳（『市史』史料編近代・現代編第７号文書）所収。

8）注６）参照。明治14年12月、『武儀郡各村署誌』（『市史』史料編近代・現代、第40号文書）には、溜池の名称が記載されている。以下列挙すると、松小洞上池、松小洞下池、弥勒寺池、西ケ洞池、荒神洞池、古井神田池、寺ケ洞池、円神寺池、円福寺池、円神寺池、坂田池、大原池である。以上の如く、池尻村は干損所であることから、各地区に溜池が造られ、水田耕作が営まれていたことが知られよう。II・III区の水田は字絵図から坂田池を水源としていることが知られる。同池は『瀬尻含広見地区沿革年表』（関市史編纂委員会）によると「永正年間（1504～1520）に開掘すと伝う」とあるが、史料の出典は明記されていない。しかし同年表は史料に忠実であるため信用に足るが、後世の史料に拠るものと思われる。

9）『瀬尻含広見地区沿革年表』（関市史編纂委員会）

10）注６）、７）参照。

11）注８）参照。

12）注６）参照。

13）慶長６年、美濃一国郷帳（『県史』史料編近世一、第１号文書、『市史』史料編古代・中世・近世一、第１号文書）所収。

14）明治８年、武儀郡池尻村字絵図。

第２節　歴史的環境

古代の池尻にはムゲツ氏の氏寺とされる弥勒寺が建立されていた。発掘調査の成果により法起寺式の伽藍配置を有し、出土品等からは白鳳時代の建築であることが確認されている。その東に隣接する弥勒寺東遺跡からは、多数の倉庫群の遺構が検出され、遺物より７～８世紀の武儀郡[1]の郡衙であることが解明されつつある（第５図、第２表）。以上の様に、古代の池尻は武儀郡に本拠地を置く、ムゲツ氏の重要な拠点であったことが知られる[2]。

文献史料で池尻を確認できるのは、嘉元４年（1306）６月12日の昭慶門院御領目録[3]の「池尻郷良叔」を初見とする。「池尻」の地名については安八郡（大垣市）にもあり[4]、その比定については諸説あるが、永和４年（1378）の横蔵寺所蔵大般若波羅蜜多経[5]の奥書に「武儀郡池尻郷」とあり、武儀郡であることが確かめられる。成立に関しては明らかではないが、「目録」の伝領からすると池尻郷は美濃国の国衙領と考えられ、白河上皇の分国として12世紀初めに溯ることができる。良叔はおそらく在地の人物ではなく、在京の者で池尻郷を知行していた預所と考えられる[6]。在地の状況については史料が存せず明らかではないが、中世の池尻郷周辺には、東に伊勢神宮領下有智御厨、北に山口郷、西に鷹司家領宇陀弘見荘（旧長講堂領）、南に新熊野社領小瀬荘（旧皇室領）が存在しており、池尻郷周辺には荘園が多く存在していた状況が窺える[7]。

室町期には、土岐一族である土岐池尻氏との関わりが指摘されている（『市史』は武儀郡の池尻と考えている）[8]。しかし地名の比定に際しては武儀郡、あるいは安八郡のどちらに当たるのか明らかではない。近世の石高からすると安八郡の池尻は約981石あり、武儀郡のおよそ2.5倍に相当し、肥沃な土

壌であることがわかる。また土岐氏は西濃地域において勢力を巡らせていることからして、安八郡と見る方が有力と考えられる。何れにせよ史料の制約により、推測の域を脱し得ない。今後の成果を待つところである。

中世における同地区の遺跡には、弥勒寺東遺跡や和田山遺跡が知られている。前者の遺跡からは中世の土坑が検出され、山茶碗等が出土している。後者の遺跡は鉄滓や山茶碗が出土しており鍛冶遺跡と考えられている[9]（第5図、第2表）。

江戸期における池尻村の支配関係は、慶長14年(1609)には旗本川辺大島領となり、寛永14年(1637)10月17日にはには関大島家三代義豊が卒去し断絶するが、同17年（1640）に大島義唯の預地となる。貞享4年（1687）には幕府領、元禄14年（1701）には旗本松平領を経て幕末に至る[10]。しかし村政、村況（同章1節）については史料の制約があり不明な点が多い、今後の成果を待ちたい[11]。

注

1）古代における武儀郡は種々の表記が存するが、本報告では「武儀郡」を用いた。

2）「4　古墳～奈良時代」（『市史』考古・文化財編、1994年）。「第6章　大化前代、第7章　律令国家の歩み、第8章　平安時代の美濃国と武儀郡、第10章　古代の文化」（『同』通史編自然・原始・古代・中世、1996年）参照。

3）嘉元四年六月一二日、昭慶門院御領目録（『県史』史料編古代中世四、11京都大学所蔵文書、古文書集第1号文書、1973年）所収。同文書は竹内理三編『鎌倉遺文』22661号文書にも収録されているが、その比定については安八郡としている。以下、昭慶門院御領目録を「目録」と略す。

4）「池尻」の地名は県下に安八郡と武儀郡の2箇所存在する。

5）永和四年四月七日、横蔵寺所蔵大般若波羅蜜多経奥書。同年七月二三日、同。同年二月六日、同。（『県史』史料編古代・中世二、経典奥書、揖斐郡横蔵寺第1号文書）所収。

6）「目録」は亀山法皇が皇女意子内親王（昭慶門院）に譲与した所領目録である。伝領経過等から国衙領とする（『県史』通史編中世）。しかし『県史』が言うように必ずしも国衙領として一致する訳ではない。また、地理的に見ると肥沃な平野部に位置し、条里遺構が存する安定した耕地であることが知られる。すなわち池尻地区においては、先述した地理的環境（第1節）や条里制が施行されていないことなどを考え合わせると、嘉元4年より少し時代が下る程度ではないだろうか。推測に過ぎないが、遺物の出土状況からもこの時代前後の山茶碗が集中していることから裏付けられよう。条里の施行については、今回の発掘調査では明らかにならなかった。史料の制約上保留しておきたいが、何れにしろ今後の検討が待たれるであろう。

なお、「目録」の出家法名良叔の実名については明らかではない。「目録」を概観すると所領の下に記されている人名は、その所領を管理する預所であることは明らかである。

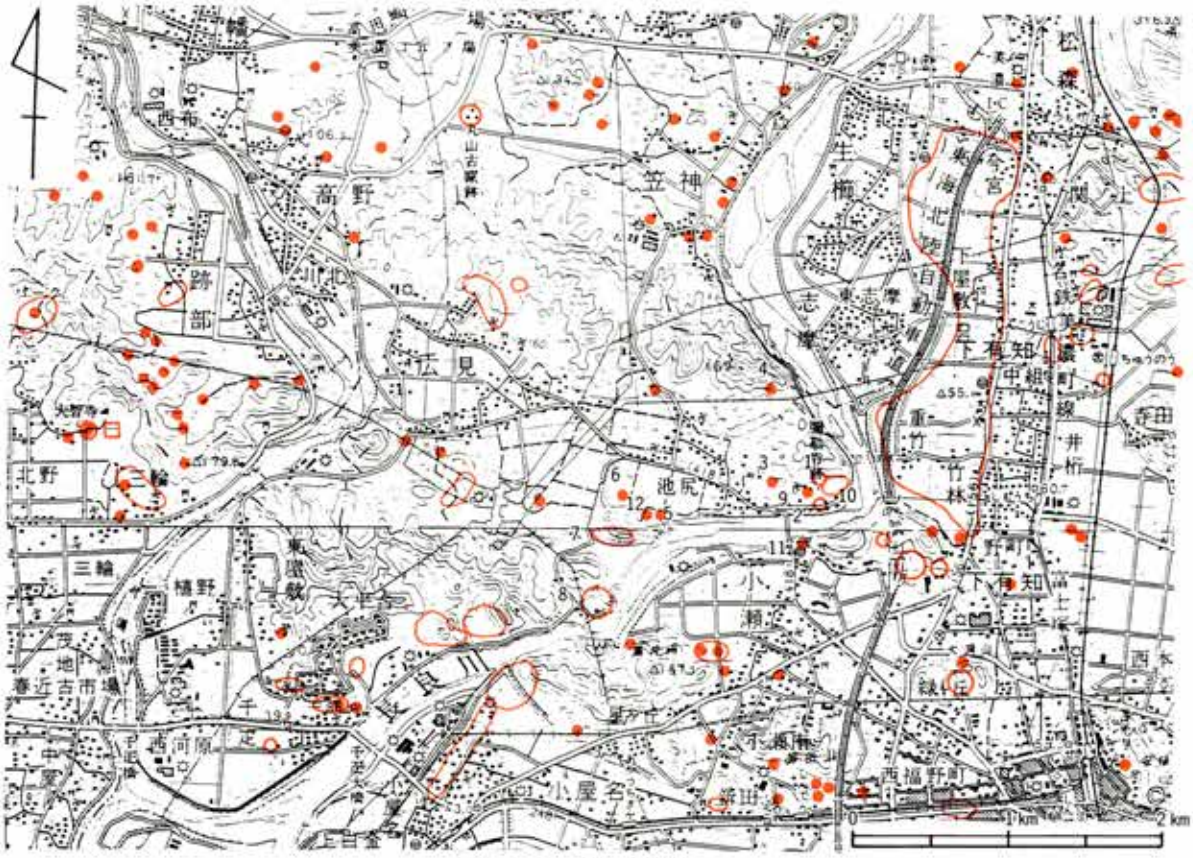
7）「第12章　荘園と郷」（『市史』通史編自然・原始・古代・中世、1996年）参照。

8）「第13章　在地領主の動き」（『市史』通史編自然・原始・古代・中世、1996年）参照。注1）参照。

9）注2）参照。「6　鎌倉～安土桃山時代」（『市史』考古・文化財編）参照。

10）寛政重修諸家譜、2巻、義家流（新訂『寛政重修諸家譜』2巻、続群書類従完成会、1965年）所収。

11）「池尻」に関する史料は時代を問わずほとんど存せず、断片的に知り得るのみである。また、史料の所在についても不明確である。発掘調査も併せて、今後の成果が待たれる。



第５図　周辺の遺跡

第２表　周辺の遺跡地名一覧

番号	遺　跡　名	所　在　地	種　別	時　代	遺　跡　の　概　況
1	弥勒寺跡	関市池尻弥勒寺	寺院跡	白鳳・奈良	国史跡Ｓ34．３．２指定
2	円空入定塚	関市池尻131	古　墳	江　戸	県史跡Ｓ48.11.14指定
3	池尻大塚古墳	関市池東屋敷	古　墳	古　墳	方墳
4	南宮前古墳	関市池尻南宮前	古　墳	古　墳	円墳
5	向畑古墳	関市池尻向畑	古　墳	古　墳	円墳
6	反松大塚古墳	関市池尻反松	古　墳	古　墳	円墳
7	赤根古墳群	関市池尻赤根	古　墳	古　墳	円墳
8	大原古墳群	関市池尻大原	古　墳	古　墳	円墳
9	弥勒寺古墳	関市池尻弥勒寺120-1	古　墳	古　墳	円墳
10	弥勒寺東遺跡	関市池尻弥勒寺	郡　衙	白鳳～室町	郡衙Ｈ６～発掘調査中
11	松尾山古墳群	関市池尻弥勒寺	古　墳	古　墳	滅失
12	和田山遺跡	関市池尻寺下	製鉄遺跡	室　町	Ｓ28発掘調査

※池尻地区の遺跡は（岐阜県教育委員会『改訂版岐阜県遺跡地図』1990年、『市史』考古・文化財編）をもとに作成。

（小塩康真）

第3章 遺　　構

第1節 基 本 層 序

本遺跡は耕地整理に伴い整然と区画された水田地帯が広がっていた。そのため地表面より0.4～0.5m（II層迄）の大部分は攪乱を受けていた。基本的にI・II区の基本層序は同一であるが、I区北側は山際であることから、崖錐の影響により砂礫が交じる。II区は、調査区内に一部暗渠排水が敷設されるなど、大正年間の圃場整備の影響を受けている様子が看取されたが、上面からの掘り込みを除いては比較的安定した土層が観察される。III区においても旧水田であったことから、地表面より0.5～0.6m（II層迄）の大部分は攪乱を受けていた。またIII層上面では、暗渠排水が2～3m間隔で縦横に敷設されており、上面からの影響を多分に受けていた。しかしその下層は比較的安定した土層が観察される。

調査区内には東西、南北に試掘トレンチを開けた。調査区の南北は50m程度と狭いため、各地区の東西トレンチの基本層序を以下に記す。

〔I区〕

I層（10YR2/2　黒褐色土）

表土層で、堆積は0.2m前後を測る。調査区全域が旧水田耕作土であったため、攪乱を多分に受けている。径5㎜以下の小石を含み、密度は粗い。山茶碗、近世陶磁器等の小破片が出土する。

II層（7.5YR3/1　黒褐色粘質土）

第1遺構面に相当する。攪乱による影響が少なからず認められるので、重機でこの面の中間まで除去する。厚さ0.2m前後で、にぶい赤褐色（5YR4/6）の鉄分の沈着が見られる。径10㎜以下の小石を含む。遺物は山茶碗、瀬戸美濃陶磁器等の小破片を包含する。II層上部における遺物の取り上げはグリッド毎に一括して取り上げる。

III層（10YR3/1　黒褐色粘質土）

第2遺構面となる弱粘性の土で、密度は粗い。崖錐により砂礫が混入する。0.16m前後の堆積を測る。水田区画に伴う多数の杭列や数条の畦畔が検出される。遺物は山茶碗（生田）を始め、須恵器、近世陶磁器等の破片が出土する。

IV層（10YR2/1　黒色粘質土）

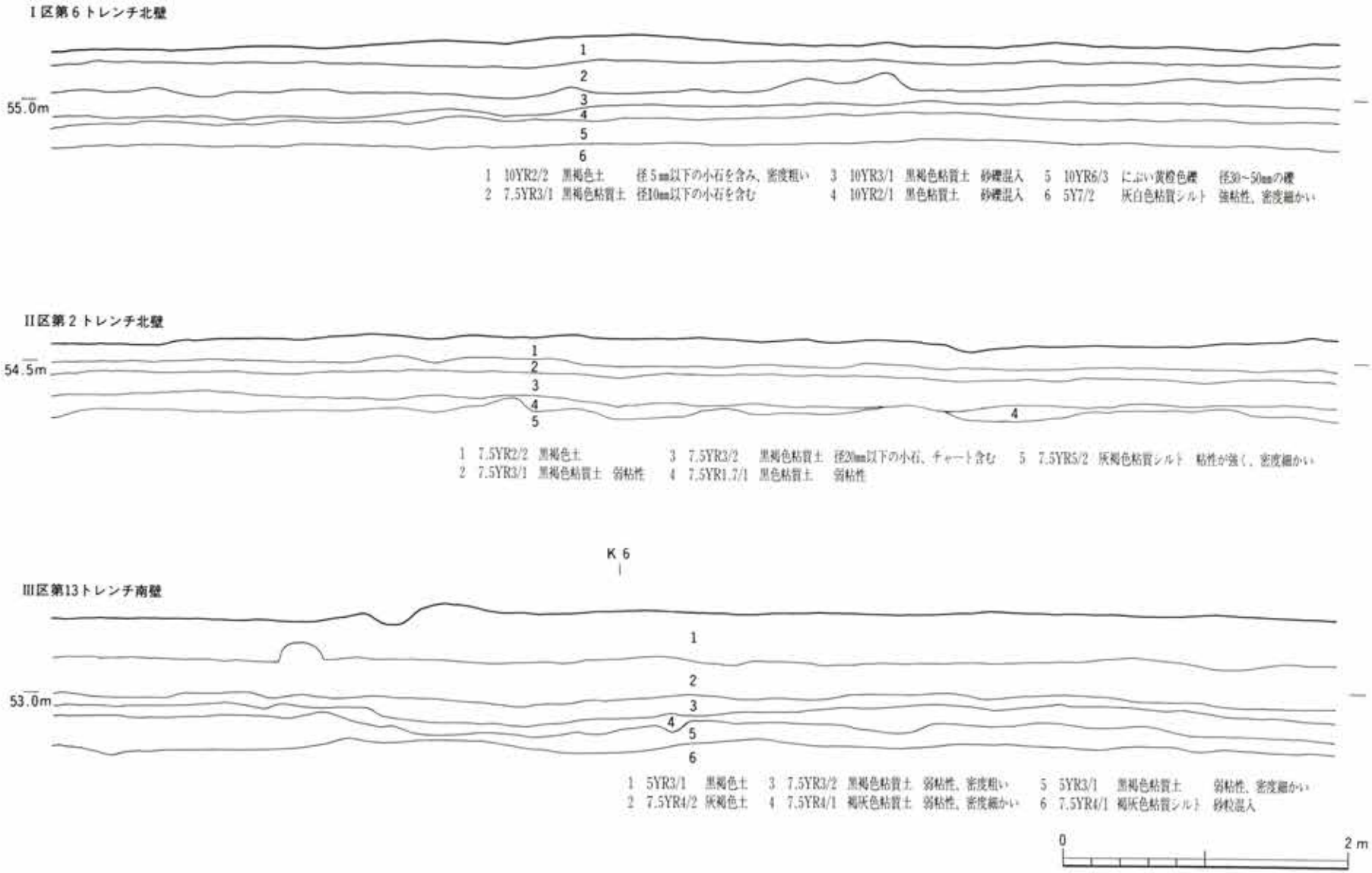
第3遺構面となる弱粘性の土で、密度は粗い。崖錐により砂礫が交じる。0.12m前後の堆積を測る。水田13枚が検出される。遺物は山茶碗（明和～大畑大洞）が主流である。

V層（10YR6/3　にぶい黄橙色礫）

径30～50㎜の礫が占め、堆積は0.2m前後を測る。北側では崖錐により場所によって、III・IV層に見られる。この面における遺構、遺物は確認されていない。場所によって炭化物による泥炭層が混じる箇所もある。

VI層（5Y7/2　灰白色粘質シルト）

粘性が強く密度が細かい。最下層である。III層で検出される杭はこの層まで打ち込まれていること



第6図　西屋敷遺跡土層断面図

が確認される。

〔II区〕

I層（7.5YR2/2　黒褐色土）

旧表土で、堆積は0.2m前後を測る。調査区全域が水田であったことから、撹乱を多分に受けている。土の移動が考えられる。山茶碗、近世陶磁器等の小破片が出土する。

II層（7.5YR3/1　黒褐色粘質土）

第1遺構面に相当する。撹乱が少なからず認められる。重機でこの面の中間まで除去する。堆積は0.1m前後を測る。遺物については近世陶磁器や山茶碗の小破片が出土する。

III層（7.5YR3/2　黒褐色粘質土）

第2遺構面となる弱粘性の土で、密度は粗い。径20mm以下の小石、チャートを含む。炭化物を含み、堆積は0.2m前後を測る。水田区画は明確ではないが、区画に関わる多数の杭列が検出される。盛土については未確認である。遺物は山茶碗（生田）を始め、須恵器、瀬戸美濃の大窯製品、古瀬戸の破片が出土する。

IV層（(7.5YR1.7/1　黒色粘質土）

第3遺構面となる弱粘性の土で、密度は粗い。堆積は0.1m前後を測る。水田15枚が検出されている。遺物は山茶碗（明和～大畑大洞）が主流である。

V層（7.5YR5/2　灰褐色粘質シルト）

粘性が強く密度が細かい。最下層である。III層で検出される杭はこの層まで打ち込まれていることが確認される。IV層とV層の間には場所によって一部黒色粘質シルト（7.5YR1.7/1）が存する。放射性炭素年代測定結果によれば、B.C.180年とのデーターが得られたが、この面における遺構は確認されていない。

〔III区〕

I層（5YR3/1　黒褐色土）

旧表土で、堆積は0.4m前後を測る。調査区全域が水田であったことや、圃場整備によって撹乱を多分に受けている。土の移動が考えられる。山茶碗等の小破片等が出土する。

II層（7.5YR4/2　灰褐色土）

暗渠排水が東西、南北に敷設され、撹乱による影響が認められる。重機でこの面まで除去する。堆積は0.3m前後を測る。遺物は瀬戸美濃陶磁器が主流である。

IIIa層（7.5YR3/2　黒褐色粘質土）

第1遺構面となる弱粘性の土で、密度は粗い。堆積は0.15m前後を測る。多数の杭が列を成し水田区画に関わる遺構として検出される。I・II区のIII層と同時代の層位であると考えられる。遺物は山茶碗（生田）を始め、須恵器、瀬戸美濃の大窯製品、古瀬戸の破片が出土する。遺物はグリッド毎に一括で取り上げる。

IIIb層（7.5YR4/1　褐灰色粘質土）

第1遺構面となる弱粘性の土で、密度は粗い。堆積は0.1m前後を測る。多数の杭が列を成し水田区画に関わる遺構として検出される。I・II区のIII層と同時代の層位であると考えられる。遺物は山茶碗（生田）を始め、須恵器、瀬戸美濃の大窯製品、古瀬戸の破片が出土する。

Ⅳ層（５YR3/1　黒褐色粘質土）

第２遺構面となる弱粘性の土で、密度は細かい。堆積は0.15ｍ前後を測る。水田区画は明確ではないが、東西の畦畔が４条検出される。

Ⅴ層（7.5YR4/1　褐灰色粘質シルト）

地山である。ほぼ全域からこの層が検出される。Ⅰ・Ⅱ区と比べると若干粘性が弱く、砂が混入する。調査区西側や中央部では、かなり上面で検出される。

第２節　遺　構　概　要

１、遺構概要

Ⅰ・Ⅱ区においては、現地表面より約0.5ｍ下に近代から近世の溝、約0.6ｍ下に杭列を伴う水田遺構、約0.7ｍ下に畦畔で区画された水田遺構が確認された。Ⅲ区においては現地表面より約0.7ｍ下に杭列を伴う水田遺構、約0.8ｍ下に畦畔で区画された水田遺構が確認された。従って、本報告ではⅠ・Ⅱ区のⅡ層を第１遺構面の遺構、Ⅲ層を第２遺構面の遺構、Ⅳ層を第３遺構面の遺構、Ⅲ区Ⅲ層を第１遺構面の遺構、Ⅳ層を第２遺構面の遺構と称し報告する。各遺構面の時代比定は、遺構の検出状況や出土遺物等から総合的に以下のように判断した。なお、土の堆積が0.10～0.15ｍ程度と薄いため、遺跡の時代幅を広く見た。また地表面に近い層では攪乱によって整合性が失われている。

［Ⅰ・Ⅱ区］

Ⅱ層（第１遺構面）…江戸時代～近代

Ⅲ層（第２遺構面）…室町時代後期～江戸時代

Ⅳ層（第３遺構面）…鎌倉時代後期～室町時代初期

［Ⅲ区］

Ⅲ層（第１遺構面）…室町時代後期～江戸時代

Ⅳ層（第２遺構面）…鎌倉時代後期～室町時代初期

と大別できる。なお、Ⅰ・Ⅱ区とⅢ区との層位間には若干不整合性が見られる。

以下、遺構の種別は次の原則を用いた。

・SD…溝

・SK…土坑

・SL…畦畔

・SN…杭列

・ST…水田

第３節　Ⅰ・Ⅱ区第１遺構面の遺構（第８図）

本遺構面は、調査の主目的である第２遺構面の掘削の際、検出された遺構である。重機でⅡ層中間部迄除去し、下層部より検出される。本遺構面は地表面から0.2～0.3ｍとさしたる深さがないため攪乱の影響により、溝２条がⅡ区において確認されたのみである。他の遺構については確認できなかった。なお、本遺構面では、このⅡ層中からⅢ層にかけて杭が多数検出されており、この面における水田区画を表す杭列であると当初考えていた。しかし溝との関わりが何ら認められないことや杭がⅤ層

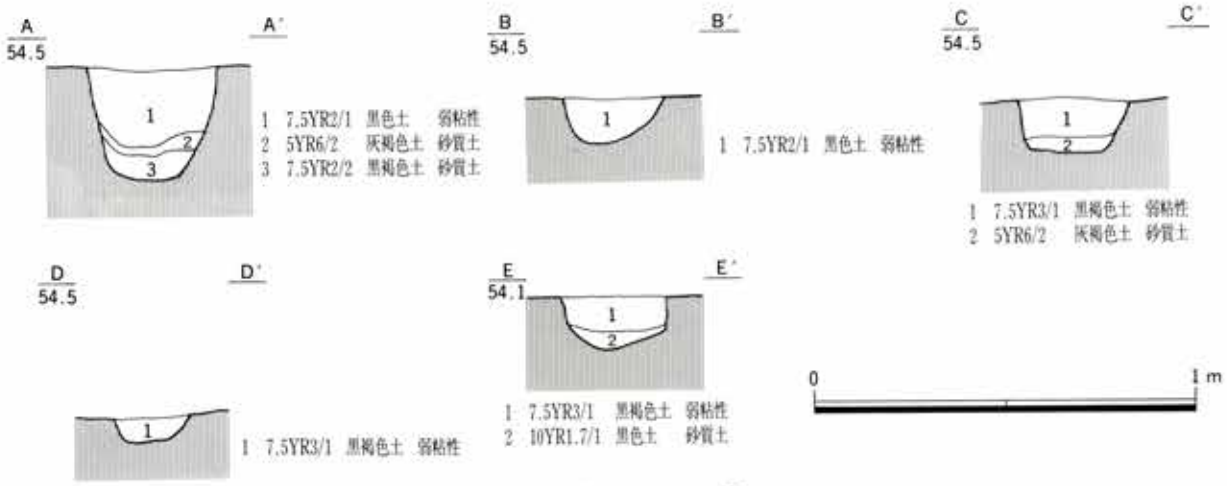
に迄達していること等を考え合わせると、本遺構面のものではないと思われる。更に花粉分析からも松材が確認されることから（第5章）、第2遺構面の水田区画に伴う遺構であると判断した。

SD 1

G23区～I23区にてII層より検出される。溝は北方向より南へ至る。調査対象外となる北方向へは更に延びるものと推測される。長さ30.5m、幅0.27～0.29m、深さ0.29～0.06mを測る。底面のレベルは、F23区では54.12m、I23区では54.08mを測る。主軸の方位はN10°Eである。埋土はF23区では3層、G23・I23区では1層、H23区では2層にそれぞれ分層される。遺物は山茶碗10、土師器皿7、瀬戸美濃（連房）1、寛永通寶1、合計19点が出土した。土器は何れも小破片で流れ込みによって混入した遺物と考えられる。遺構の性格、他遺構との関わりについては明らかではない。

SD 2

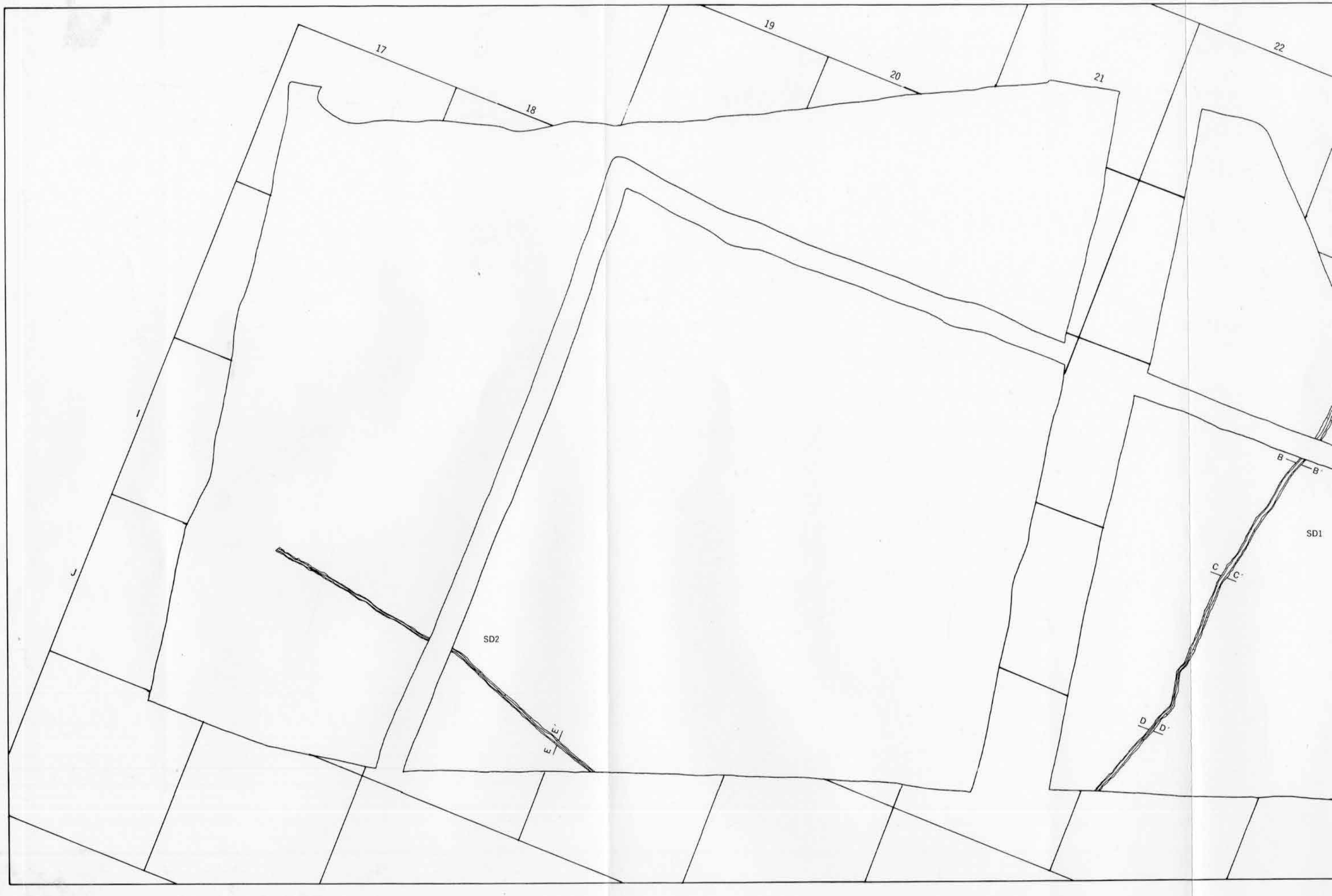
J18区～20区にてII層より検出される。溝は北西方向より南東方向へ至る。南東方向へ延びるものと推測されるが調査区外となる。長さ23.1m、幅0.28m、深さ0.14mを測る。底面のレベルは、J18区では53.96m、J19区では53.91mを測る。主軸の方位はE8°N～E20°Nである。埋土は2層に分層される。遺物は出土していない。遺構の性格、他遺構との関わりについては明らかではない。



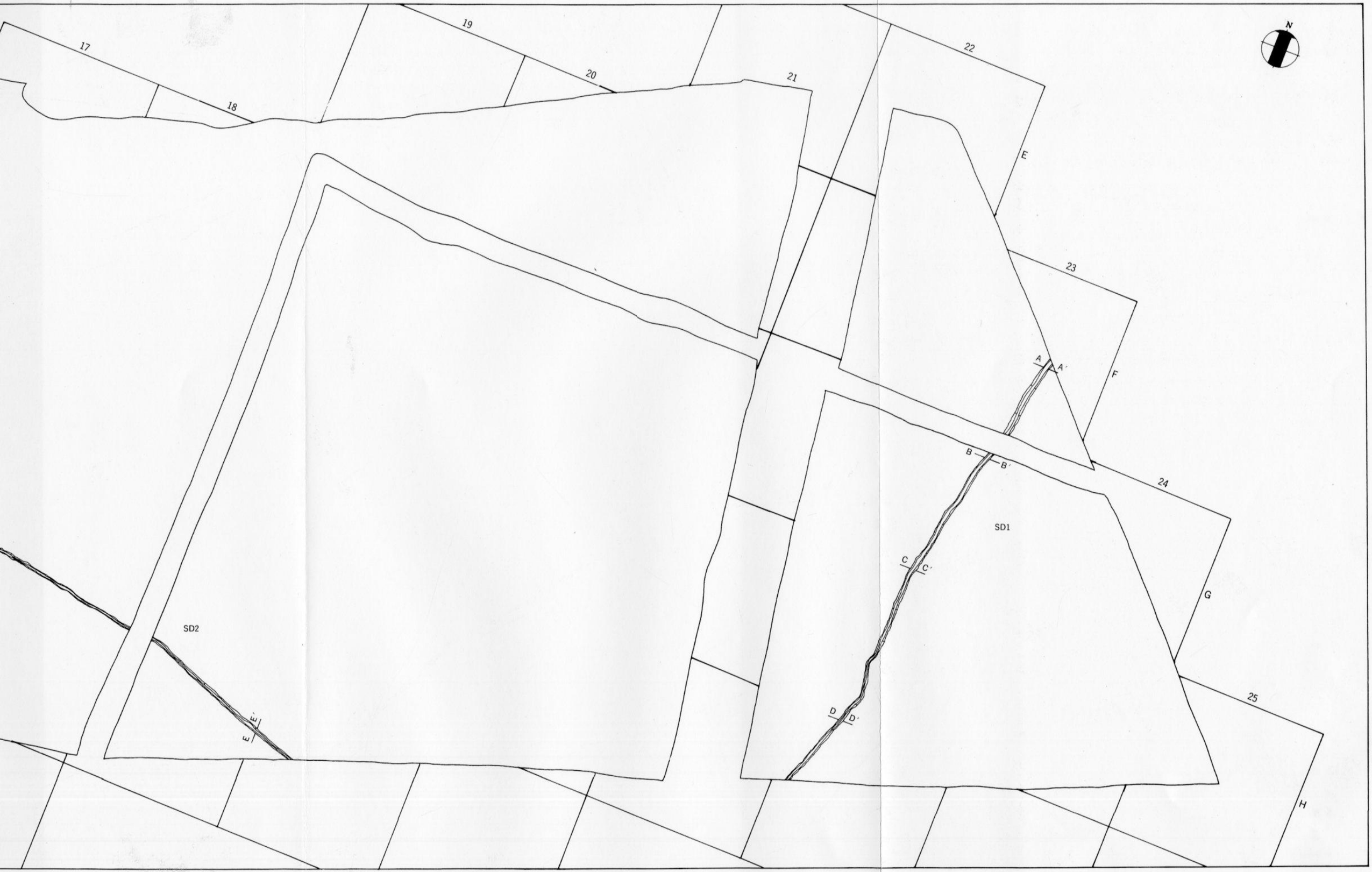
第7図　溝セクション図

第3表　溝一覧表

遺構名	グリッド	規模（m）				主軸方位	備考
		長さ	幅	深さ	底面高さ		
SD 1	G23～I23	(30.5)	0.29～0.27	0.29～0.06	54.12～54.08	N10°E	
SD 2	J18～20	(23.1)	0.28	0.14	53.96～53.91	E8°N～E20°N	



第８図　II区第１遺構面　遺構配置図



第８図　II区第１遺構面　遺構配置図

第４節　Ⅰ・Ⅱ区第２遺構面の遺構（第10・11図）

本遺構面は重機による表土掘削後、Ⅱ層を掘り下げていくと水田区画を示す多数の杭列が検出された。杭跡も含めて総点数686点を数える。杭列は一定の方向性を有し区画を形成していたものと考えられる。杭には割材、丸杭があり、大半は丸杭である。杭先は鉈等の鋭利な道具を使用した痕跡が認められ、土留め用の杭であることが窺える（第４章第３節）。打ち込まれた角度はほぼ垂直で、横板は確認されていない。杭周辺にはわずかな段差が観察されたが、畦畔と認められる盛土は、Ⅰ区にて８条確認された。Ⅱ区においては畦畔の盛土は確認されず、杭列周辺の段差のみを確定した。

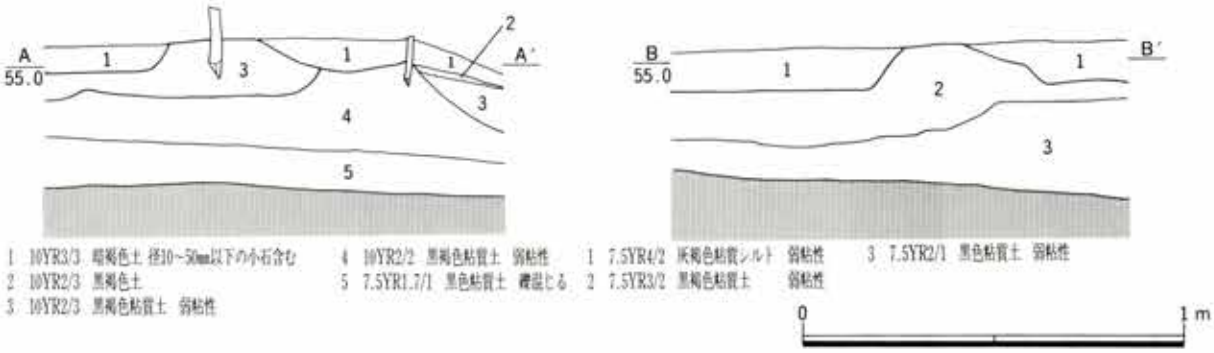
なお、完全な水田区画については未確認なため、畦畔の方向性がわかるよう一部補助線、推定線を施し、畦畔、杭列に番号を付した。

Ⅰ区　畦畔

上面からの影響で明確な水田遺構を認めることはできなかったが、畦畔は等高線に沿うように形成されていたものと考えられる。調査区北側のレベルは55.9ｍ前後、南側は55.0ｍ前後、東側は55.7ｍ前後、西側は54.9ｍ前後である。比高差は南北で約0.9ｍ、東西で約0.8ｍを測る。畦畔は北西方向から南東方向に至る。調査区東側における主軸の方位はN60°Wである。西側では60°未満となる。

SL１

C24区～G27区にて検出される。F26区にてSL２と直交する。調査対象外となる北西方向は、更に延びるものと推測される。南東方向も同様である。長さ40.4ｍ、幅0.15～0.40ｍ、高さは最高で0.11ｍを測る。主軸の方位はN50°W～N70°Wである。E25・F25区に杭列が見られ、SL１とSL３に直交することから畦畔が想定される。



第９図　TR１南壁・TR２南壁セクション図

SL２

F26区～G26区にて検出される。西方向へは更に延びるものと推測されるが調査対象外となる。F26区にてSL１と直交する。長さ6.4ｍ、幅0.20～0.40ｍ、高さは最高で0.11ｍを測る。主軸の方位はN50°Wである。

SL３

D25区～F28区にかけて検出される。調査対象外となる南西方向へは更に延びるものと推測される。

北西方向であるD25区においては段差のみ確認している。E25区においてはSL 4に枝分かれする。長さ48.2m、幅0.15～1.15m、高さは最高で0.09mを測る。主軸の方位はN55°W～N78°Wである。F27区～G26区に杭列が見られることから畦畔が想定される。

SL 4

E25区～F27区にて検出される。西方向であるE25区においてはSL 3より枝分かれする。東方向であるF27区において途絶える。長さ24.8m、幅0.25～0.85m、高さは最高で0.09mを測る。主軸の方位はN77°Wである。

SL 5

D27区にて検出される。西方向には段差と杭列を確認している。畦畔である可能性を有する。南東方向は明らかではない。長さ24.5m、幅0.20～0.32m、高さは最高で0.03mを測る。主軸の方位はN58°Wである。

SL 6

E28区～E29区にかけて検出される。北西方向は不明であるがD27区に畦畔らしき遺構が存在することから繋がっていた可能性を有する。南東方向は終結する。杭列を伴うが、盛土の北側にて確認される。長さ16.2m、幅0.20～0.75m、高さは最高で0.04mを測る。主軸の方位はN58°Wである。

SL 7

D28区にて検出される。盛土に沿って杭列が確認される。長さ10.2m、幅0.2～0.5m、高さは最高で0.05mを測る。主軸の方位はN58°Wである。

SL 8

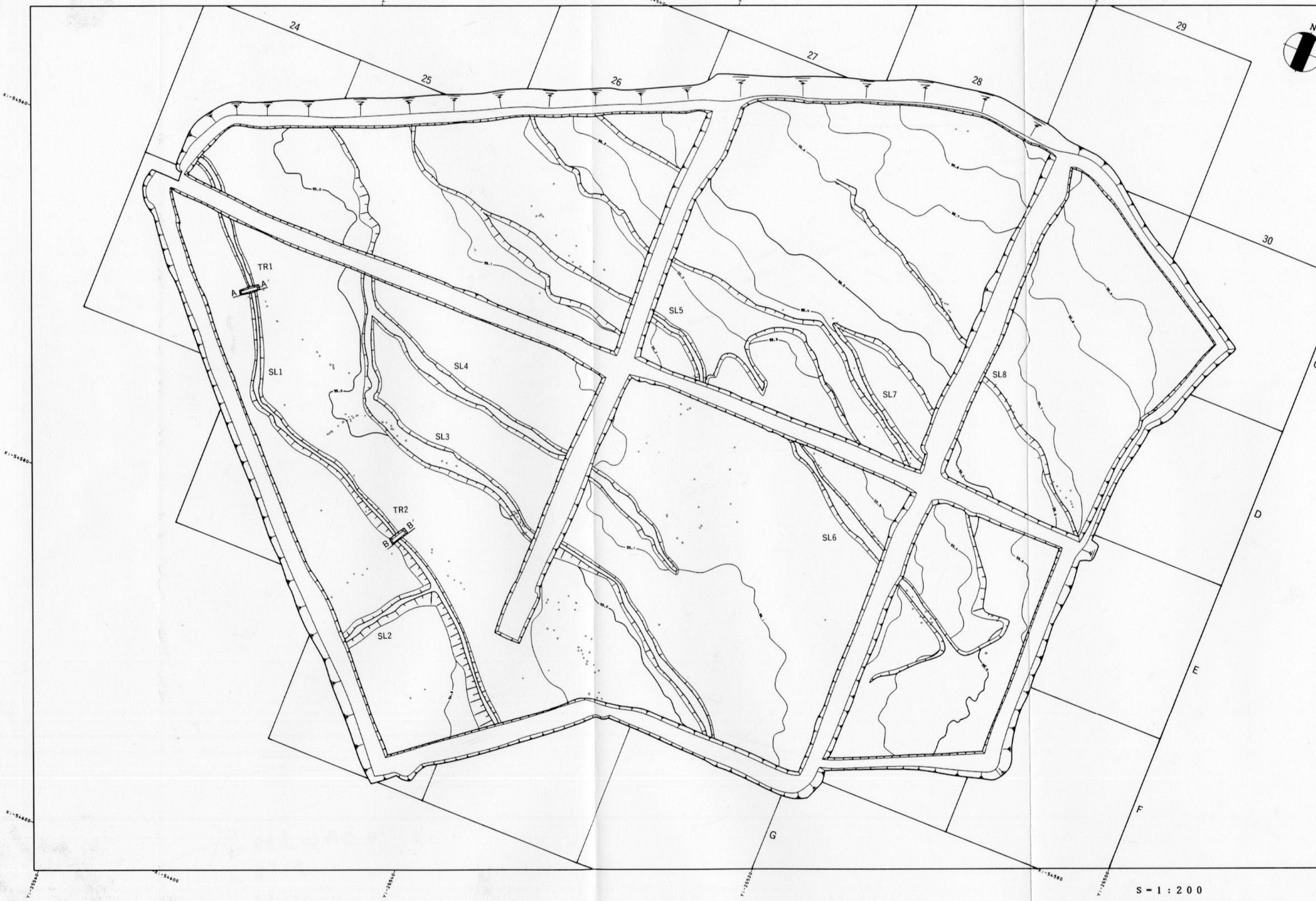
C28区～D29区にかけて検出される。盛土は未確認であるが、杭列が存することから畦畔とした。北西方向は崖錐の影響により明らかではない。南東方向は調査区外となる。段差の長さ26.8mを測る。主軸の方位はN58°Wである。

II区　杭列

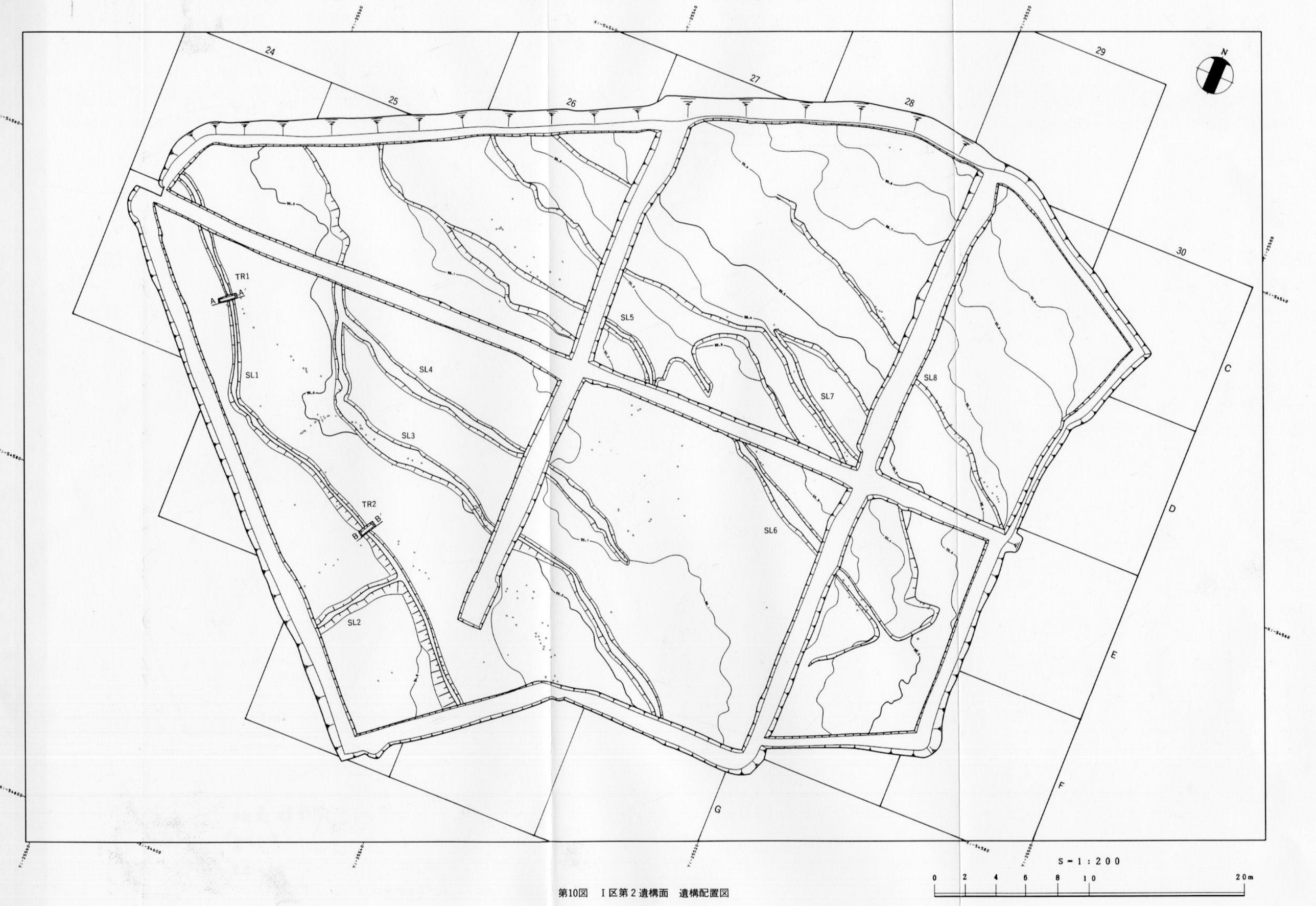
II区ではSN 1～SN 9の杭列及び段差を確認した。調査区北側レベルは54.3m前後、南側は53.9m前後、東側は54.3m前後、西側は54.2m前後、中央部は54.15mである。比高差は南北で約0.4m、東西で約0.1m、東側と中央部で0.15m、西側と中央部で0.05mを測る。杭列の区画は調査区東側ではI区西側と同様に南北の軸を基準にして西へ60°未満の傾きが生じる。調査区西側では緩やかになる。

SN 4

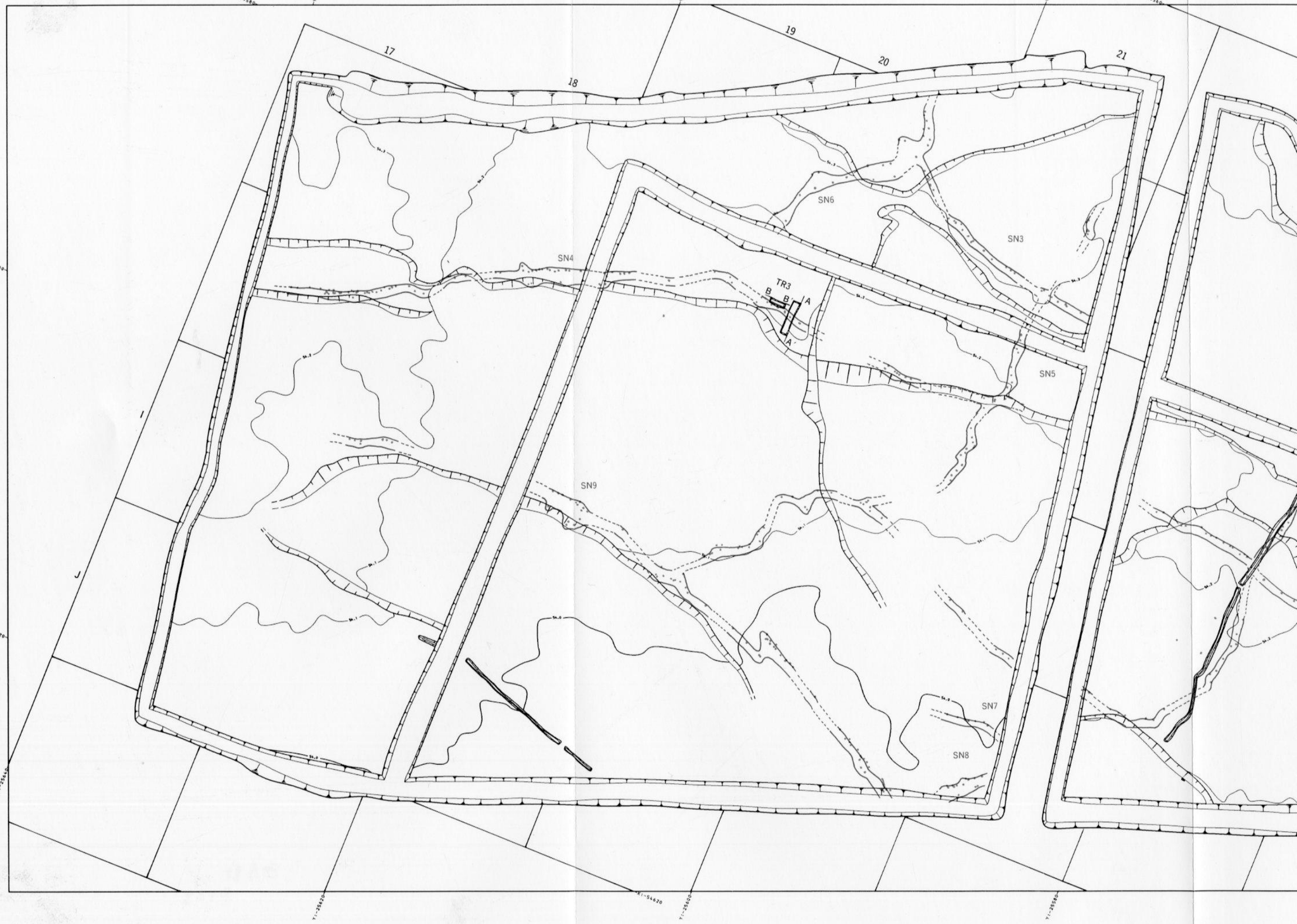
H17区～H24区にて検出される。調査対象外となる西方向は更に延びるものと推測される。東方向はH24区にて途絶える。G19区～22区には杭列が間断するが、杭が点在することから一連の杭列と考



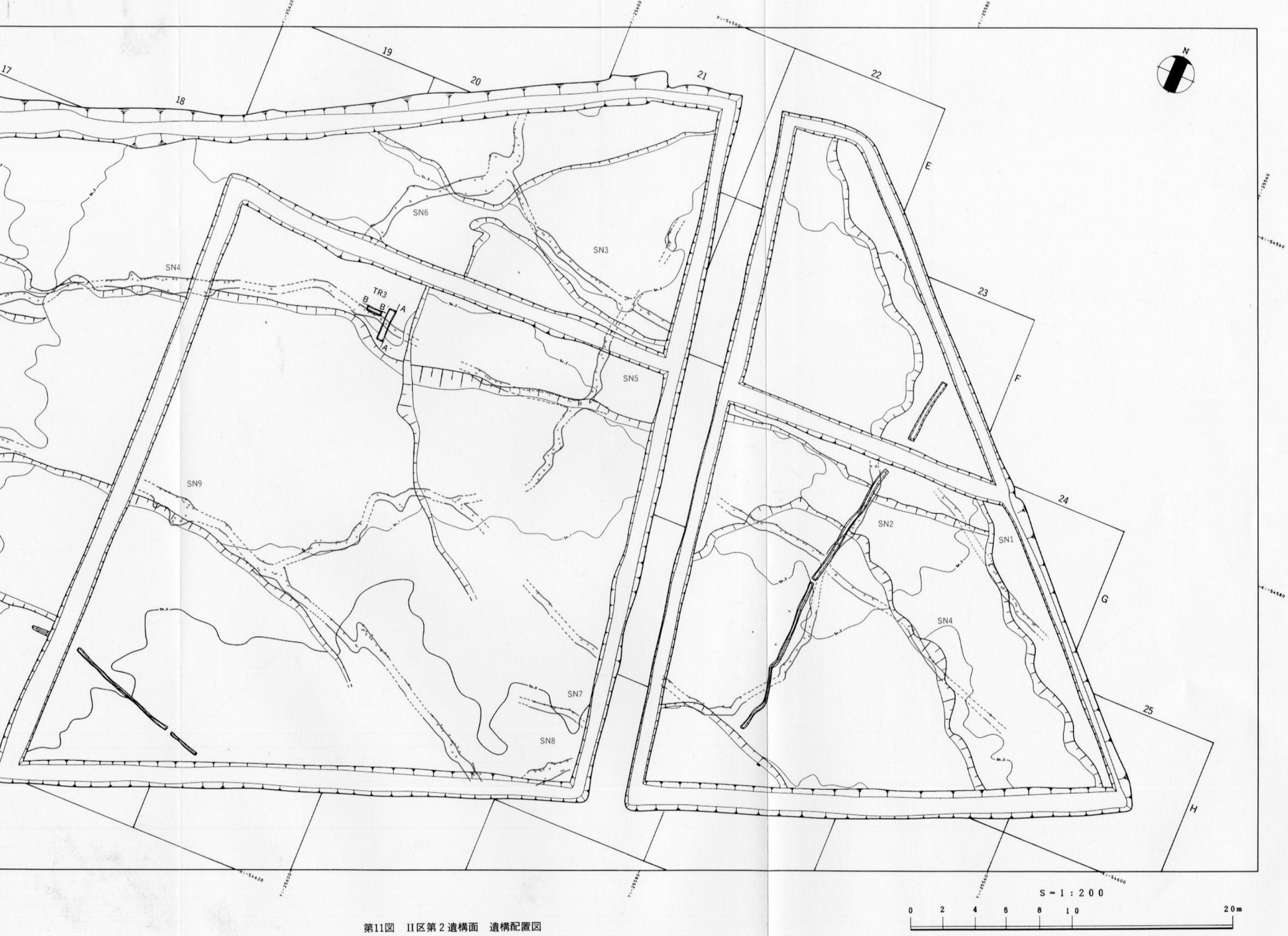
第10図　Ⅰ区第２遺構面　遺構配置図



第10図　Ⅰ区第２遺構面　遺構配置図

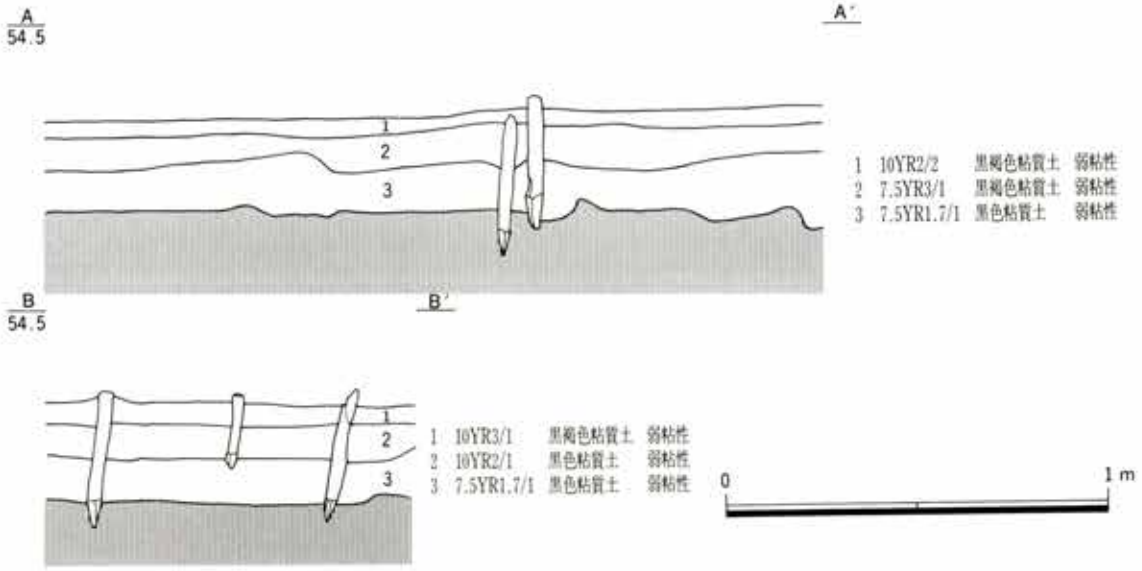


第11図　II区第２遺構面　遺構配置図



第11図　II区第２遺構面　遺構配置図

えられる。南北の杭列はG20区にてSN6と直交するものと推察される。また、G21区においてはSN5、G23区においてはSN2と各々直交する。杭列の長さは推定線を含めて78.5mを測る。主軸の方位はW27°S～W12°Nである。



第12図　TR3東壁セクション図・SN4実測図

第4表　I区畦畔一覧表

遺構名	グリッド	規模 (m)			主軸方位	備考
		長さ	幅	高さ(最大)		
SL1	C24～G27	40.4	0.15～0.40	0.11	N50°W～N70°W	
SL2	F26～G26	6.4	0.20～0.40	0.11	N50°W	
SL3	E25～F28	48.2	0.15～1.15	0.09	N55°W～N78°W	
SL4	E25～F27	24.8	0.25～0.85	0.09	N77°W	
SL5	D27	24.5	0.20～0.32	0.03	N58°W	
SL6	E28～E29	16.2	0.20～0.75	0.04	N58°W	
SL7	D28	10.2	0.20～0.50	0.05	N58°W	
SL8	C28～D29	26.8	—	—	N58°W	

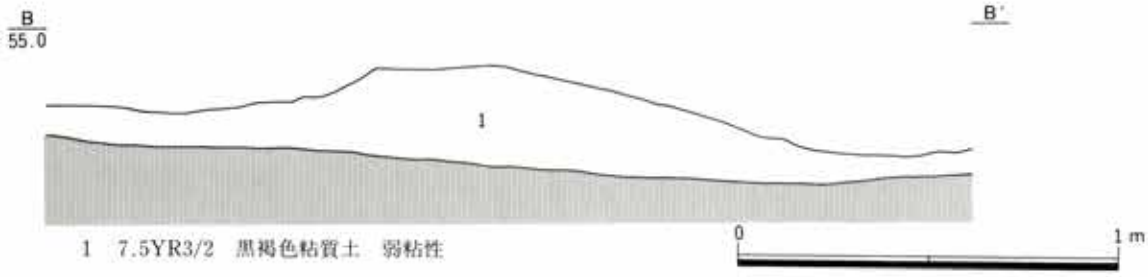
第5表　II区杭列一覧表

遺構名	グリッド	長さ(m)	主軸方位	備考
SN1	G23～24	10.2	N53°W	
SN2	G23～H23	40.7	N3°E	
SN3	F20～21	14.0	W13°N	
SN4	H17～24	78.5	W27°S～W12°N	
SN5	F21～I20	37.4	N3°E～N49°E	
SN6	F20～G20	14.0	N45°E	
SN7	I22	2.8	N8°S	
SN8	I22	2.5	N56°E	
SN9	I18～21	39.1	W19°N～W4°S	

第5節　第Ⅰ・Ⅱ区第3遺構面の遺構（第14・15図）

本遺構調査面では、ST1～ST12（Ⅰ区）、ST13～ST28（Ⅱ区）総計28枚の水田が確認された。上面で確認された第2遺構面とほぼ同位置で確認されている。完全な水田区画は、ST 9、ST10、ST11、ST23の4枚で、立地状況に応じて面積等は異なっているが、畦畔には一定の方向が認められる。また、取水、排水口については今回の発掘では明らかにはならなかったが、畦畔の高さから察すると、山からの湧き水はオーバー・フローして各々の水田に及んでいたものと推察される。

Ⅰ区水田域北側レベルは55.8m前後、南側は54.7m前後と約1.1mの比高差を有し、東側は55.5m前後、西側は54.7m前後で比高差約0.8mが生じる。ST1～ST12は北東側に位置する山の傾斜により南西方向へ緩やかに傾斜する地形に即した方向で水田区画が形成されている。畦畔の主軸はおよそN60°W前後で、等高線に沿うように形成されている。東南側では水田遺構ではない地域が存在する。北西方向からの畦畔が途中で途切れ、礫層が現れる。



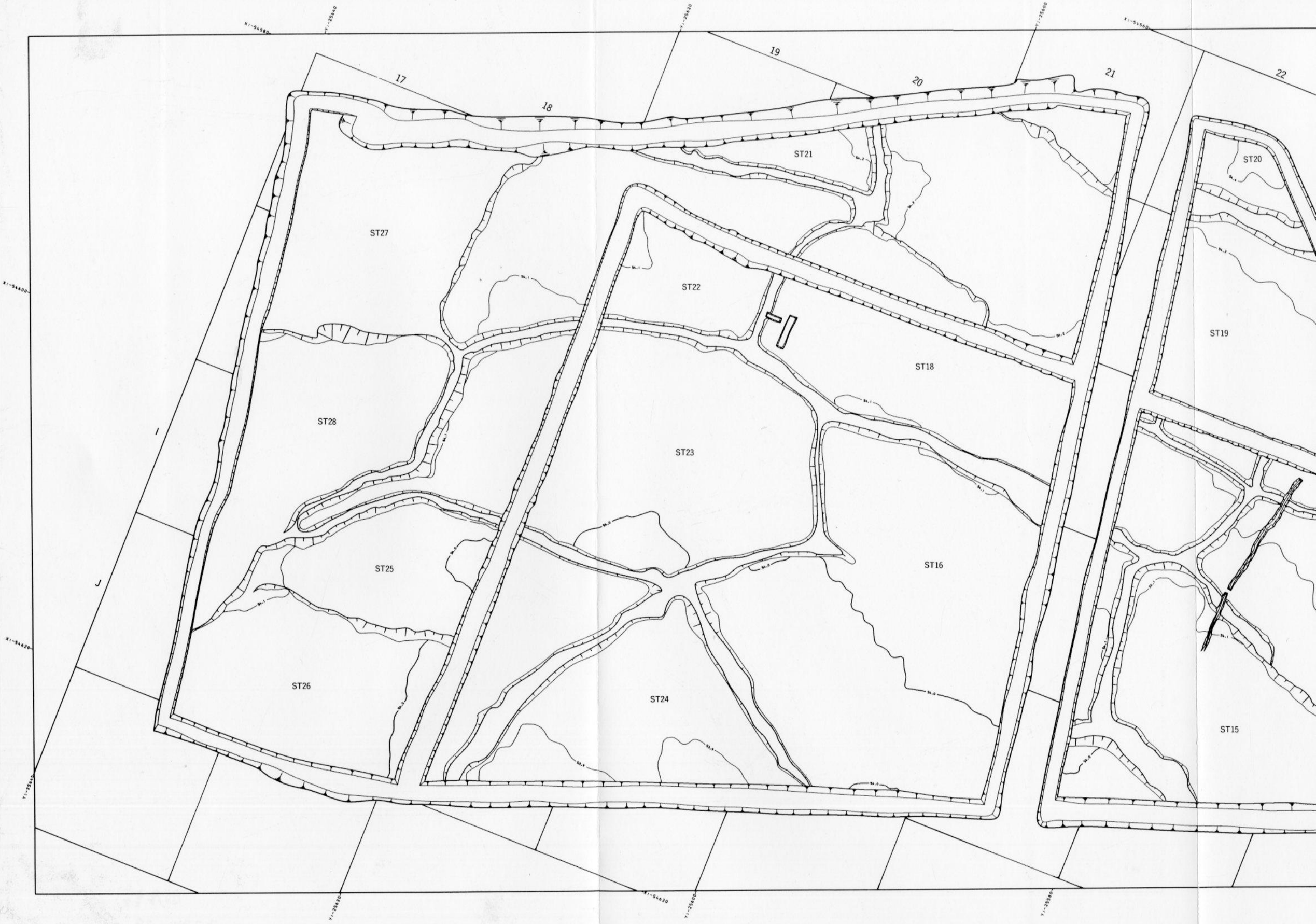
1　7.5YR3/2　黒褐色粘質土　弱粘性

第13図　TR 2 南壁セクション図

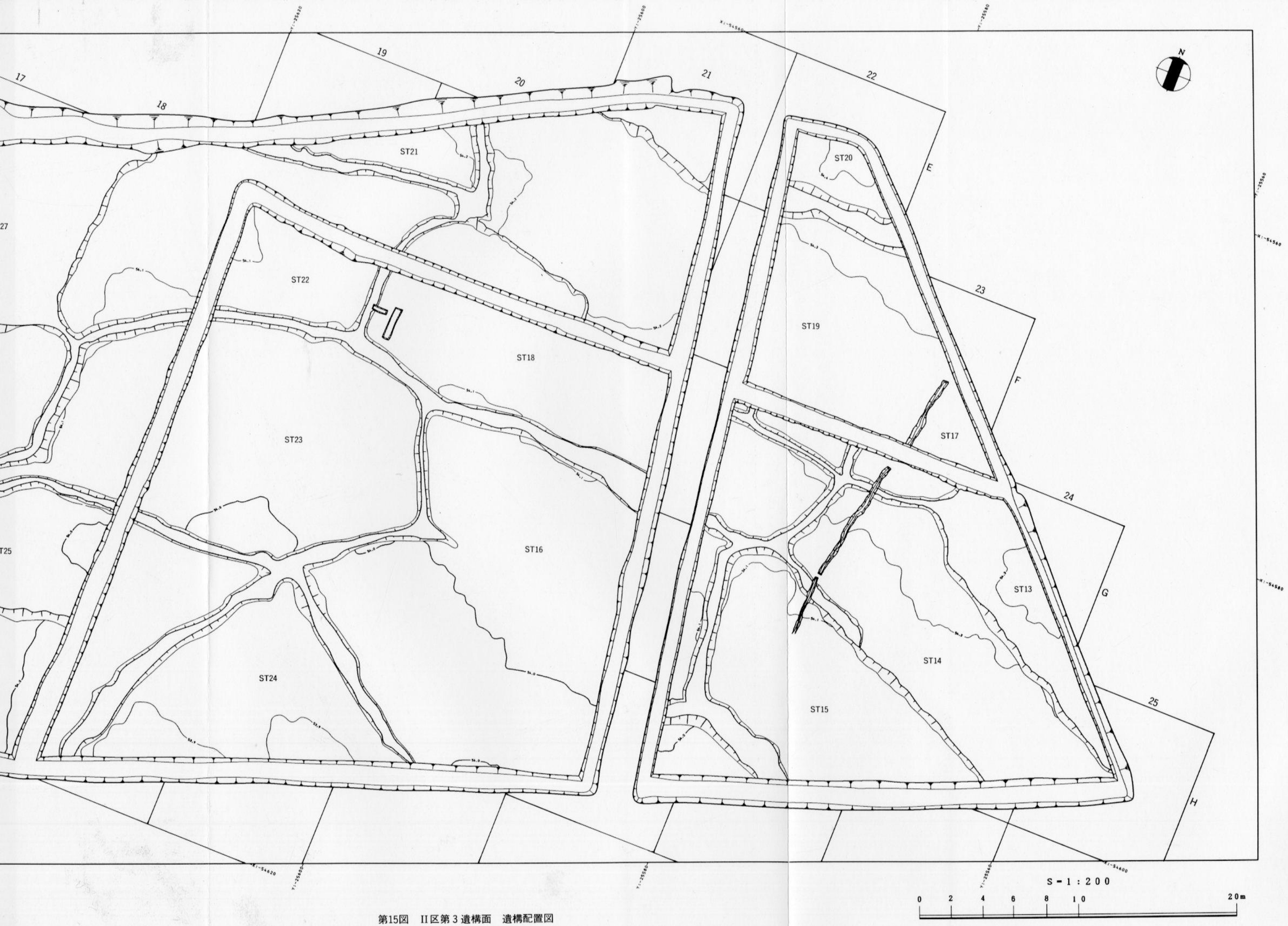
第6表　Ⅰ区水田一覧表

遺構名	グリッド	規模				主軸方位	備考
		長軸(m)	短軸(m)	面積(m²)	高さ(m)		
ST 1	G26	(7.7)	(5.1)	(37.8)	54.65～54.70		
ST 2	E24, F25・26, G26	(27.3)	(5.2)	(61.8)	54.80～54.70		
ST 3	F27, G27	(21.0)	3.2	(99.2)	54.85～54.90	N55°W	
ST 4	D24・25, E24・25, F25	(19.2)	5.4	113.4	54.80～54.90	N30°W	
ST 5	E25・26, F26・27	(28.1)	2.9	52.6	54.75～54.90	N60°W	
ST 6	D25	(4.8)	(4.3)	(12.7)	55.05	N29°W	
ST 7	D25～27, E25～28, F27・28	(35.1)	10.5	(322.8)	55.00～55.10	N65°W	
ST 8	C26, D25～27	(21.3)	6.0	(130.1)	55.15～55.20	N72°W	
ST 9	D27・28, E27～29	18.8	4.6	95.5	55.25	N53°W	
ST10	D27～29, E28・29	30.3	3.8	85.2	55.25～55.40	N53°W	
ST11	C26～28, D26～29	50.0	6.9	161.9	55.50	N62°W	
ST12	C28～30, D28～30	(13.3)	(12.0)	(157.4)	55.60～55.80		

第14図　Ⅰ区第３遺構面　遺構配置図



第15図　II区第３遺構面　遺構配置図



第15図　II区第3遺構面　遺構配置図

II区における水田域北側レベルは54.4m前後、南側53.9m前後、東側は54.3m前後、西側では54.2m前後、中央部(ST16、23)では54.0m前後を測る。比高差は南北で0.5m前後、東側と中央部では約0.3m、西側と中央部では約0.2mを測る。ST14～ST20の畦畔の方向はI区と同様であるが、60°前後の傾きがそれ未満に変化する。ST21～ST28は北西方向から南へ傾斜する水田区画を呈している。中央部はやや低くなり西側、東側の水田の傾斜が重なって、南へ低くなる。

畦畔の幅や高さは傾斜の度合い等により差異が見られる。現状で最大幅1.70m、最小幅0.30mを測る。高さは最高約0.2m、最低約0.1mを測る。

第7表　II区水田一覧表

遺構名	グリッド	規模				主軸方位	備考
		長軸(m)	短軸(m)	面積(m²)	高さ(m)		
ST13	G24	(20.0)	(5.1)	(54.4)	54.30	—	
ST14	G23·24, H23～25	(21.6)	6.3	(144.7)	54.20～54.25	N62°W	
ST15	H22～24, I23	(14.8)	7.6	(124.3)	54.05～54.10	N64°W	
ST16	G20·21, H20～22, I20～22	20.8	20.6	(386.1)	54.00～54.10	—	2つの水田遺構
ST17	F23, G23	—	—	—	54.20	—	
ST18	F20·21, G20～23	29.8	(6.3)	54.1	54.10～54.15	N81°W	
ST19	E20～22, F20～23	—	—	—	54.20～54.35	—	
ST20	E22	—	—	54.0	54.40	—	
ST21	F19·20	—	—	(21.3)	54.20	—	
ST22	F18～20, G18～20, H18	18.5	9.6	190.0	54.10～54.15	W12°W	
ST23	G19·20, H18～20, I17～20	22.3	13.8	276.7	54.00～54.05	N16°W	
ST24	I19～21, J19～21	(5.8)	(2.7)	(119.5)	53.90～53.95	—	
ST25	I17～19, J17～19	17.6	7.1	274.5	54.00～54.10	W4°W	
ST26	J17·18, K17·18	(14.7)	(8.9)	(123.6)	54.00～54.10	—	
ST27	G17·18, H17·18	(5.9)	(11.3)	(132.3)	54.25～54.30	—	
ST28	H17·18, I17·18, J17	(12.7)	(9.7)	(126.1)	54.15	W36°S	

第6節　III区第1遺構面の遺構（第17図）

本遺構面では、I・II区同様、重機による表土掘削後、多数の杭列が検出された。総点数は376点(杭跡含む）を数える。調査区西側では字絵図に見られる微高地が確認された。今回検出された水田は杭による水田区画である。盛土については確認されていない。なお、水田区画については明らかな箇所、区画が推定される箇所には補助線を施した。他に土坑4が検出されている。この面の調査は主目的ではないので杭の位置のみ調査を実施した。

III区の広見地区は昭和期の圃場整備が実施され水田化された地域である。しかしその地域からは杭列が検出されていないことから、圃場整理における杭とは考えられない。またIV層においては明瞭に

畦畔が検出されていることから、III層における杭列で近世における水田遺構に関わるものと判断する。杭の方向性からすると水田区画に伴う土留め杭であることは明らかである。また、この面では水田を形成する際に穴を埋めたと見られる土坑が4基検出された。

杭列（SN）

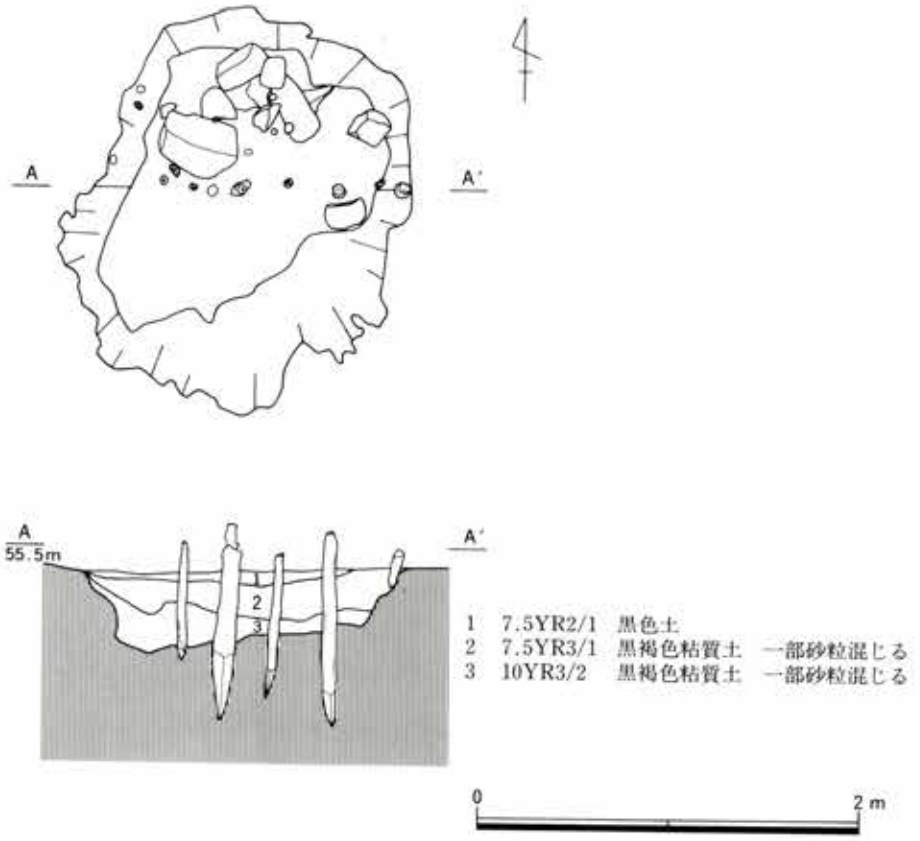
東西・南北方向にSN 1～SN 8が確認された。明確な区画は明らかではないが、SN 1～SN 6は東西の方向性を有することは明らかである。I・II区と同様（第4節）、水田区画に関わる土留め杭と考える。横木については未確認である。SN 7、SN 8は南北に延びる方向性を有することから、字絵図に見られる微高地と水田との境界杭と推察される。水田の平均面積等は完全な区画が存しないため明らかではない。盛土については未確認である。

土坑（SK）

L 4区～6区にかけて土坑群が検出される。遺構の性格については、明らかではないが、周辺は白色のシルト層（地山）が検出されており、中世は林などの微高地として存在していたものと考えられる。そのため倒木による穴であったと推定される。土坑には長めの杭が打ち込まれており、穴を塞ぐ様に杭の補強と見られる石が多数存在する。近世には微高地（林）の開発により生じた穴を塞ぐために埋められた土坑と考えられる。

SK 1

L 5、6区にて検出される。平面形は不正円形を呈し、長軸2.12m、短軸1.76m、深さ0.43mを測る。埋土は3層に分かれ、上記同様に石が検出されている。土坑内には杭が12本東西二列に打ち込まれ、杭先は地山に達する。杭の長さは1.05～0.21mと長短存するが、全体的に長めの杭である。遺構の性格は上述の如く、近世の水田開発に関わる遺構と判断される。遺物は寛永通寶1、石鏃1等が出土した。

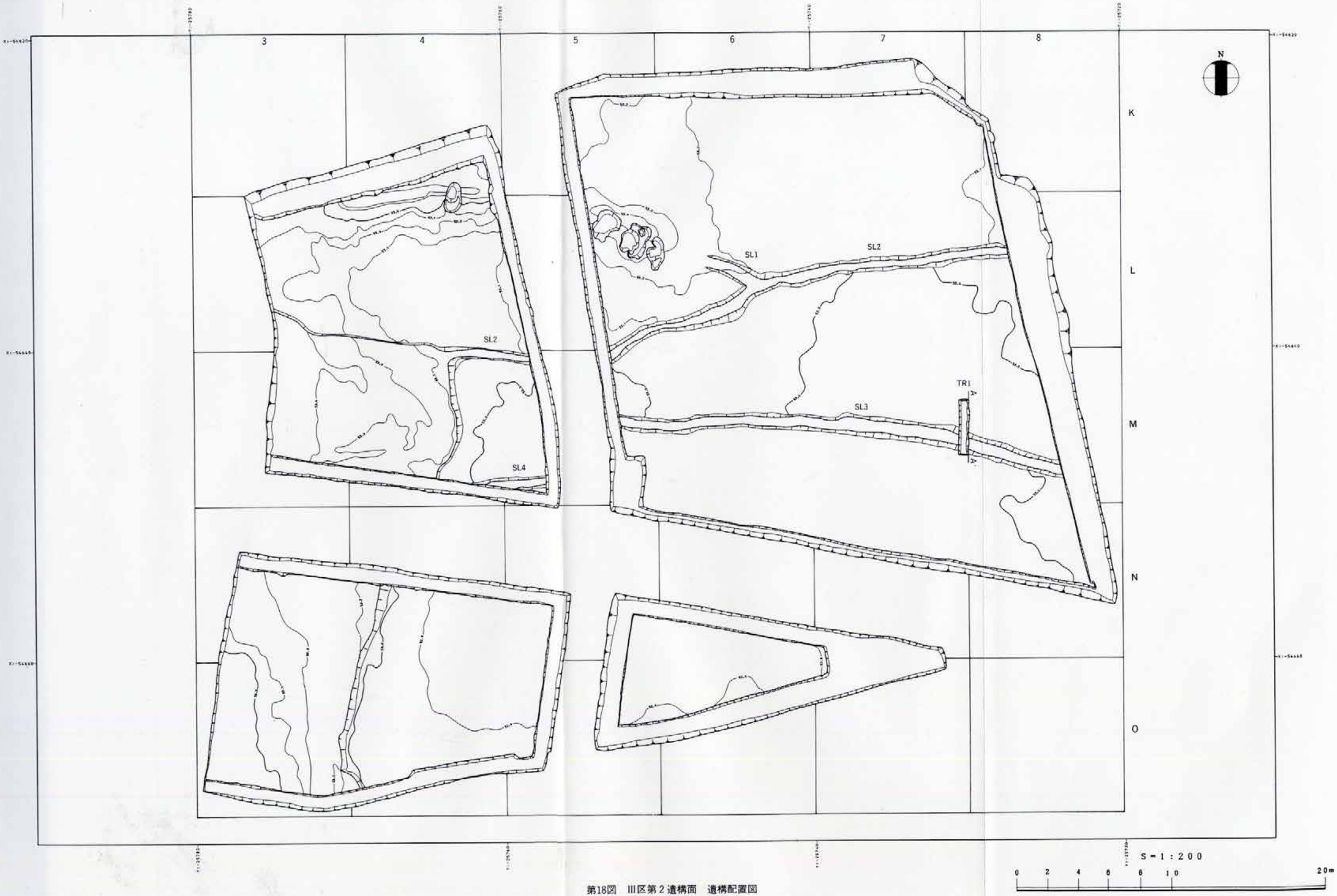


第16図　SK1実測図

S＝1：200

0 2 4 6 8 10 20m

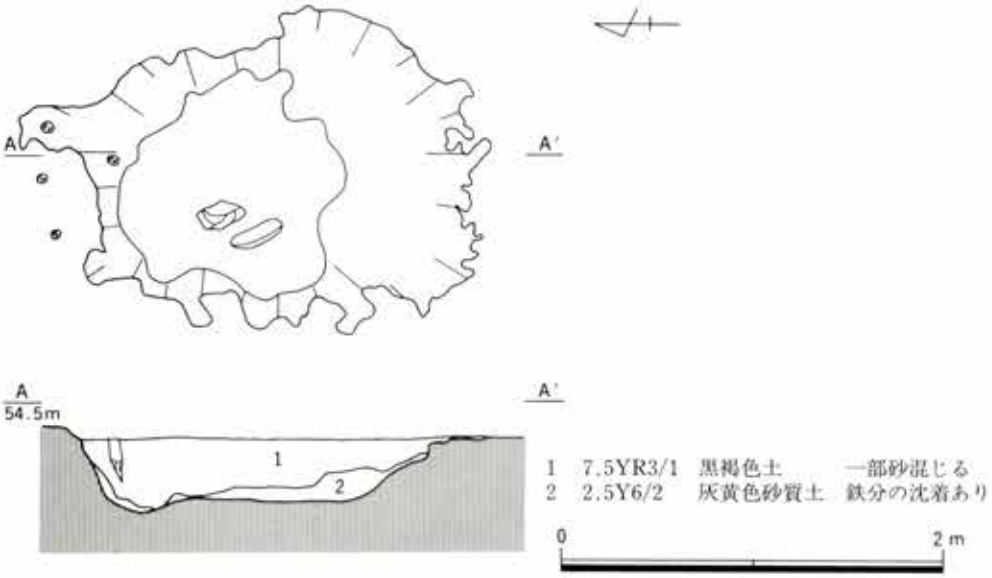
第17図　Ⅲ区第１遺構面　遺構配置図



第18図　Ⅲ区第２遺構面　遺構配置図

SK 2

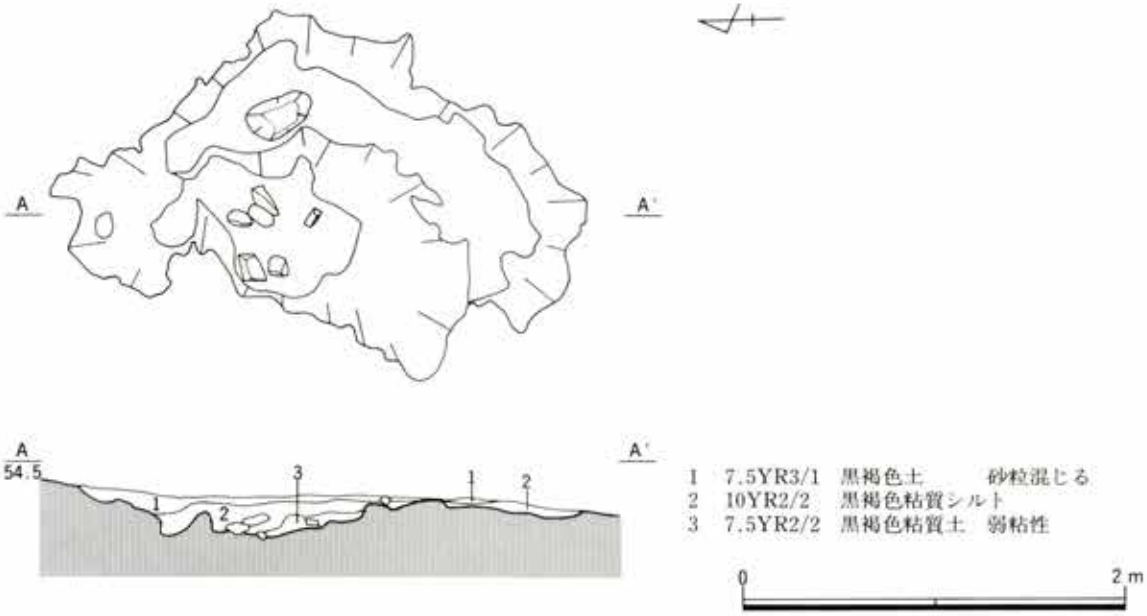
Ｌ５区にて検出される。SK１の西側に隣接する。平面形は不定形を呈し、長軸2.52ｍ、短軸1.34ｍ、深さ40.00ｍを測る。埋土は２層に分かれ、上記同様に石が検出される。遺物は、山茶碗、近世陶磁器の小破片が出土した。遺構の性格については、明らかではないが、時代については土杭内には杭が２点、北側周辺には東西に杭が２点打ち込まれていることから、この時期に埋められたものと判断される。



第19図　SK2実測図

SK 3

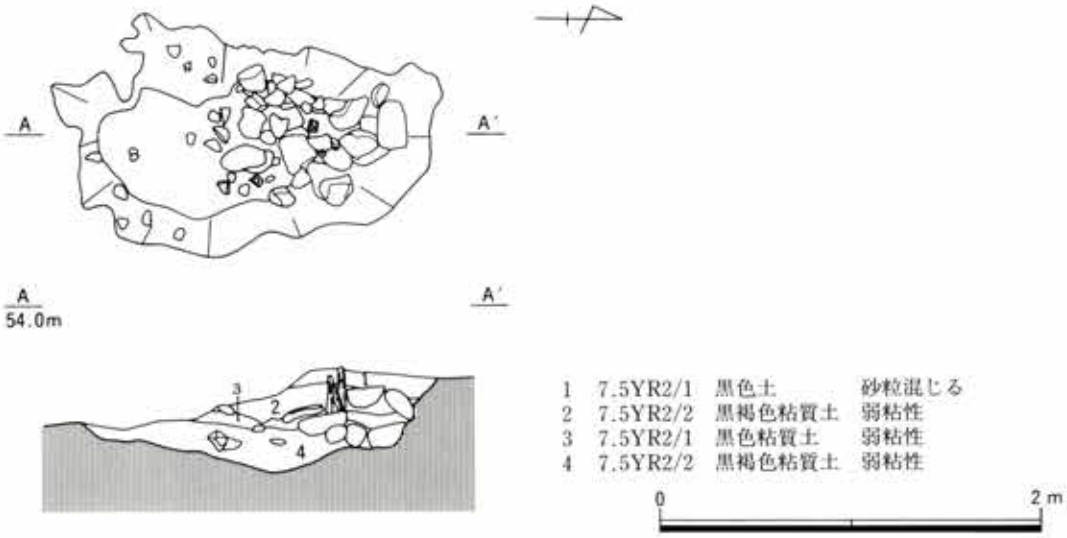
Ｌ５区にて検出される。平面形は不正楕円形を呈し、長軸2.67ｍ、短軸1.52ｍ、深さ0.23ｍを測る。埋土は３層に分かれ、石が20数個余り投げ込まれ穴を塞ぐ様に埋められた形跡がある。遺構の性格については、先述の如くである。遺物は、山茶碗、近世陶磁器の小破片、鉛玉１点が出土した。



第20図　SK3実測図

SK 6

L 4区にて検出される。平面形は不正楕円形を呈し、長軸1.85m、短軸0.97m、深さ0.50mを測る。埋土は2層に分かれ、穴を埋めるために石が多量に投げ込まれたものと考えられる。杭が上方にて検出される。遺物は、山茶碗、近世陶磁器の小破片が出土した。



第21図　SK6実測図

第8表　Ⅲ区杭列一覧表

遺構名	グリッド	長さ(m)	主軸方位	備　考
SN 1	L 6～K 8	19.55	W10°S	
SN 2	L 3～7	36.40	W 8°N	
SN 3	M 4～L 6	43.95	W 1°N	
SN 4	M 7	6.75	W 3°N	
SN 5	M 4～5	14.60	W 5°S	
SN 6	M 6～7	11.85	W 8°N	
SN 7	M 3	6.15	N 2°E	
SN 8	N 4～O 4	13.50	N20°E	

第9表　Ⅲ区土坑一覧表

遺構名	グリッド	規模(m)			平面形	備　考
		長辺	短辺	深さ		
SK 1	L 5	2.12	1.76	0.43	不正円	
SK 2	L 5	2.52	1.34	0.40	不定形	
SK 3	L 5，6	2.67	1.52	0.23	不正楕円	
SK 6	K 4～L 4	1.85	0.97	0.50	不正楕円	

第７節　Ⅲ区第２遺構面の遺構（第18図）

本遺構面では東西４条の畦畔及び調査区西側にて、水田域と微高地（第１遺構面＝近世においては秣場、林）との境界が検出されている。また、調査区中央部の西側においても微高地と見られる地山の高まりが確認されている。従って、中世における当該地区は微高地として存在していたものと考えられる。

確認された畦畔は全て東西方向のもので、南北の畦畔は確認できなかった。水田の区画や構造については、完全な区画が存しないため明らかではないが、調査区内の水田域北側のレベルは53.2ｍ前後、南側では52.9ｍ前後、東側では53.1ｍ前後、西側微高地で53.5ｍ前後、水田面では53.0ｍ前後あり、比高差は南北で0.3ｍ前後、東西で0.1ｍ前後、東側の水田面と微高地では約0.5ｍの差が生じている。水田面はほぼ平坦であることから、水の流れは緩やかであることが想定される。畦畔との間隔は10ｍ前後である。水源は坂田池と考えられ、水の供給は北より取水し南流、若しくは西流したものと考えられる。

SL 1

Ｌ６区にて検出される。SL２より枝分かれし、西側は微高地と繋がる。長さ3.3ｍ、幅0.70～0.80ｍ、高さは最高で0.09ｍを測る。主軸方位はW25°Ｎである。

SL 2

Ｍ４区～Ｌ８区にて検出される。西側は微高地と繋がる。東側は更に延びるものと推測されるが、調査区外に至る。長さ38.0ｍ、幅0.40～0.80ｍ、高さは最高で0.13ｍを測る。主軸方位はＷ８°Ｓである。

SL 3

Ｍ５区～Ｍ８区にて検出される。西側はＭ５区にて不明となる。SL４と繋がるか。若しくはＭ５区にて南北の畦畔の存在が想定される。長さ29.1ｍ、幅0.45～0.90ｍ、高さは最高で0.09ｍを測る。主軸方位はＷ２°Ｎである。

第22図　TR1東壁セクション図

SL 4

Ｍ４区～Ｍ５区にて検出される。東・西側の延長は調査区外に至る。SL３との関わりが指摘できるが不明である。長さ3.0ｍ、幅0.40～0.50ｍ、高さは0.11ｍを測る。主軸方位はＷ５°Ｓである。

第10表　Ⅲ区畦畔一覧表

遺構名	グリッド	規模（m）			主軸方位	備考
		長さ	幅	高さ		
SL 1	L 6	3.3	0.08～0.70	0.09	W25°N	
SL 2	M 4 ～ L 8	38.0	0.80～0.40	0.13	W 8°S	
SL 3	M 5 ～ 8	29.1	0.90～0.45	0.09	W 2°N	
SL 4	M 4 ～ 5	3.0	0.50～0.40	0.11	W 5°S	

（小塩康真）

第4章　遺　　物

第1節　遺　物　概　要

西屋敷遺跡から出土した遺物は、土師器、須恵器から中世の山茶碗・小皿、大窯期・連房式登窯期の近世陶器までの多時期にわたる土器類、玩具・土鈴・土錘などの土師質の土製品、近世の陶製加工品、杭・櫛・鑑札などの木製品、渡来銭、古銭、煙管などの金属製品の他、縄文・弥生期までさかのぼる石鏃、石斧、砥石などの石製品である。取上げられた遺物のうち、土器類はそのほとんどが破片・細片である。また、土製品、木製品、金属製品などは保存状態の悪いものが多い。特に中世以前の遺物は磨耗が著しい。遺物全体の割合をみると、大半を占めるのは中近世陶器片である。また、本遺跡周辺の環境や一般的な水田地形の性質からみて、この地においても幾度かの撹乱や周辺からの流れ込みが繰り返されてきたと考えられる。歴史的環境などを考慮すると中世以前の遺物については近隣地域からの流れ込みと推測されるため、中世以降の遺物に主眼をおいて整理調査を行った。

この調査では出土した遺物のうち、土器・陶磁器については分析の対象を、原則として口縁部が残存するものに限定し、口縁残存率が12分の1以上の遺物を対象に分析しデータを整理した。本来ならば残存率にかかわらず、すべての出土遺物について資料化すべきであるが今回は割愛する。器種の構成状況・比率を明らかにすることが目的であるため、破片の総数は求めていない。遺物を精選したのち、胎土、成形方法、文様、施釉などの特徴から産地を分類し主に器形的な特徴から器種の分類を行った。器種の名称については既刊の報告書にある標準的な名称を参考にした。なお、次にあげる器種については以下の報告書を主に引用したので列記する。

灰釉陶器　分類は、斎藤孝正「灰釉陶器生産の一様目」(『美濃の古陶　美濃古窯研究会会報3』1989)の区分・名称に従った。

山茶碗　胎土と形態から南部系山茶碗に類するものを山茶碗A、北部系山茶碗に類するものを山茶碗Bとした。山茶碗Aについては藤澤良祐『尾呂』1990瀬戸市教育委員会の中世瀬戸窯編年表（II）の区分・名称に従って分類した。

小皿　山茶碗と同様に、胎土と形態から南部系に類するものを小皿A、北部系に類するものを小皿Bとし、前項の編年に従った。

古瀬戸　分類は、藤澤良祐「瀬戸古窯址群II－古瀬戸後期様式の編年－」(『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要X』1991）の分類法・名称を参考にした。

中国磁器　分類は、太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡II』1983の報告書にある分類法・名称を参考にした。

大窯　主な分類は、田口昭二「美濃焼」(『考古学ライブラリー17』1983ニューサイエンス社)、及び『瀬戸市史・陶磁史編』の分類法・名称を参考にした。

連房　主な分類は、「美濃焼」、及び藤澤良祐「本業焼の研究(3)－付表本業焼編年表－」(『瀬戸市歴史民族資料館　研究紀要』1989)、『尾呂』の付表1近世美濃窯編年表にある分類法・名称を参考にした。

土製品、木製品、金属製品、石製品については主に機能的な視点から、以下に示す周知の分類方法、

編年表に沿って器種、名称の分類を行った。なお、次にあげる器種については以下の報告書を主に引用したので列記する。

土製玩具類　財団法人愛知県埋蔵文化財センター『清洲城下町遺跡Ⅴ』(1985) の報告書にある分類・名称を参考にした。

土錘　財団法人愛知県埋蔵文化財センター『松河戸遺跡』(1983) の報告書にある分類・名称を参考にした。

金属製品　白金館址（特別養護老人ホーム建設予定地）遺跡調査会『白金館址遺跡Ⅰ』(1988)、都立学校遺跡調査会『白鷗』(1990) の報告書にある分類・名称を参考にした。

石鏃　財団法人岐阜県文化財保護センター『荒城神社遺跡』(1993) の報告書にある分類・名称を参考にした。

なお、それぞれの器種の主な概要・特徴及び個々の遺物についての詳説は、第2節以降で出土地区・遺構面ごとにまとめた。出土地区はⅠ区とⅡ区をグループ化した。

第2節　土　　器　　類

1．器種の分類と概要

出土した土器類は種類、器種ごとに分類し、その時期のメルクマールとなるものや器形・成形の面で特徴的なものを抽出して図化し、それぞれに解説を加えた。また、図化した遺物については後述の観察表に成形、調整、胎土、色調、施釉などをまとめた。なお、それぞれの器種の概要と主な特徴については以下のとおりである。

「土師器」は灯明皿として使用されたものが多い。口径10cm前後の小型の皿がほとんどである。皿は軟質で浅黄橙色のものと、硬質で黒褐色のものがある。皿の他には、外面に多量の炭化物が付着した甕、鉢の一部が出土している。

「須恵器」はどの遺物も摩滅が著しく破片の断面もローリングによって丸みを帯びている。坏蓋、坏身をはじめ、碗、高坏、盤、甕、長頸瓶、壺、円面硯と考えられる破片がそれぞれ出土している。

「灰釉陶器」は「K—90式」から「O—53式」にかけての時期（10世紀頃）のものと考えられる。碗の他に、皿、段皿、長頸壺の一部が出土している。

「山茶碗」のうち、山茶碗Aは『尾呂』の中世瀬戸窯編年表（Ⅱ）の区分・名称のなかの第5型式から第7型式までの碗が中心となっている。山茶碗Bについては、周知の美濃窯山茶碗編年表のなかの「白土原1号窯期」から「生田2号窯期」に相当する碗が出土している。山茶碗Bの生産時期を山茶碗Aや古瀬戸の編年と比較するため、山茶碗Bは周知の美濃窯山茶碗編年表に従った分類法の名称を、上記の『尾呂』の区分・名称に対応させて解説と観察表に用いた。(第11表)

第11表　山茶碗B対応表

美濃窯山茶碗編年表による区分	中世瀬戸窯編年表（II）の区分
白土原1号窯期	第IV期
明和1号窯期	第V期
大畑大洞4号窯期（前半）	第VI期
大畑大洞4号窯期（後半）	第VII期
大洞東1号窯期	第VIII期
脇之島3号窯期	第IX期
生田2号窯期	第X期

山茶碗Aは破片数が少なく、山茶碗全体のなかでの割合は約7％であった。生産された時期は第5～7型式（13世紀前半）のものと考えられる。山茶碗Bについては第VI～VIII期（14世紀後半）の割合が約40％と最も高く、その前後の時期（第IV～V期／14世紀前半）及び（第IX～X期／15世紀前半）はそれぞれ20％ずつの割合で見られる。

どの山茶碗も底部外面には回転に糸切り痕が見られる。高台端部及び底部外面の調整や植物圧痕についてはそれぞれ観察表に示した。生産時期については、第5～7型式(山茶碗A)、第IV期～第X期（山茶碗B）の範囲で判断し観察表に記した。なお、山茶碗Bについては個体数が多いため生産時期の第IV期から第X期までの器種の主な特徴を以下のとおり列記する。

第IV期

直線的に立ち上がる厚手の体部と底部内面の外縁に輪状の窪みが見られるのが特徴である。また、時期が下がるにつれて、底部中央が薄くなり、底部内面中央に静止指ナデ調整の見られるものが多くなる。底部外面は回転糸切りの後、やや幅の広い高台が貼り付けられている。

第V期

前期に比べ、器壁が薄くなり高台径が小さくなる。口縁はわずかに外反し、端部が肥厚になり上方につまみ上げて尖らせてある。底部内面の外縁に小さい輪状の窪みが見られる。底部内面中央の静止指ナデ調整と底部外面の回転糸切りはどの個体にも見られる。

第VI～VII期

前期に比べ、体部が大きく開いて器高が低くなり、口径・高台径も小さくなる。底部内面中央の静止指ナデ調整と底部外面の回転糸切りは同様である。

第VIII期

前期に比べ、各法量が一段と小さくなる。口縁は端部がわずかに内彎し、底部内面中央の静止指ナデ調整が個体によって見られなくなる。底部外面の回転糸切りは引き続き認められる。

第IX期

口径器高ともに小さくなる。高台が失われ、底部内面中央の静止指ナデ調整は全く見られなくなる。体部内面にはロクロナデによる同心円状の突起が見られるようになる。

第X期

口径は10cm前後と一段と小型になる。口縁は端部が顕著に内彎し、体部内面の同心円状の突起は

さらに鋭くなる。

「小皿」については、全体のなかでの小皿Aの割合が山茶碗Aの場合とほぼ同様である。小皿Bの時期についても山茶碗Bとほぼ同様の割合で出土している。また、小皿Bでは底部外面に墨書の見られるものが9点確認されている。どの小皿も底部外面には回転糸切り痕が見られる。底部内面に静止指ナデ痕のあるもの、外面に板状の圧痕等が見られるものについては、それぞれ観察表に記した。

「古瀬戸」は足付きの大型の皿、折縁中皿、平碗、擂鉢、香炉、有耳壺が出土している。

「中国磁器」は青磁、白磁、青白磁、染付の各器種が出土している。青磁では龍泉窯系と見られる碗、輪花坏の他、皿、長頸瓶が出土している。また、盤か鉢の口縁部に似た破片も出土している。白磁では碗、小坏、皿が見られる。青白磁の梅瓶の一部と思われるものも確認されている。染付では坏、皿が出土している。

「肥前系の磁器類」では、伊万里の青磁、白磁、染付の碗、小鉢が出土している。古伊万里、初期伊万里と思われる碗の他、唐津の碗、鉢も出土している。また、特定はできないが肥前系磁器の白磁の紅皿も見られる。

「大窯」では釉を施した碗類、皿類、鉢類が多く、鉄釉の天目茶碗、外面に強い稜の入ったシンプルな丸皿、縁釉皿、折縁皿、輪禿皿、内禿皿、長石釉を施した志野襞皿、内面に同心円状の突起をもつ無釉の重圏皿が見られる。その他、片口、香炉、燭台、徳利、猪口、茶入、水注、合子も出土している。大型の擂鉢の破片も出土しており、片口擂鉢の注口部分も見られる。

「連房」は大窯と同様に碗類、皿類、鉢類が多く、施釉の天目茶碗、丸碗、坏、内面に菊花文の型押しが見られる菊皿、輪禿皿、縁釉皿、灯明皿に加え、染付の碗、皿も出土している。その他に擂鉢、徳利、花瓶、水瓶、壺、合子、香炉、黄瀬戸の鉢と皿、織部の向付、染付の水滴、鬢盥も見られる。

2．各遺構面の遺物

a、Ⅰ・Ⅱ区第1遺構面

＜土師器＞

皿（1～10）

口径5.3～11.1cmの小型の皿である。灯明皿として利用された痕があり、体部の内面に煤及び油煙が付着している。1は軟質であるがほぼ完形で出土した。2、3はやや硬質である。4は不定方向の指ナデ調整が内外面とも行なわれており、口径の大きい硬質の皿である。5と7はやや硬質で厚手のつくりである。6は口縁部がピンク色をした焼成不十分な小型の皿である。8は全体に薄手で底部外面に植物圧痕が見られる。9と10は体部を回転ナデにより成形したもので、底部外面には明瞭な回転糸切り痕が見られる。内面には炭化物が付着している。

鉢（11）

11は鉢の口縁部の破片である。外面には炭化物が全面に付着している。

＜須恵器＞

壺（12）

12は壺の底部の破片と思われる。体部は鋭く立ち上がり、幅の広い高台が貼り付けられ、端部は外側に突きだしている。外面には炭化物が全面に付着している。

有台坏身（13）

13は底部の破片である。底部中央が薄くなっており、体部の立ち上がりは鋭い。高台は底部外面のやや内側に貼り付けられ、端部は丸みをもち外側に開いている。

盤（14）

14は盤の底部である。底部中央が高台端部付近の位置まで下がる。高台は内側、外側ともに丸みをもたせた調整が施されている。

＜灰釉陶器＞

碗（15）

小型の碗の底部と思われる。高台は小さく逆三角形で端部はやや外側に突き出している。内面には輪状に釉が見られる。

長頸壺（16）

広口の長頸壺の口縁部と思われる。端部は三角形につまんだ後、やや外反気味に突き出してある。口縁部外面に釉が見られる。

＜山茶碗＞

山茶碗B（17～19）

17は体部の立ち上がり付近にやや窪みが見られる。底部外面には回転糸切りの後、不定方向に爪状の圧痕が見られる。高台は中央部に向かって傾斜し丸みがある。18は体部外面にナデによる凹凸がはっきりと見られ、口縁端部は上方に尖らせてある。内面には自然釉が見られる。19は外面の白泥を不定方向に指でナデた痕が見られる。

＜小皿＞

小皿A（20）

厚手で大型の小皿である。内面全面に自然釉が掛かり、底部付近には釉が少したまっている。出土した他の小皿とは形状が異なるが、器形の特徴から第5型式と思われる。

小皿B（21）

全体に橙色の降灰のかかった皿である。北部系の小皿としては体部が厚い。

＜古瀬戸＞

擂鉢（22）

大型の擂鉢の口縁部である。口縁部内面に小突起をめぐらせてある。外面はムラのある錆釉が掛かり、内面は一様に艶のない濃い鉄釉がかけられている。

香炉（23）

体部は傾斜した見込み部分から垂直に立ち上がると思われる。体部外面の最下方にはわずかな凹状が見られる。底部の内面及び外面の上部には少し光沢のある黄褐色の鉄釉が掛けられている。底部外面には三足のうちの一足だけが残存している。

＜中国磁器＞

白磁小坏（24）

口径の小さい坏の口縁部である。口縁は「く」の字に外反し端部は水平になっている。

青白磁坏（25）

坏の口縁部と思われる。釉肌はひび割れ状にうす茶色のラインがめぐっている。

染付坏（27）

口縁部の外反は強くない。外面は口縁部の界線の下に唐草文が見られ、内面も口縁部と体部中程の界線の間に文様が描かれていたと思われる。

染付皿（26、28、29）

26、28は碁笥底の削り高台で、畳付部は露胎である。26の外面は3本の界線の間に波涛文帯と芭蕉葉文が描かれ、内面はやや太めの界線が3本あり、底部には十字花文が描かれている。28は外面に芭蕉葉文が見られ、内面底部には唐草文が見られる。29は皿の口縁部と思われる。外面は界線の下に唐草文が描かれている。

＜肥前系磁器＞

染付折縁鉢（30）

産地は特定できないが、肥前系磁器の折縁鉢の口縁部である。口縁部内面に連続文様があるが、ややムラがある。

白磁紅皿（31）

外面には底部から口縁部に向けて襞状の削りが放射状に見られる。外面の釉は全面に掛からず、露胎部が多く残る。

＜伊万里＞

染付小碗（32）

口縁部は薄く、端部は強く外反している。削り出した高台は低く端部が尖っている。外面には流れるような草花文が見られる。

染付小鉢（33）

口縁部は上方から1㎝ぐらいのところから垂直に立つ。端部は丸く調整されている。口縁部内面に網目状の連続文様が見られる。

染付碗（36）

古伊万里である。厚めの底部から鋭く立ち上がる碗である。外面に淡いコバルト色でシンプルな線画が描かれている。

青磁碗（37）

口縁部はわずかに内彎し端部は薄くなっている。口径の大きい鉢とも考えられる。

＜唐津＞

碗（34）

体部が垂直に立つ碗の口縁部である。外面は波打つ刷毛目文様で、内面は長石釉と思われる白濁の釉が無造作に掛けられている。

坏（35）

坏の体部である。体部下方には回転方向に刷毛目文様があり、それ以外は白濁の釉がランダムに流し掛けされている。

＜大窯＞

天目茶碗（45、46、81）

口縁部のくびれが小さい天目茶碗である。46は口縁部のくびれの下方の張り出しが強い。鉄釉が流れて体部下方は部分的に露胎である。81は口縁部のくびれがゆるやかな天目茶碗である。鉄釉が被熱により落とされ、薄茶色の斑点状になっている。

丸碗（47）

体部はほぼ垂直に立ち上がる。高台は削り出しの輪高台である。飴釉に光沢のない暗褐色の釉が掛けられている。

坏（38、48）

38は高台部をヘラで削り出し、内側は内反りになっておりヘラを離したときの痕が残る。48は外面にヘラ削りによる明瞭な稜が見られる。全面に長石釉が掛けられている。

丸皿（39、40、49～51、53～55）

39は体部外面に強い稜を２本もち、碁笥底の削り高台になっている。40は体部がやや強い傾斜で立ち上がり、外面には稜が２本入る。淡い褐色の鉄釉に乳白色の釉が流し掛けされている。49は体部外面の下方に強い稜が１本ある。低い内削ぎの高台に１ヶ所ピン痕が見られる。51は体部外面の下方に３本の稜が見られ、高台の内側には輪トチンに溶着した釉が型抜きしたように半円形に残っている。53、54は強めの稜が２本あり、高台畳付部の幅が狭い。55はシャープな高台で、その内側には輪トチンに溶着した釉が薄く部分的に残っている。内面中央部には径３㎝程の押型による菊花文が見られる。

緑釉皿（41、52）

41は折縁の皿である。体部外面には強い稜が２本あり、高台は端部が丸く整えられた削り出しの輪高台である。口縁部は折り返され内彎気味になっており、その部分を中心に灰釉が掛けられている。内面には鉄絵の一部が見られ、輪状の重焼痕で釉が消えている。52は口縁端部がやや外反する皿である。

重圏皿（42）

同心円状の小突起をもつ無釉の皿である。素地の鉄分が錆釉の感じを醸し出している。内面に炭化物が広く付着し灯明皿として使用されたものと思われる。

鉢（43）

鉢の底部である。外面はヘラ削りにより強めの稜が見られる。外面には赤茶色の鉄釉がランダムに刷毛塗りされている。内面は見込み部分を円形に刷毛で拭い取ってある。

耳付水注（44）

注口部は貼り付けられた後、外側から櫛等で孔が開けられている。耳部に掛けられたと思われる取手が外面と擦れた痕が残る。内外面とも茶色の鉄釉が掛けられ、剥落痕が斑点状に見られる。注口部の下方には水平に灰釉が掛けられている。

徳利（56）

徳利の口縁部の破片である。端部から内面にかけてややくすんだ乳白色の釉が流し掛けされている。

合子（57）

合子の身である。底部内面には中心から右回りに螺旋状のナデ痕がはっきりと認められる。体部外

面下方の角には小さな窪みが多数見られる。

擂鉢（58～62）

59、62は口縁部が肥大し、外面に一旦折り返された後、端部を内彎させてある。擂目は口縁部付近から下向きにつけられている。60は口縁部外面に小突起があり、端部はやや内彎気味になっている。58、61は口縁部外面の小突起をナデ調整した痕が見られる。端部は内彎気味で丸味をもたせてある。

＜連房＞

丸碗（63、64、82～84）

63、64は小型の碗である。64はほぼ全面にわたって灰釉が剝落している。82は低く幅の広い高台をもつ碗である。淡いオリーブ色の飴釉に乳白色のうのふ釉が流し掛けされ、深い色合いを醸し出している。83は外面に細かい間隔でわずかな稜をもつ小型の碗である。錆釉が部分的に落ちている。84は体部中央から真上に立ち上がる碗である。

坏（65～68）

65、67は高台部を露胎にした小型の碗である。口縁部はほぼ垂直に立ち、口縁端部が少し膨らんでいる。66は口縁部が外反し、内削ぎの高台になっている。68は染付である。外面に果物と思われる絵が描かれている。

広東茶碗（69）

高台が高く端部を尖らせてある。高台外側の中央部に沈線が1条見られる。

皿（70、76、85～89）

70はくすんだ薄褐色の皿の口縁部である。76は小型の皿で、高台の有無は不明である。85は体部中央から鋭く立ち上がる皿である。削り出し高台の一部が残存している。86は底部内面に摺絵の一部が見られる。高台の内側には段をつけ、底部との境を明瞭にしてある。88は内面見込みに輪状の小突起をつけている。底部外面には高台の一部が残存している。

輪禿皿（71）

底部内面に釉の掛からない部分が径6.0cm、幅3㎜にわたって見られる。

折縁皿（72、73）

72は折縁の口縁で、端部を内側に折り返してある。口縁部のみ釉が掛けられている。73は口縁端部をゆるやかな折り縁にしてある。

菊皿（74、75）

74は内面の型押しによる菊花文が不明瞭である。底部内面には3ヶ所のピン痕が見られる。底部外面には高台貼り付け時のナデ痕が強く残っている。75はやや大型の菊皿で、体部外面には約1㎝間隔で丸ノミによる削りが見られる。高台は幅が広く高い。

平皿（90）

錆釉と灰釉の塗り分け平皿である。口縁部をわずかに上方に屈曲させてある。内面灰釉部分に摺絵が見られる。

中皿（91）

黄瀬戸の中皿の口縁部である。口縁端部にオリーブ色の釉を残し、内面には波状の櫛目文様が描かれている。

灯明皿（92）

内面の突起の端部はやや外側に傾いている。

鉢（77、78、93、94）

77は小鉢である。厚手の体部で口縁部は上方に立ち上がる。内面には錆釉の上に力強く大胆な鉄絵が描かれている。78は足付きの鉢の底部と思われる。２足だけ残存する。底部内面には中心を少し外れてはっきりとしない菊花文の型押しが見られる。93は鉢類の口縁部と思われる。端部の下方2.8cmのところにわずかな突起が見られる。94は体部内面に短い間隔で沈線が見られる。底部は碁笥底の削り高台である。

鬢盥（79、80）

79は側面中程に草花文の摺絵が描かれている。口縁部はやや内側に傾き、内面見込みには釉がたまっている。80は底面の短軸が広めで、体部はやや外側に開く。側面にはシンプルな水玉文の絵が、不明瞭ではあるが浮き出た感じになっている。

向付（95）

２つの長四角形をずらして重ね合わせたような織部の向付の破片である。内外面ともオリーブ色の釉と灰釉が塗り分けてある。内面の灰釉部分に摺絵の一部が見られる。

花瓶（96）

筒型の花瓶の口縁部である。花弁12枚の花文の摺絵が連続して描かれている。

香炉（97）

口縁部はやや外反し、端部を内側に曲げてある。外面にはほぼ水平に櫛目状の沈線が見られ、口縁部付近で離した痕がある。

擂鉢（98～100）

98は端部が内側に折り返され、先端部に向かって薄くなっている。擂目は口縁の５cm程下方から見られる。99は端部がやや肥大し、口縁部中程及び口縁部と体部の境目付近が屈曲している。口縁部の釉はムラがある。100は受け口状で口縁部の内面は直線的である。端部は面取りが施されている。

b、Ⅰ・Ⅱ区第２遺構面

＜土師器＞

皿（101～109）

いずれも灯明皿として利用された痕がある。101はやや硬質で体部の内面は指圧調整が行われている。102は焼成がやや不良で外面がもろく、軟質であるがほぼ完形で出土した。103は薄手でやや硬質である。油煙痕が口縁部にはっきりと残る。104、108、109は厚手で成形が粗雑である。105は硬質で容積の大きい皿である。106と107は器高が極めて低く内面に炭化物が広く付着している。

甕（110）

中型の甕の口縁部である。口縁端部には面取りが施されている。内外面ともに炭化物が付着している。

＜須恵器＞

坏身（111）

坏身の口縁部と思われる。

坏蓋（112）

蓋の口縁部と思われる。口縁に近づくほど外傾し、端部に浅い凹面をもっている。

高坏（113）

高坏の脚部である。ゆるやかに下方に向かって外反し、端部はシャープな凸状をめぐらしている。

甕（114）

大型の甕の口縁部である。口縁端部は内側に折り返され、面取りが施されている。口縁外面にナデ調整による小突起が1条見られる。

蓋（115）

天井部外面中央に径2.8cmのつまみがある。つまみは扁平で中央部がわずかに膨らみ端部は丸い。天井部中心から3.3cmの位置に輪状の沈線が見られる。

＜灰釉陶器＞

碗（116～118）

3点ともO—53式の碗の底部である。116は底部中央が薄く高台端部の位置付近まで張り出す。117はたいへん丁寧な調整がなされている。高台は幅が狭くて高い。端部は外側に開き気味で丸く整えられている。底部内面にはナデ調整の痕がいくつか見られる。118は高台が低く端部は外側に強く曲げられている。底部は中央部が薄くなっている。

皿（119、120）

119はO—53式の皿の底部である。底部外面には回転糸切り痕の上に七角形の爪状圧痕が見られる。高台断面は逆三角形で、端部は外側に突き出している。底部内面は全体に平滑である。120はK—90式の皿である。高台は開き気味に貼り付けられた後、端部が内側に曲がり面取りが施されている。底部内面及び高台外側に灰オリーブ色の釉が見られる。

＜山茶碗＞

山茶碗A（121、122）

121は大型の碗である。高台は外側に突き出し、内側はゆるやかな傾斜になっている。底部内面に静止指ナデが2ヶ所見られる。122は高台の貼り付けが未調整のため安定が悪い。底部内面の見込み付近には輪状段が目立つ。

山茶碗B（123～127）

123は底部外面に高台貼り付け時のナデが深く残る。内面中央部は極めて薄い。124は焼成が不十分であるが、内面は平滑になっている。口縁端部の一部に炭化物が付着している。125、127はやや硬質でコテナデ痕が強く残る。126は焼成が不十分で内面のナデ痕が摩耗している。

＜小皿＞

小皿A（128）

体部は開き気味に立ち上がり、口縁付近で外反する。口縁端部は厚みがある。

小皿B（129～136）

129、130は体部・底部ともに厚めで内面見込みのコテナデにより体部と底部の境がはっきりしている。136は底部外面に墨書が見られるが、破片のため文字は判別できない。131は底部内面にゆるやかな輪状の段が見られる。132、133、135は器高が低く、内面の輪状の段が高く膨らむ。134は墨書の確認はできるが、文字の判別はできない。

＜鉢＞

鉢（137）

中世の鉢の口縁部である。口縁部はくびれ、端部は外反し外側に折り返してある。凹凸部の境をヘラ調整で強調してある。

＜古瀬戸＞

平碗（138）

古瀬戸の古い時期の碗である。口縁はくびれて、端部はわずかに外反し尖らせてある。浅黄色の艶のある灰釉が掛けられている。体部中程の内面に窯道具等の痕が見られる。

大皿（139）

足付きの大型の皿の底部である。内面には古瀬戸特有のにぶい黄色の釉が掛けられ、焼成による釉のかたまりや白斑点が見られる。体部下方から底部にかけてはラフなヘラ削りが行われ砂礫の動いた痕が顕著に見られる。足は指でつまみ、紐等で足の中程を絞った痕がある。

有耳壺（140）

耳付きの壺の体部である。耳は孔の部分がなく機能するものではない。3条1組の沈線は深く描かれている。肩部から体部への境に浅い稜が見られる。

擂鉢（141）

擂鉢の口縁部である。口縁部内面に小突起がある。内面の口縁から4cm下に擂目の一端が見られる。錆釉の刷毛塗りで外面に一部ムラがある。

＜中国磁器＞

白磁碗（142、146）

142は碗の底部である。体部下方と高台の境は丁寧な成形が行われているが、高台内側の中央部のナデ調整はやや雑である。146は碗の口縁部である。端部は外反してほぼ水平になっている。

青磁碗（143）

厚い底部をもった大型の碗である。内面見込みは輪状の段になっている。内面にはヘラ描きによる花文の一部が見られる。

染付皿（144、147）

144は皿の口縁部の破片である。口縁部が「く」の字に外反する。外面には濃淡をつけた渦状の唐草文が描かれている。内面の口縁部に1本、見込みには2本の界線があり底部内面にも文様があったと思われる。147は皿の底部である。高台は低く、内側を垂直に削り出してある。底部内面には濃淡をつけた花鳥文が見られる。体部外面にも文様の一部が見られる。

青磁皿（145）

高台を内削ぎにした皿の底部である。体部の立ち上がりはゆるやかで、見込みの屈曲がわずかに確

認できる。底部内面にはヘラ描きと櫛目による螺旋文が見られる。

白磁皿（148）

皿の底部である。高台はわずかに内側に曲げられている。灰色の強い白磁である。

青白磁梅瓶（149）

梅瓶の底部に近い体部の破片である。外面の唐草文の窪んだ部分に明るいオリーブ灰色の釉がたまっている。内面にはややラフなヘラ削り痕が残る。

＜伊万里＞

染付碗（150）

体部は上方に立ち、口縁部はわずかに外反気味である。体部外面中央に直線的な絵が見られる。

青磁皿（151）

底部の破片である。高台は畳付部を尖らせてある。

＜大窯＞

天目茶碗（156）

口縁部のくびれは浅く、体部外面はロクロナデの凹凸が強調されている。鉄釉が被熱により部分的に赤茶色になっている。

丸碗（157）

高台内側の削ぎとりはわずかで、中心部は未調整である。体部は開き気味に立ち上がり、露胎部は被熱により色が変わっている。

丸皿（152、153、158～161）

152は体部外面下方に強い稜があり、内面には鉄絵の一部が見られる。153は透明な長石釉が掛けられ、口縁端部は鋭く外反している。160は底部内面に厚さ2㎜の釉がたまっている。161は体部外面下方に強い稜が2本見られ、内面には鉄絵の一部と口縁から見込みにかけて4本のラインが描かれている。

襞皿（154）

志野の襞皿である。高く幅の狭い高台が貼り付けられている。口縁部は丸ノミで襞状に削られ、端部は外反している。

重圏皿（162～168）

162、163、164は内面に同心円状の3本のゆるやかな小突起をつくっている。165は体部外面中程にナデによる幅1㎝のくびれがある。167は体部内面に同心円状に5㎜間隔でシャープな小突起がつけられている。168は小突起がやや内側に傾いている。焼成が不十分で赤っぽい部分が残る。

縁釉皿（169、170）

169は体部が薄く口縁端部がやや外反している。

猪口（155）

高台は内削ぎで畳付部の摩耗が著しい。

茶入（171）

器肉の厚い体部が開いて立ち上がる。内面は螺旋状に強いナデが見られる。

擂鉢（172）

片口の擂鉢である。片口部の形状から内側に右手親指、外側に人差し指と中指をあてて注口を成形した痕がはっきりとわかる。口縁から5㎝程下方に擂目が見られる。

＜連房＞

小皿（173）

体部が鋭く立ち上がり、口縁部は折縁になっている。

天目茶碗（174）

口縁部は浅くくびれて、端部は薄くなっている。体部は艶のない赤褐色の釉が掛けられている。

坏（175）

染付の坏である。内外面とも界線は見られず、外面には草花文が描かれている。

c、Ⅰ・Ⅱ区第3遺構面

＜土師器＞

皿（176～182）

176、179はともに口径が大きく、体部は比較的立ち上がり底部との境がはっきりしている。178、180、181は口縁部に炭化物が見られる。179は硬質で口径が大きめである。182は薄手でやや硬質である。

＜須恵器＞

円面硯（183）

円面硯の台脚部の一部と考えられる。陸部との継ぎ目から端部に向かって細くなり、わずかに外側に開きながらほぼ垂直に立ち、端部は面取りが施されている。側面には上から右下方向に向けて、ヘラ描きによる直線的な力強い沈線が見られる。

＜灰釉陶器＞

碗（184、185）

2点ともO―53式の碗の底部である。高台は開き気味に貼り付けられ、端部は尖らせて外側に突き出してある。185は高台端部の一部に板状圧痕が見られる。

＜山茶碗＞

山茶碗A（186～189）

186は高台がやや外側に開き、内面は底部中央近くまでなだらかに傾斜をつけて調整してある。187は碗の口縁部である。外面に灰オリーブ色の自然釉が掛かっている。188、189の高台は幅が広く低いつくりになっている。189は内面に自然釉が見られる。

山茶碗B

第Ⅳ期（Ⅰ区・190，Ⅱ区・225～227）

190は高台がつぶれて低く、外側に突き出ている。底部外面まで籾殻痕が見られる。225は底部内面に大きく指ナデが見られる。227は口縁部がわずかに外反し、内面に自然釉が見られる。

第Ⅴ期（Ⅰ区・191～202，Ⅱ区・228～231）

191はやや大きめの碗である。体部はほぼ直線的に開いて立ち上がる。192はやや厚めの底部で、内面にコテナデ痕は見られない。体部の立ち上がり部分は薄くつままれ、急な角度で立ち上がる。193、

195、196、201、230は体部の立ち上がり部が一旦外側に膨らみ、再び薄くなって開き気味に立ち上がる。内面にはコテナデ痕がはっきり残る。196、201は底部がやや薄い。197は底部から体部にかけてなだらかなカーブを見せ、口縁部に近づくほど上方に立ち上がる。194、199、200、228は口縁部の破片である。口縁部は薄くつままれ、端部は外面に丸みをもって上方に尖らせてある。内面には自然釉が見られる。202はオロシ碗の口縁部である。口縁部の形状は前述のタイプで内面には自然釉が見られる。231は内外面とも多量の降灰が見られる。

第VI～VII期（I区・203～209，II区・232～239）

203は体部が急な角度で立ち上がり、外面にはロクロナデによる凹凸が見られる。口縁端部は三角形に整えられ、上方につまみ上げられている。204、206、233、237、238は底部外面のわずかに内側に高台が貼り付けられている。内面見込みにはコテナデによる輪状の窪みがはっきりと残る。205、207、232は体部が少し外側に膨らみ加減で立ち上がる。内面見込みのコテナデ痕は顕著ではない。208は焼成がやや不良で内面は特に平滑である。体部はやや外反気味に立ち上がる。209、234、235、239は碗の口縁部である。口縁端部は直線的に薄くなり、面取りをするように整えられている。また、236には体部内面の上方に4cmにわたってコテ状のものでナデた痕が見られる。

第VIII期（I区・210～216、219，II区・240～247）

210、214、240、241、246は口縁部である。口縁は薄くつまんだ後、三角形に整え端部をわずかに内彎させてある。211、212、213、244は低い高台が貼り付けられ、膨らみをもたせて体部が立ち上がる。口縁端部は面取りをするように整えられているが、上方につままれてわずかに内彎する。215、216、245、247は底部外面のやや内側に、243はかなり内側に逆三角形の高台が貼り付けられている。内面見込みのコテナデが顕著でその外側に輪状の段をもつように見える。219、242はやや厚めの体部で、口縁端部は丸みをもたせて整えてある。

第IX期（I区・217、218、220，II区・248～252）

217、218、252は口縁部である。体部は薄く、内外面ともロクロナデによる小さい凹凸が見られる。口縁端部は、217が上方に、218、252は内彎気味につままれている。220、248、249はやや厚めの体部である。この時期としては口径が大きめである。口縁端部は面取りが施されており、内彎はしない。250はやや粗い胎土であるが全面が乳白色を呈している。体部は厚めで、わずかに膨らみをもち口縁端部は面取りが施されている。251は口径器高ともに小型になり、口縁端部は細く小さくつままれている。

第X期（I区・221～223，II区・253～257）

221、253、255は焼成が不十分で軟質である。底部内面に弱い指ナデの痕が残る。内面の突起は底部に近い部分ほど摩滅している。また、255は特に小型で口縁端部の内彎が強い。222、256は内面上方に3本の同心円状の突起があり、口縁端部は上方に尖らせてある。223、254は口縁端部の内彎が強い。222、254は外面の白泥が灰黄色を呈している。

その他（224）

器高、口径ともに小さめの碗である。口縁端部は薄くつままれ丸く整えられている。胎土、器形から北部系・南部系のどちらにも属さない形式と考えられる。

＜小皿＞

小皿A（258、259）

258は体部の中間に稜をもち、口縁端部が尖っている。259は底部からの立ち上がり部にひとつ稜がある。底部外面のほぼ全体に炭化物が付着している。

小皿B

第Ⅳ期（Ⅰ区・260～266，Ⅱ区・271～279）

260は底部外面に幅6㎜のラインが3本（板状圧痕）が見られる。262は小皿Bの中では最も器高が高い。底部外面には墨書が見られるが判別はできない。263は底部径がやや小さく、内面見込みの屈曲はほとんど見られない。271、272、276、277は口縁端部を丸く整えてある。273、275は口縁部を薄くし端部を上方に尖らせている。278、279は口縁端部を面取りし鋭く尖らせてある。274は内面全面に薄緑色の自然釉が掛かり、底部外面には中央から少しずれて墨書が見られるが判別はできない。

第Ⅴ～Ⅶ期（Ⅰ区・264～269，Ⅱ区・280～288）

264、266、267、268は内面見込みから底部中央まで輪状の段が顕著に見られる。265、269は体部が鋭く立ち、底部内面はほぼ水平である。280は底部外面に墨書の一部が見られるが、文字は判別できない。281、282、283は内面に輪状の段をもち、口縁部がわずかに外反し端部は角をつけて整えてある。284は体部中程に稜をもち、口縁端部を尖らせてある。285、286、287、288は口縁部が外反せずに端部で鋭く立つ。285、286は底部外面に墨書が見られるがいずれも判別はできない。

第Ⅷ～Ⅹ期（Ⅰ区・270，Ⅱ区・289～291）

270は底部外面に歪みがあり、体部は大きく開いて立ち上がる。289は底部内面が特に平滑である。290は底部外面が中央部で膨らみ安定しない。291は褐灰色の小型の皿で、白泥が体部外面に見られる。

＜鉢＞

鉢（292、293）

292は受け口をもつ鉢の口縁部である。293は口縁部がわずかに外反し、端部は丸く調整されている。

＜古瀬戸＞

折縁中皿（294）

体部に明瞭な稜をもつ深い皿である。内面には灰釉を斜めにハケ塗りした痕が見られる。

有耳壺（295）

耳付きの壺の底部の破片と思われる。幅1.2cmの高台がやや外側に開いて付けられている。内面は何らかの原因で焼けこげている。

擂鉢（296）

口縁部内面に小突起をもち、端部はやや外反する。

＜中国磁器＞

白磁碗（297、299、302）

297は碗の口縁部である。端部はやや内彎し外面に折り返した玉縁状になっている。口縁部外面には2条の沈線が見られる。299は口縁端部を強く外反させた碗である。302は碗の体部の破片である。内面にはヘラ描きによる櫛目文が見られる。

白磁皿（303）

淡い灰オリーブ色の皿の底部である。高台をもたず、体部は大きく開いて立ち上がる。内面にはヘラ描きによる螺旋文の一部が見られる。

青磁碗（298、300、301）

298は碗の底部である。高台は丁寧な面取りが施され、畳付部の外側まで外面の釉が厚く掛けられている。300は龍泉窯系の碗の口縁部である。外面には片切彫りによる鎬蓮弁文が見られる。301も龍泉窯系の碗の体部である。内面見込み付近にはヘラ描き及び片切彫りによる草花文が見られる。

＜大窯＞

坏（304）

体部下方に強い稜をもつ。高台は幅が均一ではなく、高台内側も未調整である。内面にピン痕が2ヶ所見られる。

丸皿（305）

高台は端部が尖っており、体部下方には強い稜をもつ。高台内側及び底部内面にトチン痕がある。

重圏皿（306、308）

306は内面に同心円状の3本のゆるやかな小突起をつくっている。粗い胎土で内面には炭化物が付着し灯明皿として使用された痕がある。308は体部内面に同心円状に5本のシャープな小突起がつけられている。堅く焼き締められている。

縁釉皿（309、310）

309は底部外面と体部の境をなだらかに調整してある。口縁はやや外反している。口縁端部の釉はほとんど剝落している。310は内面見込みのくびれを強くし、口縁端部はやや外反させてある。内面にはピン痕が見られる。

香炉（307、312）

307は器高の低い香炉である。小さい玉状の未調整の足が貼り付けられている。内面はナデの後見込みに強いコテナデが見られる。312は底部からの立ち上がりに丸みがあり、内面を指の幅で螺旋状にナデた痕が見られる。シンプルな足が付けられている。

片口（311）

体部はナデによるゆるやかな凹凸が見られる。口縁部には注口と思われる部分がわずかに残る。

燭台（313）

大型の燭台の台脚部である。外面はコテナデによる小突起をつくり、端部は深い凹状になっている。

擂鉢（314、315）

314は口縁部外面に突起があり、端部を上方につまみ上げてやや内彎させてある。擂目は斜め右下方向に向けてつけられている。315は片口の擂鉢である。口縁部外側の突起はわずかで端部は強く内彎している。注口は右手親指で軽く押さえて作られている。擂目はほぼ口縁部から右下向きにつけられている。

＜連房＞

水甕（316）

折縁の甕の口縁部である。端部が上方に立ち受け口状になっている。

鉢（317、318）

318は口縁部内面に小突起がある。

d、Ⅲ区第Ⅱ層（第1遺構面の上面）

＜土師器＞

皿（319～326）

319、322は体部外面にナデ調整がはっきり見られる。320、325、326は焼成が不十分である。321、324は口縁部に炭化物が見られる。323はやや硬質の口径の小さい厚手の皿である。

＜須恵器＞

甕（327）

つまみ部が欠損した蓋である。口縁部は垂直に折り返され、端部は丸くなっている。天井部外面に自然釉が見られる。

盤（328）

盤の底部である。体部は鋭く立ち上がり、底部中央は高台端部付近の位置まで張り出す。高台は低く端部は丸みがある。

坏身（329）

平らな底部から直線的に立ち上がる。底部外面は未調整である。

＜灰釉陶器＞

段皿（330）

K—90式の段皿の口縁部である。端部は薄く尖らせてある。口縁部から2.7cmの位置に幅2mmの輪状の凹部が見られる。内面は全面に灰オリーブ色の釉が掛かっている。

＜小皿＞

小皿B（331）

底部外面に墨書が見られる。文字は判別できない。

＜古瀬戸＞

香炉（332）

袴腰形の香炉の底部である。体部は底面の少し内側から立ち上がる。足は端部を細くつまんで付けられている。内面にピン痕が見られる。

＜中国磁器＞

青磁碗（333）

体部外面には片切彫りによる鎬蓮弁文が見られる。内面の見込みは明瞭な段がつけられ、底部にはヘラ描きによる草花文が見られる。

青磁長頸瓶（334）

頸部の破片である。内面はナデによるわずかな凹凸が見られる。頸部内径は約4cmである。

青磁輪花坏（335）

口縁部の破片である。口縁はくびれて端部が外反する。端部は波状に浅く切り込まれ、内面には片切彫りによる文様が見られる。

＜唐津＞

鉢（336）

鉢の口縁部である。口縁端部は折縁で小さく受け口状になっている。内面には波打つ刷毛目文様が見られ、外面下方には赤褐色の露胎部が見られる。

＜伊万里＞

染付碗（337）

初期伊万里の碗の底部である。体部外面の界線の上に文様の一部が見られる。

白磁坏（338）

坏の口縁部である。口縁部外面に浅いコテナデ痕が見られる。

＜大窯＞

丸皿（339～342）

339は碁笥底の削り高台の小型の皿である。340は無高台の皿である。口縁端部は上方に尖り、内面は底部中央が薄くなっている。341は外面に強い稜をもつ皿である。高台断面は逆三角形である。342は口縁端部がわずかに外反する。高台断面は台形で、高台内側にピン痕が見られる。

内禿皿（343、344）

343は皿の口縁部である。口縁部外面に2本の浅いコテナデ痕が見られる。344は大型の皿である。口縁端部はわずかに外反する。外面露胎部にはヘラ削りによる明瞭な稜が見られる。

重圏皿（345）

体部内面に4本の同心円状のシャープな小突起が見られる。灯明皿として使用されたものと思われる。

鉢（346）

底部内面には太い筆によるシンプルな鉄絵が見られる。

擂鉢（347）

片口の擂鉢の口縁部である。体部はゆるやかな凹凸があり口縁端部は少し内彎させ三角形に整えてある。小さめの注口が見られる。

＜連房＞

天目茶碗（348、349）

2点とも体部上方で大きくくびれ、口縁端部で小さく外反する。348は鉄釉が焼成の加減で部分的に暗褐色になっている。

碗（350、351、360）

350、351は底部外面のやや内側に高台を削り出してある。高台端部は外側に少し開き、畳付部は面取りが施されている。360は染付の碗の底部である。内外面に界線が見られる。

丸碗（352～358）

口縁部が上方に立ち上がり端部を丸く整えた碗である。352は口縁部に乳白色の釉が流し掛けされている。353は口縁部に灰釉が流し掛けされている。354は体部下方に丸みをもたせた薄手の碗でる。356は錆釉の上に口縁部から鉄釉を流し掛けしてある。体部下方の張り出しは弱い。357はやや小型の碗で、外面に花文の摺絵が見られる。358は染付の碗である。体部下方で強く屈曲している。外面には亀甲文

が描かれている。

腰折碗（359）

染付の碗である。体部は見込みからほぼ直角に鋭く立ち上がる。底部内面に花文が描かれている。

塗り分け碗（361）

体部外面中程で灰釉と鉄釉を塗り分けてある。外面の塗り分けられた付近に浅い沈線が3条見られる。

坏（362、363）

363は染付の坏である。体部外面には濃紺と深緑で草花文が描かれている。

柳茶碗（364）

丸碗の口縁部である。外面には濃いオリーブ色で細く柳模様が描かれている。

丸皿（365）

365は染付の皿である。体部外面には界線の上に唐草文風の文様が描かれている。内面は界線の間に文様が見られ、底部内面にも円形の幾何学模様の一部が見られる。

皿（366～372）

366、370は底面の広い皿である。底部内面中央に花文の摺絵が見られる。367は体部が屈曲して開き気味に立ち上がる。底部内面に細かい火襷痕がある。368は錆釉に銅緑釉が掛けられ見込みにたまった痕がある。369は高台をもたない小型の皿である。底部内面に重ね焼きの痕がある。371は全面に釉が掛けられ、底部内面にはコバルト色の梅文の摺絵が見られる。372は小型の無高台の皿である。外面にはヘラ削りによって砂の動いた痕が明瞭に残る。

輪禿皿（373～376）

内面に輪状の釉のない部分がある。373は輪禿部分が中心からずれている。374の輪禿部分の径は7.8cmで高台径と同じである。375は内面見込みの上方に鉄釉が見られる。幅1cm程の輪禿部分の内側に花文の摺絵がある。376は全面に釉が掛けられ、輪禿部分の内側に梅文の摺絵が見られる。

折縁皿（377～380）

口縁部を折縁にして端部は小さく内彎させてある。377は外面に強い稜が見られる。378は高台をやや内側に曲げてある。内面には草文の鉄絵が見られる。380は大型の深い皿である。

菊皿（381～383）

381は外面に約1cm間隔で斜めに丸ノミによる削ぎが見られる。口縁部から掛けられた銅緑釉は外面に多く見られる。382は体部外面の削ぎは片切刃によるものと思われる。383は底部外面に墨書が見られる。「八□」と読める。

打型皿（384）

内面の打型は中心から少しずれて押されている。

灯明皿（385）

小型の灯明皿である。内面の突起は外側に傾いている。

鉢（386～388）

386は練鉢類の底部と思われる。見込みにはコテナデによる低い突起が見られる。387は黄瀬戸の鉢の口縁部である。口縁端部はくびれ、内面には波状の櫛目文が見られる。388は口縁部内側に小突起を

もった鉢の口縁部である。

香炉（389）

径が小さく用途は不明である。口縁部の形状から香炉とも思われるが器種の特定はできない。

壺（390）

鉄釉の広口の壺の口縁部である。

合子（391）

合子の身である。碁笥底の削り高台で、内面見込みにはコテナデの痕がある。

蓋（392）

つまみの付いた蓋である。内面の輪状の突起の径は6.5cmである。

織部変形向付（393）

複数の長四角形をずらして重ね合わせた形状の向付の一部と思われる。板をたたみ込んだような形の足がついている。

瓶（394）

頸部の細い瓶の体部である。残存する部分での頸部内径は2.0cm、体部内径は9.4cmである。

鬢盥（395）

体部はわずかに内側に傾いて立ち上がる。底部内面は指圧による調整が見られる。

水滴（396）

染付の水滴である。側面に細かい襞があり、染付は上面に見られる。注口部の内面には穿孔時の痕が残る。底部外面には細かい布目が見られる。

擂鉢（397、398）

397は端部がやや肥大し、口縁部中程及び口縁部と体部の境目付近で屈曲する。398は端部が浅い凹状に面取りされ、内面に小突起をもち受け口状になっている。

e、III区第1遺構面

＜土師器＞

皿（399～402）

329は体部の内面全体に炭化物がしっかり付着し、底部外面まで煤痕が続いている。400、402は小型で薄手の皿である。401は厚めの口縁をもち、口縁端部には炭化物が見られる。

＜須恵器＞

盤（403）

盤の底部と思われる。全体に器肉が厚く、体部はゆるやかに立ち上がる。高台は中心部に向けてなだらかで、断面が低い三角形になる。

坏身（404、405）

404は小型の坏である。体部の立ち上がりは直線的で口縁部は外反気味である。405は有台坏身の底部である。底部中央付近は下方にやや膨らみ、体部は開き気味に立ち上がる。高台は底部外面のやや内側に貼り付けられ、端部は内側、外側とも角ばっており外側に少し突き出す。

長頸瓶（406）

長頸瓶の頸部と思われる。厚めの器肉でほぼ垂直に立ち上がり口縁部付近でゆるやかに外反する。肩部との境には内面にくびれた部分に接合痕が見られる。外面と内面上部には自然釉が見られる。

＜山茶碗＞

山茶碗B（407、408）

407は高台が小さく断面は逆三角形である。底部外面のやや内側に貼り付けられている。408は焼成が不十分な大型の碗である。内面見込みはわずかに窪んでいる。

＜小皿＞

小皿B（409～411）

409は底部外面に墨書が見られる。「大」という文字が確認できる。410は底部内面にゆるやかな輪状の段が見られる。

＜古瀬戸＞

擂鉢（412）

口縁部内面に小突起をもち、端部は面取りが施され内側部分を尖らせてある。鉄釉は赤色を帯びた褐色になっている。

＜中国磁器＞

青磁盤（413）

端部が折り返されている。盤または鉢類の口縁部と思われる。細片であるため特定が難しい。燭台等の台脚部の一部とも考えられる。

＜伊万里＞

白磁坏（414）

底部内面中央付近に茶褐色の焼き膨れが1ヶ所見られる。

染付碗（415）

底部内面に線状の文様があり、体部外面には界線が2本確認できる。

＜大窯＞

丸皿（416、417）

417は口縁部内面と見込みにコテナデ痕が見られる。底部内面には小さなピン痕が3ヶ所残っている。

重圏皿（418～421）

418は胎土が粗く内面には3本の同心円状のゆるやかな小突起が見られる。灯明皿として使用されたものと思われる。419は内面に4本の同心円状の小突起が見られる。内面には重ね焼きの痕がある。420、421は堅く焼き締められ、同心円状の小突起の端部は小さく尖っている。

折縁皿（422）

高台を内削ぎにした皿である。折縁になった口縁部は端部を小さく内彎させてある。灰釉は底部を残すように掛けられている。

擂鉢（423、424）

423は口縁部の断面が細長い三角形を呈し、端部は強く内彎する。424は口縁部の一端に注口の一部

が見られる。口縁部は内外面に膨らみ端部は浅い凹状に整えられている。

＜連房＞

丸碗（425）

小型の碗である。外面に弱い稜がいくつか見られる。

志野織部皿（426）

口縁端部がやや外反する皿である。まず灰釉が施され、口縁部内面と見込み付近に輪状の鉄絵が描かれ、その上から長石釉が流し掛けされたものと思われる。

折縁皿（427）

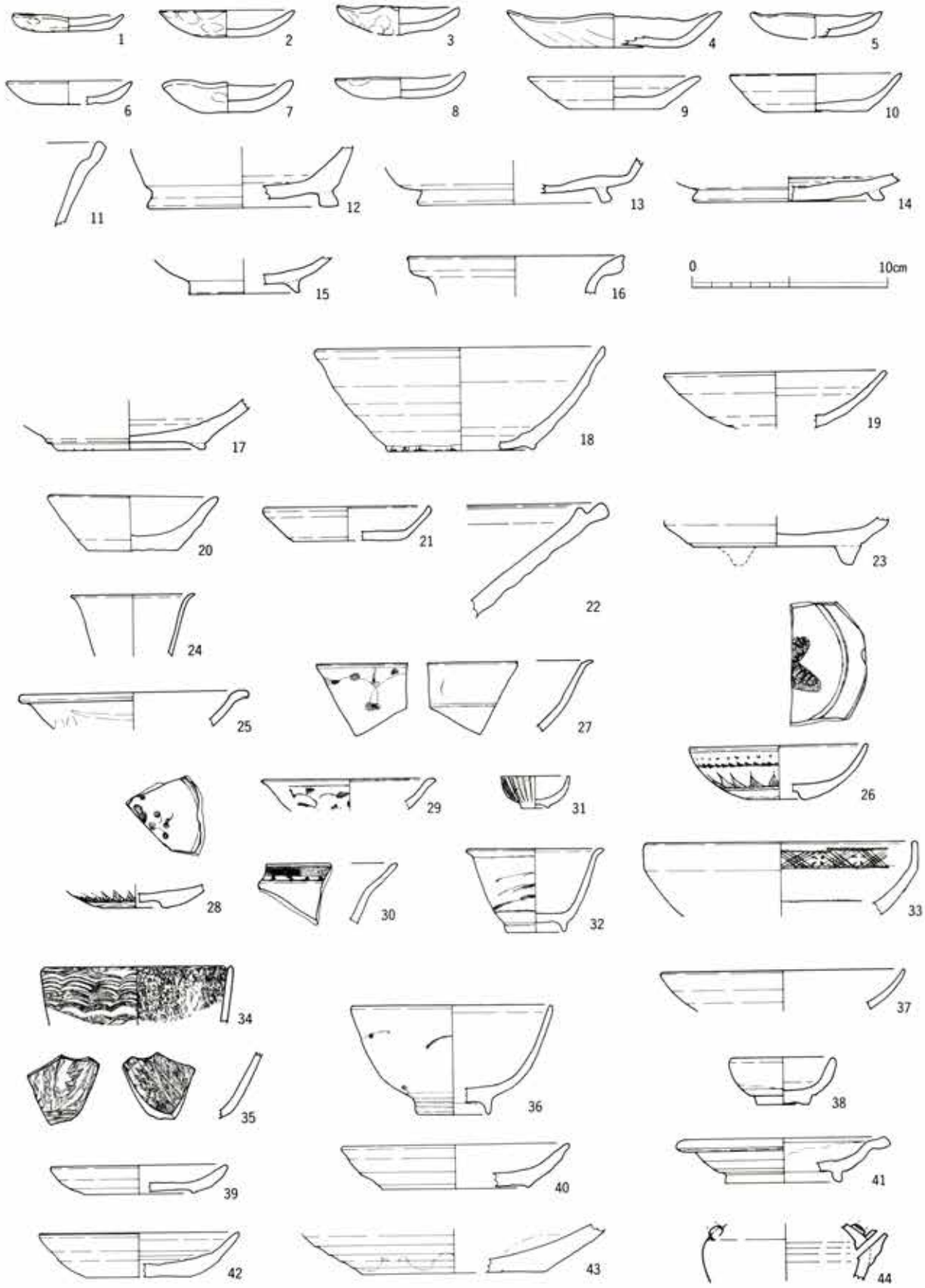
染付の折縁皿である。口縁端部は外反し水平になっている。見込みに界線が2本あり、底部内面に草花文の一部が見られる。

菊皿（428）

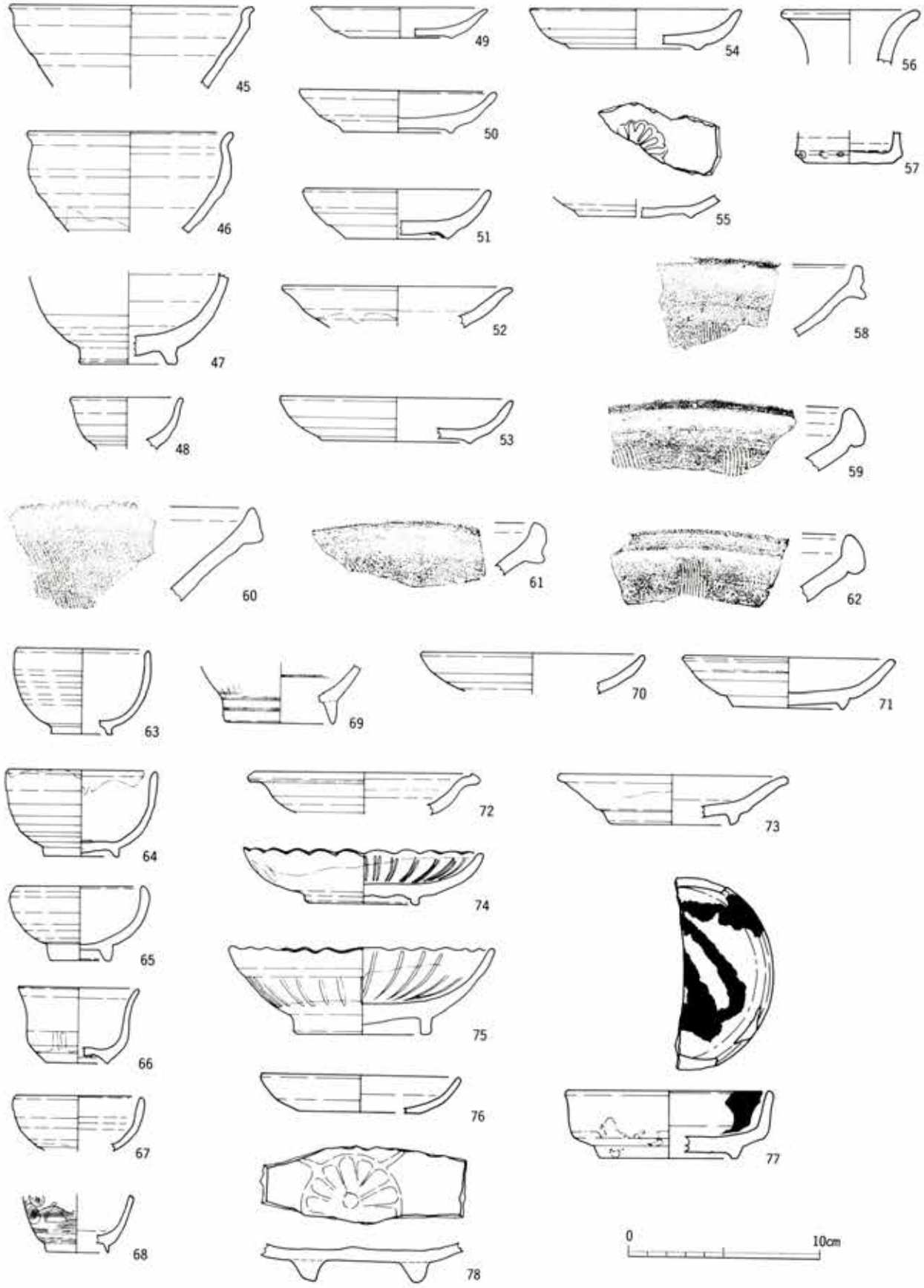
体部外面の削ぎは抉りが深く、角ノミによるものと思われる。

徳利（429）

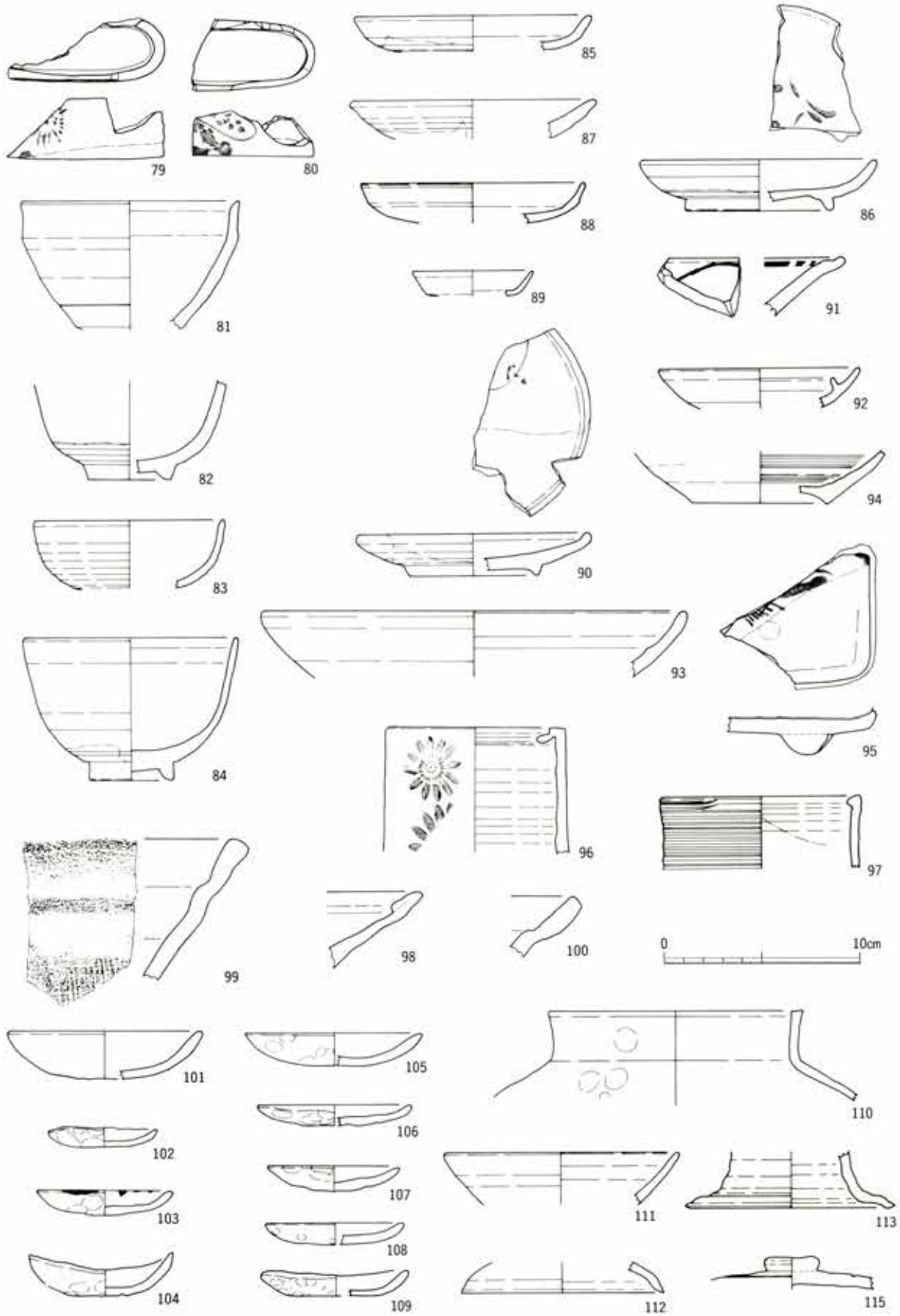
徳利の口縁部である。内外面とも回転ナデの痕が明瞭である。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
0
10cm
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44

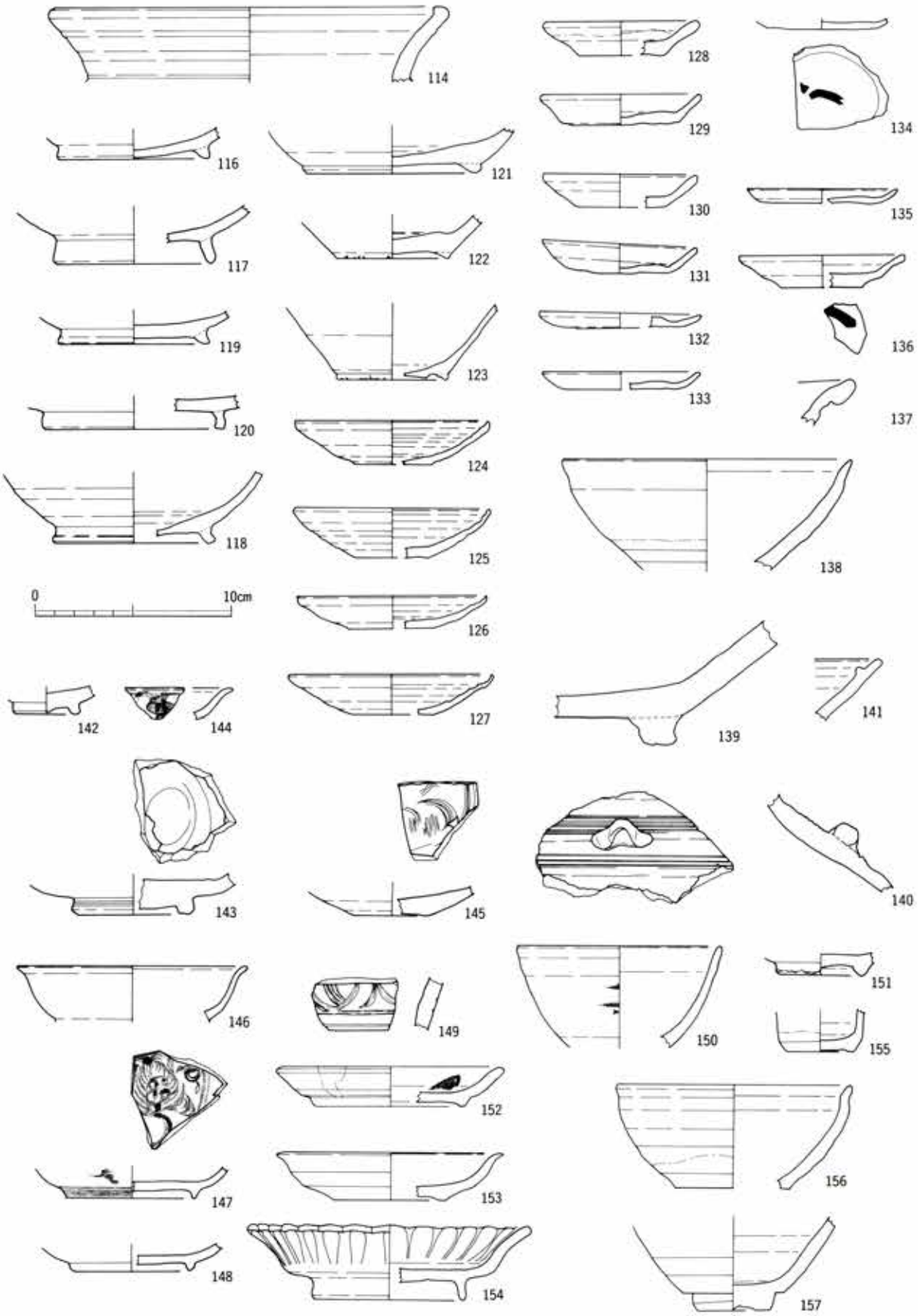
第23図　出土遺物(1)


45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
0
10cm

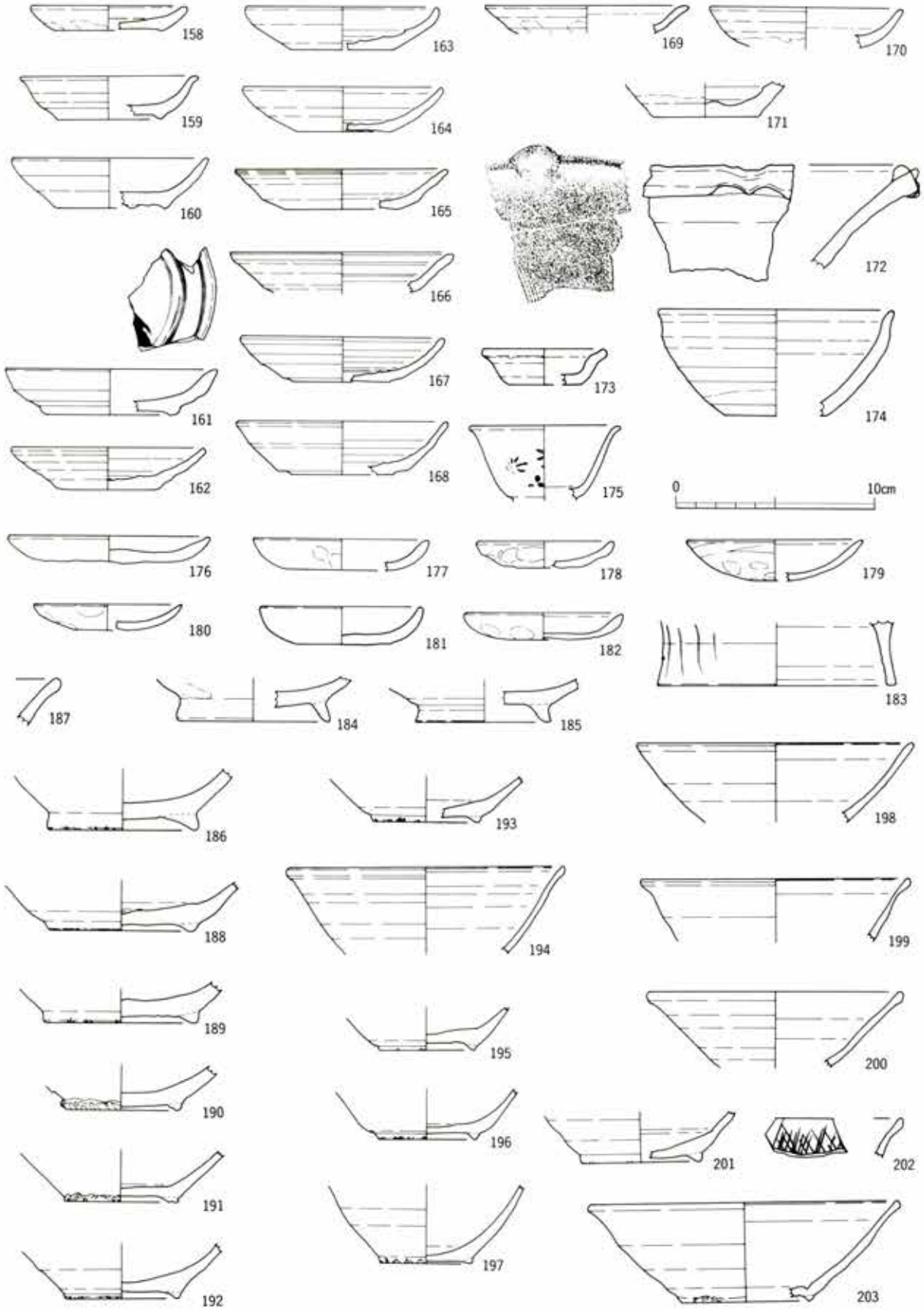
第24図　出土遺物(2)


79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
0
10cm
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
115

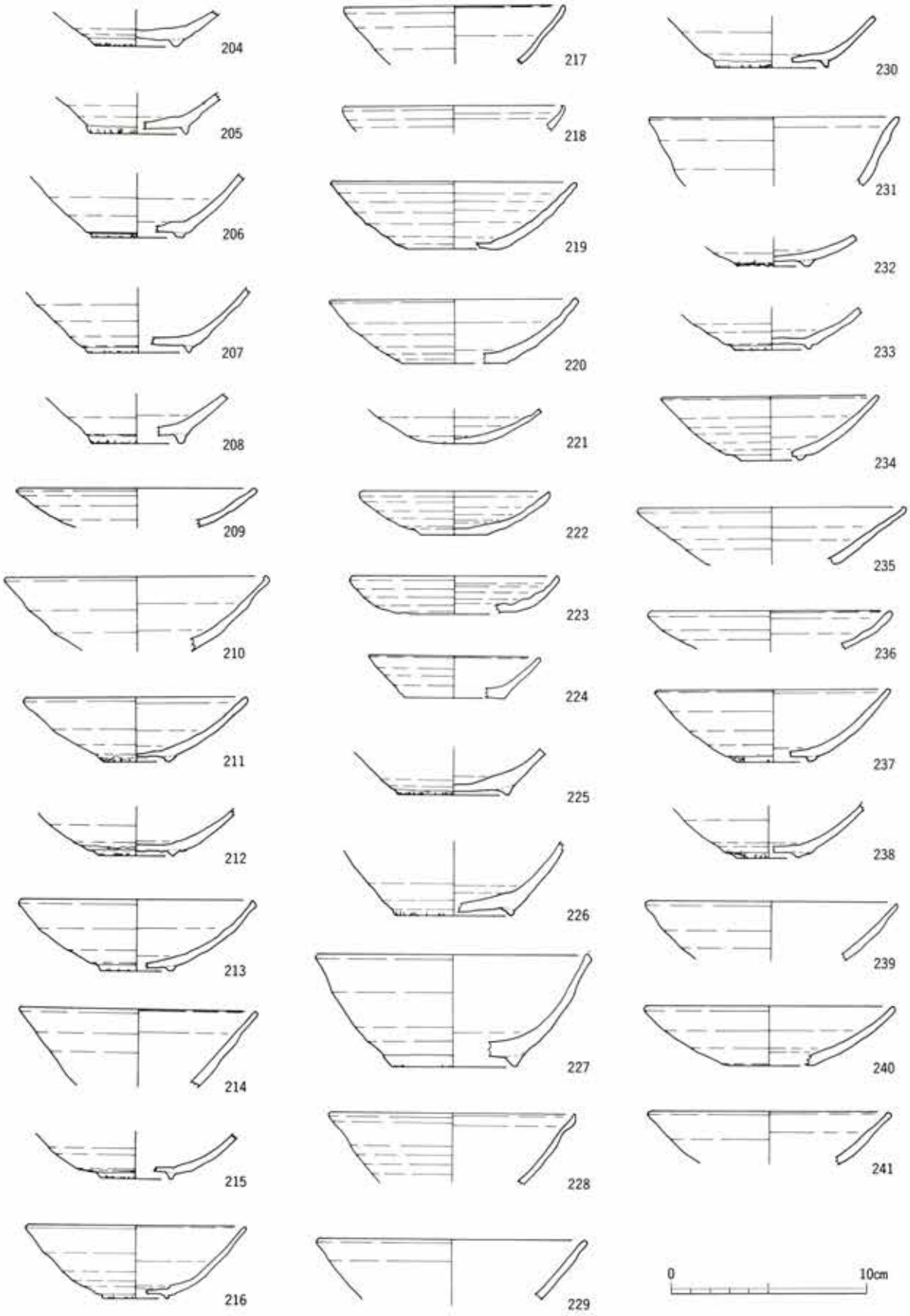
第25図　出土遺物(3)


114
116
117
119
120
118
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
0
10cm

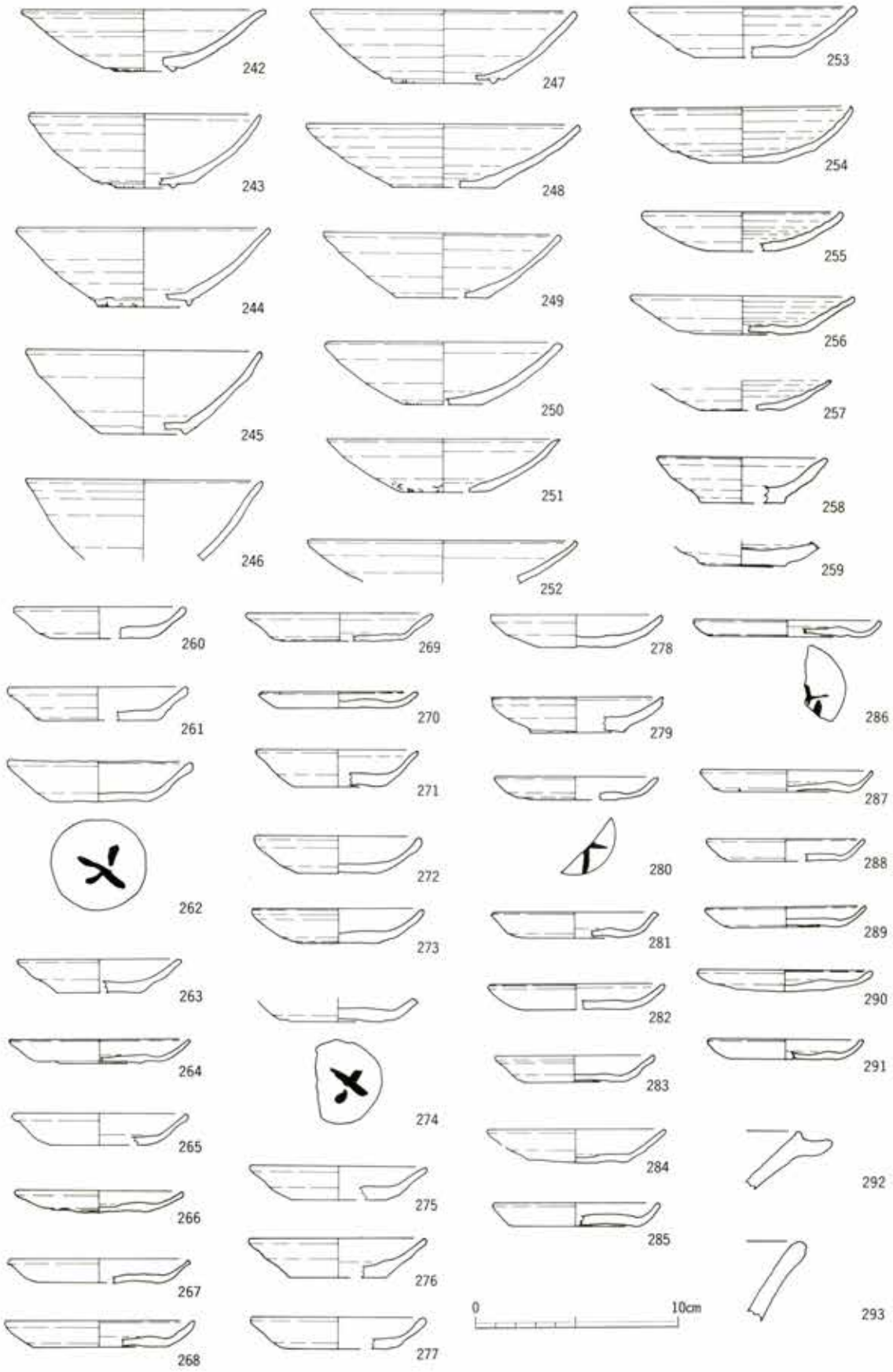
第26図　出土遺物(4)


158
163
169
170
159
164
171
160
165
172
166
167
173
174
161
168
175
162
0
10cm
176
177
178
179
180
181
182
183
187
184
185
186
193
198
188
194
199
189
195
200
190
196
201
202
191
197
192
203

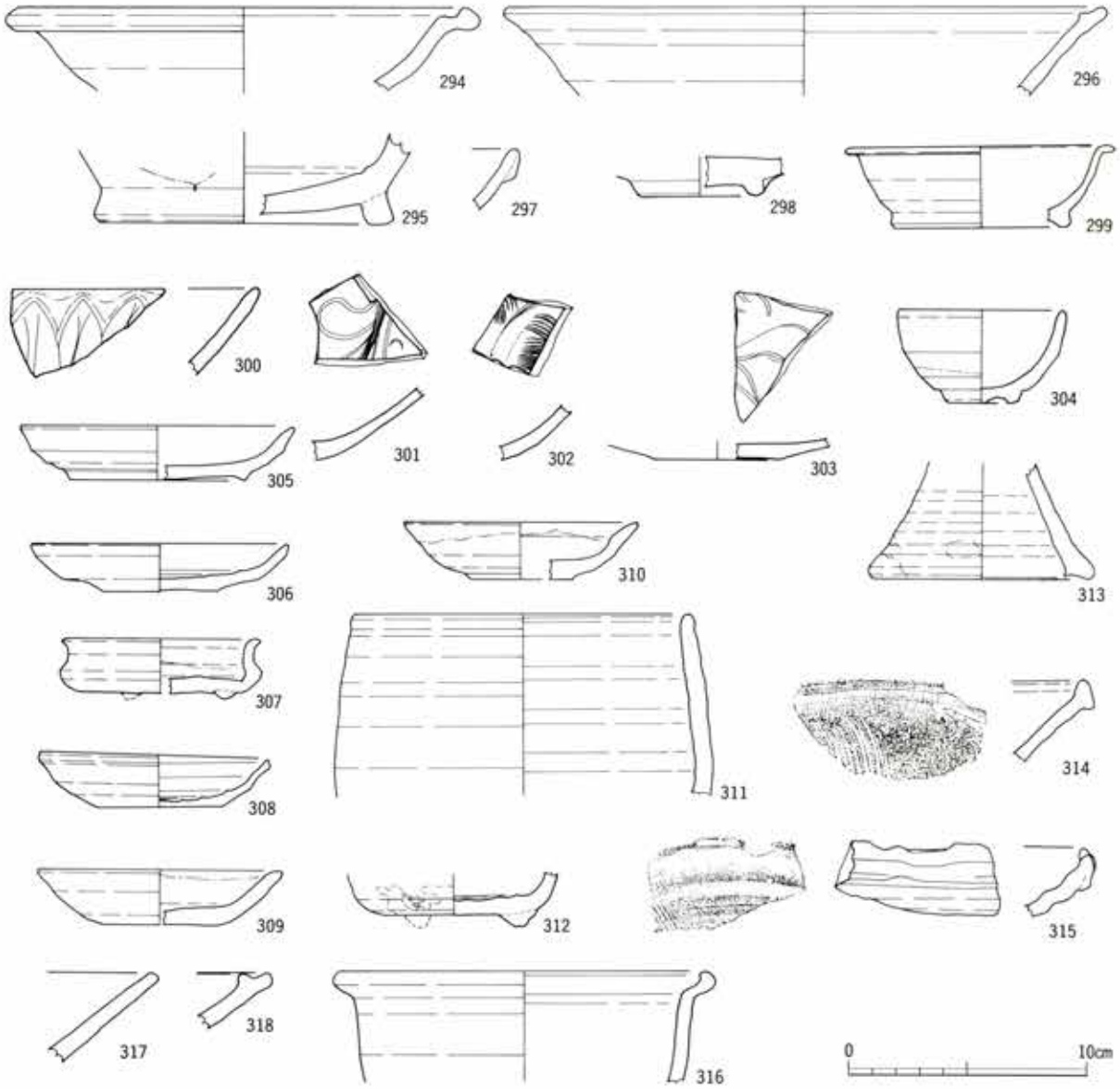
第27図　出土遺物(5)


204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
0
10cm

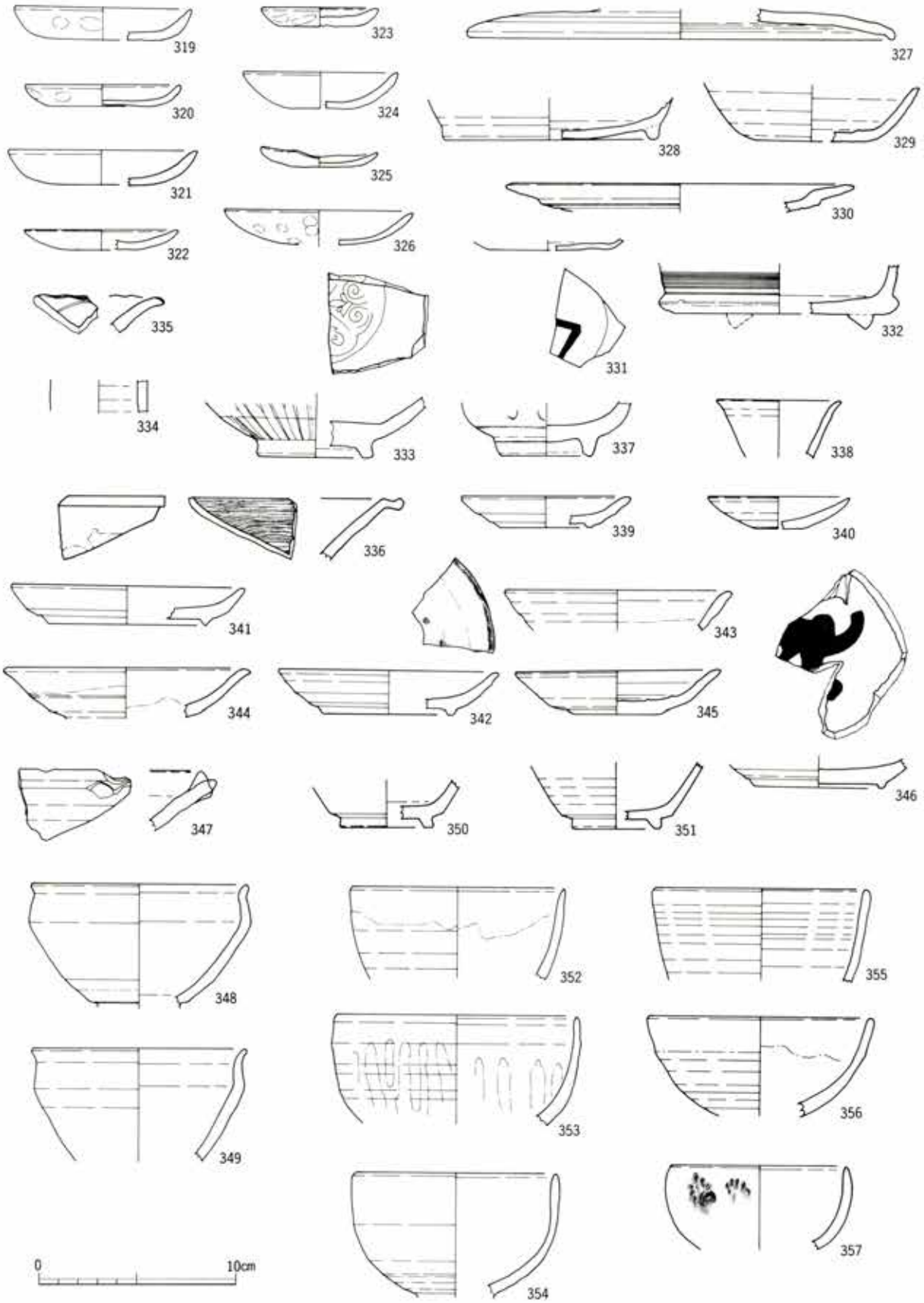
第28図　出土遺物(6)


242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
0
10cm

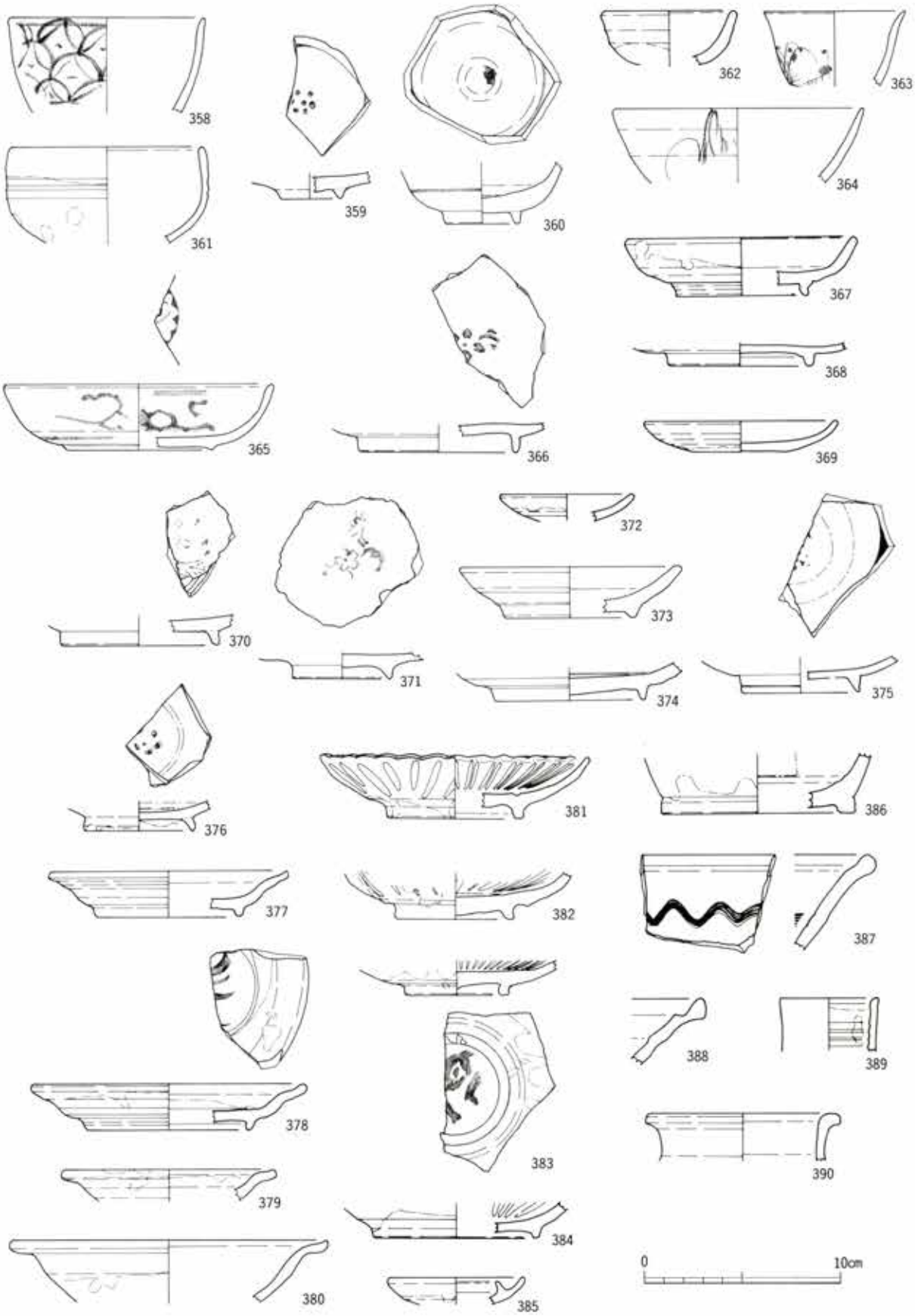
第29図　出土遺物(7)


294
296
295
297
298
299
300
304
301
302
303
305
306
310
313
307
311
314
308
309
312
315
317
318
316
0
10cm

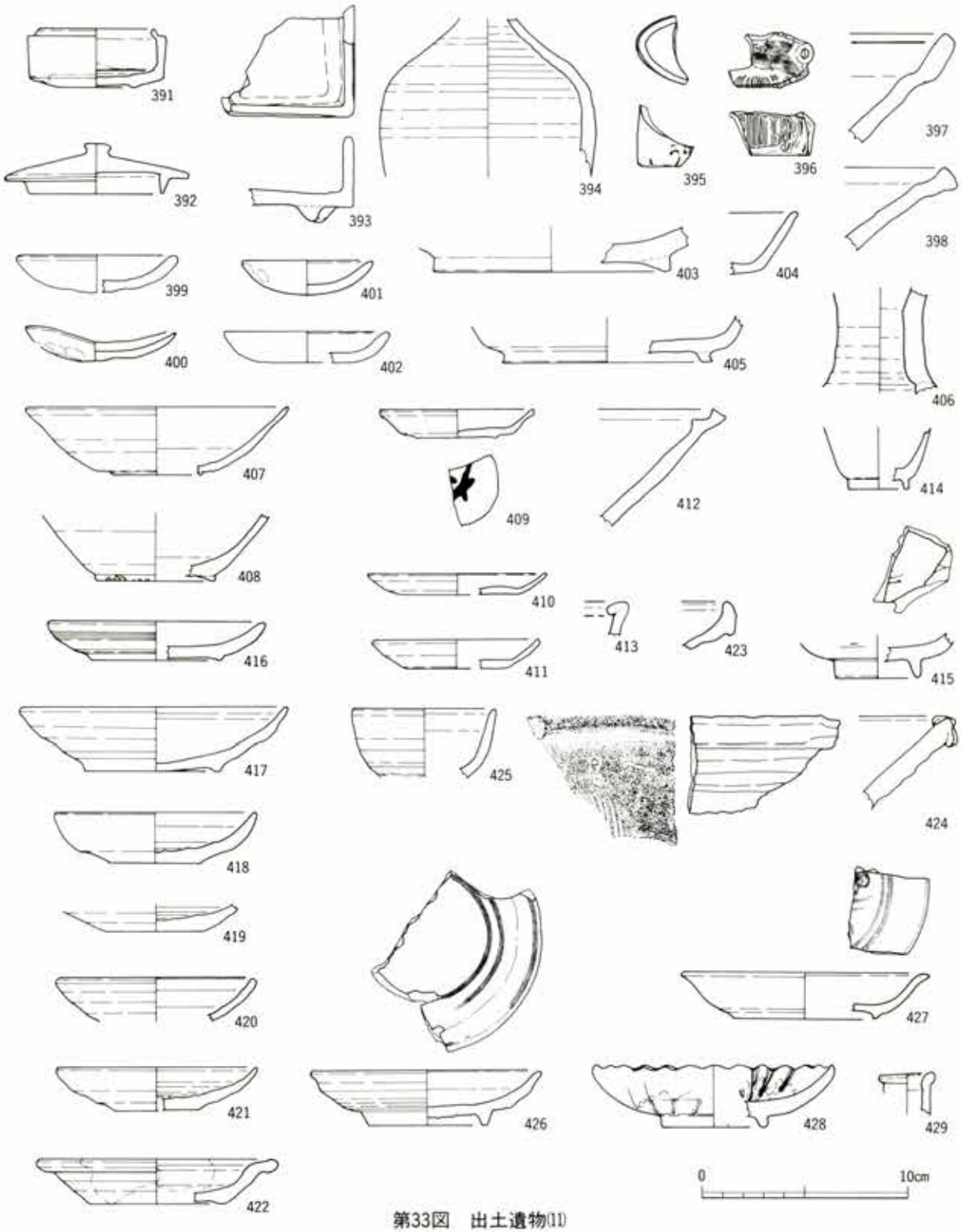
第30図　出土遺物(8)


319
323
327
320
324
328
329
321
325
330
322
326
335
332
331
334
333
337
338
336
339
340
341
343
344
342
345
346
347
350
351
348
352
355
349
353
356
354
357
0
10cm

第31図 出土遺物(9)


358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
0
10cm

第32図　出土遺物(10)


391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
0
10cm

第33図　出土遺物(11)

第12表　土器類観察表(1)

挿図番号	地区層位	遺物名器種	法量(cm) 口径	器高	底径高台径	成形・調整	胎土	色調(外面・内面)	残存率(X/12)	その他(釉薬など)	産地・時期
第23図1	I区E28 II	土師器皿	5.3	1.0	—	体部外面指圧	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR7/3(ニブイ橙) 7.5YR8/2(灰白)	口縁 12.0		
2	I区F28 II	土師器皿	(7.0)	1.4	—	体部外面指圧	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	2.5YR7/3(浅黄) 2.5YR7/3(浅黄)	口縁 5.5	口縁部内面炭化物付着	
3	I区E25 II	土師器皿	6.4	1.6	—	体部外面指圧	密　径1mm以下のチャート、長石含む	10YR7/3(ニブイ黄橙) 10YR7/3(ニブイ黄橙)	口縁 8.5		
4	I区E25 II	土師器皿	11.1	1.9	—	体部内外面不定方向横ナデ	密　径0.1mm以下の雲母、長石含む	10YR5/3(ニブイ黄褐) 10YR7/3(ニブイ黄橙)	口縁 4.0	口縁部内面炭化物付着	
5	II区I19 II	土師器皿	6.9	1.4	—		密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR7/2(ニブイ黄橙) 10YR8/2(灰白)	口縁 6.5		
6	II区J18 II	土師器皿	6.6	(1.2)	—		密　径1mm以下の長石含む	5YR8/3(淡橙) 5YR8/3(淡橙)	口縁 4.6		
7	II区H18 II	土師器皿	6.7	1.8	—	体部外面指圧、口縁部内外面横ナデ	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR7/3(ニブイ黄橙) 10YR7/3(ニブイ黄橙)	口縁 7.0		
8	II区F22 II	土師器皿	6.9	1.3	—	体部外面指圧、体部内面横ナデ	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR7/3(ニブイ橙) 7.5YR7/3(ニブイ橙)	口縁 7.0		
9	II区J19 II	土師器皿	8.9	1.7	(4.8)	底部外面回転糸切り、体部内外面回転ナデ	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR7/4(ニブイ橙) 7.5YR7/6(橙)	口縁 1.5 底部 4.8	口縁部内面炭化物付着	
10	II区E25 II	土師器皿	(9.0)	2.0	(5.4)	底部外面回転糸切り、体部内外面回転ナデ	密	7.5YR6/4(ニブイ橙) 7.5YR6/4(ニブイ橙)	口縁 3.6 底部 11.0		
11	I区E27 II	土師器鉢	—	—	—	回転ナデ	密　径1mm以下の長石、雲母を多く含む	7.5YR1.7/1(黒) 7.5YR4/1(褐灰)	—	体部炭化物付着	
12	I区E28 II	須恵器壺	—	—	9.8	底部外面回転ヘラ削り、高台貼付け後ナデ調整	密　径0.1mm以下の砂粒含む	5Y6/1(灰) 5Y6/1(灰)	底部 2.5		
13	II区G20 II	須恵器有台坏身	—	—	10.1	底部外面回転ヘラ削り、高台貼付け後ナデ調整	密　径0.5mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	底部 2.0		
14	II区H17 II	須恵器盤	—	—	10.0	底部外面回転ヘラ削り、高台貼付け後ナデ調整	密　径0.2mm以下の長石、チャート、含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	—		
15	II区I22 II	灰釉陶器碗	—	—	5.7	体部外面下方回転ヘラ削り、底部外面回転糸切り	密　径1mm以下の長石、チャート含む	10YR6/1(褐灰) 10YR6/1(褐灰)	—		O—53
16	I区G26 II	灰釉陶器長頸壺	6.4	—	—		密　径0.2mm以下のチャート含む	2.5Y7/3(浅黄) 10YR7/2(ニブイ黄橙)	口縁 2.0		
17	I区D29 II	山茶碗B	—	—	7.7	底部外面爪状圧痕、高台端部輪花痕	やや粗　径1mm以下のチャート、長石含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	底部 12.0		第IV期
18	I区E26 II	山茶碗B	(15.2)	5.4	(7.8)	底部外面板目、高台端部輪花痕、底部内面静止指ナデ	密	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 1.4 底部 2.3	口縁部外面炭化物付着	第V期
19	I区C29 II	山茶碗B	(11.6)	—	—		密　径0.5mm以下のチャート含む	2.5Y8/2(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 2.7	外面白泥	第IX期
20	I区D28 II	小皿A	(8.8)	3.1	(4.8)		やや粗　径1mm以下の長石、チャート含む	10YR8/1(灰白) 10YR5/2(灰黄褐)	口縁 3.0 底部 10.0	内面全面自然釉	第5型式
21	I区C28 II	小皿B	(8.6)	1.8	(5.4)	底部内面静止指ナデ	密　径1mm以下の長石、チャート含む	10YR7/3(ニブイ黄橙) 10YR6/4(ニブイ黄橙)	口縁 2.4 底部 4.0	内面に降灰 7.5YR6/4(ニブイ橙)	第IV期
22	II区G17 II	古瀬戸擂鉢	—	—	—		粗　径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR4/4(褐) 5YR3/2(暗赤褐)	—	錆釉	
23	I区E27 II	古瀬戸灯籠形香炉	—	—	(8.8)	体部外面下方～底部回転ヘラ削り、足付き	密　径1mm以下の長石、チャート含む	10YR8/2(灰白) 10YR5/6(黄褐)	底部2.9	内面鉄釉、底部外面露胎 10YR8/2(灰白)	
24	I区E27 II	中国磁器白磁小坏	(6.4)	—	—		密　径0.05mm以下の微砂粒含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁4.6		
25	I区F29 II	中国磁器青白磁坏	(12.0)	—	—		密　径0.1mm以下の砂粒含む	2.5GY7/1(明オリーブ灰)・2.5GY7/1(明オリーブ灰)	口縁2.0		
26	I区E26 II	中国磁器染付皿	(9.4)	2.8	(2.6)	削り出し高台(内削ぎ)	密　径0.1mm以下の砂粒含む	5GY7/1(明オリーブ灰) 5GY7/1(明オリーブ灰)	口縁 2.0 底部 5.0	高台畳付部露胎 10YR6/3(ニブイ黄橙)	
27	II区G21 II	中国磁器染付坏	—	—	—		密　径0.1mm以下の砂粒含む	7.5Y7/1(灰白) 7.5Y7/1(灰白)	—		
28	II区J19 II	中国磁器染付皿	—	—	(3.4)	削り出し高台(内削ぎ)	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10GY8/1(明緑灰) 5G7/1(明緑灰)	底部 2.5	高台畳付部露胎 2.5Y8/2(灰白)	
29	II区I20 II	中国磁器染付皿	(9.1)	—	—		密　径0.1mm以下の砂粒含む	5G7/1(明緑灰) 5G7/1(明緑灰)	口縁 1.4		

第13表　土器類観察表(2)

挿図番号	地区層位	遺物名器種	法量(cm) 口径	器高	底径高台径	成形・調整	胎土	色調(外面・内面)	残存率(X/12)	その他(釉薬など)	産地・時期
第23図30	I区E25 II	肥前磁器染付折縁鉢	—	—	—		密 径0.1mm以下の砂粒含む	10GY8/1(明緑灰) 10GY8/1(明緑灰)	—		
31	I区E25 II	肥前磁器白磁紅皿	3.6	1.7	1.6	削り出し高台、体部外面放射状の削り	密	N9/(白) N9/(白)	口縁 5.0 底部 8.0	底部露胎 7.5Y8/1(灰白)	
32	I区E28 II	伊万里染付小碗	(7.2)	4.4	(3.1)	貼付け高台	密	(灰白) (灰白)	口縁 0.8 底部 6.6		
33	I区F26 II	伊万里染付小鉢	(14.3)	—	—		密 径0.1mm以下の砂粒含む	7.5GY8/1(明緑灰) 5GY8/1(灰白)	口縁 1.7		
34	II区G19 II	唐津碗	(9.8)	—	—		密 径0.1mm以下の長石、チャート含む	5YR3/1(黒褐) 5YR3/1(黒褐)	—		
35	II区H22 II	唐津坏	—	—	—		密	5YR4/2(灰オリーブ) 5YR4/2(灰オリーブ)	—		
36	II区G20 II	古伊万里染付碗	(10.6)	5.8	(3.8)	削り出し高台	密	5GY8/1(灰白) 5GY8/1(灰白)	口縁 2.1 底部 2.0		
37	II区G23 II	伊万里青磁碗	(12.7)	—	—		密 径0.1mm以下の砂粒含む	7.5GY8/1(明緑灰) 7.5GY8/1(明緑灰)	口縁 2.0		
38	I区D26 II	大窯坏	(5.3)	2.5	2.8	体部下方外面回転ヘラ削り、削り出し高台	密	N2/(黒) N2/(黒)	口縁 2.4 底部 12.0	鉄釉、外面下方以下露胎2.5Y7/1(灰白)	
39	I区E27 II	大窯丸皿	(9.2)	1.5	(5.6)	体部外面下方回転ヘラ削り、高台内削ぎ	やや粗 径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR8/3(浅黄橙) 10YR8/3(浅黄橙)	口縁 4.0 底部 0.0	灰釉	
40	I区E25 II	大窯丸皿	(12.0)	2.3	(7.8)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台、底部外面ピン痕	密 径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR8/4(浅黄橙) 10YR8/4(浅黄橙)	口縁 2.0 底部 2.2	鉄釉にうのふ釉の流し掛け2.5Y8/1(灰白)	
41	I区D27 II	大窯縁釉皿	(11.2)	2.4	(6.1)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台、口縁部内面コテナデ	密	N6/(灰) 5Y6/3(オリーブ黄)	口縁 2.3 底部 3.1	内面鉄釉に灰釉、外面露胎	
42	I区E26 II	大窯重圏皿	(10.5)	2.3	(5.6)	体部内面コテナデ、同心円状の小突起4本、底部外面回転糸切り	密 径0.5mm以下のチャート含む	10YR6/4(ニブイ黄橙) 2.5Y8/4(淡黄)	口縁 2.0 底部 6.0	無釉、焼成不良、底部内面炭化物付着	
43	I区F26 II	大窯鉢	—	—	(9.6)	体部外面下方回転ヘラ削り	密 径0.5mm以下のチャート、長石含む	5YR3/6(暗赤褐) 5YR3/3(暗赤褐)	底部 1.9	内面鉄釉、見込み付近円形の拭い取り10YR8/2(灰白)	
44	I区E26 II	大窯耳付水注	—	—	—		密 径0.2mm以下の長石含む	5YR3/4(暗赤褐) 5YR4/3(ニブイ赤褐)	体部 3.0	鉄釉	
第24図45	II区E21 II	大窯天目茶碗	(13.0)	—	—		密	10YR6/8(明黄褐) 10YR6/8(明黄褐)	口縁 2.1	鉄釉	
46	II区H19 II	大窯天目茶碗	(10.9)	—	—	体部下方外面回転ヘラ削り	密 径0.2mm以下の長石含む	5YR2/2(黒褐) 5YR2/2(黒褐)	口縁 1.8	鉄釉、外面下方以下露胎2.5Y7/2(灰黄)	
47	II区I20 II	大窯丸碗	—	—	(5.2)	体部下方外面回転ヘラ削り、削り出し高台	密 径1mm以下の長石含む	7.5YR3/4(暗褐) 10YR2/2(黒褐)	底部 6.9	鉛釉、高台畳付部露胎7.5YR8/1(灰白)	
48	II区H24 II	大窯坏	(5.8)	—	—	体部外面回転ヘラ削り、削り出し高台	密	2.5Y8/2(灰白) 2.5Y8/2(灰白)	口縁 2.8	長石釉	
49	II区I23 II	大窯丸皿	(9.4)	1.6	(5.6)	体部外面下方回転ヘラ削り、高台内削ぎ、底部外面ピン痕	密	5Y6/4(オリーブ黄) 5Y6/4(オリーブ黄)	口縁 2.1 底部 2.9	鉄釉と灰釉	
50	II区I20 II	大窯丸皿	(10.6)	2.2	(5.8)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密	5Y6/4(オリーブ黄) 5Y6/4(オリーブ黄)	口縁 0.7 底部 3.1	灰釉、底部露胎5Y8/1(灰白)	
51	II区G20 II	大窯丸皿	(10.0)	2.7	(5.5)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密 径0.2mm以下の石英、長石含む	7.5Y5/2(灰オリーブ) 7.5Y5/2(灰オリーブ)	口縁 2.0 底部 6.0	灰釉、底部外面の輪トチン痕に釉溜結	
52	II区I20 II	大窯縁釉皿	(12.4)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	密 径0.2mm以下の長石含む	2.5Y6/1(黄灰) 10YR7/1(灰白)	口縁 2.6	灰釉、口縁部以外露胎5Y7/2(灰白)	
53	II区H24 II	大窯丸皿	(12.5)	2.3	(8.0)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台、底部外面ピン痕	密 径0.1mm以下の砂粒含む	2.5Y5/1(黄灰) 2.5Y5/1(黄灰)	口縁 2.1 底部 2.0	長石釉	
54	II区J17 II	大窯丸皿	(11.3)	2.1	(7.2)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密 径0.1mm以下のチャート、長石含む	2.5Y8/1(灰白) 2.5Y8/1(灰白)	口縁 2.6 底部 2.5	長石釉	
55	II区I20 II	大窯丸皿	—	—	(6.0)	体部外面回転ヘラ削り、削り出し高台、輪トチン痕、底部内面押型菊花文	密 径0.2mm以下のチャート含む	10YR7/2(灰白) 10YR7/2(灰白)	底部 2.0	灰釉	
56	II区G20 II	大窯徳利	(7.3)	—	—		密 径0.2mm以下の石英、長石含む	10YR5/2(灰黄褐) 10YR5/2(灰黄褐)	口縁 2.8	鉄釉10YR1.7/1(黒)	
57	II区G19 II	大窯合子身	—	—	(4.7)	体部外面回転糸切り、内面螺旋状の回転ナデ	密 径2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR2/1(黒) 7.5YR2/1(黒)	底部 7.0	鉄釉、底部外面露胎5YR4/6(赤褐)	

第14表　土器類観察表(3)

挿図番号	地区層位	遺物名器種	法量(cm) 口径	器高	底径高台径	成形・調整	胎土	色調(外面・内面)	残存率(X/12)	その他(釉薬など)	産地・時期
第24図58	I区F28 II	大窯擂鉢	—	—	—	内面に擂目(9条一単位、幅1.3cm)、口縁外部突起コテナデ	やや粗　径1mm以下の長石含む	10R3/2(暗赤褐) 10R2/2(極暗赤褐)	—	錆釉	
59	I区E25 II	大窯擂鉢	—	—	—	内面に擂目(7条一単位、幅1.5cm)	やや粗　径5mm以下の礫、径0.1mm以下のチャート含む	5YR3/3(暗赤褐) 2.5YR3/3(暗赤褐)	—	錆釉	
60	II区I21 II	大窯擂鉢	—	—	—	内面に擂目(15条一単位、幅2.1cm)	やや粗　径0.1mm以下のチャート、長石含む	7.5YR3/2(黒褐) 7.5YR2/2(黒褐)	—	錆釉	
61	II区I22 II	大窯擂鉢	—	—	—	内面擂目	やや粗　径1mm以下のチャート、長石含む	10R3/2(暗赤褐) 10R3/2(暗赤褐)	—	錆釉	
62	II区G19 II	大窯擂鉢	—	—	—	内面に擂目(9条一単位、幅1.5cm)	やや粗　径0.1mm以下のチャート、径1.5mm以下の長石含む	2.5YR4/3(ニブイ赤褐) 2.5YR4/3(ニブイ赤褐)	—	錆釉	
63	I区F26 II	連房丸碗	(7.0)	4.5	(3.3)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.1mm以下の砂粒含む	5Y7/2(灰白) 5Y7/2(灰白)	口縁　3.0 底部　4.1	灰釉	
64	I区E26 II	連房丸碗	(7.7)	4.6	(4.0)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁　2.8 底部　4.0	灰釉、外面下方以下露胎2.5Y6/2(灰黄)	
65	I区D24 II	連房坏	(6.6)	4.0	(3.2)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.1mm以下の砂粒含む	5Y7/2(灰白) 5Y7/2(灰白)	口縁　2.2 底部　6.8	灰釉、外面下方以下露胎2.5Y8/2(灰白)	
66	I区E27 II	連房坏	(5.8)	4.1	(2.9)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密	10Y7/2(灰白) 10Y7/2(灰白)	口縁　4.0 底部　6.4	灰釉、外面下方以下露胎2.5Y8/2(灰白)	
67	I区F26 II	連房坏	(6.6)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	密　径0.1mm以下の砂粒含む	5Y6/3(オリーブ黄) 5Y6/3(オリーブ黄)	口縁　3.0	灰釉、外面下方以下露胎2.5Y7/1(灰白)	
68	I区D26 II	連房染付坏	—	—	(3.3)	貼付け高台	密	5GY8/1(灰白) 5GY8/1(灰白)	底部　5.0		
69	I区F27 II	連房染付広東茶碗	—	—	(5.2)	貼付け高台	密　径0.1mm以下の長石含む	7.5Y6/1(灰) 7.5Y6/1(灰)	底部　5.5		
70	I区E26 II	連房皿	(11.8)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	密　径0.5mm以下のチャート、石英含む	10YR4/4(褐) 10YR4/4(褐)	口縁　3.9	灰釉、外面下方以下露胎10YR8/2(灰白)	
71	I区D27 II	連房輪花皿	(11.2)	2.7	(6.0)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5Y5/2(灰オリーブ) 2.5Y6/3(ニブイ黄)	口縁　1.8 底部　7.5	灰釉、高台部露胎2.5Y6/1(黄灰)、底部外面に炭化物付着	
72	I区C29 II	連房折縁皿	(11.5)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径1mm以下のチャート含む	2.5Y8/1(灰白) 10YR8/2(灰白)	口縁　2.2	口縁部灰釉10YR6/6(明黄褐)	
73	I区D25 II	大窯折縁皿	(12.2)	2.6	(6.8)	体部外面回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径1mm以下のチャート、長石含む	10YR6/3(ニブイ黄褐) 10YR7/3(ニブイ黄褐)	口縁　0.5 底部　4.0	灰釉、外面下方以下露胎10YR8/2(灰白)	
74	I区E25 II	連房菊皿	(12.8)	2.9	6.1	口縁端部花弁状ヘラ切り込み、体部内面菊花文型押し、貼付け高台、底裏指ナデ、底部内面ピン痕	やや粗　径1mm以下のチャート含む	2.5Y5/4(黄褐) 2.5Y6/4(ニブイ黄)	口縁　5.0 底部 12.0	灰釉、外面下方以下露胎10YR8/3(浅黄橙)、銅緑釉流し掛け2.5Y4/6(オリーブ褐)	
75	I区F26 II	連房菊皿	(13.6)	4.7	(7.3)	口縁端部花弁状ヘラ切り込み、体部内面菊花文型押し、体部外面丸ノミ削ぎ、貼付け高台	密　径3mm以下のチャート含む	10Y5/2(オリーブ灰) 10YR8/4(浅黄橙)	口縁　1.2 底部　6.7	灰釉、口縁部及び外面銅緑釉流し掛け、外面下方以下露胎10YR8/3(浅黄橙)	
76	I区E28 II	連房皿	(10.5)	2.0	(6.3)	体部外面下方～底部回転ヘラ削り	密	7.5YR4/4(褐) 7.5YR4/4(褐)	口縁　2.8 底部　2.4	錆釉	
77	I区G26 II	連房小鉢	(11.0)	3.7	(7.2)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.1mm以下のチャート、長石含む	7.5YR3/3(暗褐) 7.5YR3/3(暗褐)	口縁　3.2 底部　5.1	錆釉、高台部露胎7.5Y7/1(灰白)、内面鉄絵	
78	I区E24 II	連房鉢類	—	—	—	足付き、底部外面ピン痕、内面中央部菊花文型押し	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	5Y7/3(浅黄) 5Y7/3(浅黄)	—	灰釉	
第25図79	I区D27 II	連房餐盤	—	3.2	—	体部外面下方～底部ヘラ削り調整	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	7.5Y7/2(灰白) 7.5Y7/2(灰白)	—	灰釉、体部外面に摺絵7.5Y4/3(暗オリーブ)	
80	I区F26 II	連房餐盤	—	—	—	体部外面下方～底部ヘラ削り調整、底部外面指ナデ	密　径0.1mm以下の砂粒含む	10Y7/1(灰白) 5Y7/2(灰白)	—	灰釉、体部外面に摺絵、内面見込み釉5B6/1(青灰)	
81	II区G21 II	大窯天目茶碗	(11.1)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	密　径1mm以下のチャート含む	N2/(黒) N2/(黒)	口縁　2.3	鉄釉と粒状の鉛釉、外面下方以下露胎7.5YR8/1(灰白)	
82	II区F22 II	連房丸碗	—	—	(4.4)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.5mm以下のチャート含む	5Y7/3(浅黄) 5Y7/3(浅黄)	底部　4.0	鉛釉にうのふ釉流し掛け、外面下方以下露胎2.5Y8/2(灰白)	
83	II区J19 II	連房丸碗	(10.0)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR4/4(褐) 10YR4/4(褐)	口縁2.1	錆釉	
84	II区H24 II	連房丸碗	(11.0)	7.5	(4.4)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密	2.5Y4/4(オリーブ褐) 2.5Y4/4(オリーブ褐)	口縁　1.5 底部　7.6	鉛釉、外面下方以下露胎2.5Y7/4(浅黄)	

第15表　土器類観察表(4)

挿図番号	地区 層位	遺物名 器種	法量(cm) 口径	器高	底径 高台径	成形・調整	胎　土	色　調 (外面・内面)	残存率 (X/12)	その他 (釉薬など)	産地・時期
第25図 85	II区J20 II	連房 皿	(12.5)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	密	7.5Y7/3(浅黄) 7.5Y7/3(浅黄)	口縁 4.0	灰釉、外面下方以下露胎2.5Y6/1(黄灰)	
86	II区J19 II	連房 皿	(12.0)	2.7	(7.6)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.5mm以下のチャート含む	5Y7/2(灰白) 2.5Y7/4(浅黄)	口縁 1.0 底部 3.1	灰釉、外面下方以下露胎10YR7/4(ニブイ黄橙)、底部外面に炭化物付着	
87	II区F26 II	連房 皿	(12.5)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	密　径6mm以下の礫、径1mm以下のチャート含む	2.5Y7/3(浅黄) 2.5Y7/3(浅黄)	口縁 2.5	灰釉、外面下方以下露胎2.5Y7/1(灰白)	
88	II区I21 II	連房 皿	(11.8)	—	—	内面見込みコテナデ	密　径0.1mm以下のチャート、長石含む	7.5Y7/2(灰白) 7.5Y7/2(灰白)	口縁 3.5	灰釉	
89	II区G18 II	連房 小皿	(6.3)	—	—		密　径1mm以下のチャート含む	2.5YR2/3(極暗赤褐) 2.5YR2/3(極暗赤褐)	口縁 2.0	錆釉	
90	II区F22 II	連房 塗り分け平皿	(12.4)	2.2	(6.8)	削り出し高台	密　径1mm以下のチャート、長石含む	2.5Y7/2(灰黄)と 5YR3/2(暗赤褐)	口縁 3.0 底部 3.0	灰釉と鉄釉の塗り分け、内面摺絵、高台部露胎2.5Y6/3(ニブイ黄)	
91	II区G23 II	連房 黄瀬戸中皿	—	—	—	内面口縁付近に2条一組の櫛目文	やや粗　径0.2mm以下の長石、石英含む	10YR7/4(ニブイ黄橙) 2.5Y7/4(浅黄)	—	灰釉、口縁部内面銅緑釉7.5Y5/3(灰オリーブ)	
92	II区I18 II	連房 灯明皿	(10.3)	—	—		密　径0.5mm以下のチャート含む	5YR3/4(暗赤褐) 5YR3/4(暗赤褐)	口縁 1.6	錆釉、外面下方以下露胎10YR6/3(ニブイ黄橙)	
93	II区H23 II	連房 鉢	(22.0)	—	—		密	7.5YR1.7/1(黒) 7.5YR1.7/1(黒)	口縁 1.1	鉄釉	
94	II区G23 II	連房 鉢	—	—	(7.0)	内面櫛目沈線の連続文様、体部外面回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.5mm以下の長石含む	5Y4/3(暗オリーブ) 5Y5/3(灰オリーブ)	底部 2.0	灰釉、外面下方以下露胎2.5Y6/2(灰黄)	
95	II区G19 II	連房 鐵部変形向付	—	—	—	足付き、内面ピン痕	密　径0.3mm以下のチャート含む	7.5Y8/1(灰白)と 7.5Y5/3(灰オリーブ)	—	灰釉、内面見込み緑釉、内面中央部に摺絵	
96	II区I23 II	連房 花瓶	(7.7)	—	—		密　径0.1mm以下のチャート含む	7.5Y7/1(灰白) 10Y7/2(灰白)	口縁 2.3	灰釉、外面に摺絵、口縁受け部露胎2.5Y7/1(灰白)	
97	II区I20 II	連房 香炉	(10.4)	—	—	体部外面に2条一組の櫛目沈線連続文様	密　径0.2mm以下の長石、石英含む	2.5Y4/4(オリーブ褐) 2.5Y4/4(オリーブ褐)	口縁 2.0	鉄釉、内面下方露胎2.5Y8/2(灰白)	
98	I区E26 II	連房 擂鉢	—	—	—		密　径0.1mm以下のチャート、長石含む	5YR4/4(ニブイ赤褐) 5YR4/2(灰褐)	—	鉄釉	
99	II区I19 II	連房 擂鉢	—	—	—	体部外面上方に沈線3条、内面に擂目(13条一単位、幅3.5cm)	やや粗　径3mm以下の礫、径1mm以下の長石含む	7.5YR3/3(暗褐) 7.5YR3/4(暗褐)	—	鉄釉	
100	II区G23 II	連房 擂鉢	—	—	—		やや粗　径5mm以下の礫、径0.1mm以下の長石、チャート含む	2.5YR4/3(ニブイ赤褐) 2.5YR4/2(灰褐)	—	鉄釉	
101	I区E25 III	土師器 皿	10.2	(2.5)	—	体部内面横ナデ	密　径1mm以下の長石含む	5Y3/1(オリーブ黒) 5Y3/1(オリーブ黒)	口縁 2.3		
102	I区F27 III	土師器 皿	5.7	1.1	—	体部外面指圧、口縁部内外面ナデ	密　径0.1mm以下の長石含む	7.5YR7/4(ニブイ橙) 7.5YR8/4(浅黄橙)	口縁 12.0		
103	II区I19 III	土師器 皿	(7.0)	(1.4)	—	体部外面指圧、体部内面横ナデ	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR8/2(灰白) 10YR7/2(ニブイ黄橙)	口縁 4.0	口縁部内面炭化物付着	
104	II区H23 III	土師器 皿	(7.5)	2.5	—	体部外面指圧、体部内面横ナデ	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR7/4(ニブイ橙) 7.5YR7/2(明褐灰)	口縁 4.0		
105	II区G21 III	土師器 皿	9.3	(1.8)	—	体部外面指圧、口縁部内面横ナデ	密　径0.2mm以下の長石含む	10YR4/1(褐灰) 10YR4/1(褐灰)	口縁 3.3		
106	II区F20 III	土師器 皿	(9.0)	1.1	—	体部外面指圧、体部内面横ナデ	密　径0.2mm以下のチャート含む	10YR8/3(浅黄橙) 10YR8/3(浅黄橙)	口縁 3.5	体部内面炭化物付着	
107	II区F21 III	土師器 皿	6.9	(1.4)	—	体部外面指圧	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR7/2(ニブイ黄橙) 10YR7/2(ニブイ黄橙)	口縁 4.5	体部内面炭化物付着	
108	II区J18 III	土師器 皿	(7.2)	(1.3)	—	体部外面指圧	密　シャモット含む	7.5YR8/2(灰白) 7.5YR8/2(灰白)	口縁 4.0		
109	II区I20 III	土師器 皿	(7.8)	1.4	—	体部外面指圧、体部内面横ナデ	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR8/3(浅黄橙) 7.5YR7/2(明褐灰)	口縁 3.0	体部内面炭化物付着	
110	II区H23 III	土師器 甕	13.2	—	—	回転ナデ、頸部一肩部外面指圧	やや粗　径1mm以下の石英、径0.2mm以下の雲母を多く含む	10YR3/3(暗褐) 10YR3/3(黒褐)	口縁 1.8	体部炭化物付着	
111	I区F29 III	須恵器 坏身	(12.3)	—	—		密　径0.5mm以下の長石、径1mm以下のチャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 1.5		

第16表　土器類観察表(5)

挿図番号	地区層位	遺物名器種	法量(cm) 口径	器高	底径高台径	成形・調整	胎土	色調(外面・内面)	残存率(X/12)	その他(釉薬など)	産地・時期
第25図112	I区F25 III	須恵器坏蓋	(10.6)	—	—		密 径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR4/1(褐灰) 2.5Y5/1(黄灰)	口縁 1.5		
113	I区D25 III	須恵器高坏脚部	—	—	(10.9)		密 径1mm以下の長石、チャート、石英含む	10Y4/1(灰) 2.5Y5/1(黄灰)	底部 1.3	内面炭化物付着	
第26図114	I区C29 III	須恵器甕口縁部	(20.8)	—	—		密 径1mm以下の長石、石英含む	N7/(灰白) N7/(灰白)	口縁 3.0		
第25図115	II区H17 III	須恵器蓋	—	—	—	天井部外面回転ヘラ削り、天井部内面不定方向ナデ、つまみ上部指圧、沈線1条	密 径3mm以下の長石含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	—	つまみ径2.8cm	
第26図116	I区D28 III	灰釉陶器碗	—	—	7.7	底部外面回転ヘラ削り	密 径3mm以下の長石、径0.2mm以下のチャート含む	10YR7/2(ニブイ黄橙) 10YR7/2(ニブイ黄橙)	底部 3.0		O−53
117	I区E28 III	灰釉陶器碗	—	—	8.4	底部外面回転ヘラ削り、底部内面不定方向ナデ	密 径1mm以下の長石、径0.5mm以下のチャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	底部 3.8		O−53
118	II区G18 III	灰釉陶器碗	—	—	8.4	体部外面下方回転ヘラ削り、底部外面回転糸切り	密 径0.5mm以下のチャート、長石含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	底部 2.8		O−53
119	II区H17 III	灰釉陶器皿	—	—	7.8	底部外面回転糸切り、底部中央に爪状圧痕	密 径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5Y7/1(明褐灰) 7.5Y7/1(明褐灰)	底部 4.5		O−53
120	II区H23 III	灰釉陶器皿	—	—	9.4	体部外面下方回転ヘラ削り、底部外面回転糸切り	密 径1mm以下のチャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/2(灰黄)	底部 1.5	内面 釉5Y6/2(灰オリーブ)	K−90
121	I区C28 III	山茶碗A	—	—	9.0	高台端部輪鼓状、底部内面多方向静止指ナデ	やや粗 径2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR7/1(明褐灰) 7.5YR5/3(ニブイ褐)	底部 9.0		第6型式
122	I区F28 III	山茶碗A	—	—	6.0	高台端部輪鼓状、底部内面静止指ナデ	やや粗 径2mm以下のチャート、径0.2mm以下の長石含む	10YR7/1(灰白) 10YR8/3(浅黄橙)	底部 12.0		第7型式
123	I区D29 III	山茶碗B	—	—	(6.0)	底部外面板目、高台端部輪鼓状、底部内面静止指ナデ	密 径4mm以下の長石礫、径0.2mm以下のチャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	底部 4.5		第VI−VII期
124	I区D28 III	山茶碗B	(10.3)	2.3	(4.1)	体部内面コテナデ	密 径0.2mm以下のチャート含む	10YR8/3(浅黄橙) 10YR8/2(灰白)	口縁 3.0 底部 3.0	焼成不良、内面平滑、口縁部炭化物付着	第IX期
125	II区J19 III	山茶碗B	(10.4)	2.6	(3.8)	底部外面爪状圧痕	密 径0.5mm以下の長石、径1.5mm以下のチャート含む	10YR6/2(灰黄褐) 2.5Y5/1(黄灰)	口縁 2.0 底部 2.9	内面上方に降灰 2.5Y4/3(オリーブ褐)	第X期
126	II区H24 III	山茶碗B	(10.0)	1.7	(4.2)		密 径0.2mm以下のチャート含む	10YR8/4(浅黄橙) 10YR8/4(浅黄橙)	口縁 2.0 底部 3.0	焼成不良	第X期
127	II区I21 III	山茶碗B	(10.8)	2.1	(4.2)		密 径1mm以下の長石、チャート含む	10YR8/4(浅黄橙) 10YR7/4(ニブイ黄橙)	口縁 0.5 底部 3.0	外面白泥	第X期
128	II区F22 III	小皿A	(8.2)	1.8	4.4	底部外面板目、底部内面静止指ナデ	やや粗 径3mm以下のチャート、長石含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	口縁 2.0 底部 9.0		第6型式
129	I区C29 III	小皿B	(8.2)	1.6	(5.0)	底部外面板目、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密 径1mm以下の長石、チャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR6/2(灰黄褐)	口縁 2.0 底部 4.5	内面全面釉	第IV期
130	I区F28 III	小皿B	(8.0)	1.7	(4.6)	底部外面板目、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	口縁 3.0 底部 3.0		第IV期
131	I区C30 III	小皿B	(8.0)	1.8	(5.0)	底部外面板目、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密 径0.5mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y8/2(灰白)	口縁 5.6 底部 11.5	焼成不良	第V期
132	I区C29 III	小皿B	(8.4)	0.9	—	底部外面板目、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 8.5	内面平滑	第IX−X期
133	I区G7 III	小皿B	(8.3)	0.9	(6.0)	底部内面コテナデ	密 径0.5mm以下の長石、チャート含む	N8/1(灰白) N8/1(灰白)	口縁 2.2 底部 4.9	内面平滑、I区E24と接合	第IX−X期
134	II区F26 III	小皿B	—	—	(5.7)	底部外面板目、底部内面コテナデ	密 径2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	底部 5.0	底部外面墨書	
135	II区G24 III	小皿B	(8.8)	0.8	(6.0)		密 径1mm以下のい長石、チャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	口縁 3.7 底部5.0		第IX−X期
136	II区H23 III	小皿B	(8.7)	1.7	(4.2)	底部内面静止指ナデ	密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR7/2(ニブイ黄橙) 10YR7/1(灰白)	口縁 0.2 底部 3.0	底部外面墨書	第IV期
137	I区C29 III	鉢	—	—	—	口縁部外面に沈線2条	密 径2mm以下の長石、径0.5mm以下のチャート含む	2.5Y6/1(黄灰) 2.5Y6/1(黄灰)	—		
138	II区G18 III	古瀬戸平碗	(15.0)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	やや粗 径2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/4(浅黄) 2.5Y7/4(浅黄)	口縁 0.8	灰釉、体部外面下方露胎2.5Y8/1(灰白)	
139	II区G20 III	古瀬戸大皿	—	—	—	体部外面下方−底部回転ヘラ削り、足付き	やや粗 径3mm以下の長石含む	10YR7/3(ニブイ黄橙) 10YR7/4(ニブイ黄橙)	—	内面自然釉10YR8/3(浅黄橙)	

第17表　土器類観察表(6)

挿図番号	地区層位	遺物名器種	法量(cm) 口径	器高	底径高台径	成形・調整	胎土	色調(外面・内面)	残存率(X/12)	その他(釉薬など)	産地・時期
第26図140	II区G22 III	古瀬戸有耳壺	—	—	—	肩部耳の上下に3条1組の沈線が2段	密　径3mm以下の長石、径0.2mm以下のチャート含む	2.5Y6/3(ニブイ黄) 2.5Y6/3(ニブイ黄)	—	灰釉	
141	II区G18 III	古瀬戸擂鉢	—	—	—		やや粗　径0.1mm以下の砂粒含む	5YR4/3(ニブイ赤褐) 5YR4/3(ニブイ赤褐)	—		
142	I区E26 III	中国磁器白磁碗	—	—	3.5	削り出し高台	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	7.5Y8/1(灰白) 2.5Y8/1(灰白)	底部 12.0	高台露胎 2.5Y8/2(灰白)	
143	I区F27 III	中国磁器青磁碗	—	—	(5.6)	内面見込みにヘラ削り、底部内面ヘラ描き文、削り出し高台	密　径0.2mm以下のチャート含む	2.5Y6/3(ニブイ黄) 2.5Y6/3(ニブイ黄)	底部 4.0	高台畳付部以内露胎10YR7/3(ニブイ黄橙)	
144	I区E25 III	中国磁器染付皿	—	—	—		密　径0.1mm以下の砂粒含む	5GY8/1(灰白) 5GY8/1(灰白)	—		
145	I区C29 III	中国磁器青磁皿	—	—	(4.1)	底部内面ヘラ描きと櫛目による螺旋文	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10Y5/2(オリーブ灰) 10Y5/2(オリーブ灰)	底部 2.5	底部外面露胎 2.5Y6/1(黄灰)	
146	II区G22 III	中国磁器白磁碗	(11.9)	—	—		密　径0.05mm以下の微砂粒含む	5Y8/1(灰白) 5Y8/1(灰白)	口縁 1.5		
147	II区G20 III	中国磁器染付皿	—	—	(7.1)	削り出し高台	密　径0.1mm以下の砂粒含む	2.5GY8/1(灰白) 7.5GY8/1(明緑灰)	底部 2.8		
148	II区I21 III	中国磁器白磁皿	—	—	(6.0)	削り出し高台	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	底部 0.8	高台畳付部露胎 2.5Y8/1(灰白)	
149	II区H19 III	中国磁器青白磁梅瓶	—	—	—	外面ヘラ描き唐草文、内面回転ヘラ削り	密	5G7/1(明緑灰) 2.5G8/1(灰白)	—		
150	I区E28 III	伊万里染付碗	(10.7)	—	—		密　径0.1mm以下の砂粒含む	10GY8/1(明緑灰) 10GY8/1(明緑灰)	口縁 1.9		
151	II区H19 III	伊万里青磁皿	—	—	(4.6)	削り出し高台	密　径0.1mm以下の砂粒含む	7.5GY8/1(明緑灰) 10YR7/1(灰白)	底部 7.2	高台畳付部以内露胎7.5YR6/6(橙)	
152	I区F26 III	大窯丸皿	(11.2)	2.1	(8.0)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台、底部外面ピン痕	密	7.5Y6/1(灰) 7.5Y6/1(灰)	口縁 3.1 底部 4.6	長石釉	
153	I区G26 III	大窯丸皿	(12.0)	2.5	(5.9)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.2mm以下の長石含む	5Y7/1(灰白) 5Y7/1(灰白)	口縁 2.0 底部 4.0	長石釉	
154	I区F26 III	大窯志野焼皿	(15.0)	3.9	(8.2)	口縁部内外面丸ノミによる菊花文、貼り付け高台	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	5Y6/1(灰) 5Y6/1(灰)	口縁 4.6 底部 4.0	長石釉	
155	I区F29 III	大窯猪口	—	—	(3.4)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台、内面螺旋状の回転ナデ	密　径1mm以下のチャート、石英含む	7.5YR3/3(暗褐) 7.5YR3/3(暗褐)	底部 7.0	鉄釉、底部外面露胎 7.5YR6/4(ニブイ橙)	
156	II区G19 III	大窯天目茶碗	(12.2)	—	—	体部下方外面回転ヘラ削り	密　径0.1mm以下の砂粒含む	7.5R1.7/1(赤黒) 7.5R1.7/1(赤黒)	口縁 1.8	鉄釉、外面下方以下露胎2.5YR4/3(ニブイ赤褐)	
157	II区J18 III	大窯丸碗	—	—	3.8	体部下方外面一高台螺旋状回転ヘラ削り、削り出し高台、底裏内反り	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	底部 12.0	鉄釉、外面下方以下露胎5YR5/4(ニブイ赤褐)	
第27図158	II区I17 III	大窯丸皿	(8.1)	1.3	(2.8)	体部外面下方回転ヘラ削り、高台内削ぎ、内面見込みコテナデ	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	5Y7/3(浅黄) 5Y7/3(浅黄)	口縁 4.1 底部 4.2	灰釉、底部露胎 2.5Y8/1(灰白)	
159	II区F19 III	大窯丸皿	(9.2)	2.2	(5.5)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.1mm以下の砂粒含む	7.5Y4/3(暗オリーブ) 2.5Y7/3(浅黄)	口縁 4.2 底部 11.0	灰釉、底部外面釉剥離5Y8/1(灰白)、I20Hと接合	
160	II区F23 III	大窯丸皿	(10.2)	2.6	(5.6)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台、底部外面輪トチン付着痕	密　径0.1mm以下の砂粒含む	7.5Y5/3(灰オリーブ) 7.5Y5/3(灰オリーブ)	口縁 2.0 底部 3.5	灰釉	
161	II区F20 III	大窯丸皿	(11.0)	2.4	(7.3)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径1mm以下ののチャート、石英含む	2.5Y7/1(灰白) 5Y7/1(灰白)	口縁 1.6 底部 3.1	長石釉、内面鉄絵 2.5Y3/2(黒褐)	
162	II区G23 III	大窯重圏皿	(9.9)	2.2	(4.9)	体部内面コテナデ、同心円状の小突起2本、底部外面回転糸切り	やや粗　径0.2mm以下のチャート、長石、石英含む	10YR5/1(褐灰) 10YR5/1(褐灰)	口縁 3.5 底部 6.0	無釉、内面炭化物付着	
163	II区F20 III	大窯重圏皿	(10.0)	2.2	(5.6)	体部内面コテナデ、同心円状の小突起3本、底部外面回転糸切り	やや粗　径0.2mm以下のチャート、長石、径3mm以下の石英含む	7.5YR5/1(褐灰) 10YR5/1(褐灰)	口縁 6.0 底部 3.0	無釉、内面炭化物付着、I区E29と接合	
164	II区H23 III	大窯重圏皿	(10.5)	2.3	(4.9)	体部内面コテナデ、同心円状の小突起3本、底部外面回転糸切り	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	2.5Y5/1(黄褐) 2.5Y5/1(黄褐)	口縁 1.9 底部 4.2	無釉、内面炭化物付着	
165	II区F22 III	大窯重圏皿	(10.6)	2.1	(5.8)	体部内面コテナデ、同心円状の小突起3本、底部外面回転糸切り	密　径0.5～1mmのチャート含む	10YR7/4(ニブイ黄橙) 10YR7/4(ニブイ黄橙)	口縁 4.4 底部 6.4	無釉、口縁部緑灰7.5YR5/3(ニブイ褐)、II区I20と接合	

第18表　土器類観察表(7)

挿図番号	地区層位	遺物名器種	法量(cm) 口径	器高	底径高台径	成形・調整	胎土	色調(外面・内面)	残存率(X/12)	その他(釉薬など)	産地・時期
第27図166	II区H22 III	大窯重圏皿	(11.6)	—	—	体部内面コテナデ、同心円状の小突起3本	密	7.5YR4/1(褐灰) 7.5YR4/1(褐灰)	口縁 2.5	鉄釉、外面下方以下露胎10YR6/1(褐灰)	
167	II区H23 III	大窯重圏皿	(10.4)	2.3	(4.9)	体部内面コテナデ、同心円状の小突起7本、底部外面回転糸切り	密 径0.1mm以下の白色粒含む	10Y5/1(灰) 10Y5/1(灰)	口縁 5.5 底部 5.0	無釉、焼き締め	
168	II区F20 III	大窯重圏皿	(10.6)	2.8	—	体部内面コテナデ、同心円状の小突起5本、底部外面回転糸切り	密 径0.5mm以下のチャート含む	5YR7/4(ニブイ橙) 5YR6/4(ニブイ橙)	口縁 2.3	無釉、内面炭化物付着	
169	II区I18 III	大窯縁釉皿	(10.6)	—	—	体部外面回転ヘラ削り	密 径0.1mm以下のチャート、長石含む	7.5YR1.7/1(黒) 7.5YR1.7/1(黒)	口縁 2.1	鉄釉、体部下方内外面露胎N6/(灰)	
170	II区H19 III	大窯縁釉皿	(10.0)	—	—		密 径1mm以下のチャート、長石含む	2.5YR3/2(暗赤褐) 5YR3/2(暗赤褐)	口縁 3.5	鉄釉、体部下方内外面露胎5YR6/4(ニブイ橙)	
171	II区F20 III	大窯茶入	—	—	(5.4)	体部外面回転糸切り、体部下方内面～底部螺旋状の回転ナデ	密 径1mm以下の石英含む	10YR8/2(灰白) 7.5YR2/1(黒)	底部 4.5	鉄釉	
172	I区D28 III	大窯片口擂鉢	—	—	—	片口部指圧調整、内面擂目	やや粗 径1mm以下のチャート、長石含む	7.5YR4/2(灰褐) 10YR3/2(黒褐)	—	錆釉	
173	I区E28 III	連房小皿	(6.4)	1.8	(3.8)	底部外面回転糸切り	密 径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR8/1(灰白) 5Y7/3(浅黄)	口縁 2.5 底部 3.2	灰釉、外面露胎	
174	II区H23 III	連房天目茶碗	(12.1)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	密 径0.2mm以下の長石含む	5YR7/1(明褐灰) 5YR5/4(ニブイ赤褐)	口縁 1.1	鉄釉、外面下方以下露胎7.5YR8/2(灰白)	
175	II区J23 III	連房染付坏	(7.8)	—	—	体部外面縦方向に削り	密 径0.1mm以下のチャート含む	N8/(灰白) N8/(灰白)	口縁 1.6		
176	I区F26 IV	土師器皿	10.4	1.4	—	体部外面指圧、体部内面横ナデ、底部内面一方向ナデ	密 径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR7/3(ニブイ橙) 7.5YR7/2(明褐灰)	口縁 5.8	底部内面炭化物付着	
177	I区F26 IV	土師器皿	9.0	(1.6)	—	体部外面指圧、体部内面横ナデ	密 径0.2mm以下の雲母、長石含む	7.5YR7/3(ニブイ橙) 7.5YR7/3(ニブイ橙)	口縁 6.0		
178	II区F19 IV	土師器皿	(7.1)	(1.5)	—	体部外面指圧、体部内面横ナデ	密	5YR7/4(ニブイ橙) 5YR7/4(ニブイ橙)	口縁 5.0	体部炭化物及び油分付着	
179	II区G19 IV	土師器皿	(9.0)	2.1	—	体部外面指圧、口縁部内外面一方向横ナデ	密	10YR3/2(黒褐) 10YR5/2(灰黄褐)	口縁 3.0		
180	II区I21 IV	土師器皿	7.5	1.3	—	体部外面指圧	密 径0.2mm以下のチャート、長石含む	2.5Y6/2(灰黄) 2.5Y6/2(灰黄)	口縁 4.0		
181	II区F22 IV	土師器皿	8.4	(1.9)	—		密 径0.2mm以下のチャート、雲母、長石含む	7.5YR7/3(ニブイ橙) 10YR7/3(ニブイ橙)	口縁 3.4		
182	II区E22 IV	土師器皿	8.2	1.4	—	体部外面指圧、口縁部内外面横ナデ	密 径0.2mm以下のチャート含む	10YR8/4(浅黄橙) 10YR8/3(浅黄橙)	口縁 4.0	体部内面炭化物付着	
183	II区F18 IV	須恵器円面硯脚部	—	—	12.2	台脚部外面ヘラ描き沈線	密 径0.2mm以下のチャート、長石含む	5Y6/1(灰) 7.5Y6/1(灰)	底部 1.0		
184	I区E29 IV	灰釉陶器碗	—	—	7.9	底部外面回転ヘラ削り	密 径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR7/2(ニブイ黄橙) 10YR7/2(ニブイ黄橙)	—		O－53
185	II区G24 IV	灰釉陶器碗	—	—	7.0	体部外面下方回転ヘラ削り、底部外面回転糸切り	密 径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR8/1(灰白) 7.5YR8/1(灰白)	底部 4.0		O－53
186	I区F28 IV	山茶碗A	—	—	(7.8)	高台端部糸切痕	やや粗 径1mm以下のチャート、長石含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	底部 4.2		第5型式
187	II区H20 IV	山茶碗A	—	—	—		やや粗 径0.5mm以下のチャート、長石含む	2.5Y6/2(灰黄) 10YR7/1(灰白)	口縁 1.5	体部外面に降灰5Y5/2(灰オリーブ)	第5型式
188	II区H19 IV	山茶碗A	—	—	7.4	高台端部糸切痕、底部内面多方向静止指ナデ	やや粗 径1mm以下のチャート、長石わずかに含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	底部 6.0		第6型式
189	II区F21 IV	山茶碗A	—	—	(7.8)	高台端部糸切痕	やや粗 径2mm以下の石英、径0.5mm以下の黒色粒含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	底部 5.0		第6型式
190	I区E28 IV	山茶碗B	—	—	6.2	高台端部糸切痕	密 径1mm以下のチャート、長石含む	2.5Y8/1(灰白) N6/(灰白)	底部 8.9	底部外面炭化物付着	第IV期
191	I区F28 IV	山茶碗B	—	—	5.8	底部外面板目、高台端部糸切痕、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR8/2(灰白) 10YR8/2(灰白)	底部 7.0		第V期
192	I区F28 IV	山茶碗B	—	—	6.0	高台端部糸切痕	密	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	底部 8.6		第V期
193	I区E27 IV	山茶碗B	—	—	(5.4)	高台端部糸切痕、底部内面コテナデ	密 径0.5mm以下の黒色粒、径0.1mm以下の長石含む	5Y7/1(灰白) 5Y7/1(灰白)	底部 9.0		第V期

第19表　土器類観察表(8)

挿図番号	地区層位	遺物名器種	法量(cm) 口径	器高	底径高台径	成形・調整	胎土	色調(外面・内面)	残存率(X/12)	その他(釉薬など)	産地・時期
第27図194	I区D25 IV	山茶碗B	(14.2)	—	—		密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	5Y7/1(灰白) 5Y7/1(灰白)	口縁 2.9		第V期
195	I区D28 IV	山茶碗B	—	—	(5.0)	底部外面板目、高台端部糸切痕、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	底部 12.0		第V期
196	I区E28 IV	山茶碗B	—	—	(5.0)	底部外面板目、高台端部糸切痕	密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR8/2(灰白) 10YR8/2(灰白)	底部 5.0		第V期
197	I区F28 IV	山茶碗B	—	—	(4.8)	高台端部糸切痕	密	7.5YR7/4(ニブイ橙) 10YR7/2(ニブイ黄橙)	底部 5.8		第V期
198	I区F27 IV	山茶碗B	14.2	—	—		密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	7.5YR7/1(明褐灰) 2.5Y8/1(灰白)	口縁 1.8		第V期
199	I区E28 IV	山茶碗B	(13.8)	—	—		密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR8/1(灰白) 10YR8/1(灰白)	口縁 2.0		第V期
200	I区E28 IV	山茶碗B	(13.2)	—	—		密 径0.2mm以下の長石含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 1.8		第V期
201	I区F28 IV	山茶碗B	—	—	4.8	底部外面板目、高台端部糸切痕、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密 径0.2mm以下の長石含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	底部 4.6		第V期
202	I区C29 IV	山茶碗B オロシ碗	—	—	—	体部内面に斜格子状のヘラ描きによる細かいオロシ目	密 径0.5mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	—		第V期
203	I区F27 IV	山茶碗B	(15.6)	5.3	(6.5)	高台端部糸切痕、底部内面コテナデ	密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR8/2(灰白) 10YR8/3(浅黄橙)	口縁 1.0 底部 0.1	焼成不良	第VI～VII期
第28図204	I区E28 IV	山茶碗B	—	—	(4.2)	底部外面板目、高台端部糸切痕、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR8/1(灰白) 10YR7/2(ニブイ黄橙)	底部 12.0	外面白泥	第VI～VII期
205	I区E28 IV	山茶碗B	—	—	(5.0)	高台端部糸切痕、底部内面静止指ナデ	密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y8/1(灰白) 2.5Y8/1(灰白)	底部 6.0		第VI～VII期
206	I区E28 IV	山茶碗B	—	—	(4.8)	底部外面板目、高台端部糸切痕、底部内面静止指ナデ	密 径0.5mm以下の長石含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	底部 2.3		第VI～VII期
207	I区E28 IV	山茶碗B	—	—	(5.4)	底部外面砂粒圧痕、高台端部糸切痕、底部内面2方向静止指ナデ	密	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	底部 3.0		第VI～VII期
208	I区D28 IV	山茶碗B	—	—	(4.8)	高台端部糸切痕、底部内面静止指ナデ	密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR8/3(浅黄橙) 10YR8/3(浅黄橙)	底部 5.0	焼成不良、内面平滑	第VI～VII期
209	I区D28 IV	山茶碗B	(12.4)	—	—		密 径0.2mm以下の長石含む	2.5Y8/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 3.0	外面白泥	第VI～VII期
210	I区F27 IV	山茶碗B	(13.2)	—	—		密	5Y7/1(灰白) 5Y7/1(灰白)	口縁 1.6		第VIII期
211	I区E28 IV	山茶碗B	(11.4)	3.3	(3.6)	高台端部糸切痕、底部内面コテナデ	密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 10YR6/2(灰黄褐)	口縁 1.5 底部 3.5		第VIII期
212	I区D29 IV	山茶碗B	—	—	(4.0)	底部外面板目、高台端部糸切痕、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR8/1(灰白) 10YR8/1(灰白)	底部 4.5		第VIII期
213	I区E26 IV	山茶碗B	(12.2)	3.8	(3.8)	高台端部糸切痕、底部内面回転指ナデ	密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 1.1 底部 0.1		第VIII期
214	I区E28 IV	山茶碗B	(12.3)	—	—		密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR7/2(ニブイ黄橙) 10YR7/2(ニブイ黄橙)	口縁 2.5		第VIII期
215	I区D28 IV	山茶碗B	—	—	(3.6)	高台端部糸切痕、底部内面コテナデ	密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	底部 4.0		第VIII期
216	I区F27 IV	山茶碗B	(11.2)	3.9	(3.5)	高台端部糸切痕、底部内面コテナデ	密 径1mm以下の長石、チャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	口縁 1.0 底部 4.0		第VIII期
217	I区F27 IV	山茶碗B	(11.6)	—	—		密 径0.5mm以下の長石、チャート含む	7.5YR8/1(灰白) 7.5YR6/3(ニブイ褐)	口縁 2.1	外面白泥、内外面炭化物付着	第IX期
218	I区F27 IV	山茶碗B	(11.6)	—	—		密 径1mm以下の長石含む	2.5Y8/1(灰白) 2.5Y8/1(灰白)	口縁 2.5		第IX期
219	I区F27 IV	山茶碗B	(12.8)	3.5	(4.9)	底部外面爪状圧痕、体部底部内面コテナデ	密 径1.5mm以下の長石含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 2.5 底部 4.0	外面白泥	第VIII期
220	I区F26 IV	山茶碗B	(13.0)	3.3	(5.6)		密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR8/2(灰白) 10YR8/2(灰白)	口縁 0.8 底部 3.8	焼成不良	第IX期
221	I区D26 IV	山茶碗B	—	—	(3.6)	底部外面板目、底部内面静止指ナデ	密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR8/2(灰白) 10YR8/2(灰白)	底部 7.0	焼成不良、内面平滑	第X期

第20表　土器類観察表(9)

挿図番号	地区層位	遺物名器種	法量(cm) 口径	器高	底径高台径	成形・調整	胎土	色調(外面・内面)	残存率(X/12)	その他(釉薬など)	産地・時期
第28図 222	I区E27 IV	山茶碗B	(9.9)	2.2	3.6	底部外面板目、体部内面コテナデ	密　径1mm以下の長石含む	2.5Y6/2(灰黄) 2.5Y6/2(灰黄)	口縁 2.3 底部 3.6	外面白泥	第X期
223	I区F22 IV	山茶碗B	(11.0)	—	—	体部内面コテナデ	密　径0.5mm以下の長石、チャート含む	10YR6/2(灰黄褐) 10YR6/2(灰黄褐)	口縁 2.0	口縁部内外面炭化物付着	第X期
224	I区E26 IV	山茶碗	(9.0)	2.2	(5.3)	底部外面回転糸切りの後、粘土を付け足して再び回転糸切り	密　径0.5mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 1.8 底部 1.7		
225	II区H21 IV	山茶碗B	—	—	(5.8)	底部外面板目、高台端部糸切痕、底部内面静止指ナデ	密　径3mm以下の長石、径0.2mm以下のチャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	底部 12.0		第IV期
226	II区G23 IV	山茶碗B	—	—	6.2	底部外面板目、高台端部糸切痕	密　径1mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	底部 3.2		第IV期
227	II区H20 IV	山茶碗B	(14.0)	5.9	(6.6)	高台端部糸切痕	密　径1mm以下の長石含む	5Y7/1(灰白) 5Y7/1(灰白)	口縁 1.0 底部 3.5	内面自然釉	第IV期
228	II区H23 IV	山茶碗B	(12.8)	—	—		密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR8/1(灰白) 10YR8/1(灰白)	口縁 2.0		第V期
229	II区F22 IV	山茶碗B	14.2	—	—		密　径1mm以下の長石含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 2.8	口縁端部に降灰 5YR6/6(橙)	第V期
230	II区F20 IV	山茶碗B	—	—	(5.8)	底部外面板目、高台端部糸切痕、底部内面静止指ナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	底部 4.5		第V期
231	II区H23 IV	山茶碗B	(12.8)	—	—		密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	口縁 1.8	内外面自然釉	第V期
232	II区I20 IV	山茶碗B	—	—	(3.7)	底部外面爪状圧痕、高台端部糸切痕	密　径0.5mm以下の長石、チャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	底部 7.5		第VI～VII期
233	II区F22 IV	山茶碗B	—	—	4.0	高台端部糸切痕、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密　径0.5mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	底部 8.2	底部内面炭化物付着	第VI～VII期
234	II区J20 IV	山茶碗B	(11.4)	3.3	(3.2)	高台端部糸切痕	密　径0.5mm以下の長石、チャート含む	10YR8/1(灰白) 10YR8/1(灰白)	口縁 2.5 底部 1.0		第VI～VII期
235	II区G20 IV	山茶碗B	(13.9)	—	—		密　径0.2mm以下の長石含む	2.5Y8/1(灰白) 2.5Y8/1(灰白)	口縁 1.5	外面白泥	第VI～VII期
236	II区G17 IV	山茶碗B	(12.8)	—	—	体部内面一方向横ナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR7/2(ニブイ黄橙) 10YR7/2(ニブイ黄橙)	口縁 2.5		第VI～VII期
237	II区H24 IV	山茶碗B	(12.2)	3.7	(3.8)	高台端部糸切痕	密　径0.5mm以下の長石、径1mm以下のチャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 1.9 底部 2.5		第VI～VII期
238	II区I19 IV	山茶碗B	—	—	(3.4)	底部外面板目、高台端部糸切痕、底部内面コテナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	底部 6.0		第VI～VII期
239	II区I20 IV	山茶碗B	(13.0)	—	—		密　径0.2mm以下の長石含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 2.0		第VI～VII期
240	II区J18 IV	山茶碗B	(13.0)	—	—		密　径0.1mm以下の砂粒含む	2.5Y7/2(灰黄) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 1.8		第VIII期
241	II区F20 IV	山茶碗B	(12.6)	—	—		密　径0.2mm以下の長石含む	2.5Y8/1(灰白) N7/(白)	口縁 2.6		第VIII期
第29図 242	II区H24 IV	山茶碗B	(12.2)	3.1	(2.8)	高台端部糸切痕、底部内面静止指ナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR6/2(灰黄褐) 10YR6/1(褐灰)	口縁 3.5 底部 5.5	内外面炭化物付着	第VIII期
243	II区J19 IV	山茶碗B	(11.6)	3.7	2.8	底部外面板目、高台端部糸切痕、底部内面静止指ナデ	密　径1mm以下の長石、チャート含む	2.5Y8/3(淡黄) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 3.8 底部 5.0	外面白泥	第VIII期
244	II区H20 IV	山茶碗B	12.7	3.9	4.6	高台端部糸切痕、底部内面コテナデ	密　径0.5mm以下の長石、径1mm以下のチャート含む	2.5Y8/1(灰白) 2.5Y8/1(灰白)	口縁 1.6 底部 3.1		第VIII期
245	II区G24 IV	山茶碗B	(11.7)	4.2	(4.2)	高台端部糸切痕、底部内面コテナデ	密　径0.2mm以下の長石含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	口縁 1.0 底部 3.0		第VIII期
246	II区H17 IV	山茶碗B	(11.8)	—	—		密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	口縁 1.7		第VIII期
247	II区H20 IV	山茶碗B	(13.4)	3.7	(5.4)	高台端部糸切痕、底部内面コテナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/2(ニブイ黄橙)	口縁 0.1 底部 2.9		第VIII期
248	II区H24 IV	山茶碗B	(13.8)	3.2	(5.2)	底部外面板目	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR8/1(灰白) 10YR8/1(灰白)	口縁 1.0 底部 4.0		第IX期
249	II区H20 IV	山茶碗B	(12.0)	3.2	(4.8)	底部外面板目	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR8/1(灰白) 10YR8/1(灰白)	口縁 4.0 底部 3.0		第IX期
250	II区H23 IV	山茶碗B	(12.0)	3.2	(4.0)	底部糸切痕	やや粗　径1mm以下の長石、チャート含む	2.5Y8/1(灰白) 2.5Y8/2(灰白)	口縁 1.9 底部 4.0	外面白泥	第IX期

第21表　土器類観察表(10)

挿図番号	地区層位	遺物名器種	法量(cm) 口径	器高	底径高台径	成形・調整	胎土	色調(外面・内面)	残存率(X/12)	その他(釉薬など)	産地・時期
第29図251	II区F19 IV	山茶碗B	(11.8)	2.6	(4.4)	底部糸切痕	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR8/1(灰白) 10YR8/2(灰白)	口縁 2.0 底部 2.0	外面白泥	第IX期
252	II区F20 IV	山茶碗B	(13.6)	—	—		密　径2mm以下の長石含む	2.5Y8/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 1.7	外面白泥	第IX期
253	II区H20 IV	山茶碗B	(11.4)	2.5	(5.0)	底部内面静止指ナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR8/2(灰白) 10YR8/2(灰白)	口縁 2.0 底部 4.5	焼成不良	第X期
254	II区I20 IV	山茶碗B	(11.0)	2.8	(3.6)		密　径1mm以下の長石、チャート含む	10YR8/4(浅黄橙) 2.5Y6/2(灰黄)	口縁 1.3 底部 6.5	外面白泥	第X期
255	II区H19 IV	山茶碗B	(10.0)	2.0	(3.5)	底部内面静止指ナデ	密　径0.5mm以下の長石含む	10YR8/3(浅黄橙) 7.5YR8/4(浅黄橙)	口縁 1.1 底部 4.5	焼成不良、外面白泥、口縁部外面炭化物付着	第X期
256	II区H23 IV	山茶碗B	(11.1)	1.9	(4.0)	底部外面板目、底部内面静止指ナデ	密　径2.5mm以下の長石含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 0.8 底部 4.0		第X期
257	II区J19 IV	山茶碗B	—	—	(4.0)		密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR5/1(褐灰) 10YR5/1(褐灰)	底部 4.0		第X期
258	I区D25 IV	小皿A	(8.4)	2.3	(4.3)		やや粗　径3mm以下の礫、径0.2mm以下のチャート、長石含む	5Y7/1(灰白) 5Y7/1(灰白)	口縁 3.2 底部 3.0		第5型式
259	I区G26 IV	小皿A	—	—	4.4		やや粗　径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR6/3(ニブイ黄橙) 10YR5/2(灰黄褐)	底部12.0		第5型式
260	I区E28 IV	小皿B	(8.6)	1.6	(4.9)	底部外面板目、底部内面静止指ナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 1.0 底部 3.5		第IV期
261	I区F28 IV	小皿B	(9.0)	1.7	(5.8)	底部内面静止指ナデ	密　径0.5mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 2.5 底部 4.2		第IV期
262	I区F27 IV	小皿B	(9.2)	2.1	4.7	底部外面板目、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密　径0.5mm以下の長石、チャート含む	10YR8/1(灰白) 10YR8/1(灰白)	口縁 9.0 底部 12.0	底部外面墨書	第IV期
263	I区E28 IV	小皿B	(8.2)	1.7	4.3	底部内面静止指ナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y5/1(黄灰) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 2.6 底部 6.0		第IV期
264	I区E27 IV	小皿B	(8.9)	1.2	(4.1)		密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	口縁 2.0 底部 6.0	内面平滑	第V～VIII期
265	I区F28 IV	小皿B	(8.8)	1.6	(5.0)	底部内面コテナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 2.8 底部 1.0		第V～VIII期
266	I区F27 IV	小皿B	(8.4)	1.0	(4.8)	底部外面板目、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 7.8 底部 10.0	内面平滑	第V～VIII期
267	I区F28 IV	小皿B	(9.0)	1.3	(5.6)	底部外面板目、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	N7/(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 1.7 底部 3.0	内面平滑	第V～VIII期
268	I区E29 IV	小皿B	(9.4)	1.3	(6.8)	底部外面板目、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密　径0.5mm以下の長石、チャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR8/1(灰白)	口縁 4.5 底部 5.0	口縁部に降灰10YR6/1(褐灰)、内面油煙痕	第V～VIII期
269	I区E26 IV	小皿B	(9.3)	1.4	(5.7)	底部外面板目、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 2.0 底部 2.0		第V～VIII期
270	I区E27 IV	小皿B	(8.0)	0.8	(6.0)	底部内面コテナデ後静止指ナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	口縁 2.0	内面平滑	第VIII～X期
271	II区H23 IV	小皿B	(8.1)	1.9	(4.6)		やや粗　径0.2mm以下のチャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	口縁 3.0 底部 6.0	表面焼きぶくれ	第IV期
272	II区H24 IV	小皿B	(8.4)	1.9	(4.2)	底部外面植物圧痕、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密　径0.2mm以下の長石含む	10YR8/2(灰白) 10YR8/2(灰白)	口縁 4.0 底部 6.0		第IV期
273	II区I20 IV	小皿B	(8.6)	1.8	(4.2)	底部内面静止指ナデ	密　径0.5mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 4.5 底部 4.9		第IV期
274	II区J19 IV	小皿B	—	1.2	(4.4)	底部外面板目、底部内面コテナデ	密　径1mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/2(灰黄) 2.5Y7/2(灰黄)	底部 7.5	内面全面自然釉、底部外面墨書	第IV期
275	II区G23 IV	小皿B	(8.8)	1.7	(4.8)	底部外面板目、底部内面コテナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 1.5 底部 2.5		第IV期
276	II区I19 IV	小皿B	(8.8)	2.0	(4.8)	底部内面静止指ナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 2.4 底部 3.5		第IV期
277	II区I19 IV	小皿B	(8.8)	1.6	(5.0)	底部外面板目、底部内面静止指ナデ	密　径1mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 1.8 底部 3.0	口縁部に降灰10YR7/4(ニブイ黄橙)、内面平滑	第IV期
278	II区I20 IV	小皿B	8.5	1.7	(3.8)	底部外面植物圧痕、底部内面静止指ナデ	密　径0.5mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 3.6 底部 3.0	内面自然釉	第IV期
279	II区F19 IV	小皿B	(8.6)	1.8	(4.8)	底部外面板目	密　径0.5mm以下の長石、チャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	口縁 3.5 底部 3.0		第IV期

第22表　土器類観察表(11)

挿図番号	地区層位	遺物名器種	法量(cm) 口径	器高	底径高台径	成形・調整	胎土	色調(外面・内面)	残存率(X/12)	その他(釉薬など)	産地・時期
第29図280	II区E22 IV	小皿B	(8.2)	1.1	(4.0)	底部内面コテナデ	密　径0.2mm以下のチャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 5.0 底部 4.0	底部外面墨書	第V～VII期
281	II区F23 IV	小皿B	(8.4)	1.3	(6.4)	底部内面コテナデ	密　径0.1mm以下の砂粒、径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 3.2 底部 4.0		第V～VII期
282	II区H20 IV	小皿B	(8.8)	1.3	6.4	底部外面板目、底部内面静止指ナデ	密　径1mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 4.5 底部 5.4	内面炭化物付着	第V～VII期
283	II区H23 IV	小皿B	(8.0)	1.4	(5.0)	底部外面板目、底部内面静止指ナデ	密　径0.5mm以下の長石、チャート含む	10YR8/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 4.5 底部 5.5	体部内面に降灰 2.5Y6/2(灰黄)	第V～VII期
284	II区H24 IV	小皿B	(8.9)	1.6	(5.0)	底部外面板目、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 1.5 底部 7.2	体部外面炭化物付着	第V～VII期
285	II区I21 IV	小皿B	(8.4)	1.2	(5.6)	底部外面板目、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 2.2 底部 2.5	底部外面墨書	第V～VII期
286	II区H24 IV	小皿B	(9.4)	0.9	(5.6)	底部外面板目、底部内面静止指ナデ	密　径3mm以下の長石、径0.2mm以下のチャート含む	10YR7/2(ニブイ黄橙) 10YR6/2(灰黄褐)	口縁 1.5 底部 3.0	底部外面墨書	第V～VII期
287	II区I20 IV	小皿B	(8.1)	1.1	(6.3)	底部外面板目、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 2.6 底部 6.0	底部外面炭化物付着	第V～VII期
288	II区G20 IV	小皿B	(7.8)	1.1	(5.4)	底部内面コテナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 3.5 底部 5.8		第V～VII期
289	II区H20 IV	小皿B	(8.0)	1.1	(5.5)		密　径3mm以下の礫、径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y6/1(黄灰) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 2.5 底部 2.0	内面平滑	第VIII～X期
290	II区I21 IV	小皿B	(9.3)	0.7	(4.7)	底部外面板目、底部内面静止指ナデ	密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁 1.5 底部 12.0		第VIII～X期
291	II区H23 IV	小皿B	(7.8)	1.0	(5.8)	底部内面コテナデ後静止指ナデ	密　径0.2mm以下の長石含む	10YR5/1(褐灰) 10YR5/1(褐灰)	口縁 1.6 底部 5.8	白泥	第VIII～X期
292	I区E28 IV	鉢	—	—	—	口縁上端部コテナデ	やや粗　径2mm以下の長石、石英、チャート含む	10YR6/1(褐灰) 10YR6/1(褐灰)	—		
293	II区I20 IV	鉢	—	—	—	口縁部外面に沈線2条	やや粗　径2mm以下の長石、チャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	—		
第30図294	I区G27 IV	古瀬戸折縁中皿	(20.2)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	やや粗　径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR8/1(灰白) 2.5Y6/3(ニブイ黄)	口縁 1.8	内面灰釉ハケ塗り、口縁部釉剥落、外面下方以下露胎	
295	II区G19 IV	古瀬戸有耳壺	—	—	(12.4)	貼付け高台	密　径2mm以下の石英、径1mm以下のチャート、長石含む	7.5YR5/4(ニブイ褐) 7.5YR3/1(黒褐)	底部 2.1	外面一部灰釉 5Y4/3(暗オリーブ)、高台部露胎10YR5/3(ニブイ黄褐)	
296	I区D28 IV	古瀬戸擂鉢	(25.6)	—	—		やや粗　径2mm以下のチャート、石英含む	7.5YR7/4(ニブイ橙) 7.5YR6/4(ニブイ橙)	口縁 1.1	鉄釉	
297	I区E26 IV	中国磁器白磁碗	—	—	—	体部外面に沈線2条	密　径0.1mm以下の砂粒含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	—		
298	I区D29 IV	中国磁器青磁碗	—	—	(5.3)	削り出し高台	密　径0.1mm以下の砂粒含む	(明緑) (明緑)	底部 2.5	高台畳付部以内露胎7.5Y7/1(灰白)	
299	I区F26 IV	中国磁器白磁小碗	(11.4)	3.6	(7.3)	削り出し高台	密　径0.05mm以下の微砂粒含む	5Y8/1(灰白) 5Y8/1(灰白)	口縁 1.1 底部 2.6	高台畳付部露胎 7.5YR6/6(橙)	
300	II区I18 IV	中国磁器青磁碗	—	—	—	体部外面鎬蓮弁文	密　径0.1mm以下の砂粒含む	10Y6/2(オリーブ灰) 10Y6/2(オリーブ灰)	—		龍泉窯系
301	II区G23 IV	中国磁器青磁碗	—	—	—	内面ヘラ描き櫛目文	密	7.5Y5/2(灰オリーブ) 7.5Y5/2(灰オリーブ)	—		龍泉窯系
302	II区G19 IV	中国磁器白磁碗	—	—	—	内面櫛目文	密　径0.1mm以下の砂粒含む	10Y8/1(灰白) 10Y8/1(灰白)	—		
303	II区J24 IV	中国磁器白磁皿	—	—	(5.4)	底部外面回転糸切り、内面ヘラ描き文	密　径0.2mm以下のチャート含む	5Y6/2(灰オリーブ) 5Y6/2(灰オリーブ)	底部 2.5	底部外面露胎 10YR6/1(褐灰)	
304	I区E24 IV	大窯坏	(7.2)	4.0	(3.3)	体部下方外面～高台螺旋状回転ヘラ削り、削り出し高台、底部内面コテナデ	やや粗　径0.5mm以下のチャート、長石含む	10Y8/1(灰白) 10Y8/1(灰白)	口縁 4.8 底部 8.0	長石釉、外面下方以下露胎10YR8/1(灰白)	
305	I区F25 IV	大窯丸皿	(11.6)	2.4	(7.5)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台、底部外面トチン付着痕	密　径0.2mm以下の石英、チャート、長石含む	2.5Y7/2(灰白) 2.5Y7/2(灰白)	口縁 5.0 底部 6.0	灰釉	
306	I区F26 IV	大窯重圏皿	(10.8)	2.0	(4.8)	体部内面コテナデ、同心円状の小突起3本、底部外面回転糸切り	やや粗　径0.2mm以下のチャート、長石、石英含む	5YR7/6(橙) 5YR5/6(明赤褐)	口縁 2.0 底部 12.0	無釉	

第23表　土器類観察表(12)

挿図番号	地区層位	遺物名器種	法量(cm) 口径	器高	底径高台径	成形・調整	胎土	色調(外面・内面)	残存率(X/12)	その他(釉薬など)	産地・時期
第30図307	I区E29 IV	大窯香炉	(8.0)	2.6	(7.1)	底部外面回転糸切り、足付、底部内面見込みコテナデ、中央部静止指ナデ	密　径3mm以下の石英,径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5Y6/3(オリーブ黄) 7.5Y6/3(オリーブ黄)	口縁　1.0 底部　6.0	灰釉、底部内外面露胎2.5Y6/1(黄灰)	
308	II区F21 IV	大窯重圏皿	(9.8)	2.4	5.5	体部内面コテナデ、同心円状の小突起5本、底部外面回転糸切り	密　径1mm以下の赤褐色粒、径0.5mm以下の長石含む	N4/(灰) N4/(灰)	口縁　6.7 底部　11.5	無釉、焼き締め	
309	II区H24 IV	大窯縁釉皿	(10.2)	2.3	(4.8)	底部外面回転糸切り	密　径3mm以下の長石,径0.2mm以下のチャート含む	10YR8/2(灰白) 10YR8/2(灰白)	口縁　10.0 底部　6.0	口縁部灰釉 5Y5/3(灰オリーブ)	
310	II区G21 IV	大窯縁釉皿	(10.0)	2.4	(4.5)	底部外面回転糸切り	密　径0.05mm以下のチャート、長石の微砂粒含む	10YR7/1(ニブイ黄橙) 10YR7/2(ニブイ黄橙)	口縁　3.9 底部　4.0	口縁部灰釉 7.5Y5/3(灰オリーブ),H20Hと接合	
311	II区G23 IV	大窯片口	(14.1)	—	—		密　径1mm以下のチャート含む	7.5YR3/1(黒褐) 7.5YR3/1(黒褐)	口縁　3.0	鉄釉	
312	II区G19 IV	大窯香炉	—	—	(6.2)	底部外面回転糸切り、三足付、体部～底部内面螺旋状ナデ	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	—	体部外面のみ鉄釉 7.5Y2/1(黒)	
313	II区G20 IV	大窯燭台	—	—	(9.3)	台脚部外面コテナデ	密　径0.2mm以下の長石含む	7.5YR2/3(極暗褐) 7.5YR7/2(明褐灰)	底部　4.5	鉄釉,内面露胎,外面一部自然釉	
314	II区F23 IV	大窯擂鉢	—	—	—	内面に擂目(8条一単位,幅2.1cm)	やや粗　径1mm以下のチャート、長石含む	10R3/2(暗赤褐) 2.5YR3/1(暗赤灰)	—	錆釉	
315	II区F21 IV	大窯片口擂鉢	—	—	—	片口部指圧調整、内面擂目	やや粗　径1mm以下のチャート、長石含む	7.5YR3/1(黒褐) 7.5YR3/1(黒褐)	—	錆釉	
316	I区E28 IV	連房水甕	(15.3)	—	—		密　径0.1mm以下のチャート含む	7.5Y6/3(オリーブ黄) 7.5Y7/3(浅黄)	口縁　1.2	灰釉	
317	I区F26 IV	連房鉢	—	—	—		密　径1mm以下のチャート、長石含む	5Y7/3(浅黄) 5Y6/3(オリーブ黄)	—	灰釉、II区H22と接合	
318	II区G23 IV	連房鉢	(27.9)	—	—		密　径0.1mm以下の砂粒含む	5Y6/4(オリーブ黄) 5Y6/4(オリーブ黄)	口縁　0.7	灰釉	
第31図319	III区N5 II	土師器皿	9.2	1.7	—	体部外面指圧、口縁部内外面横ナデ	密　径0.2mm以下の長石含む	7.5YR7/3(ニブイ橙) 10YR8/3(浅黄橙)	口縁　4.0	体部内面炭化物付着	
320	III区M7 II	土師器皿	(8.0)	1.2	—	体部外面指圧	密　径0.2mm以下のチャート含む	5YR8/4(淡橙) 7.5YR8/3(浅黄橙)	口縁　6.0		
321	III区O4 II	土師器皿	9.8	1.8	—	口縁部内外面横ナデ	密　径0.2mm以下の長石含む	7.5YR7/3(ニブイ橙) 7.5YR7/3(ニブイ橙)	口縁　2.0	口縁部内面炭化物付着	
322	III区M6 II	土師器皿	(8.0)	1.1	—		密　径0.2mm以下のチャート含む	10YR8/2(灰白) 10YR8/2(灰白)	口縁　3.0	口縁部内面炭化物付着	
323	III区M6 II	土師器皿	(6.0)	1.0	—	体部外面指圧、体部内面横ナデ	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR4/1(褐灰) 10YR4/1(褐灰)	口縁　6.0		
324	III区M6 II	土師器皿	8.0	1.9	—	口縁部内外面横ナデ	密　径0.2mm以下の長石含む	7.5YR6/3(ニブイ褐) 10YR6/2(灰黄褐)	口縁　4.0	口縁部内面炭化物付着	
325	III区L5 II	土師器皿	(6.0)	(1.0)	—	体部外面指圧、体部内面横ナデ、底部内面指圧	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR8/3(浅黄橙) 5YR8/3(浅黄橙)	口縁　12.0		
326	III区M6 II	土師器皿	(9.6)	(1.8)	—	体部外面指圧	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR8/3(浅黄橙) 10YR8/3(浅黄橙)	口縁　4.5		
327	III区L4 II	須恵器蓋	22.1	—	—	天井部外面回転ヘラ削り	やや粗　径2mm以下の長石含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	口縁　1.1		
328	III区N8 II	須恵器盤	—	—	10.2	体部外面下方～底部回転ヘラ削り、高台貼付け後ナデ調整	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	—		
329	III区L7 II	須恵器坏身	—	—	7.0	底部外面回転ヘラ削り	密　径2mm以下の長石、石英含む	N6/(灰) N6/(灰)	底部　4.5		
330	III区M6 II	灰釉陶器段皿	—	—	—	体部外面回転ヘラ削り	密　径0.5mm以下のチャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	—	内面釉5Y6/2(灰オリーブ)	K—90
331	III区K6 II	小皿B	—	—	(6.0)		密　径0.2mm以下の長石含む	2.5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	底部　2.0	底部外面墨書	
332	III区L5 II	古瀬戸神饌形香炉	—	—	(11.0)	体部外面下方～底部回転ヘラ削り、足付き、体部下方に沈線5条	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR5/4(ニブイ黄褐) 10YR4/4(褐)	底部　2.4	錆釉、底部外面露胎 10YR8/2(灰白)	
333	III区M5 II	中国磁器青磁碗	—	—	(6.0)	体部外面鎬蓮弁文、底部内面ヘラ描き文、削り出し高台	密　径0.1mm以下の砂粒含む	2.5GY6/1(オリーブ灰) 2.5GY6/1(オリーブ灰)	底部　3.5	高台畳付部以内露胎10YR5/2(灰黄褐)	龍泉窯系
334	III区K6 II	中国磁器青磁長頸瓶	—	—	—		密　シルト含む	7.5GY6/1(明灰) 2.5Y8/1(灰白)	—	頸部径5.4cm	

第24表　土器類観察表(13)

挿図番号	地区層位	遺物名器種	法量(cm) 口径	器高	底径高台径	成形・調整	胎土	色調(外面・内面)	残存率(X/12)	その他(釉薬など)	産地・時期
第31図335	Ⅲ区L 6 Ⅱ	中国磁器 青磁 輪花坏	—	—	—	口縁部輪花状の指圧調整、内面ヘラ描き文	密	2.5GY6/1(オリーブ灰) 2.5GY6/1(オリーブ灰)	—		龍泉窯系
336	Ⅲ区M 6 Ⅱ	唐津 鉢	—	—	—		密　径0.2mm以下の長石、チャート含む	5Y4/3(暗オリーブ) 5Y4/3(暗オリーブ)	—	外面下方露胎 5YR3/4(暗赤褐)	
337	Ⅲ区O 6 Ⅱ	初期伊万里 染付 碗	—	—	(4.8)	貼付け高台	密　径0.1mm以下の砂粒含む	7.5GY8/1(明緑灰) 7.5GY8/1(明緑灰)	底部 6.0	高台畳付部露胎 7.5Y8/1(灰白)	
338	Ⅲ区M 5 Ⅱ	伊万里 白磁 坏	(6.4)	—	—		密　径0.1mm以下の砂粒含む	5GY8/1(灰白) 5GY8/1(灰白)	口縁 2.1		
339	Ⅲ区D 4 Ⅱ	大窯 丸皿	(8.8)	1.6	(4.3)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.2mm以下の石英、チャート含む	5Y7/3(浅黄) 5Y7/3(浅黄)	口縁 2.8 底部 3.0	灰釉、外面下方以下露胎5Y4/1(灰)	
340	Ⅲ区M 4 Ⅱ	大窯 丸皿	(7.3)	1.7	(2.3)	体部外面－底部回転ヘラ削り	密　径1mm以下のチャート、長石含む	7.5Y6/1(灰) 7.5Y6/1(灰)	口縁 5.9 底部 6.0	灰釉、外面下方以下露胎10YR6/2(灰黄褐)	
341	Ⅲ区N 6 Ⅱ	大窯 丸皿	(12.1)	2.0	(8.2)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.1mm以下の長石含む	5Y8/3(淡黄) 5Y8/3(淡黄)	口縁 2.0 底部 3.0	灰釉	
342	Ⅲ区M 8 Ⅱ	大窯 丸皿	(11.5)	2.2	(7.0)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台、底部外面ピン痕	密　径0.2mm以下の長石含む	5Y7/1(灰白) 5Y7/1(灰白)	口縁 1.9 底部 1.8	長石釉、口縁端部鉄釉7.5YR4/3(褐)	
343	Ⅲ区L 5 Ⅱ	大窯 内禿皿	(11.4)	—	—	体部外面コテナデ	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	5Y7/2(灰白) 5Y7/2(灰白)	口縁 1.6	灰釉、体部内面下方露胎5Y8/2(灰白)	
344	Ⅲ区N 4 Ⅱ	大窯 内禿皿	(12.9)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	密　径3mm以下の長石、径0.2mm以下のチャート含む	2.5Y7/3(浅黄) 2.5Y7/3(浅黄)	口縁 3.3	灰釉、体部内面下方露胎10YR7/3(ニブイ黄橙)	
345	Ⅲ区O 6 Ⅱ	大窯 重圏皿	(10.6)	2.3	4.8	体部内面コテナデ、同心円状の小突起4本、底部外面回転糸切り	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR4/3(褐) 5YR3/4(暗赤褐)	口縁 8.0 底部 10.5	無釉	
346	Ⅲ区O 4 Ⅱ	大窯 鉢	—	—	(7.0)	体部外面回転ヘラ削り、削り出し高台	やや粗	10YR8/3(浅黄橙) 10YR8/3(浅黄橙)	底部 5.2	内面鉄絵	
347	Ⅲ区O 4 Ⅱ	大窯 片口擂鉢	—	—	—	片口部指圧調整	やや粗　径1mm以下のチャート、長石含む	7.5YR2/1(黒) 7.5YR2/1(黒)	—	鉄釉	
348	Ⅲ区M 7 Ⅱ	連房 天目茶碗	(11.2)	—	(4.2)	体部外面下方回転ヘラ削り	密　径0.2mm以下の石英、チャート、長石含む	7.5YR3/3(暗褐・黒) 7.5YR3/3(暗褐・黒)	口縁 2.5 底部 1.5	鉄釉、外面下方以下露胎10YR7/1(灰白)	
349	Ⅲ区M 6 Ⅱ	連房 天目茶碗	(11.0)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR2/3(極暗褐・黒)・7.5YR2/3(極暗褐・黒)	口縁 2.0	鉄釉に口縁部鉛釉	
350	Ⅲ区K 7 Ⅱ	連房 碗	—	—	(4.8)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.3mm以下の長石含む	10Y7/2(灰白) 10Y7/2(灰白)	底部 3.3	灰釉、高台部露胎 5Y8/1(灰白)	
351	Ⅲ区L 7 Ⅱ	連房 碗	—	—	(4.4)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.1mm以下の長石含む	10Y7/1(灰白) 10Y7/1(灰白)	底部 2.3	灰釉、高台部露胎 2.5Y6/1(黄灰)	
352	Ⅲ区M 7 Ⅱ	連房 丸碗	(11.0)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	密　径0.5mm以下の長石含む	5Y5/4(オリーブ) 5Y5/4(オリーブ)	口縁 2.7	鉄釉	
353	Ⅲ区L 5 Ⅱ	連房 丸碗	(12.4)	—	—		密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR2/2(黒褐) 7.5YR2/2(黒褐)	口縁 2.0	鉄釉、口縁部に沿って灰釉流し掛け 5Y5/6(オリーブ)	
354	Ⅲ区M 7 Ⅱ	連房 丸碗	(10.5)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.1mm以下のチャート、長石含む	2.5Y8/2(灰白) 2.5YR7/2(灰黄)	口縁 4.1	灰釉、外面下方以下露胎5Y8/2(灰白)	
355	Ⅲ区K 6 Ⅱ	連房 丸碗	(10.7)	—	—		密　径0.5mm以下のチャート含む	10YR4/6(褐) 10YR4/6(褐)	口縁 2.7	鉛釉	
356	Ⅲ区N 4 Ⅱ	連房 丸碗	(11.7)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	密　径1mm以下のチャート、長石含む	7.5YR4/4(褐) 7.5YR4/4(褐)	口縁 3.0	錆釉に鉄釉流し掛け7.5YR1.7/1(黒)	
357	Ⅲ区L 3 Ⅱ	連房 丸碗	(9.0)	—	—		密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5Y7/1(灰白) 7.5Y7/1(灰白)	口縁 2.0	灰釉、外面に摺絵	
第32図358	Ⅲ区M 9 Ⅱ	連房 染付 丸碗	(10.2)	—	—		密	5B5/1(青灰) 5B5/1(青灰)	口縁 1.9		
359	Ⅲ区K 6 Ⅱ	連房 染付 腰折碗	—	—	(3.2)	貼付け高台	密　径0.1mm以下のチャート、長石含む	7.5GY7/1(明緑灰) 7.5GY7/1(明緑灰)	底部 5.5		
360	Ⅲ区L 4 Ⅱ	連房 染付 碗	—	—	(4.0)	貼付け高台	密　径0.1mm以下のチャート、長石含む	10Y7/1(灰白) 10Y7/1(灰白)	底部 12.0		
361	Ⅲ区M 5 Ⅱ	連房 塗り分け碗	(10.0)	—	—	体部外面に沈線3条	密　径0.2mm以下の長石含む	7.5YR7/2(灰白) 7.5YR7/1(灰白)	口縁 3.5	内面及び口縁部外面灰釉、外面鉄釉 7.5YR3/2(黒褐)	

第25表　土器類観察表(14)

挿図番号	地区層位	遺物名器種	法量(cm) 口径	器高	底径高台径	成形・調整	胎土	色調(外面・内面)	残存率(X/12)	その他(釉薬など)	産地・時期
第32図 362	IIIEM 6 II	連房坏	(6.1)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	5Y6/2(オリーブ灰) 5Y6/2(オリーブ灰)	口縁 3.0	灰釉、外面下方以下露胎2.5Y7/1(灰白)、露胎部炭化物付着	
363	IIIEM 7 II	連房染付坏	(7.2)	—	—		密	10GY8/1(明緑灰) 10GY8/1(明緑灰)	口縁 2.1		
364	IIIEK 6 II	連房柳茶碗	(12.6)	—	—		密　径0.1mm以下の砂粒含む	10Y7/1(灰白) 10Y7/1(灰白)	口縁 1.8	灰釉、外面に柳模様の鉄絵	
365	IIIEM 6 II	連房染付丸皿	(13.8)	3.4	(7.5)	削り出し高台	密　径0.1mm以下の長石含む	2.5Y8/1(灰白) 2.5Y8/1(灰白)	口縁 1.0 底部 3.0		
366	IIIEN 7 II	連房皿	—	—	(8.5)	体部外面回転ヘラ削り	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	2.5Y8/2(灰白) 2.5Y8/3(淡黄)	底部 4.0	灰釉、外面露胎、内面摺絵	
367	IIIEL 4 II	連房皿	(11.1)	3.1	(6.8)	削り出し高台	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	2.5Y8/4(淡黄) 2.5Y8/4(淡黄)	口縁 2.9 底部 3.3	灰釉、外面下方以下露胎2.5Y8/3(淡黄)	
368	IIIEL 5 II	連房皿	—	—	(7.4)	削り出し高台	密　径0.5mm以下のチャート含む	7.5Y5/4(ニブイ褐) 7.5Y5/4(ニブイ褐)	底部 4.0	錆釉、銅緑釉流し掛け5Y4/2(灰オリーブ)、高台部露胎2.5Y6/1(黄灰)	
369	IIIEM 7 II	連房皿	(10.0)	1.6	(4.4)	体部外面下方～底部回転ヘラ削り、内面見込み輪トチン痕	密　径0.1mm以下の砂粒含む	5YR4/4(ニブイ赤褐) 5YR4/4(ニブイ赤褐)	口縁 2.1 底部 3.0	錆釉、外面下方以下の露胎10YR7/3(ニブイ黄橙)	
370	IIIEL 4 II	連房皿	—	—	(8.0)	貼付け高台	密　径0.2mm以下のチャート、長石、石英含む	10YR8/3(浅黄橙) 5Y8/3(淡黄)	底部 2.8	内面灰釉、中央部に摺絵、外面露胎	
371	IIIEL 4 II	連房皿	—	—	(5.2)	貼付け高台	密	5Y7/2(灰白) 5Y7/3(浅黄)	底部 9.0	灰釉、内面に摺絵	
372	IIIEN 6 II	連房皿	(7.0)	—	—	体部外面下方～底部回転ヘラ削り	密　径0.1mm以下の長石含む	10Y6/1(灰) 10Y6/1(灰)	口縁 2.5	灰釉、外面下方以下露胎2.5Y6/1(黄灰)	
373	IIIEL 4 II	連房輪禿皿	(11.6)	2.7	(7.0)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径1mm以下のチャート、長石含む	5Y6/2(灰オリーブ) 5Y6/2(灰オリーブ)	口縁 2.1 底部 1.6	灰釉	
374	IIIEK 8 II	連房輪禿皿	—	—	(7.8)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.5mm以下のチャート含む	10Y7/2(灰白) 10Y7/2(灰白)	底部 8.8	灰釉、外面下方以下露胎5Y7/1(灰白)	
375	IIIEM 6 II	連房輪禿皿	—	—	(6.1)	削り出し高台、高台部外側に沈線1条	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	2.5Y7/2(灰黄) 2.5Y7/2(灰黄)	底部 6.0	灰釉、高台部露胎5Y8/2(灰白)、体部内面に鉄絵、底部内面に摺絵	
376	IIIEM 6 II	連房輪禿皿	—	—	(5.3)	貼付け高台	密　径0.5mm以下のチャート含む	10Y7/1(灰白) 10Y7/1(灰白)	底部 3.0	灰釉、高台端部及び内面見込み露胎5Y8/2(灰白)、底部内面摺絵	
377	IIIEL 4 II	連房折縁皿	(12.0)	2.4	(7.5)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	7.5Y7/1(灰白) 5Y6/4(オリーブ黄)	口縁 0.3 底部 3.5	口縁部内面灰釉、外面露胎10Y7/1(灰白)	
378	IIIEL 7 II	連房折縁皿	(13.8)	2.4	(8.4)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密	5Y7/1(灰白) 5Y7/1(灰白)	口縁 1.8 底部 1.5	口縁部内外面灰釉5Y6/3(オリーブ黄)、底部内面鉄絵	輪禿皿
379	IIIEM 7 II	連房折縁皿	(11.2)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	2.5Y7/1(灰白) 5Y6/2(灰オリーブ)	口縁 2.5	内面灰釉	
380	IIIEM 4 II	連房折縁皿	(16.3)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	密　径0.2mm以下の長石含む	7.5Y7/2(灰白) 7.5Y7/2(灰白)	口縁 2.0	灰釉、外面下方以下露胎5Y7/1(灰白)	
381	IIIEL 7 II	連房菊皿	(13.9)	3.3	(7.0)	口縁端部花弁状ヘラ切り込み、体部内面菊花文型押し、体部外面丸ノミ削ぎ、貼付け高台	やや粗	10YR7/3(ニブイ黄橙) 10YR8/3(浅黄橙)	口縁 3.5 底部 4.3	灰釉、高台部露胎10YR7/2(ニブイ黄橙)、銅緑釉流し掛け5Y5/4(オリーブ)	
382	IIIEN 8 II	連房菊皿	—	—	6.2	体部内面菊花文型押し、体部外面に削ぎ、貼付け高台、内面ピン痕	やや粗　径4mm以下のチャート含む	2.5Y7/6(明黄褐) 2.5Y7/6(明黄褐)	底部 12.0	灰釉、外面下方以下露胎2.5Y8/2(灰白)	
383	IIIEL 5 II	連房菊皿	—	—	5.6	体部内面菊花文型押し、体部外面丸ノミ削ぎ、貼付け高台、内面見込みピン痕	密　径1mm以下のチャート、長石含む	10YR8/2(灰白) 5Y6/3(オリーブ黄)	底部 7.1	灰釉、外面露胎、底部外面に墨書	
384	IIIEM 7 II	連房打型皿	—	—	(8.5)	内面菊花文型押し、削り出し高台	やや粗　径0.2mm以下のチャート含む	5Y6/2(灰オリーブ) 5Y6/2(灰オリーブ)	底部 2.0	灰釉、外面下方以下露胎5Y7/1(灰白)、一部降灰	
385	IIIEK 6 II	連房灯明皿	(7.0)	—	—		密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	5Y7/1(灰白) 5Y7/1(灰白)	口縁 2.0	灰釉、外面下方以下露胎2.5Y7/1(灰白)	
386	IIIEL 3 II	連房鉢	—	—	(10.0)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台、内面見込みコテナデ	密　径1mm以下の長石含む	5Y5/4(オリーブ) 5Y6/3(オリーブ黄)	底部 1.8	灰釉、高台部露胎2.5Y7/1(灰白)	
387	IIIEM 7 II	連房黄瀬戸鉢	—	—	—	内面口縁付近に4条一組の櫛目文	密　径1mm以下の長石含む	2.5Y7/3(浅黄) 2.5Y7/3(浅黄)	—	灰釉	

第26表　土器類観察表(15)

挿図番号	地区層位	遺物名器種	法量(cm) 口径	器高	底径高台径	成形・調整	胎土	色調(外面・内面)	残存率(X/12)	その他(釉薬など)	産地・時期
第32図388	III区O 6 II	連房鉢	—	—	—		密 径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	—	口縁部内外面灰釉 5Y7/3(浅黄)	
389	III区L 3 II	連房香炉?	(4.9)	—	—	内面コテナデ	密 径0.5mm以下の長石、石英含む	2.5GY7/1(明オリーブ灰)・2.5GY7/1(明オリーブ灰)	口縁 2.0	灰釉、内面口縁部以下露胎2.5Y7/1(灰白)	
390	III区M 8 II	連房壺	(9.0)	—	—		密 径0.1mm以下の長石含む	7.5YR4/4(褐) 7.5YR4/4(褐)	口縁 4.2	鉄釉	
第33図391	III区M 8 II	連房合子身	(5.6)	3.0	(3.5)	口縁端部回転ヘラ削り、削り出し高台(内削ぎ)	密 径0.5mm以下の石英含む	2.5GY7/1(明オリーブ灰)・2.5GY7/1(明オリーブ灰)	口縁 5.0 底部 4.9	灰釉、底部内面及び高台部露胎2.5Y7/1(灰白)	
392	III区L 3 II	連房蓋	(6.5)	(2.6)	—	天井部外面回転ヘラ削り、内面コテナデ	密 径1mm以下のチャート含む	7.5YR4/6(褐) 5Y7/1(灰白)	口縁 1.5 天井部7.9	錆釉、内面露胎、最大外径9.2cm	
393	III区M 6 II	連房鐙部変形向付	—	—	—	足付き	密 径0.2mm以下の長石含む	(緑釉) (緑釉)	—		
394	III区M 5 II	連房瓶	—	—	—	頸部内面コテナデ	密 径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR2/3(極暗褐) 7.5YR3/4(暗褐/黒)	—	鉄釉、内面一部露胎 10YR8/2(灰白)	
395	III区L 4 II	連房餐碟	—	—	—	体部外面下方～底部ヘラ削り調整	密 径0.1mm以下の砂粒含む	2.5GY7/1(明オリーブ灰)・2.5GY7/1(明オリーブ灰)	—	灰釉、体部外面に鉄絵	
396	III区M 6 II	連房染付水滴	—	—	—		密	10GY8/1(明緑灰) N8/(灰白)	—	内面及び底部露胎	
397	III区M 8 II	連房擂鉢	—	—	—	口縁部内外面に沈線各1条	やや粗 径3mm以下のチャート礫、径0.1mm以下のチャート、長石含む	5YR6/6(橙) 5YR4/3(ニブイ赤褐)	—	鉄釉	
398	III区M 7 II	連房擂鉢	—	—	—		密 径3mm以下の長石礫、径0.1mm以下のチャート、長石含む	10YR3/1(黒褐) 10YR3/1(黒褐)	—	鉄釉	
399	III区M 6 III	土師器皿	(8.0)	1.9	—	体部外面指圧	密 径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR8/3(浅黄橙) 7.5YR8/3(浅黄橙)	口縁 5.3	体部内面炭化物付着	
400	III区L 3 III	土師器皿	7.5	1.8	—	体部外面指圧、口縁部～体部内面横ナデ	密 径0.2mm以下のチャート含む	10YR8/4(浅黄橙) 10YR8/3(浅黄橙)	口縁 6.3		
401	III区K 6 III	土師器皿	(6.5)	2.2	—	体部外面指圧、体部内面横ナデ	密	7.5YR5/3(ニブイ褐) 7.5YR4/3(褐)	口縁 3.0	口縁部炭化物及び油分付着	
402	III区M 4 III	土師器皿	(8.2)	1.6	—	体部外面指圧、体部内面横ナデ	密 径0.1mm以下の砂粒含む	10YR8/3(浅黄橙) 10YR8/3(浅黄橙)	口縁 3.9		
403	III区K 9 III	須恵器盤	—	—	(11.8)	底部外面回転ヘラ削り、高台貼付け後ナデ調整	密 径1mm以下の石英、径0.2mm以下の長石、チャート含む	7.5Y6/1(褐灰) 7.5Y6/1(褐灰)	底部 1.5		
404	III区L 4 III	須恵器坏身	—	3.1	—	底部外面回転ヘラ削り後ナデ調整	密 径1mm以下の長石、径0.5mm以下のチャート含む	2.5Y6/1(黄灰) 2.5Y6/1(黄灰)	—		
405	III区L 7 III	須恵器有台坏身	—	—	(10.4)	底部外面回転ヘラ削り、高台貼付け後ナデ調整	密 径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	—	内面炭化物付着	
406	III区L 3 III	須恵器長頸瓶頸部	—	—	—		密 径1mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/2(灰黄) 7.5Y6/1(灰)	頸部 6.0		
407	III区L 9 III	山茶碗B	(13.0)	3.4	(4.2)	高台端部輕毀痕	密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	10YR7/2(ニブイ黄橙) 10YR7/2(ニブイ黄橙)	口縁 1.7 底部 1.0		第VI－VII期
408	III区L 4 III	山茶碗B	—	—	(6.0)	底部外面板目、高台端部輕毀痕、底部内面コテナデ後静止指ナデ	密 径1mm以下の長石、チャートわずか含む	10YR8/2(灰白) 10YR8/2(灰白)	底部 10.4	焼成不良	第V期
409	III区L 7 III	小皿B	(7.6)	1.4	(4.0)	底部外面植物圧痕	密 径0.2mm以下の長石、チャート含む	2.5Y7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	口縁 2.0 底部 4.5	底部外面墨書	第V～VII期
410	III区M 5 III	小皿B	(9.0)	1.1	(5.4)	底部外面板目、底部内面静止指ナデ	密 径0.5mm以下の長石、チャート含む	10YR7/1(灰白) 10YR7/1(灰白)	口縁 1.8 底部 2.9		第VIII－X期
411	III区M IV	小皿B	(8.4)	1.5	(5.0)	底部内面コテナデ後静止指ナデ	密 径0.2mm以下の長石含む	5Y7/1(灰白) 5Y7/1(灰白)	口縁 2.0 底部 3.0		第V～VII期
412	III区K 5 III	古瀬戸擂鉢	—	—	—		やや粗 径2mm以下のチャート、長石含む	10YR4/1(褐灰) 5YR3/3(暗赤褐)	—	鉄釉	
413	III区M IV	中国磁器青磁盤?	—	—	—		密 径0.1mm以下の砂粒含む	7.5GY6/1(緑灰) 5GY7/1(明オリーブ灰)	—	盤 or 鉢の口縁部	
414	III区M 5 III	伊万里白磁坏	—	—	(3.0)	貼付け高台	密 径0.1mm以下の砂粒含む	7.5GY8/1(明緑灰) 7.5GY8/1(明緑灰)	底部 4.5		

第27表　土器類観察表(16)

挿図番号	地区層位	遺物名器種	法量(cm) 口径	器高	底径高台径	成形・調整	胎土	色調(外面・内面)	残存率(X/12)	その他(釉薬など)	産地・時期
第33図415	Ⅲ区M Ⅳ	伊万里染付碗	—	—	(2.0)	貼付け高台	密　径0.05mm以下の微砂粒含む	7.5GY8/1(明緑灰) 7.5GY8/1(明緑灰)	底部　4.0	高台畳付部露胎N8/(灰白)	
416	Ⅲ区M Ⅳ	大窯丸皿	(10.8)	1.9	(6.4)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密	2.5Y8/4(淡黄) 2.5Y8/4(淡黄)	口縁　2.5 底部　3.0	灰釉	
417	Ⅲ区L 5 Ⅲ	大窯丸皿	13.1	3.3	6.8	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台、内面見込みコテナデ	密	5Y5/6(オリーブ) 5Y5/6(オリーブ)	口縁　2.7 底部 11.2	灰釉、高台部拭いとり2.5Y8/2(灰白)	
418	Ⅲ区N 7 Ⅲ	大窯重圏皿	(10.0)	2.5	4.6	体部内面コテナデ、同心円状の小突起3本、底部外面回転糸切り	やや粗　径0.2mm以下のチャート、長石、石英含む	7.5YR4/2(灰褐) 10YR4/1(褐灰)	口縁　1.7 底部 12.0	無釉	
419	Ⅲ区O 4 Ⅲ	大窯重圏皿	—	—	(5.0)	体部内面コテナデ、同心円状の小突起4本、底部外面回転糸切り	密　径3mm以下の礫、径0.2mm以下のチャート、長石、石英含む	5YR4/6(赤褐) 2.5YR3/3(暗赤褐)	底部 12.0	鉄釉	
420	Ⅲ区O 5 Ⅲ	大窯重圏皿	(9.6)	—	—	体部内面コテナデ、同心円状の小突起2本	密　径0.1mm以下の長石含む	5Y4/1(灰) 5Y4/1(灰)	口縁　3.0	無釉、焼き締め	
421	Ⅲ区M 7 Ⅲ	大窯重圏皿	(9.8)	2.2	(4.2)	体部内面コテナデ、同心円状の小突起4本	密　径0.5mm以下の白色粒含む	5Y5/1(灰) 5Y6/1(灰)	口縁　2.3 底部　2.2	無釉、焼き締め	
422	Ⅲ区M 4 Ⅲ	大窯折縁皿	(12.0)	2.4	(6.7)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台、口縁部内面コテナデ	密	5Y7/4(浅黄) 5Y7/4(浅黄)	口縁　1.3 底部　1.2	灰釉、底部露胎10YR8/2(灰白)	
423	Ⅲ区L 6 Ⅲ	大窯擂鉢	—	—	—		やや粗　径2mm以下の長石含む	5YR3/1(黒褐) 5YR3/2(暗赤褐)	—	錆釉	
424	Ⅲ区L 6 Ⅲ	大窯片口擂鉢	—	—	—	片口部指圧調整、内面擂目	粗　径0.1mm以下のチャート、長石含む	7.5YR5/2(灰褐) 7.5YR5/1(褐灰)	—	SK05	
425	Ⅲ区L 5 Ⅲ	連房丸碗	(7.0)	—	—	体部外面下方回転ヘラ削り	密　径0.1mm以下のチャート含む	5Y7/2(灰白) 5Y7/2(灰白)	口縁　3.2	灰釉、SK01	
426	Ⅲ区K 5 Ⅲ	連房志野織部皿	(11.5)	2.8	(6.0)	体部外面下方回転ヘラ削り、削り出し高台	密　径0.1mm以下の長石含む	5Y7/1(灰白) 2.5Y7/1(灰白)	口縁　3.1 底部　7.1	灰釉に長石釉流し掛け、外面下方以下露胎10YR7/2(ニブイ黄橙)、底部内面に鉄絵	
427	Ⅲ区L 7 Ⅲ	連房染付折縁皿	(12.3)	2.3	(7.0)	削り出し高台	密	5G7/1(明緑灰) 5G7/1(明緑灰)	口縁　1.1 底部　1.1	高台畳付部露胎10YR8/1(灰白)	
428	Ⅲ区L 4 Ⅲ	連房菊皿	(12.0)	3.1	(5.3)	口縁端部花弁状ヘラ切り込み、体部内面菊花文型押し、体部外面角ノミ削ぎ、貼付け高台	密　径0.1mm以下のチャート、長石含む	5Y4/4(暗オリーブ) 2.5Y5/6(黄褐)	口縁　0.3 底部　2.8	灰釉、口縁部及び外面銅緑釉流し掛け、外面下方以下露胎10YR5/2(灰黄褐)	
429	Ⅲ区L 9 Ⅲ	連房徳利	(2.8)	—	—		密　径0.1mm以下の砂粒含む	10YR5/6(黄褐) 7.5Y6/3(オリーブ黄)	口縁　6.1	鉄釉	

第3節　土　　製　　品

1．器種の分類と概要

土製品は大きく陶製品、土製玩具類、陶製加工品、土錘に分けられる。

「陶製品」では戸車が出土している。

「土製玩具類」は種類が多い。人形の顔面、胴部、脚部の他、鳥、芥子面、賽子が出土している。

土製の鈴と球も出土している。鈴は形態によって2つのタイプに分類し、次の第34図に示した。

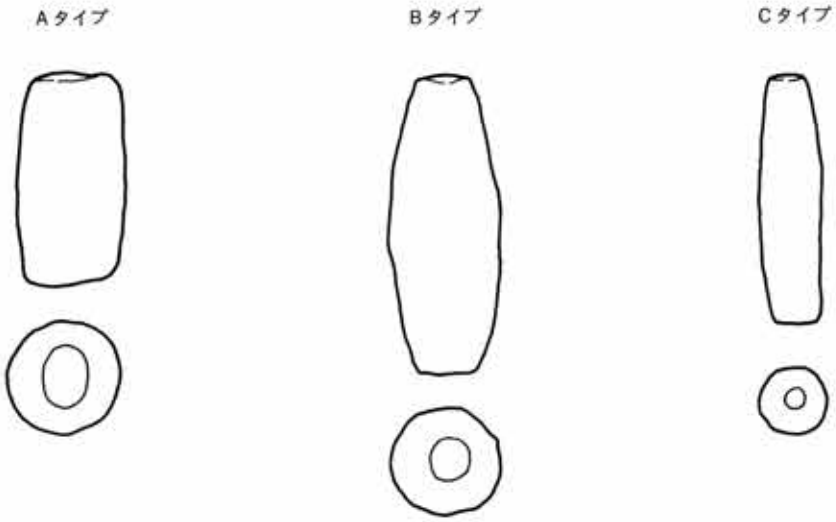
Aタイプ　・・・　紐孔の貫通方向に並行して鈴口が開けられている。

Bタイプ　・・・　紐孔の貫通方向と垂直方向に鈴口が開けられている。

第34図　鈴模式図

「陶製加工品」のうち、加工円盤は形態・施釉から主に大窯、連房期の碗皿類の底部を転用しているものと考えられる。面子は形態・施釉から主に連房期の碗皿類の体部や口縁部を転用しているものと考えられる。

「土錘」は出土した137点を形態から3つのタイプに分類し、次の第35図に示した。ここでは前述の報告書の分類法でのⅠ類をAタイプ、Ⅱ類をBタイプ、Ⅲ類をCタイプと言い換える。



第35図　土錘模式図

Cタイプに相当するものが最も多く69%、ついでBタイプ23%、Aタイプ8%となった。Aタイプは外径が大きく直線的なもの（602など）と、外径は小さくて細長いもの（479など）の他に、直線中央部に最大径をもち両端を直線的に細くしたもの（559）がある。526と584は最大径が3cmを越えている。焼成も悪く古い時期の型と思われる。Aタイプ全体の最大径の平均は2.2cmである。Bタイプは外径がやや大きめで、ゆるやかなカーブを描きながらの両端で収束する。全長が5cmを超える大型のもの（480など）と、4cm前後の中型のもの（492など）と、3cmほどの小型のもの（484など）に分けられる。最大径の平均は1.6cmになる。Cタイプはその大半が上端から下端まで同じ外径で細長い筒状のものである（512、589など）。その他はわずかに曲線を描くもので、Bタイプに見られるような膨らみはない。最大径の平均は1.3cmで1.5cmを越えるものはあまり見られない。全体に良く焼きしまっており、一部胎土が須恵器質のものも含まれる。

2．各遺構面の遺物

a、I・II区第1遺構面

＜陶製品＞

戸車（430）

戸車の破片である。ドーナッツ状の側面は回転ヘラ削り調整が行われ、内径面にも灰釉が施されている。

＜土製玩具類＞

人形・玩具（431、434、435、436）

431の人形は七福神のひとつである「布袋」の胴部である。特徴となる太鼓腹や背中の大きな袋がよくできている。434はミニチュアの鳥である。初列風切り羽を下方におろし地鳴きをしている姿に見せてある。435は芥子面である。表には七福神のひとつである「大黒」が表現されている。436は賽子である。硬質で摩耗も著しい。一、三、五、六の面が確認できる。

鈴（438、439、440）

438はBタイプの小型の鈴である。紐は円錐形になるように端部を少し尖らせるようにしてある。439はやや硬質のBタイプの鈴で、便宜的にI区から出土した球を組み合わせて報告した。紐は三角形に捻りあげ、扁平に指圧し窪ませた部分に紐孔が開けられている。440はBタイプの鈴である。紐はたたみ込まれた後、扁平に指圧成形され、紐孔が2つ開けられている。

＜陶製加工品＞

加工円盤（444～451）

445は貼り付け高台で、高台端部が丸みを帯びた皿類の転用である。448は連房の碗で底部外面に化粧掛けが見られるものを転用している。451は底部内面中央が螺旋状のナデにより深く沈んでいる。

面子（460～464）

460は染付の碗類の体部で、高台付近の返しの部分までを含めて転用してつくられている。462は灰釉が流れてたまり、濃いオリーブ色に変化していく部分を面子にしている。463、464は花草文の肥前系磁器を転用している。

b、Ⅰ・Ⅱ区第2遺構面

＜陶製加工品＞

加工円盤（453、454）

453は高台の畳付部を外側も内側も削いだ底部である。外面には化粧掛けが施されている。454は内外面ともに端部が激しく摩滅している。

c、Ⅰ・Ⅱ区第3遺構面

＜陶製加工品＞

加工円盤（455）

455は高台のつくりが粗雑で削り出された輪の高さがほとんど見られない。

d、Ⅲ区第Ⅱ層

＜土製玩具類＞

人形（432、433、434）

432は人形の左足首である。指や土踏まずが確認できるため素足と思われる。433は人形の胴部である。座位で羽織袴姿のように見える。両手を膝にそろえ、刀等の装身具は身につけていない。434は人形の頭部である。胴部に差し込むための柄が付いている。表情や烏帽子から成年男子の顔と思われる。

鈴（441、442）

441はAタイプの鈴である。Ⅰ区から出土した球を組み合わせて報告した。紐は胴部からなだらかに捻りあげられ端部を尖らせるようにしてある。442はBタイプの鈴である。紐は方形を呈し、扁平に指圧成形されている。胴は、器肉が厚く横広形である。

＜陶製加工品＞

加工円盤（452、456～459）

452は貼り付け高台をもつ底部である。456は体部がやや多めに残る。外面には化粧掛けが見られる。457は底部中央が沈む大型の碗の転用である。458は鉄釉と灰釉の塗り分け碗の転用である。底部内面中央部に指圧痕が見られる。459は小型の皿とも考えられる。

面子（465～469）

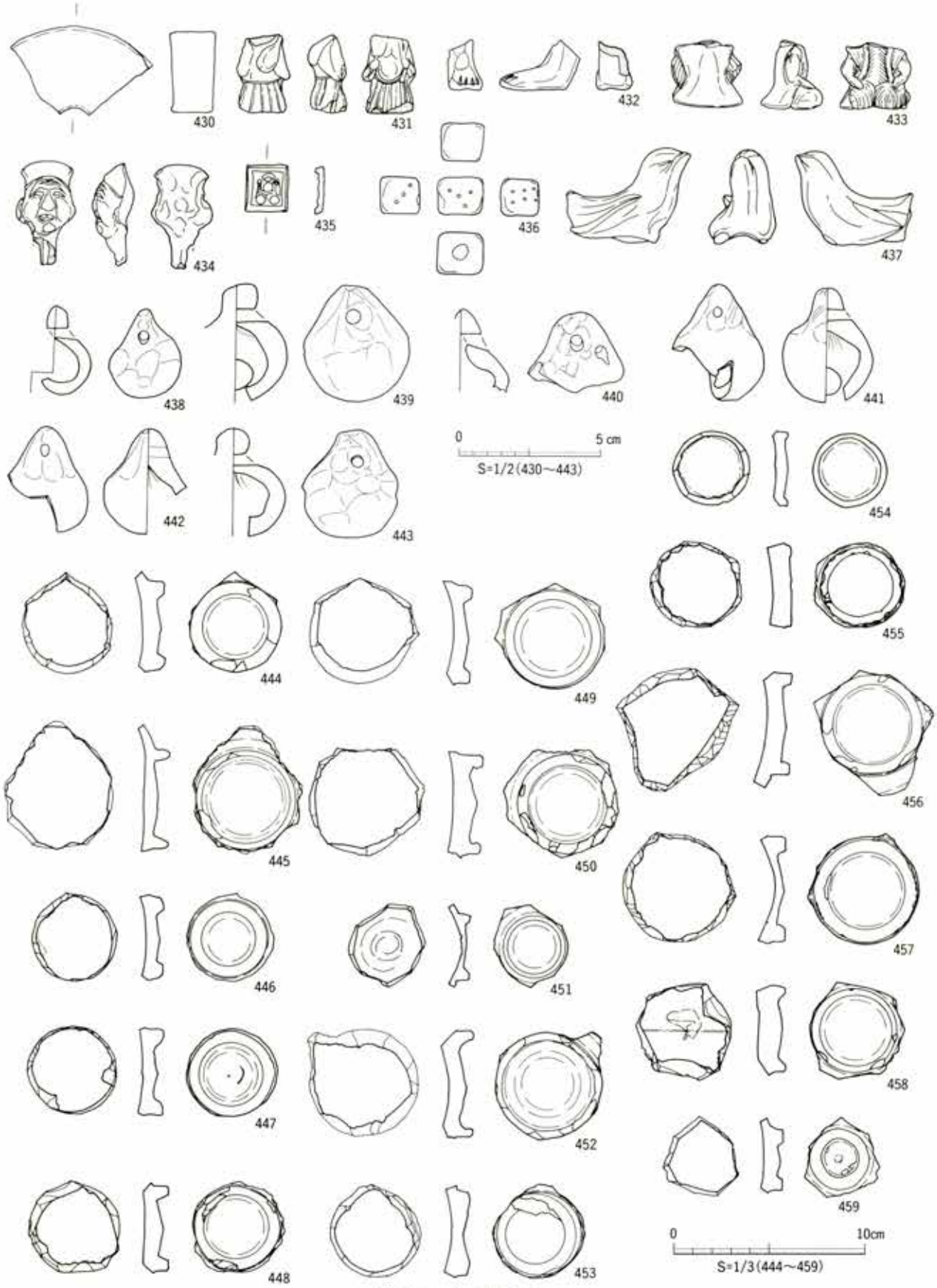
466は灰釉の流し掛けが途切れる部分を転用している。内面側は灰釉である。469は体部の下方部分を転用している。内面側には草文が見られる。

e、Ⅲ区第1遺構面

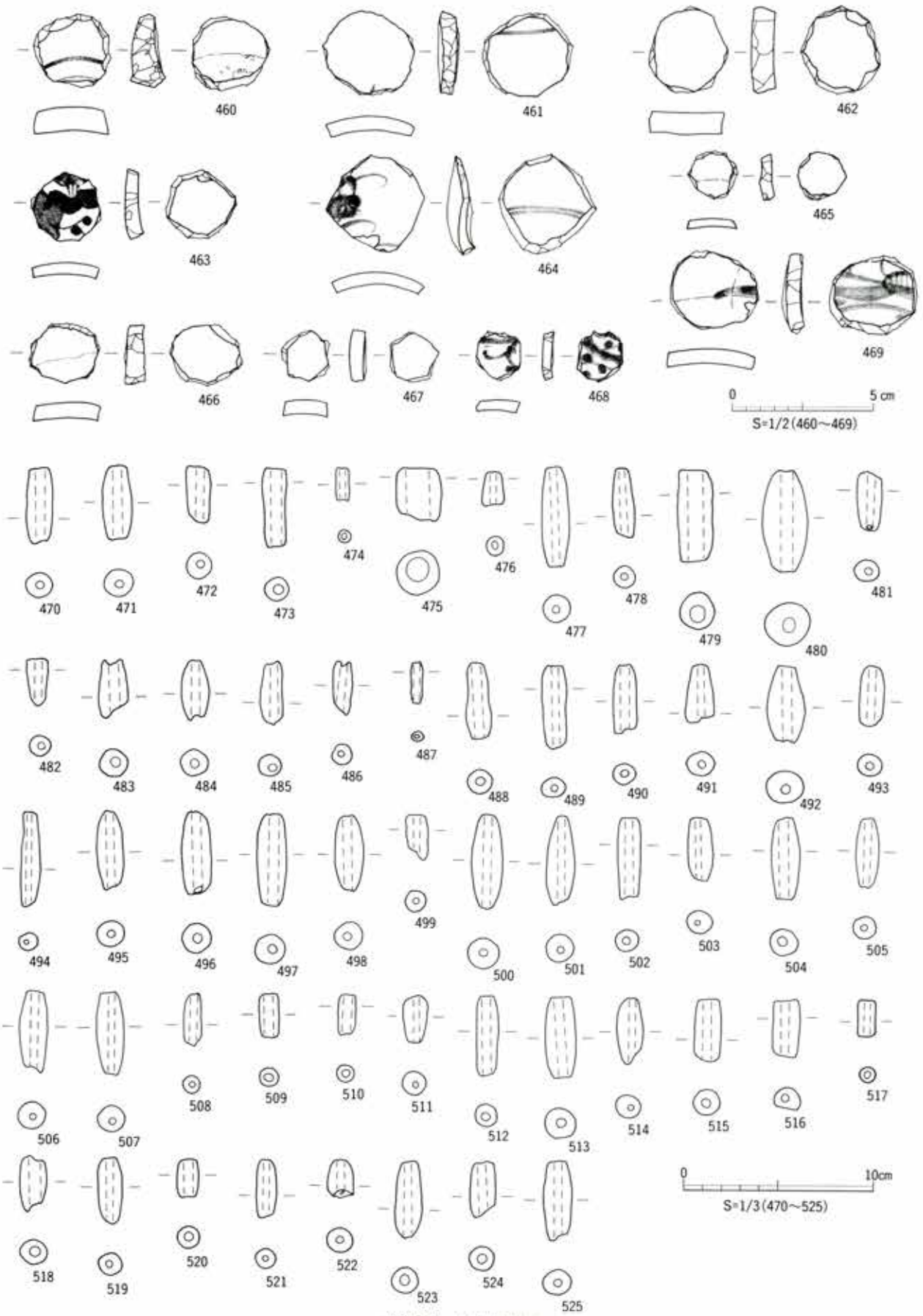
＜土製玩具類＞

鈴（443）

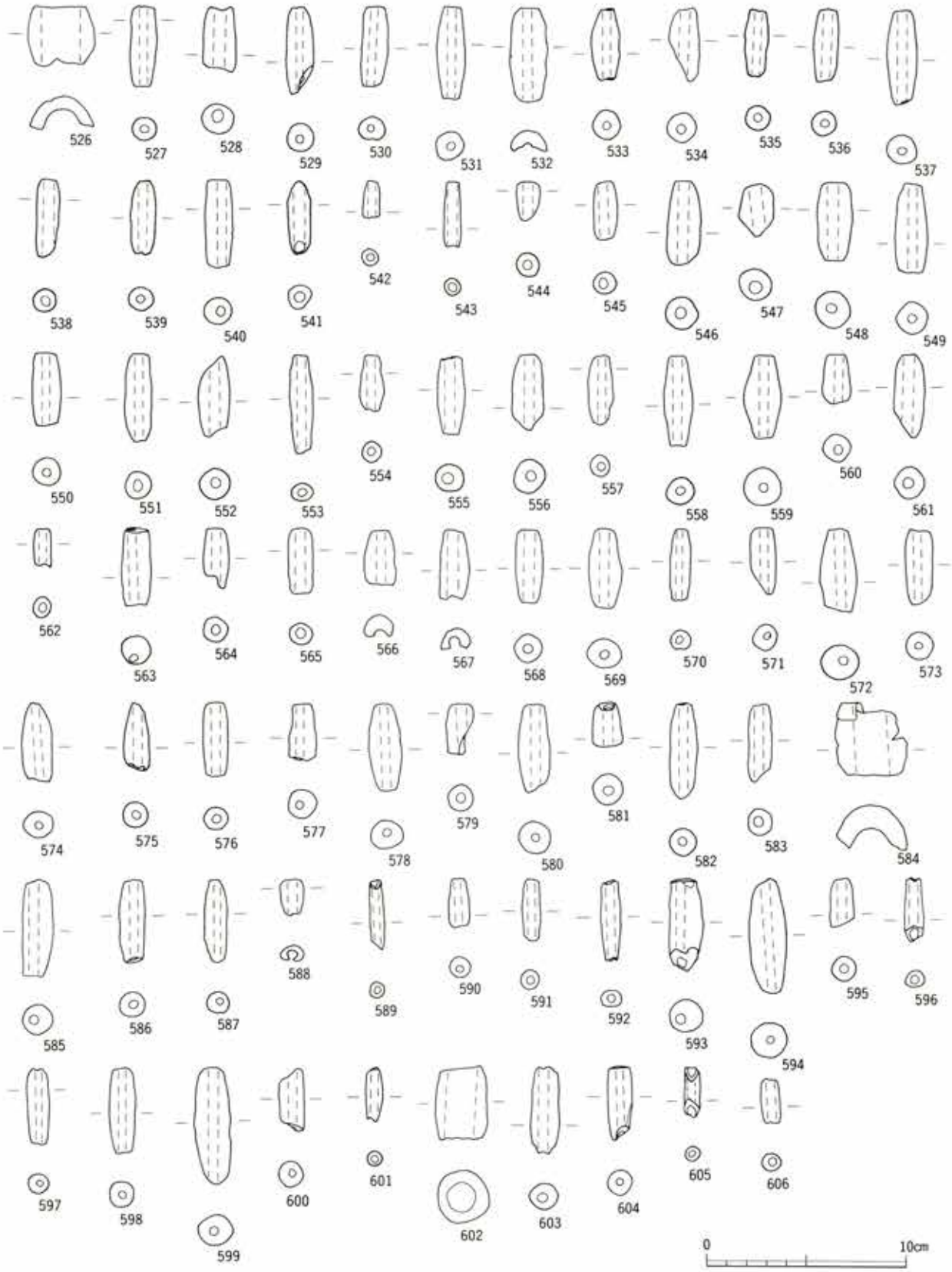
Aタイプの鈴である。紐は円錐形になるように端部を少し尖らせてある。


430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
0
5 cm
S=1/2(430～443)
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
0
10cm
S=1/3(444～459)

第36図　出土遺物(12)


460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
0
5 cm
S=1/2(460～469)
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
0
10cm
S=1/3(470～525)

第37図　出土遺物(13)


526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
0
10cm

第38図　出土遺物(14)

第28表　土製品類観察表

挿図番号	地区・層位	材質	種別	法量（cm） 全高	全幅	奥行	胎土	色調	備考
第36図 430	Ⅲ区M 5・Ⅱ	陶器 連房	戸車	1.6	外径8.0	内径2.2	密　径1.5mm以下の長石含む	2.5Y8/2(灰白)	回転面に灰釉5Y8/2(灰白)
431	Ⅱ区F 22・Ⅱ	土師器	人形	2.6	1.9	1.4	緻密　軟質	10YR8/3(浅黄橙)	胴部(立位)
432	Ⅲ区L 6・Ⅱ	土師器	人形	1.8	1.3	2.9	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	2.5YR7/2(灰黄)	左足(足首)
433	Ⅲ区L 7・Ⅱ	土師器	人形	2.4	2.5	2.2	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	2.5Y7/3(浅黄)	胴部(座位)
434	Ⅲ区M 6・Ⅱ	土師器	人形	3.7	2.1	1.5	密　径0.5mm以下のチャート含む	10YR5/1(褐灰)～10YR6/2(灰黄褐)	頭部
435	Ⅰ区F 25・Ⅱ	土師器	芥子面	0.4	1.5	1.7	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	2.5Y8/1(灰白)	
436	Ⅱ区G 23・Ⅱ	土師器	賽子	1.4	1.7	1.4	やや粗　径0.2mm以下の雲母、チャート含む	10YR5/2(灰黄褐)	
437	Ⅰ区G 26・Ⅱ	土師器	鳥	3.4	2.4	4.2	密　径1mm以下のチャート、長石含む	10YR6/2(灰黄褐)	
438	Ⅰ区C 26・Ⅱ	土師器	鈴	3.2	1.8	2.6	密　径0.2mm以下のチャート含む	10YR8/2(灰白)	Bタイプ
439	Ⅰ区E 28・Ⅱ	土師器	鈴	4.2	3.0	3.8	密　径0.5mm以下のチャート含む	10YR8/3(浅黄橙)	Bタイプ、最大径1.6cmの球と合成実測(E 25Ⅱ2481)
440	Ⅱ区J 20・Ⅱ	土師器	鈴	2.9	2.0	3.4	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	2.5Y7/4(淡赤橙)～10YR7/3(ニブイ黄橙)	Bタイプ
441	Ⅲ区K 6・Ⅱ	土師器	鈴	4.0	3.4	3.3	密　径0.1mm以下の砂粒含む	7.5YR8/3(浅黄橙)	Aタイプ、最大径1.0cmの球と合成実測(F 26Ⅲ4852)
442	Ⅲ区L 7・Ⅲ	土師器	鈴	3.7	3.1	2.9	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	7.5YR8/3(浅黄橙)	Bタイプ
443	Ⅲ区M・Ⅲ	土師器	鈴	3.9	2.5	3.4	密　径0.5mm以下のチャート含む	7.5YR8/4(浅黄橙)～10YR7/4(ニブイ黄橙)	Bタイプ

第29表　陶製加工品観察表

挿図番号	地区層位	種別	法量 長軸(cm)	最大厚(cm)	質量(g)	胎土	色調（表面・裏面）	転用部位	備考
第36図 444	Ⅰ区D 28 Ⅱ	加工円盤	5.3	1.6	37.6	密　径0.2mm以下の石英、長石、チャート含む	10YR4/3(ニブイ黄褐)・10YR8/3(浅黄橙)	大窯錆釉碗／底部	
445	Ⅰ区E 25 Ⅱ	加工円盤	6.8	1.6	42.4	密　径0.2mm以下のチャート含む	5Y7/3(浅黄)・10YR8/2(灰白)	連房灰釉・錆釉皿／底部	
446	Ⅱ区G 20 Ⅱ	加工円盤	4.6	1.3	27.0	密　径0.2mm以下のチャート含む	10YR1.7/1(黒)・10YR8/2(灰白)	大窯鉄釉碗／底部	
447	Ⅱ区H 20 Ⅱ	加工円盤	4.7	1.3	38.2	密　径1mm以下の長石、径0.2mm以下のチャート含む	7.5YR3/4(暗褐)・10YR6/1(褐灰)	連房錆釉碗／底部	
448	Ⅱ区I 20 Ⅱ	加工円盤	5.0	1.4	39.1	密　径1.5mm以下のチャート含む	2.5Y5/3(黄褐)・5Y5/4(オリーブ)	連房錆釉・灰釉碗／底部	
449	Ⅱ区I 20 Ⅱ	加工円盤	5.6	1.1	43.3	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR3/4(暗褐)・10YR8/2(灰白)	大窯錆釉碗／底部	
450	Ⅱ区J 18 Ⅱ	加工円盤	6.0	1.8	61.2	密	7.5YR3/4(暗褐)・10YR7/1(灰白)	連房錆釉碗／底部	
451	Ⅱ区J 19 Ⅱ	加工円盤	4.4	1.2	14.3	密　径0.2mm以下の長石含む	7.5YR2/3(黒)・10YR7/1(灰白)	連房錆釉坏／底部	
452	Ⅲ区L 5 Ⅱ	加工円盤	6.5	1.7	47.5	密　径2mm以下のチャート、長石含む	N1.5/(黒)・10YR8/4(浅黄橙)	大窯鉄釉皿／底部	
453	Ⅱ区F 20 Ⅲ	加工円盤	5.1	1.2	32.6	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	10YR2/1(黒)・7.5YR4/6(褐)	大窯鉄釉碗／底部	
454	Ⅱ区H 23 Ⅲ	加工円盤	4.0	0.8	16.6	密　径0.2mm以下のチャート含む	7.5YR4/2(灰褐)・7.5YR6/1(褐灰)	連房錆釉坏／底部	
455	Ⅱ区G 21 Ⅳ	加工円盤	4.6	1.3	31.2	密　径1mm以下の石英、チャート含む	N1.5/(黒)・5YR5/4(ニブイ赤褐)	連房鉄釉碗／底部	
456	Ⅲ区K 5 Ⅱ	加工円盤	6.9	1.9	57.3	密　径1.5mm以下の長石、径0.5mm以下のチャート含む	7.5YR3/4(暗褐)・2.5YR4/3(ニブイ赤褐)	連房鉄釉碗／底部	
457	Ⅲ区L 6 Ⅱ	加工円盤	5.9	1.4	42.4	密　径2mm以下の石英、チャート含む	7.5YR2/1(黒)・2.5Y7/1(灰白)	連房鉄釉碗／底部	
458	Ⅲ区L 7 Ⅱ	加工円盤	5.3	1.5	41.5	密	10YR2/2(黒)・10YR2/2(黒)	連房塗り分け碗／底部	鉄釉と灰釉
459	Ⅲ区O 4 Ⅱ	加工円盤	4.0	1.2	21.6	密　径1mm以下の長石含む	10YR1.7/1(黒)・2.5Y8/1(灰白)	大窯鉄釉坏／底部	
第37図 460	Ⅰ区D 28 Ⅱ	面子	2.7	1.0	9.8	密　径0.1mm以下の砂粒含む	10Y8/1(灰白)・10Y8/1(灰白)	碗皿類体部／染付	
461	Ⅰ区E 25 Ⅱ	面子	3.0	0.5	7.1	密　径0.1mm以下の砂粒含む	5Y7/1(灰白)・5Y7/1(灰白)	碗皿類体部／灰釉に摺絵	
462	Ⅰ区E 26 Ⅱ	面子	3.1	0.8	9.5	密　径1mm以下のチャート含む	5Y7/3(淡黄)・5Y7/3(淡黄)	碗皿類体部／灰釉	
463	Ⅰ区F 26 Ⅱ	面子	2.5	0.5	4.0	密　径0.1mm以下の砂粒含む	5GY8/1(灰白)・2.5GY8/1(灰白)	碗皿類体部／染付	
464	Ⅰ区F 26 Ⅱ	面子	3.5	0.8	7.7	密　径0.1mm以下の砂粒含む	2.5GY8/1(灰白)・2.5GY8/1(灰白)	碗皿類体部／染付	
465	Ⅲ区N 3 Ⅱ	面子	1.8	0.4	1.6	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	2.5Y6/2(灰黄)・2.5Y6/3(ニブイ黄)	碗皿類体部／灰釉	
466	Ⅲ区L 5 Ⅱ	面子	2.4	0.7	5.0	密　径0.1mm以下の砂粒含む	10YR3/3(暗褐)・2.5Y4/4(オリーブ褐)	碗皿類体部／灰釉	
467	Ⅲ区L 7 Ⅱ	面子	1.9	0.5	2.2	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	7.5YR2/1(黒)・7.5YR2/1(黒)	碗皿類体部／鉄釉	
468	Ⅲ区L 4 Ⅱ	面子	1.8	0.4	1.4	密　径0.1mm以下の砂粒含む	7.5GY8/1(明緑灰)・7.5GY8/1(明緑灰)	碗皿類体部／染付	
469	Ⅲ区M 7 Ⅱ	面子	3.2	0.7	7.4	密　径0.1mm以下の砂粒含む	10YR8/3(灰白)・10YR8/3(灰白)	碗皿類体部／灰釉に摺絵	

第30表　土錘観察表(1)

挿図番号	地区 層位	法量 全長cm	法量 最大径cm	法量 孔径cm	法量 質量g	胎土	色調	種別	備考
第37図 470	I区E25 II	4.2	1.5	0.5	9.9	密	7.5YR4/3(褐)	Cタイプ	表面に鉄釉付着，硬質
471	I区E25 II	4.1	1.6	0.5	7.1	密　径2mm以下のチャート含む	10YR8/3(浅黄橙)	Cタイプ	
472	I区E28 II	(3.1)	1.4	0.5	5.5	密　径0.5mm以下のチャート，長石含む	2.5Y7/2(灰黄)	Cタイプ	
473	I区E27 II	4.2	1.4	0.6	6.1	密　径0.5mm以下のチャート含む	10YR7/4(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
474	I区E27 II	1.8	0.8	0.3	0.8	密　径0.1mm以下の長石含む	2.5YR5/6(明赤褐)	Cタイプ	
475	I区E28 II	2.9	2.3	1.3	12.3	密　径0.5mm以下のチャート含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)～2.5YR6/6(橙)	Aタイプ	外面の一部に朱が混じる
476	I区E27 II	(1.9)	1.0	0.4	1.9	密　径0.1mm以下の長石含む	2.5Y3/1(黒褐)	Bタイプ	
477	I区D29 II	5.3	1.5	0.4	10.4	密　径0.5mm以下のチャート含む	10YR6/2(灰黄褐)～5YR6/3(ニブイ橙)	Cタイプ	
478	I区D29 II	3.8	1.2	0.4	4.2	密　シャーモット含む	10YR8/3(浅黄橙)	Cタイプ	外面の一部に朱が混じる
479	II区F22 II	4.9	1.9	0.8	16.5	密　径0.5mm以下の長石，石英含む	10YR6/3(ニブイ黄橙)	Aタイプ	
480	II区H21 II	5.5	2.5	0.7	24.7	密　径3mm以下のチャート，径0.5mm以下の長石含む	10YR6/2(灰黄褐)～10YR8/2(灰白)	Bタイプ	
481	II区H21 II	3.2	1.4	0.5	4.6	密　径1mm以下のチャート，長石含む	5YR7/6(橙)～10YR7/1(灰白)	Cタイプ	
482	II区I22 II	(2.5)	1.2	0.4	2.3	密　径0.1mm以下の長石含む	7.5YR7/2(明褐灰)	Cタイプ	
483	II区I22 II	(3.1)	1.6	0.6	5.8	密　径0.1mm以下の長石，雲母含む	10YR4/1(褐灰)	Bタイプ	
484	II区H21 II	3.2	1.6	0.5	5.1	密　径0.5mm以下のチャート含む	10YR8/2(灰白)～10R6/4(ニブイ赤橙)	Bタイプ	外面の一部に朱が混じる
485	II区H21 II	3.4	1.3	0.5	3.6	密　径1mm以下のチャート，径0.1mm以下の長石含む	10YR7/2(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
486	II区G18 II	(2.9)	1.1	0.4	2.8	密　径0.5mm以下のチャート含む	10YR7/2(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
487	II区J20 II	2.2	0.7	0.4	0.8	密　径0.2mm以下のチャート含む	N4/(灰)　～10YR8/3(浅黄橙)	Cタイプ	
488	II区G18 II	4.1	1.4	0.5	6.6	密　径2mm以下のチャート含む	2.5Y6/2(灰黄)	Cタイプ	外面の一部に朱が混じる
489	II区I20 II	4.5	1.4	0.4	7.2	密　径0.1mm以下の長石含む	2.5Y6/1(黄灰)	Cタイプ	
490	II区G19 II	(3.7)	1.3	0.5	4.5	密　径0.5mm以下のチャート含む	10YR6/3(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
491	II区H18 II	(3.1)	1.6	0.4	5.1	密　径0.5mm以下のチャート含む	2.5Y7/3(浅黄)	Bタイプ	
492	II区I20 II	4.1	2.0	0.5	15.3	密　径0.5mm以下のチャート含む	2.5Y6/1(黄灰)	Bタイプ	硬質
493	II区I20 II	3.2	1.4	0.5	4.6	密　シャーモット含む	5YR7/3(ニブイ橙)～2.5Y8/2(灰白)	Cタイプ	
494	II区J18 II	5.1	1.1	0.3	4.4	密　径0.5mm以下のチャート，長石含む	7.5YR7/4(ニブイ橙)	Cタイプ	
495	II区I19 II	4.3	1.5	0.5	7.2	密　径1mm以下のチャート含む	10YR7/2(ニブイ黄橙)	Bタイプ	
496	II区I19 II	4.5	1.6	0.5	10.0	密　径1mm以下のチャート，シャーモット含む	10YR8/2(灰白)	Cタイプ	外面の一部に朱が混じる
497	II区J17 II	5.0	1.6	0.6	10.8	密　径1mm以下のチャート含む	2.5Y7/1(灰白)	Bタイプ	
498	II区J19 II	4.1	1.6	0.5	8.3	密　径0.5mm以下のチャート含む	10YR8/3(浅黄橙)	Bタイプ	
499	II区J19 II	(2.4)	1.2	0.4	2.1	密　径0.1mm以下のチャート含む	7.5YR8/2(灰白)	Cタイプ	
500	I区F26 III	5.1	1.8	0.5	11.6	密　シャーモット含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)	Bタイプ	
501	I区E25 III	4.8	1.5	0.4	9.0	密　径0.5mm以下の雲母含む	10YR6/2(灰黄褐)	Bタイプ	外面の一部に朱が混じる
502	I区C29 III	4.4	1.3	0.5	6.6	密　径1mm以下のチャート，長石含む	10YR7/2(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
503	I区C29 III	3.4	1.4	0.3	5.8	密　径0.5mm以下のチャート含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)～2.5YR6/4(ニブイ橙)	Cタイプ	
504	I区C29 III	4.4	1.5	0.6	8.3	密　径0.5mm以下のチャート，長石，石英含む	10YR8/3(浅黄橙)	Bタイプ	

第31表　土錘観察表(2)

挿図番号	地区 層位	法量 全長cm	最大径cm	孔径cm	質量g	胎土	色調	種別	備考
第37図 505	I区C29 III	3.7	1.3	0.4	4.8	密　径0.5mm以下の長石、石英含む	2.5Y8/2(灰白)	Cタイプ	
506	I区C30 III	4.4	1.6	0.4	8.5	密　径0.1mm以下の長石、石英含む	2.5Y5/1(黄灰)	Bタイプ	
507	I区D29 III	4.5	1.5	0.4	8.6	密　径0.5mm以下の長石、雲母含む	10YR7/2(ニブイ黄橙)	Bタイプ	
508	II区F22 III	2.9	1.0	0.4	2.1	密　径0.5mm以下のチャート含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
509	II区E22 III	2.4	1.0	0.5	2.3	密　径1mm以下のチャート含む	5YR7/4(ニブイ橙)	Cタイプ	
510	II区F22 III	2.2	1.0	0.5	1.6	密　径0.5mm以下のチャート含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
511	II区F22 III	(2.6)	1.3	0.4	3.7	密　径0.5mm以下の長石、雲母含む	10YR4/1(褐灰)	Bタイプ	
512	II区H18 III	4.3	1.2	0.5	4.6	密　径1mm以下の長石、シャーモット含む	2.5Y6/2(灰黄)	Cタイプ	
513	II区H24 III	4.4	1.7	0.5	10.2	密　径0.5mm以下のチャート含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)～7.5YR3/1(黒褐)	Cタイプ	
514	II区I20 III	(3.6)	1.4	0.4	4.8	やや粗　径2mm以下のチャート含む	10YR7/2(ニブイ黄橙)	Bタイプ	
515	II区G21 III	3.4	1.5	0.5	6.4	密　径1mm以下のチャート、長石含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
516	II区F19 III	3.1	1.5	0.5	5.8	密　径0.5mm以下の石英含む	10YR4/1(褐灰)	Cタイプ	
517	II区I19 III	2.0	1.0	0.4	1.8	密　径0.5mm以下のチャート、径0.1mm以下の長石含む	10YR6/2(灰黄褐)	Cタイプ	
518	II区I20 III	(3.1)	1.5	0.7	4.4	密　径1mm以下の石英・長石含む	2.5Y6/2(灰黄)～2.5Y3/1(黒褐)	Bタイプ	
519	II区I21 III	3.6	1.4	0.4	5.7	密　径2mm以下のチャート含む	2.5Y7/2(灰黄)	Cタイプ	
520	II区G19 III	2.1	1.2	0.5	2.7	密　径0.5mm以下のチャート含む	2.5Y5/1(黄灰)	Cタイプ	
521	II区G20 III	3.2	1.1	0.4	3.5	密　径1mm以下の石英含む	10YR7/2(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
522	II区I18 III	(2.1)	1.4	0.4	3.5	密　径0.5mm以下のチャート、シャーモット含む	2.5Y8/2(灰白)	Cタイプ	外面の一部に朱が混じる
523	II区H19 III	4.2	1.6	0.5	7.1	密　径1mm以下のチャート含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
524	II区H20 III	(3.1)	1.4	0.5	4.8	密　径1mm以下のチャート、石英含む	10YR5/1(褐灰)	Cタイプ	
525	II区I17 III	4.4	1.6	0.5	9.3	密　径1mm以下の長石含む	2.5Y6/2(灰黄)～2.5Y3/1(黒褐)	Bタイプ	
第38図 526	II区G18 III	(3.1)	(3.4)	(2.0)	11.5	密　径1mm以下のチャート、長石含む	10YR7/2(ニブイ黄橙)	Aタイプ	
527	I区F26 IV	4.2	1.3	0.5	7.6	密　径0.1mm以下の長石含む	2.5Y3/1(黒褐)	Cタイプ	
528	I区E27 IV	3.4	1.7	0.6	7.1	やや粗　径1.5mm以下のチャート、長石、石英含む	10YR6/2(灰黄褐)	Aタイプ	外面の一部に朱が混じる
529	I区C29 IV	(4.4)	1.4	0.4	8.3	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	7.5YR6/1(褐灰)	Cタイプ	
530	I区E28 IV	4.2	1.4	0.4	7.3	密　径0.2mm以下の雲母、石英含む	10YR6/1(褐灰)～2.5Y4/1(黄灰)	Cタイプ	
531	I区E28 IV	4.8	1.5	0.5	9.8	密　径0.1mm以下の長石含む	2.5YR6/2(灰黄)～2.5YR5/1(黄灰)	Bタイプ	
532	I区E28 IV	4.8	1.9	—	8.0	密　径0.5mm以下のチャート、長石、石英含む	10YR5/2(灰黄褐)～10YR4/1(褐灰)	Aタイプ	
533	I区E28 IV	3.8	1.5	0.5	6.5	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	10YR8/3(浅黄橙)	Bタイプ	
534	I区E28 IV	(3.8)	1.5	0.5	6.9	密　径0.1mm以下のチャート、石英、泥岩含む	5YR7/3(ニブイ橙)	Cタイプ	
535	II区G22 IV	3.5	1.3	0.4	4.2	密	10YR7/3(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
第38図 536	II区G19 IV	3.8	1.3	0.5	5.1	密　径1mm以下のチャート含む	2.5Y7/2(黄灰)	Cタイプ	
537	II区G19 IV	4.9	1.6	0.5	10.3	密　径0.5mm以下のチャート含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)	Bタイプ	
538	II区G19 IV	3.9	1.2	0.5	4.0	密　径1mm以下のチャート、長石含む	10YR6/2(灰黄褐)	Cタイプ	
539	II区H19 IV	3.8	1.4	0.5	4.2	密　径0.5mm以下の長石含む	2.5Y7/2(黄灰)	Cタイプ	

第32表　土錘観察表(3)

挿図番号	地区 層位	法量 全長cm	法量 最大径cm	法量 孔径cm	法量 質量g	胎土	色調	種別	備考
第38図 540	II区H19 IV	4.5	1.5	0.5	8.6	密　径0.5mm以下の長石含む	2.5Y5/1(黄灰)～2.5Y3/1(黒褐)	Aタイプ	
541	II区H19 IV	3.7	1.2	0.6	3.6	密　径1mm以下のチャート、長石含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
542	II区F20 IV	(2.0)	1.0	0.5	1.3	密　径0.2mm以下の長石、石英含む	10YR4/1(褐灰)	Cタイプ	
543	II区F21 IV	3.4	0.9	0.5	1.8	密　径0.2mm以下の長石、径0.1mm以下の石英含む	2.5Y7/6(橙)	Cタイプ	
544	II区F23 IV	(2.1)	1.3	0.5	2.1	密　径0.1mm以下のチャート、長石、石英含む	10YR5/1(褐灰)	Cタイプ	
545	II区F22 IV	3.1	1.3	0.5	2.5	密　径1mm以下のチャート、長石、石英含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)～N4/(灰)	Cタイプ	
546	II区F21 IV	4.4	1.7	0.6	11.4	密　径0.5mm以下のチャート、長石、石英含む	10YR7/2(ニブイ黄橙)～10YR5/1(褐灰)	Cタイプ	
547	II区F21 IV	(2.7)	1.8	0.7	5.4	密　径1mm以下のチャート、長石含む	10YR7/2(ニブイ黄橙)	Aタイプ	
548	II区F23 IV	4.1	1.8	0.6	13.2	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	2.5Y7/1(灰白)	Aタイプ	
549	II区G24 IV	4.6	1.7	0.5	12.4	密　径1mm以下のチャート、長石含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)	Bタイプ	
550	II区F19 IV	3.8	1.5	0.4	8.0	密　径0.5mm以下のチャート、長石、石英含む	10YR6/2(灰黄褐)	Cタイプ	
551	II区F19 IV	4.5	1.4	0.5	8.7	やや粗　径1mm以下のチャート、石英含む	10YR7/2(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
552	II区E21 IV	(4.2)	1.6	0.5	8.0	密　径1mm以下のチャート、長石、雲母含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)	Bタイプ	
553	II区E22 IV	5.1	1.1	0.5	5.7	密　径1mm以下のチャート含む	7.5YR7/2(明褐)	Cタイプ	
554	II区F20 IV	(2.9)	1.0	0.5	2.9	密　径1mm以下のチャート、径0.2mm以下の雲母含む	10YR6/2(灰黄褐)	Cタイプ	
555	II区F20 IV	4.1	1.4	0.6	8.6	密　径1mm以下のチャート含む	10YR8/2(灰白)	Cタイプ	
556	II区F20 IV	(3.8)	1.7	0.6	8.9	密　径0.2mm以下のチャート、長石、石英含む	10YR7/2(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
557	II区F20 IV	3.6	1.2	0.4	3.6	密　径0.1mm以下のチャート含む	10YR5/2(灰黄褐)	Cタイプ	
558	II区F23 IV	4.7	1.5	0.5	7.7	密　径1mm以下のチャート、長石、石英含む	10YR7/2(ニブイ黄橙)～10R6/6(赤橙)	Cタイプ	
559	II区G23 IV	4.2	1.9	0.5	12.1	密　径0.5mm以下のチャート、石英含む	7.5Y5/3(ニブイ褐)～7.5YR4/1(褐灰)	Aタイプ	
560	II区G20 IV	(2.6)	1.4	0.4	4.3	密　径0.5mm以下の長石、石英、径1mm以下のチャート含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
561	II区G22 IV	(4.3)	1.6	0.6	10.0	密　径0.5mm以下の長石、石英、径2mm以下のチャート含む	10YR8/3(浅黄橙)	Cタイプ	
562	II区G22 IV	(2.0)	0.9	0.4	1.8	密　径0.5mm以下のチャート、泥岩含む	2.5Y7/2(灰黄)	Cタイプ	
563	II区G19 IV	4.0	1.6	0.5	8.8	密　径0.5mm以下のチャート、石英含む	5YR5/1(褐灰)～2.5YR5/1(赤灰)	Cタイプ	
564	II区G19 IV	(3.1)	1.3	0.5	3.3	密　径0.1mm以下の長石含む	7.5YR7/3(ニブイ橙)～2.5YR6/1(黄灰)	Cタイプ	
565	II区H19 IV	3.4	1.2	0.5	4.6	密　径1mm以下のチャート、長石含む	10YR8/3(浅黄橙)	Cタイプ	
566	II区J20 IV	(2.8)	1.6	0.5	4.8	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	5YR7/2(ニブイ橙)	Bタイプ	
567	II区I20 IV	3.6	(1.6)	0.6	4.7	やや粗　径2mm以下のチャート、長石含む	10YR7/2(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
568	II区I20 IV	3.8	1.4	0.6	6.0	密　径0.1mm以下の石英、泥岩含む	2.5YR7/3(浅黄)	Cタイプ	
569	II区I20 IV	4.1	1.8	0.5	9.5	密　径0.5mm以下のチャート、長石、石英含む	10YR6/2(灰黄褐)	Bタイプ	
570	II区I20 IV	4.8	1.1	0.4	3.8	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	10YR8/3(浅黄橙)	Cタイプ	
571	II区I19 IV	(3.5)	1.4	0.4	4.8	密　径0.1mm以下のチャート、長石含む	2.5YR7/3(浅黄)	Cタイプ	
572	II区I19 IV	4.3	2.0	0.5	12.8	密　径0.2mm以下の砂粒含む	10YR8/3(浅黄橙)～7.5YR7/3(ニブイ橙)	Bタイプ	
573	II区J19 IV	3.9	1.4	0.4	7.7	密　径0.1mm以下のチャート、長石、雲母含む	5YR7/6(橙)～10YR8/3(浅黄橙)	Cタイプ	
574	II区J18 IV	4.0	1.6	0.4	8.4	密　径1mm以下のチャート、径0.5mm以下の長石含む	10YR5/1(褐灰)～10YR6/2(灰黄褐)	Bタイプ	

第33表　土錘観察表(4)

挿図番号	地区 層位	法量 全長cm	法量 最大径cm	法量 孔径cm	法量 質量g	胎土	色調	種別	備考
第38図 575	II区J18 IV	(3.4)	1.3	0.5	4.5	密　径1mm以下のチャート、長石含む	2.5YR7/4(淡赤橙)～5YR8/2(灰白)	Cタイプ	
576	II区J18 IV	3.8	1.3	0.5	6.8	密　径0.2mm以下の砂粒含む	10YR8/3(浅黄橙)	Cタイプ	
577	II区I18 IV	(2.9)	1.5	0.5	5.2	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	7.5YR7/2(明褐灰)	Cタイプ	
578	II区I18 IV	4.4	1.7	0.5	9.0	密　径0.5mm以下の長石、径1mm以下のチャート含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)～7.5YR7/6(橙)	Bタイプ	
579	II区H18 IV	(2.6)	1.4	0.5	3.4	密　径1mm以下のチャート、長石含む	10YR8/3(浅黄橙)	Cタイプ	
580	II区G17 IV	4.4	1.7	0.5	11.3	密　径1mm以下のチャート、長石、石英含む	10YR6/2(灰黄褐)～5YR6/6(橙)	Bタイプ	
581	II区G17 IV	(2.3)	1.6	0.5	4.6	密　径1mm以下の長石、石英含む	10YR8/2(灰白)～7.5YR8/3(浅黄橙)	Cタイプ	
582	II区G17 IV	4.9	1.5	0.5	8.2	密　径0.5mm以下のチャート、長石、石英含む	7.5YR6/3(ニブイ褐)～7.5YR4/1(褐灰)	Cタイプ	
583	II区G18 IV	4.0	1.4	0.5	5.8	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	7.5YR8/3(浅黄橙)～7.5YR6/1(褐灰)	Cタイプ	
584	II区G19 IV	3.8	(3.6)	(1.7)	20.4	密　径0.2mm以下の砂粒含む	10YR8/2(灰白)～N4(灰)	Aタイプ	
585	II区G19 IV	5.0	1.6	0.5	11.7	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	10YR8/3(浅黄橙)	Cタイプ	
586	II区H24 IV	4.3	1.4	0.5	6.7	密　径1mm以下のチャート、長石含む	10YR8/2(灰白)～5YR7/3(ニブイ橙)	Cタイプ	
587	II区H23 IV	4.3	1.2	0.4	5.1	密　径1mm以下のチャート、長石含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
588	II区H23 IV	(1.9)	1.2	0.5	1.0	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	2.5Y6/3(ニブイ黄)	Cタイプ	
589	III区O6 II	(3.6)	0.9	0.3	1.5	密　径0.1mm以下のチャート、長石含む	7.5YR5/1(褐灰)	Cタイプ	
590	III区L5 II	(2.5)	1.1	0.4	2.1	密　径1mm以下のチャート、長石含む	7.5YR8/4(浅黄橙)	Cタイプ	
591	III区L7 II	3.1	1.0	0.4	1.8	密　径0.5mm以下のチャート含む	5YR7/6(橙)～7.5YR8/3(浅黄橙)	Cタイプ	
592	III区L7 II	4.2	1.5	0.4	2.5	密　径0.2mm以下のチャート、長石含む	5YR8/4(淡橙)～10YR8/3(浅黄橙)	Cタイプ	
593	III区M6 II	(4.8)	1.7	0.5	14.5	密　径0.5mm以下のチャート含む	5YR3/4(暗赤褐)	Cタイプ	
594	III区K6 II	5.9	1.9	0.4	15.9	密　径0.1mm以下のチャート、長石含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)	Bタイプ	
595	III区L5 II	(2.4)	1.2	0.5	3.1	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	10YR7/2(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
596	III区N7 II	(3.3)	1.0	0.4	1.9	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	10YR8/3(浅黄橙)	Cタイプ	
597	III区M6 II	3.9	1.0	0.3	2.8	密　径0.1mm以下のチャート含む	2.5Y8/3(淡黄)	Cタイプ	
598	III区L3 II	4.4	1.3	0.4	7.1	密　径0.5mm以下のチャート、石英含む	10R6/4(ニブイ赤橙)	Cタイプ	
599	III区L4 II	6.0	1.9	0.5	17.5	密　径0.1mm以下のチャート含む	2.5Y8/2(灰白)	Bタイプ	全体に鉄釉付着
600	III区M6 II	(3.1)	1.3	0.4	3.4	密　径0.5mm以下の長石、石英含む	2.5Y8/3(淡黄)～2.5Y6/1(黄灰)	Cタイプ	
601	III区N4 II	(2.9)	0.8	0.4	1.2	密　径0.5mm以下のチャート、石英含む	10R6/6(赤橙)～10R5/1(赤灰)	Cタイプ	
602	III区L4 II	3.7	2.7	1.5	21.5	やや粗　径1.5mm以下の長石含む	10R5/4(赤褐)	Aタイプ	
603	III区M6 III	4.5	1.5	0.6	9.1	密　径1mm以下のチャート、長石含む	7.5YR8/4(浅黄橙)～10YR8/2(灰白)	Cタイプ	
604	III区N4 III	(3.7)	1.3	0.4	5.7	密　径0.5mm以下のチャート、長石含む	10YR4/1(褐灰)～7.5YR7/2(ニブイ黄橙)	Cタイプ	
605	III区D4 III	(2.6)	0.8	0.4	1.5	密　径0.2mm以下の石英含む	10YR6/2(灰黄褐)	Cタイプ	
606	III区M6 III	2.3	0.9	0.4	1.5	密　径0.5mm以下のチャート、長石、石英含む	10YR7/3(ニブイ黄橙)	Cタイプ	

(大橋　弘志)

第4節 木　製　品

出土した木製品の総点数は581点である。出土地区の内訳はⅠ区120点、Ⅱ区223点、Ⅲ区238点であり、そのうち杭は454点である。木製品は杭を除いてすべてⅡ層から出土している。杭はⅢ層からの出土である。樹種同定によれば、各製品の年代は中世から近代のものと思われる。なお、本節では多数出土した杭については種々の木製品とは分けて解説し後半にまとめた。

＜木製品＞

製品と認められる127点の出土地区の内訳は、Ⅰ区62点、Ⅱ区54点、Ⅲ区11点であった。そのうち用途の明確なもの13点を選び出し図化した。

櫛（1～5）

1は蒔絵で装飾された挿し櫛である。黒漆の地に金箔を用いた桐の絵が施されている。2は歯の密度の粗い梳き櫛で白木で装飾はない。1、2はⅠ区からの出土であり、この調査区域が水田遺構だけではなかったことが伺える。4、5については歯が残存しない。4は片面に黒漆が見られる。3、5は装飾がなく黒く変色している。4、5はⅢ区の撹乱の見られる場所からの出土であり、他の地点から流れ込みの可能性も考えられる。

円盤状木製品（6、7）

6、7は樹種が水濡れにも強いヒノキであることからもともと蓋類、曲物底板であったと思われる。端部が均等に摩滅していることや中央に孔があるため、車輪として再利用された可能性も考えられる。外径約7㎝、厚さ0.6～0.7㎝という法量から、大きな荷物を支える車簞笥などの実用的なものでなく玩具類の車輪と思われる。他に円形のものがⅠ・Ⅱ区から3点出土しているが、1／2以下の残存率のため器種の特定はできない。

札（8）

板状の製品は多数出土したが、札と確認できるものは1点だけであった。残存率は1／2で、表面には「□□會」の焼印がみられ、発掘時には裏面に墨書で「□□和助」と人名を読みとることができた。上部にはちょうど中央と思われる位置に紐を通す孔が残っているため、荷札の可能性が高い。「和助」という名前は幕末期に多くみられるため、時期は近世幕末以降のものではないかと思われる。樹種はモミ属であり、軟質である。城下町などの都市部で出土している荷札・付札類は一般に堅牢な材質のものを用いる傾向が見られるが、本遺跡の場合、水田地区の農村部であることから入手が容易なモミ属を一般的に使用したのではないかと考えられる。

箸（9～13）

箸と思われるものは9点出土した。そのうち完形に近いもの5点を図示した。残存長や先細りの形態から食事用と思われる。断面はすべて四角形で塗りはなく白木である。11は先端欠損部が炭化して

いる。13はIII区からの出土で、他はI・II区からの出土である。

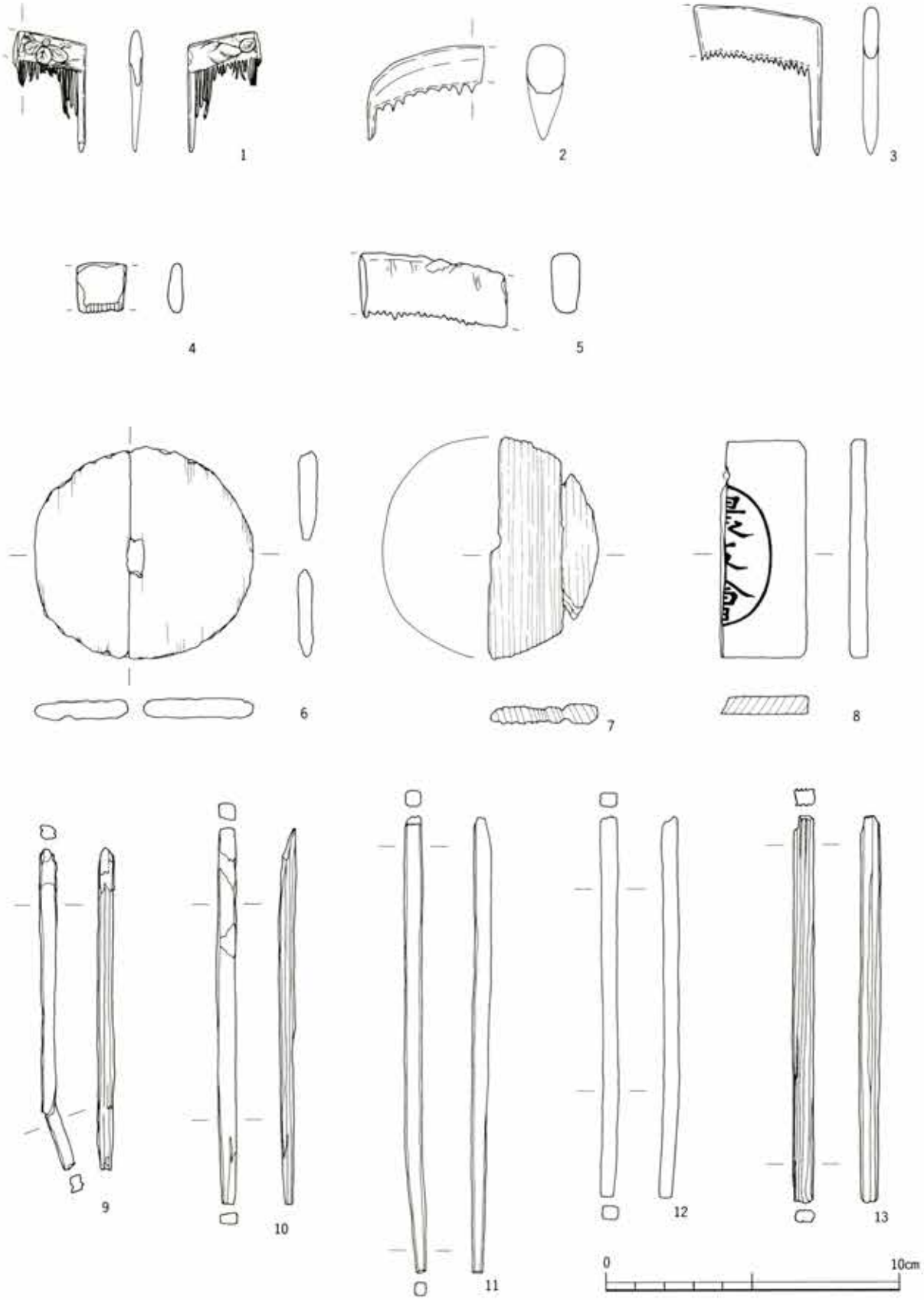
＜杭＞

杭の出土総点数は454点であった。杭はすべて打ち込まれた状態で出土した。出土地区別ではIII区が227点で全体の50％を占めており、II区170点・37％、I区57点・13％という比率である。また、杭の一部と思われる木片や杭とは特定できないものを除き、状態の良いものを390点選び出し、法量を測定した。杭の大半は中ほどで折れた状態で出土しており、平均の残存長は42.3cm、平均の残存幅は4.3cmであった。また390点中194点が最大径２～４cmの丸杭であり径６cmを超えるものは28点のみで、ほぼ均一の丸木を使用している。（２点の例外あり。１／４の割材を使用したものがII区から出土している。）ほとんどは樹皮がついた自然木の状態で利用されており、樹皮は発掘時に剝がれたものと思われる。小枝はすべて枝打ちされた痕が見られる。なかには木が腐巧し樹皮だけが残り、内部に土が入り込んだ状態のものも見られた。また、別の器種からの転用はなく、すべてはじめから杭として製作されたものと考えられる。

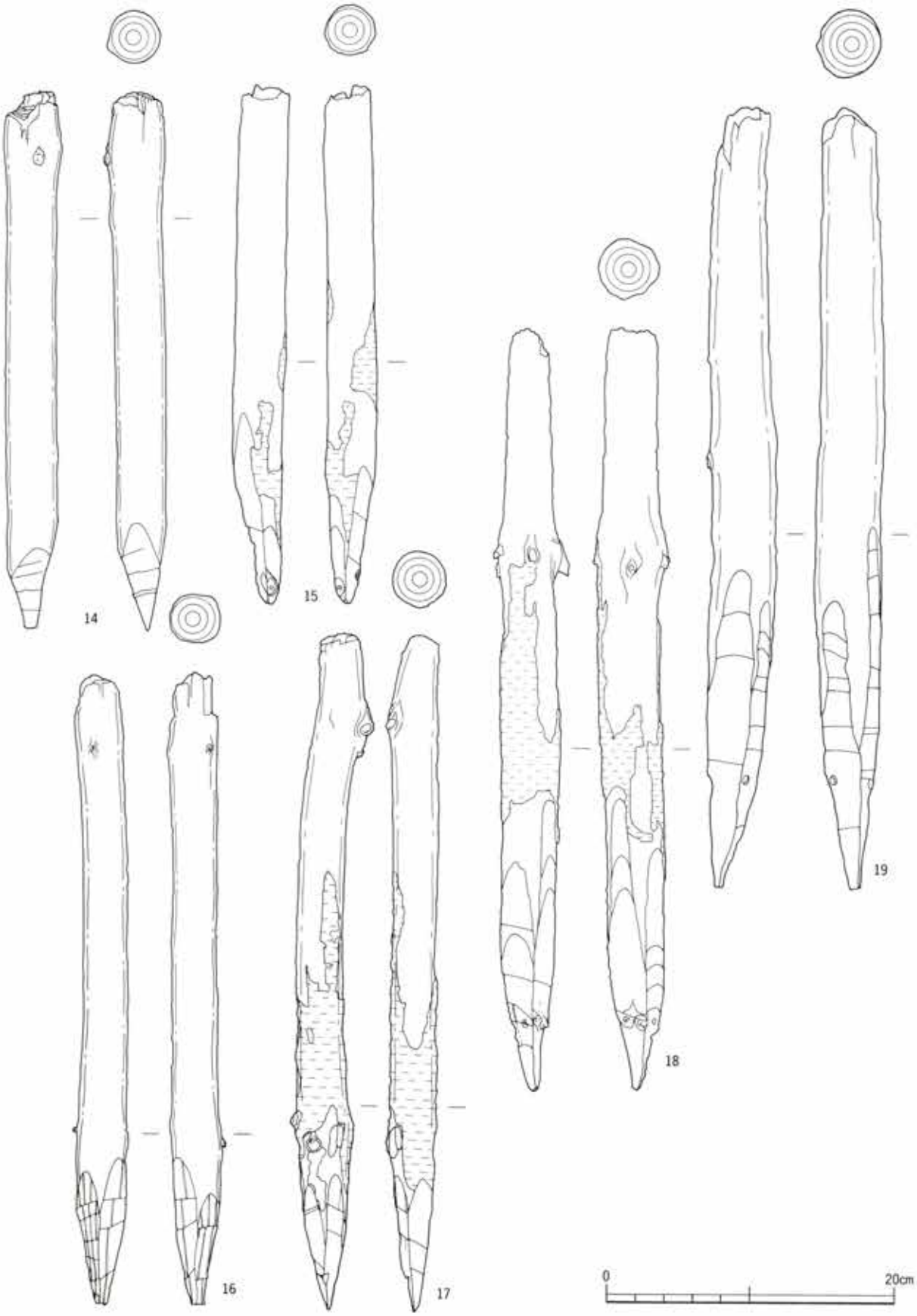
先端の加工面（削り尖らせた面）が明確なものは454点中344点で、そのうち先端全周を４面に削られているものが79％を占める。次いで５面に削られているものが17％、６面に削られているものが３％となっている。この比率はどの地区でもほぼ同じである。

杭（14～49）

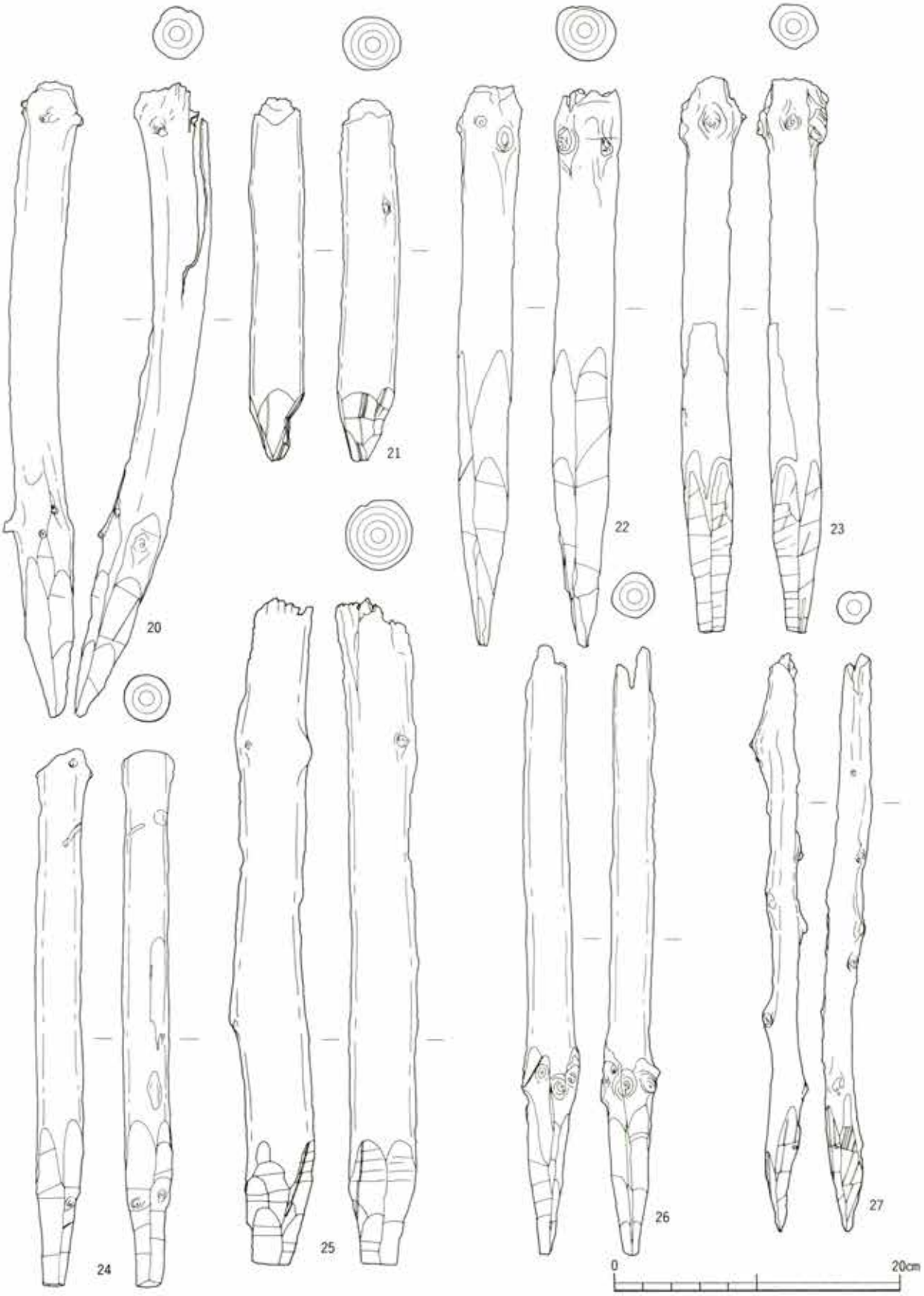
出土した454点中、状態の良いものを選び36点を図示した。内訳はI区が14～15の２点、II区が16～36の21点、III区が37～49の13点である。加工面に節のあるものが23点ある。他の13点のうち３点は加工面のすぐ上部に節があり、強度を考えて節の周辺を利用している。樹種は29点がアカマツである。他の７点はクリ、スギ、ヒノキである。27のヒノキ、45のクリは腐朽が激しい。唯一の割材である29・30は同一グリッドからの出土で、樹種はヒノキである。アカマツ材は全体に残存状態が良く、同質性も高いことから、ほぼ同時期に打ち込まれたものと思われる。



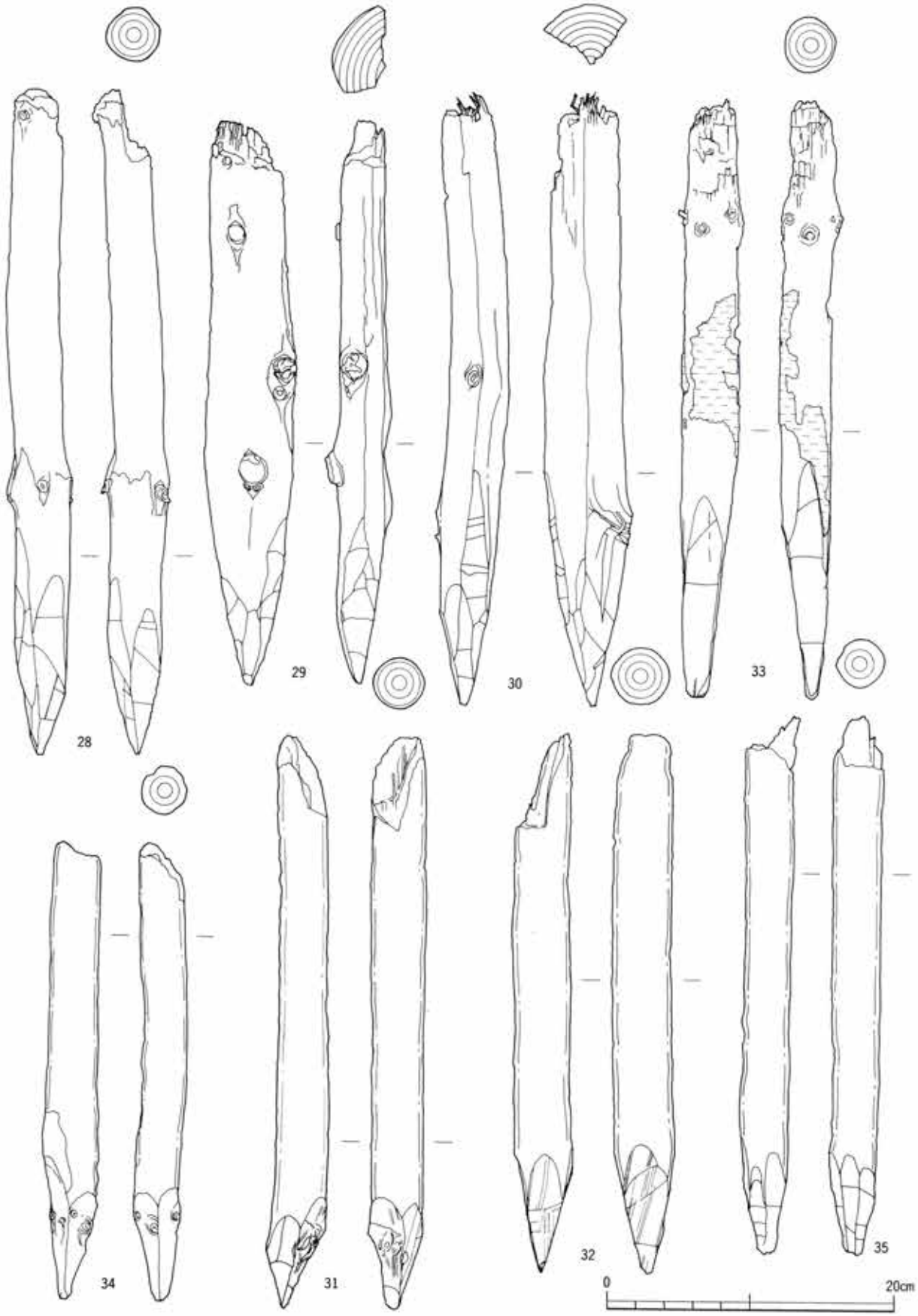
第39図　出土遺物(15)



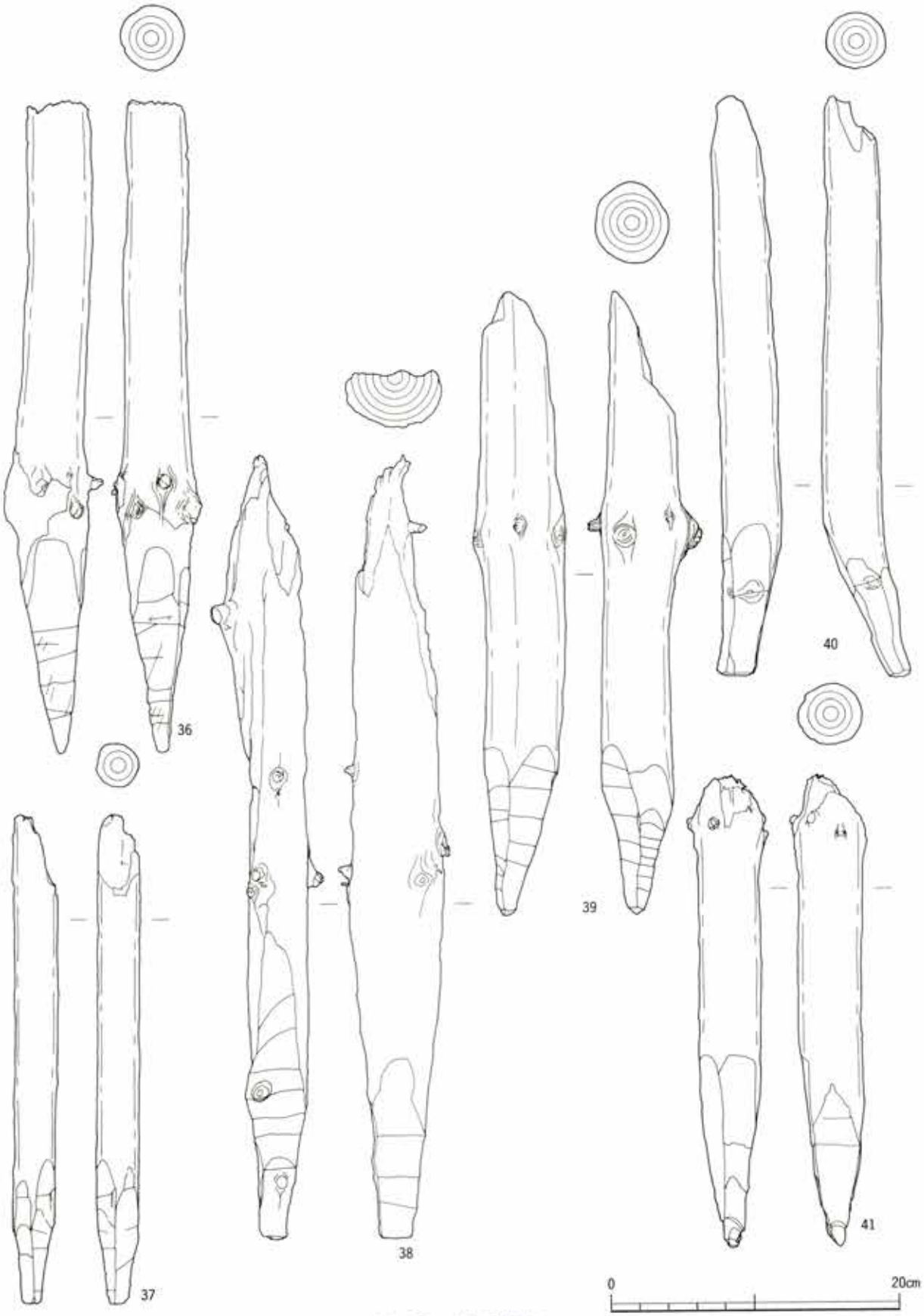
第40図　出土遺物(16)



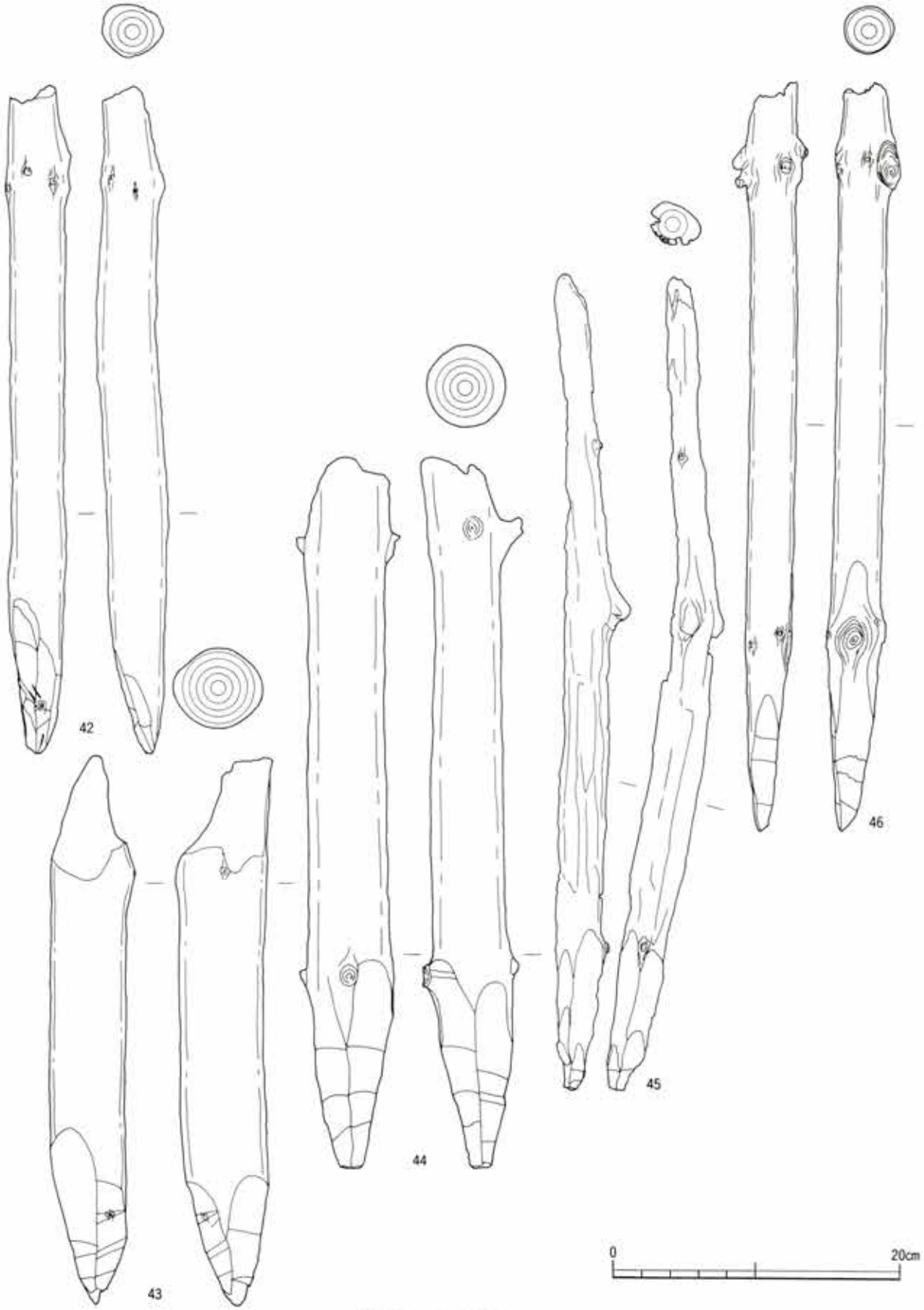
第41図　出土遺物(17)



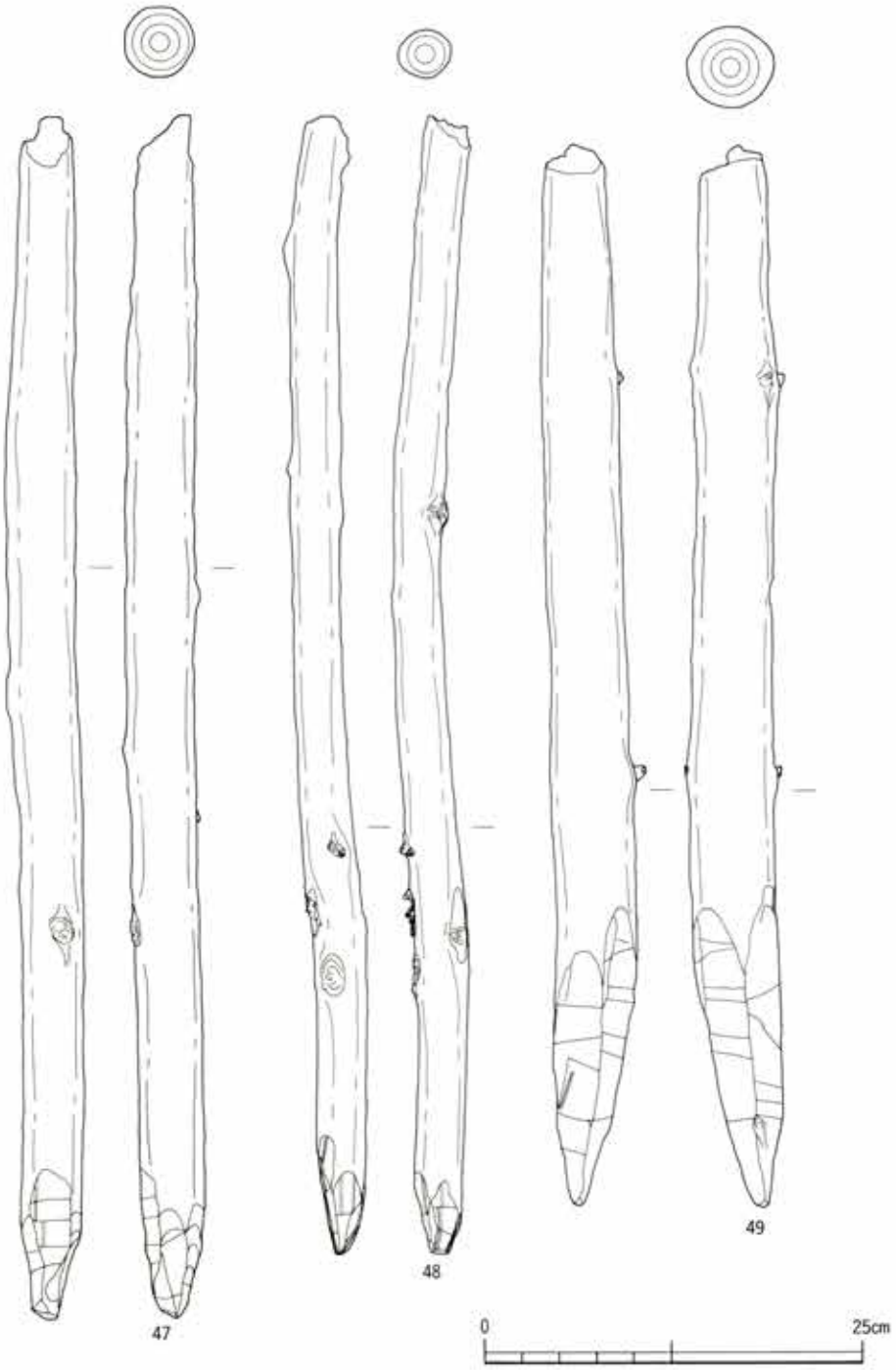
第42図　出土遺物(18)



第43図　出土遺物(19)



第44図　出土遺物(20)



第45図　出土遺物(21)

第34表　木製品観察表(1)

挿図	番号	出土区	層位	種別	樹種	法量(cm) 縦	横	最大厚	備考	整理番号
第39図	1	D26	II	櫛	イスノキ	4.2	残 2.5	0.4	蒔絵あり	615
	2	E25	II	櫛	イスノキ	3.3	残 4.1	1.3		614
	3	E28	II	櫛	イスノキ	5.1	残 4.3	0.5		474
	4	K5	II	櫛	イスノキ	残 1.7	残 1.7	0.5		487
	5	K5	II	櫛	イスノキ	残 2.1	残 5.1	1.0		481
	6	F26	II	円盤状木製品	ヒノキ	7.3		0.8	1.2×0.6cm孔あり	473
	7	I20	II	円盤状木製品	ヒノキ科	7.6		0.7		488
	8	F25	II	札	モミ属	7.4	残 2.9	0.6		480
	9	G26	II	箸	ヒノキ	残 11.1		0.5		571
	10	F26	II	箸	スギ	残 12.8		0.6		557
	11	E25	II	箸	ヒノキ	残 15.8		0.5		505
	12	F25	II	箸	ヒノキ	残 13.1		0.5		606
	13	L4	II	箸	スギ	残 13.3		0.7		578

第35表　木製品観察表(2)

挿図	番号	出土区	層位	種別	樹種	法量(cm) 残存長	残存幅	削り長	備考	整理番号
第40図	14	SN13	III	杭	アカマツ	37.7	3.6	7.5		152
	15	SN16	III	杭	アカマツ	36.3	3.5	13.3	芯抜け貫通	445
	16	SN2	III	杭	アカマツ	44.3	3.5	10.5		122
	17	SN2	III	杭	アカマツ	47.7	3.7	14.5		167
	18	SN2	III	杭	アカマツ	53.2	4.2	20.4		126
	19	SN2	III	杭	アカマツ	54.9	4.4	25.4		134
第41図	20	SN2	III	杭	アカマツ	45.1	3.5	16.2		141
	21	I22	III	杭	アカマツ	24.8	4.1	5.3		200
	22	SN4	III	杭	アカマツ	40.2	4.2	21.5		119
	23	SN4	III	杭	アカマツ	39.7	3.4	12.2		196
	24	SN4	III	杭	アカマツ	38.5	3.2	12.2		162
	25	SN4	III	杭	アカマツ	47.8	4.9	9.1		157
	26	SN4	III	杭	アカマツ	43.4	2.9	15.3		193
	27	SN4	III	杭	ヒノキ	41.6	2.3	10.2		158
第42図	28	SN4	III	杭	アカマツ	47.1	3.7	15.9		195
	29	SN5	III	杭	ヒノキ	39.8	6.5	15.2	1／4の割材	142
	30	SN5	III	杭	ヒノキ	43.2	5.7	16.5	1／4の割材	175
	31	SN11	III	杭	アカマツ	40.8	3.6	8.4		159
	32	SN11	III	杭	アカマツ	38.3	4.1	9.3		169
	33	SN10	III	杭	アカマツ	42.2	4.2	16.7		168
	34	SN10	III	杭	アカマツ	32.5	3.1	9.5		128
	35	SN10	III	杭	アカマツ	38.4	3.4	8.5		147
第43図	36	SN10	III	杭	アカマツ	45.6	4.5	14.9		441
	37	STR13C	III	杭	アカマツ	34.4	2.9	10.2		236
	38	STR13C	III	杭	ヒノキ	55.2	6.6	16.5	1面欠損	233
	39	STR13C	III	杭	アカマツ	43.9	5.0	12.0		245
	40	STR13C	III	杭	アカマツ	40.9	4.1	10.7		239
	41	P1	III	杭	アカマツ	33.3	4.4	13.6		454
第44図	42	SK1	III	杭	アカマツ	47.0	4.2	10.8		368
	43	SK2	III	杭	アカマツ	38.9	6.2	9.4		357
	44	SK1	III	杭	アカマツ	50.1	5.7	14.8		369
	45	SK6	III	杭	クリ	57.3	3.5	11.2	先端部炭化物付着(錆？)	466
	46	SK6	III	杭	アカマツ	52.5	3.4	18.9		468
第45図	47	SK1	III	杭	スギ	81.3	4.6	10.4		366
	48	SK1	III	杭	スギ	77.2	3.5	8.1		363
	49	SK1	III	杭	アカマツ	72.2	5.7	21.9		365

(武藤美和子)

第5節　金　属　製　品

本遺跡では多数の金属製品が出土している。材質は主に鉄、銅、鉛等に分類される。詳細については以下に述べる。なお、遺物により、推定線、補助線を施した。実測図のスケールは原則として1／2に統一したが、貨幣のスケールは等倍にした。

1、鉄製品（1～33）

鉄製品は33点出土した。分布を見ると、Ⅰ区27点、Ⅱ区6点、Ⅲ区0点を数える。何れもⅡ層からの出土で、Ⅲ・Ⅳ層からの出土は確認されていない。

種類は釘（4、8～18、23～25、29、30）、楔（1～3、5～7、28、31）、環状金具（21）、鍵（20）、鎌（27）、鍬（19、33）、鋏（32）、不明製品（22、26）である。主に日常雑具、部材、農具等である。状態は何れも錆化が進み、破損が認められる。

2、銅製品（34～152）

銅製品は119点出土した。そのうち106点は煙管である（雁首40点、吸口66点）。分布を見ると、Ⅰ区34点、Ⅱ区49点、Ⅲ区36点を数える。Ⅱ層からの出土が大半を占めている。

種類は釘（34）、釣針状金具（36）、釣針（45）、簪（38）、円盤状金具（37、46）、鍵穴状金具（40）、装飾金具（35）、縁金具（39）、小柄（43、44）、煙管（47～152）である。何れも日用雑具、部材等である。

39は唐草文と見られる文様が施されており、形状から縁金具と見られる。37、46は菊と見られる文様が施されている。45は頭部に文様が施されている。43、44は小柄と見られるが、刃身は腐食により存しない。

煙管の雁首や吸口には様々な形態が見られる。雁首は40点出土しており（47～86）、点数の分布を見ると、Ⅰ区6点、Ⅱ区17点、Ⅲ区17点を数える。Ⅱ層からの出土が大半を占める。状態は全般的に良好であるが、火皿の欠損や殴打痕による潰れが認められる。羅宇が残存するもの1点が出土している（72）。なかには「大仏」の銘を有する雁首が出土している。使用者の姓を記したものと見られるが検討を要する（77）。

煙管の吸口は66点出土している（87～152）。点数の分布を見ると、Ⅰ区25点、Ⅱ区22点、Ⅲ区19点である。同様にⅡ層からの出土が大半である。状態は殴打痕による潰れが認められるが、概ね良好である。92の様に文様が施されているものは1点出土している。なかには羅宇が残存するもの2点が出土している。

3、鉛玉（153～181）

29点出土のうち各地区出土のもの合計6点を図示した（154、157、161、162、169、174）。点数の分布は、Ⅰ区6点、Ⅱ区15点、Ⅲ区8点を数える。大半はⅡ層からの出土である。火縄銃の6匁目玉と考えられる。法量より中世末期～近世初期の時代に相当するものと考えられる。

4、銭貨（182～296）

銭貨は115点出土した。出土の分布は、Ⅰ区33点、Ⅱ区65、Ⅲ区17点を数え、調査区全域から出土していることがわかる。種類別に見ると桐1銭青銅貨1点（0.9%）、文久永寶3点（2.6%）、雁首銭3点（2.6%）、寛永通寶63点（54.8%）、渡来銭42点（36.5%）、不明銭3点（2.6%）が出土しており、寛永通寶が過半を占める。層位別に見るとⅡ層は桐1銭青銅貨1点（1.4%）、文久永寶1点（1.4%）、雁首銭2点（2.8%）、寛永通寶57点（79.2%）、渡来銭11点（15.3%）で、寛永通寶が圧倒的に占める。Ⅲ層からは、雁首銭1点（4.3%）、寛永通寶4点（17.3%）、渡来銭16点（69.6%）不明銭2点（8.7%）で、渡来銭が圧倒的に占める。Ⅳ層からは渡来銭しか出土していない。

明治期の桐1銭青銅貨（182）はⅠ区において1点出土している。

文久永寶（183～185）は3点出土している。各地区から1点ずつの出土である。そのうち2点は試掘調査の際に表面採集したものである。

雁首銭（186～188）は3点出土しており、何れも雁首火皿上部を潰して銭貨として使用したものと考えられる。重量は2.7～1.3gと一定ではない。

寛永通寶（189～251）は全調査区に亘って出土している。63点の内訳は、古寛永26点（41.3%）、文銭（新寛永）4点（6.3%）、新寛永33点（52.4%）である。なお、その他のものは出土していない。

渡来銭は42点出土した。Ⅱ区からは34点（81.0%）出土しており大半を占めるのが特徴的である。中世墓は未確認であるが、これだけの出土量からすると六道銭と見られ、調査区周辺に存在していた可能性が考えられる。

内訳は開元通寶（本稿では開元通寶と統一した）8点（254、259、262、263、266、276、285、291）、唐国通寶1点（267）、咸平通寶1点（287）、祥符元寶3点（278、280、281）、祥符通寶1点（286）、天聖元寶1点（270）、皇宋通寶2点（253、274）、嘉祐通寶2点（256、290）、熙寧元寶4点（258、265、272、283）、元豊通寶6点（252、255、257、264、271、273）、元祐通寶2点（268、293）、紹聖元寶1点（288）、元符通寶1点（279）、聖宋元寶1点（260）、政和通寶2点（277、289）、端平元寶1点（282）、洪武通寶1点（292）、朝鮮通寶1点（275）、永楽通寶3点（261、269、284）である。そのうち、唐銭8点、宋銭28点（南宋銭は端平元寶1点のみで、他は全て北宋銭である。）、明銭2点、朝鮮銭1点である。

なお、文字が摩滅して判読できないものが3点（294～296）出土している。法量から渡来銭と判断されるが、数値からは除外した。

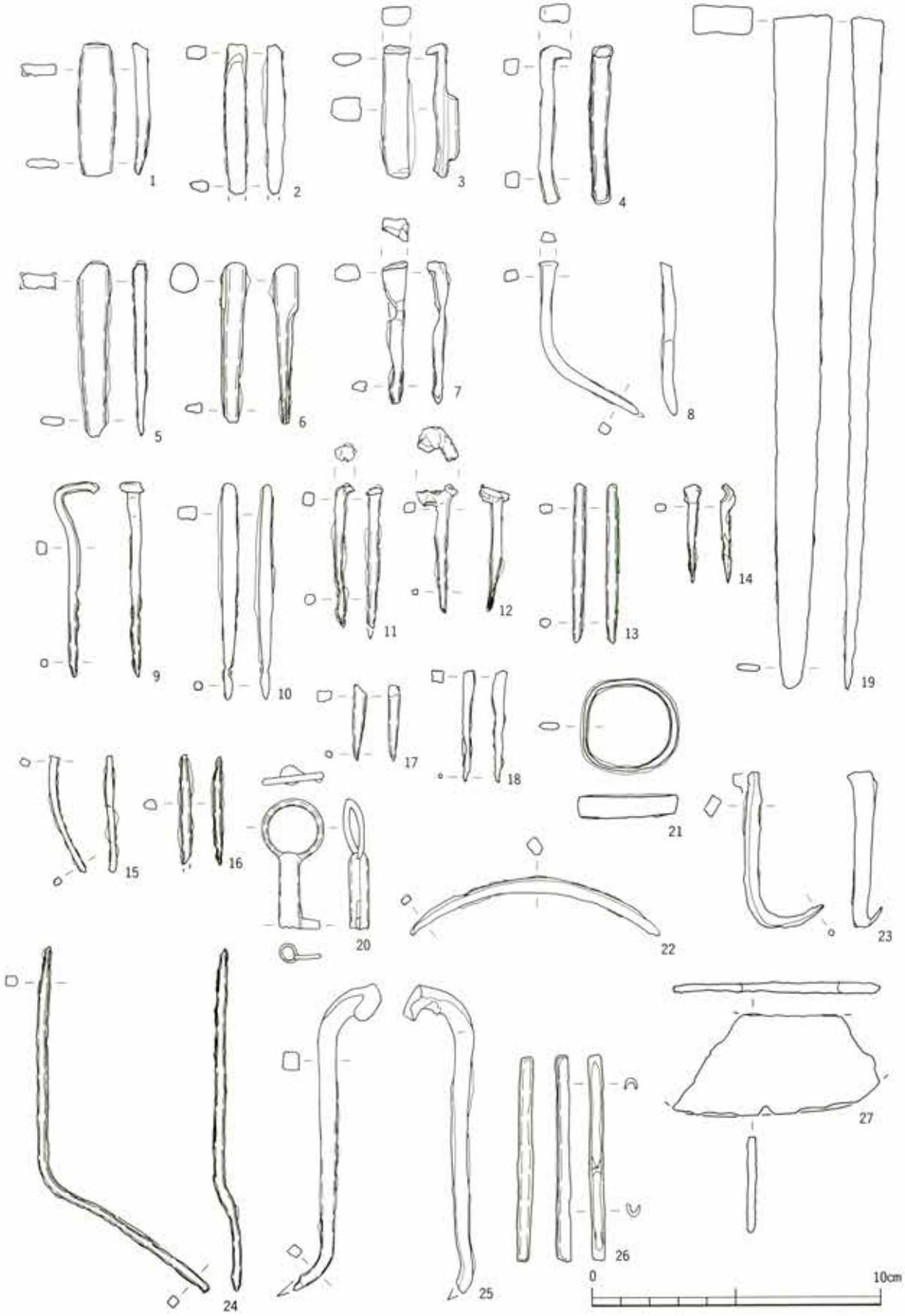
参考文献

1）古泉　弘氏『江戸の考古学』（考古学ライブラリー第48集、ニューサイエンス社、1987年）。

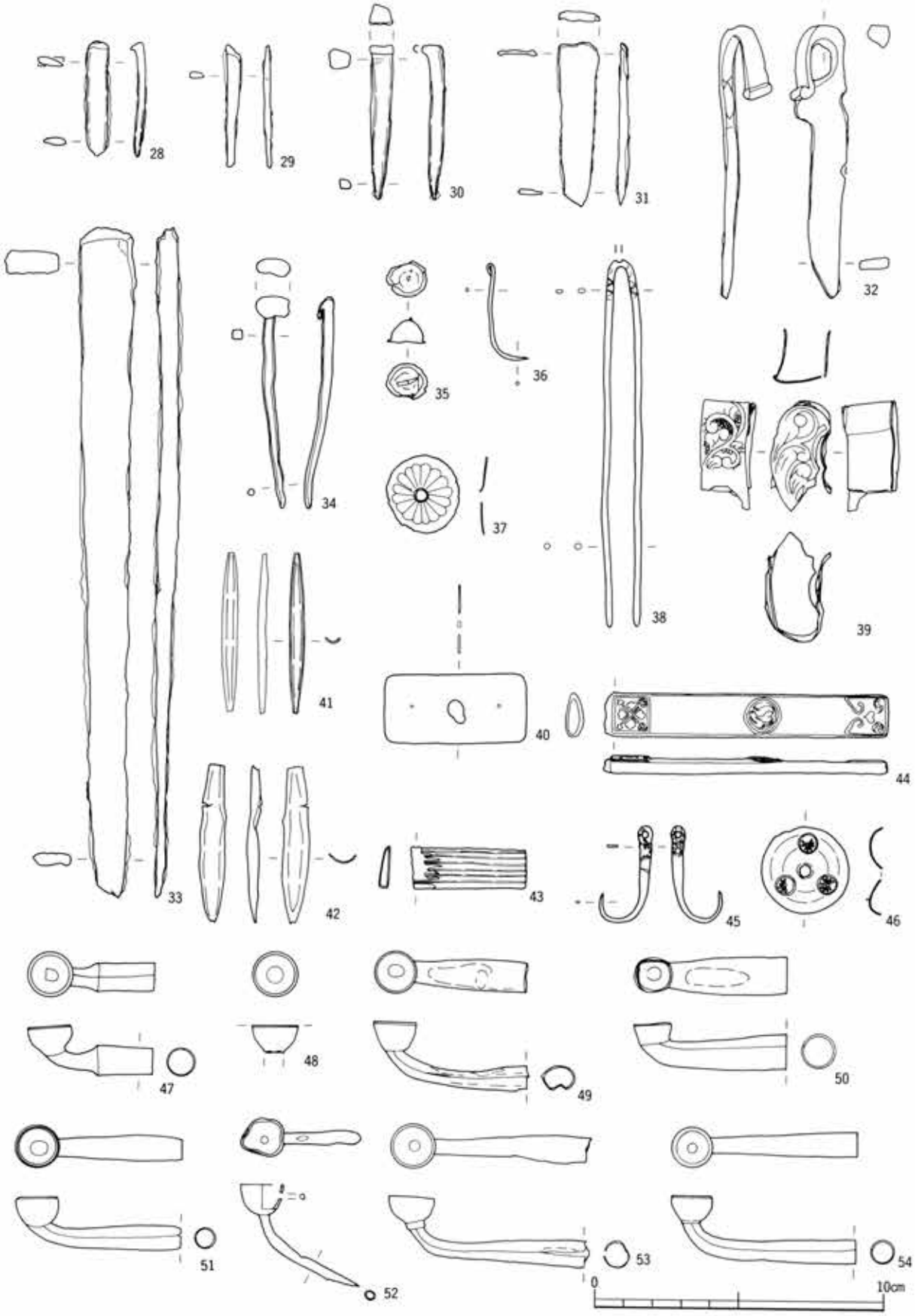
2）新宿区内藤町遺跡調査会『内藤町遺跡―放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書―』東京都建設局、1992年。

3）日本銀行調査局編『図録日本の貨幣』1～7、東洋経済新聞報社、1972年～73年。永井久美男編『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会、1994年。同氏編『中世の出土銭』補遺Ⅰ、兵庫埋蔵銭調査会、1996年。同氏編『近世の出土銭』Ⅰ、兵庫埋蔵銭調査会、1997年。

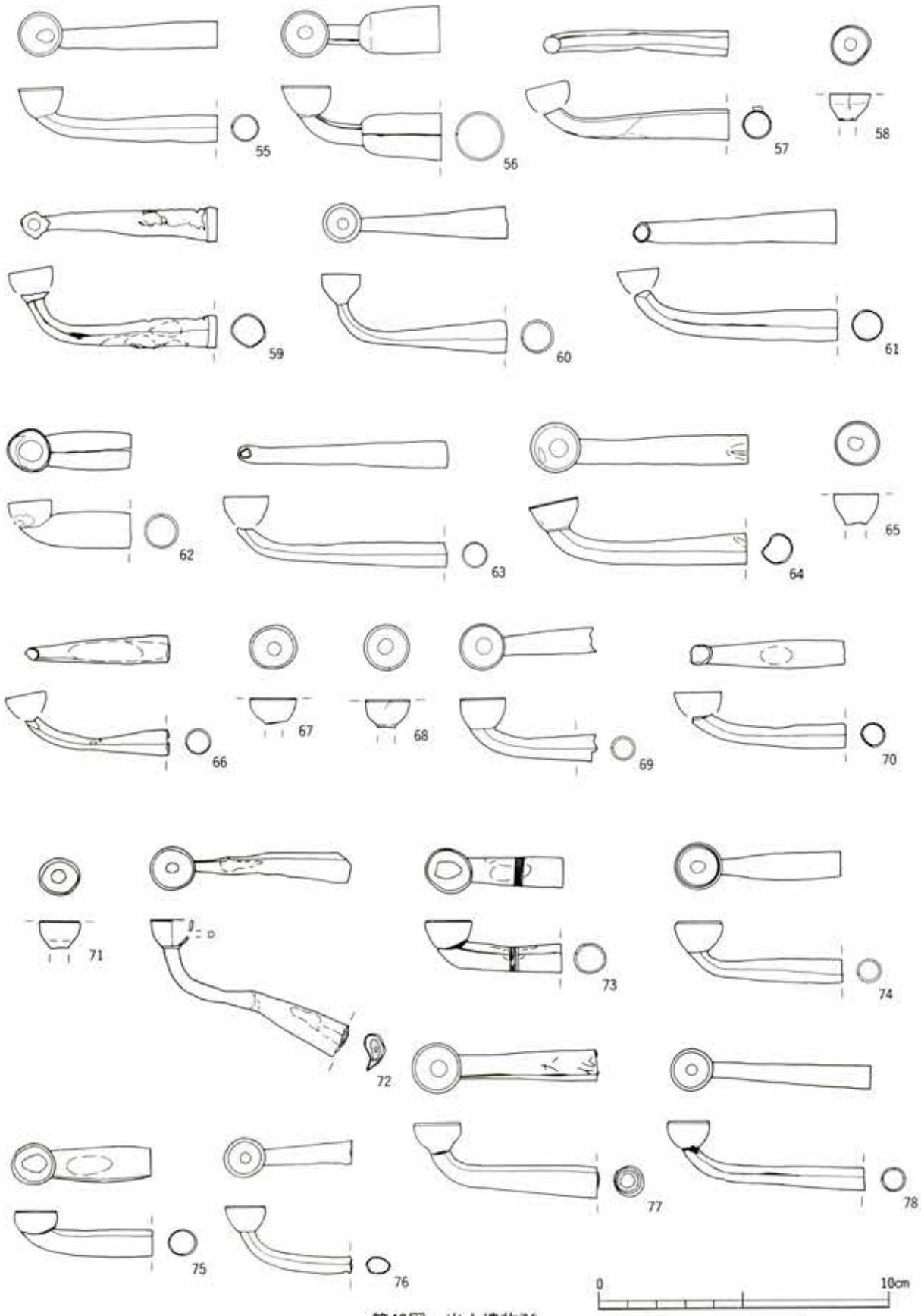
（付記）金属製品の分類は澤村雄一郎氏より御教示を得た。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
10cm

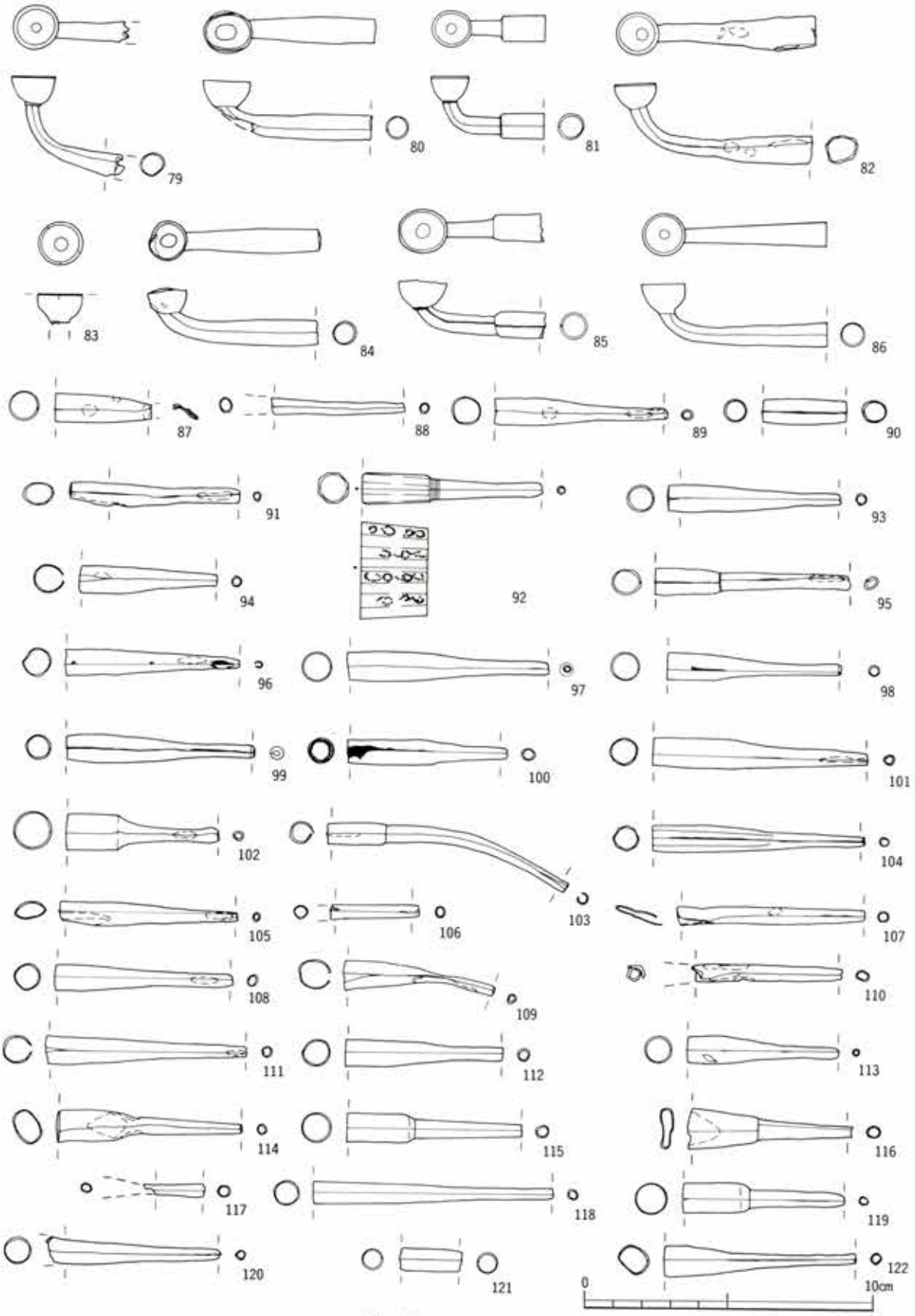
第46図　出土遺物(22)


28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
0
10cm

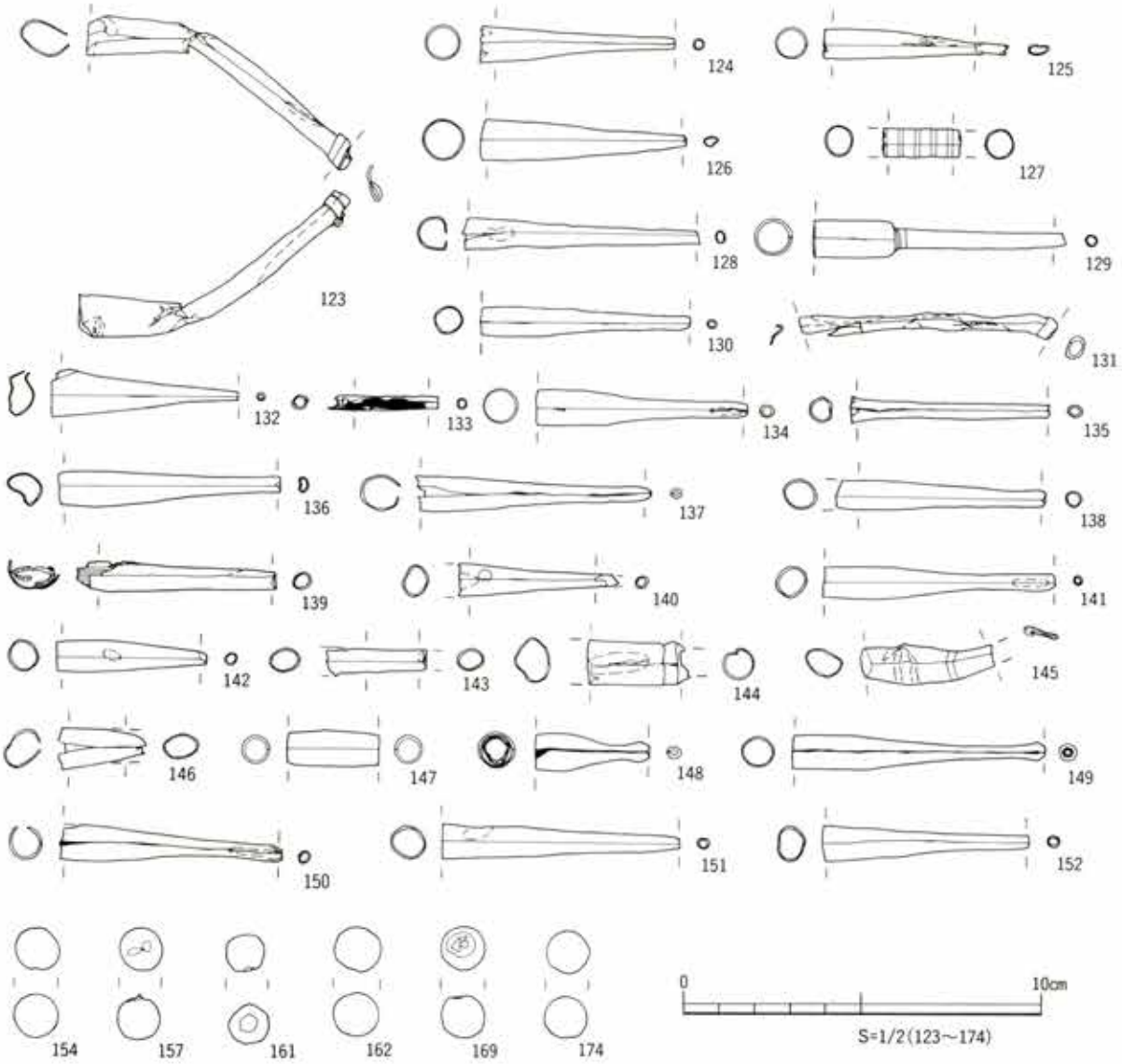
第47図　出土遺物(23)

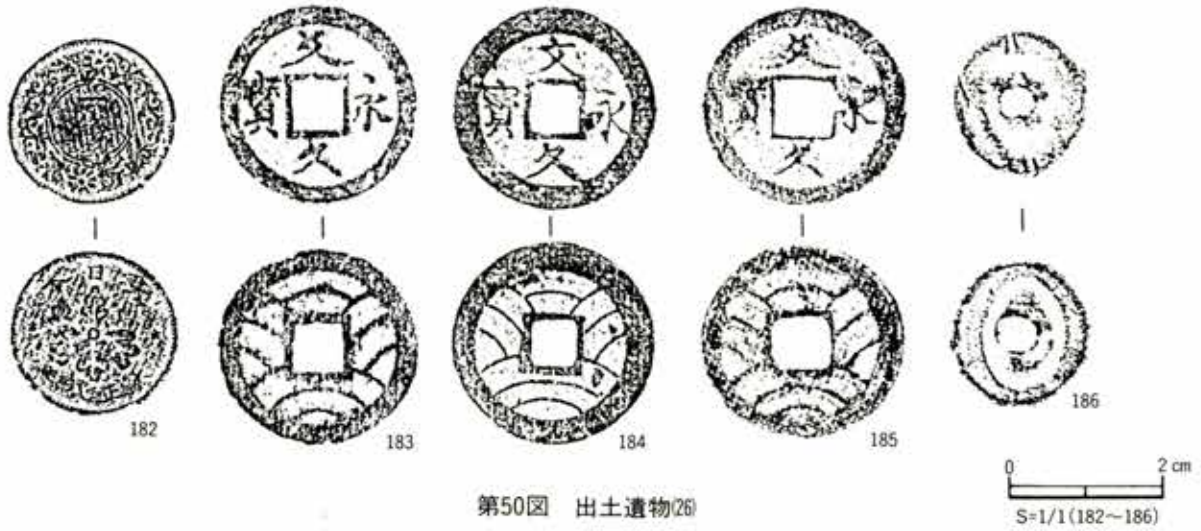

55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
0
10cm

第48図　出土遺物(24)

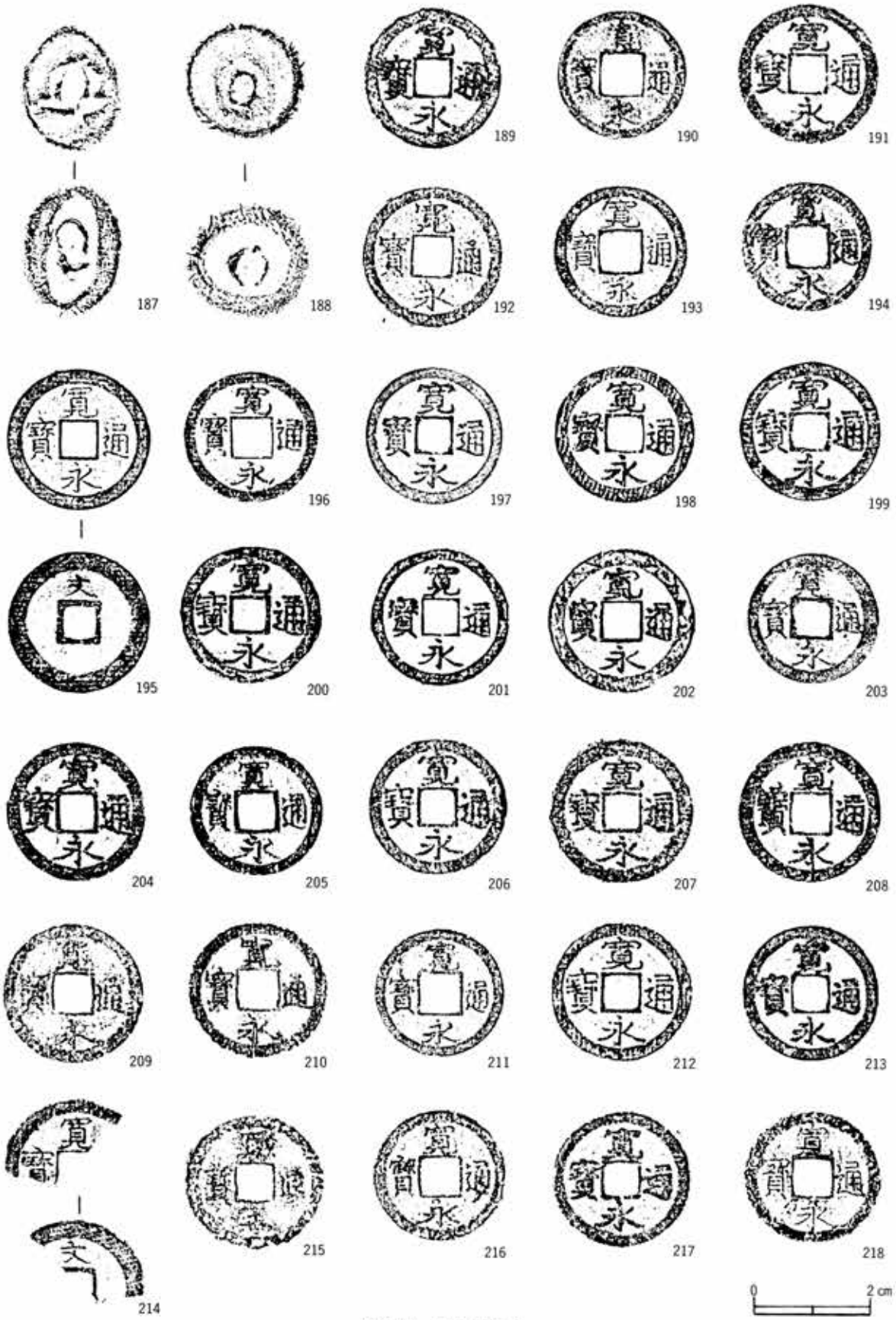

79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
0
10cm

第49図　出土遺物(25)

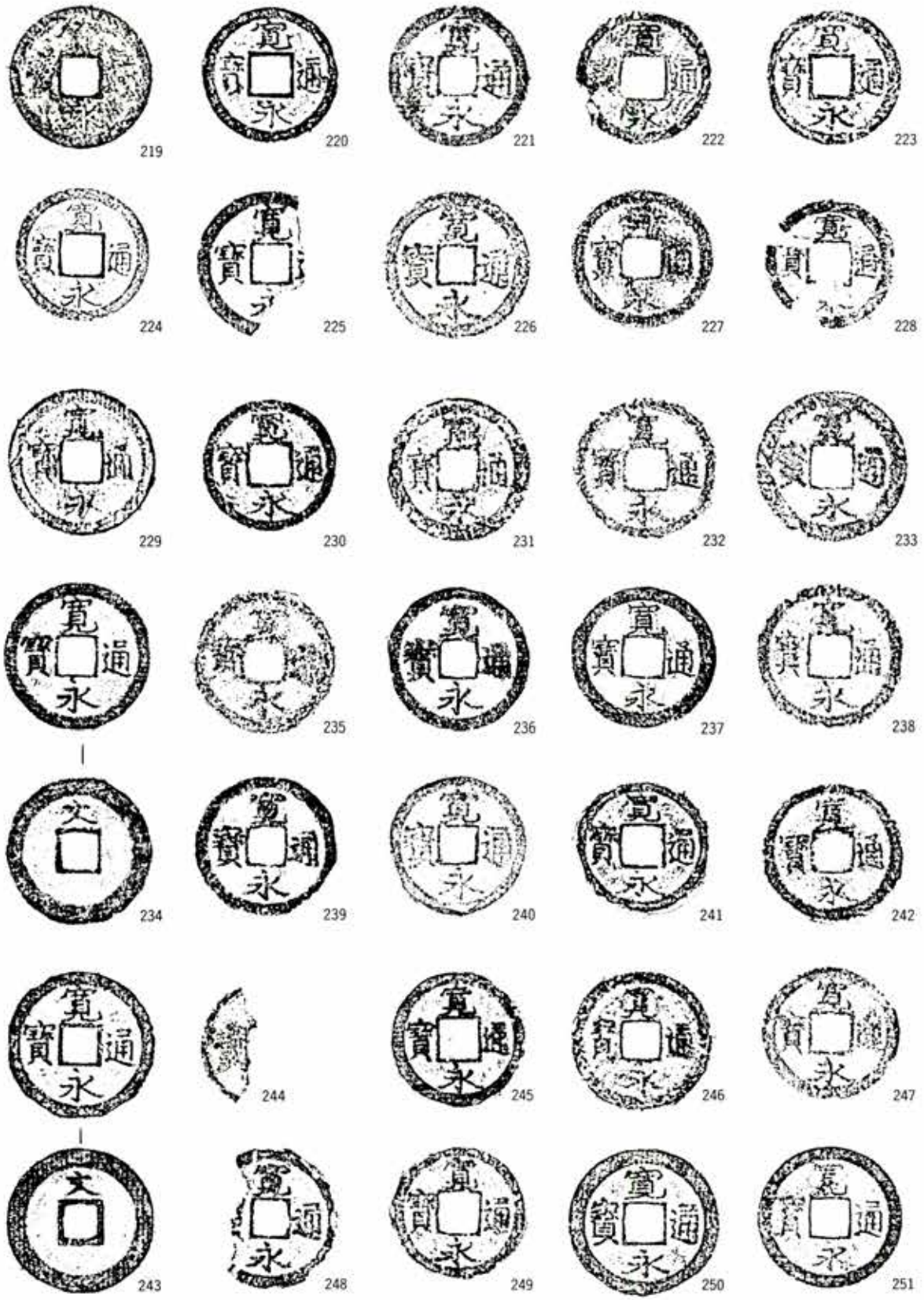

123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
154
157
161
162
169
174
0
10cm
S=1/2(123～174)


182
183
184
185
186
0
2 cm
S=1/1(182～186)

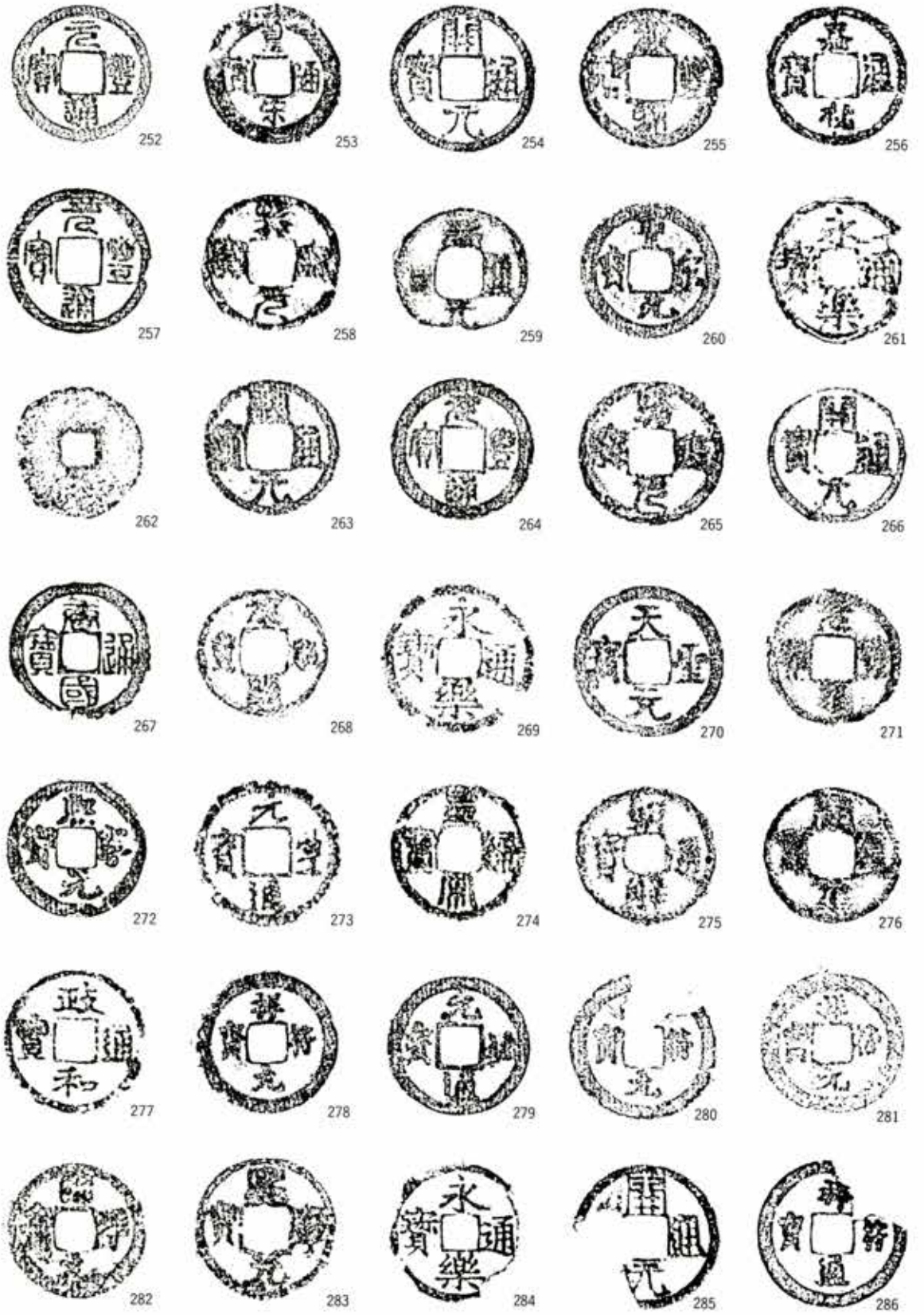
第50図　出土遺物(26)


187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
0
2 cm

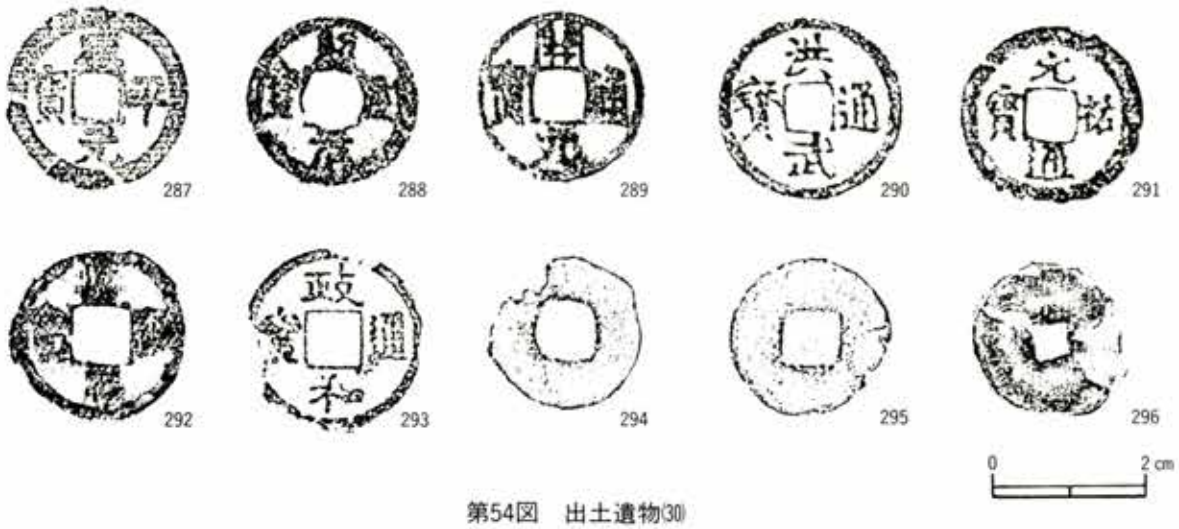
第51図　出土遺物(27)


219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
0
2cm

第52図　出土遺物(28)


252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
0
2 cm

第53図　出土遺物(29)



第54図　出土遺物(30)

第36表　鉄製品観察表(1)

（I区）

挿図番号	出土区	層位	登録番号	種別	法量 (cm)	重量(g)	備考
46-1	E26	II	2417	楔	長さ4.7、先端幅1.2、厚さ0.3	13.2	
46-2	E25	II	2436	楔	長さ5.3、先端幅0.6、厚さ0.4	13.4	
46-3	F26	II	2524	楔	長さ4.7、幅1.1、厚さ0.9	10.1	
46-4	F26	II	2529	釘	長さ5.6、先端幅0.5、厚さ0.5	9.6	
46-5	E26	II	2769	楔	長さ6.1、先端幅0.7、厚さ0.3	13.5	
46-6	E25	II	3060	楔	長さ5.6、先端幅0.6、厚さ0.3	11.9	
46-7	E25	III	4647	楔	長さ5.0、先端幅0.5、厚さ0.3	4.7	
46-8	E25	II	2450	釘	長さ5.4、先端幅0.4、厚さ0.4	5.7	
46-9	D27	II	3320	釘	長さ6.8、先端幅0.3、厚さ0.3	4.1	
46-10	E25	III	4657	釘	長さ7.5、先端幅0.3、厚さ0.3	8.9	
46-11	E28	II	3315	釘	長さ5.0、先端幅0.4、厚さ0.4	3.2	
46-12	F25	II	2799	釘	長さ4.5、先端幅0.2、厚さ0.2	3.4	
46-13	D29	II	3411	釘？	長さ5.5、先端幅0.4、厚さ0.3	4.3	
46-14	E28	II	3924	釘	長さ3.5、幅0.4、厚さ0.3	1.0	
46-15	E26	II	2775	釘	長さ4.1、先端幅0.3、厚さ0.3	1.8	
46-16	G26	II	3103	釘	長さ3.8、幅0.5、厚さ0.5	2.0	
46-17	E27	II	3294	釘	長さ2.7、先端幅0.2、厚さ0.2	1.9	
46-18	E25	II	2611	釘	長さ3.9、先端幅0.1、厚さ0.1	2.0	
46-19	E26	II	2422	鍬	長さ23.9、先端幅0.8、厚さ0.3	162.4	
46-20	E28	II	3313	鍵	長さ4.5、先端径0.7	3.9	
46-21	F25	II	2456	環状金具	長さ3.5、幅0.7、厚さ0.2	8.1	
46-22	E28	II	3150	不明	長さ8.8、先端幅0.3、厚さ0.3	9.4	
46-23	E25	II	2871	釘	長さ5.5、先端幅0.2、厚さ0.2	7.2	
46-24	E26	II	2429	釘	長さ12.2、先端幅0.4、厚さ0.4	8.0	
46-25	F26	II	2501	釘	長さ10.8、先端幅0.4、厚さ0.4	22.3	
46-26	E25	II	2442	不明	長さ7.3、幅0.5、厚さ0.5	3.9	
46-27	E28	II	3311	鎌	長さ7.2、幅3.6、厚さ0.3	23.9	

（II区）

挿図番号	出土区	層位	登録番号	種別	法量 (cm)	重量(g)	備考
47-28	F23	II	938	楔	長さ4.0、先端幅0.8、厚さ0.3	3.9	
47-29	D24	II	4642	釘	長さ4.3、幅0.5、厚さ0.2	1.5	
47-30	D24	III	4809	釘	長さ5.5、先端幅0.4、厚さ0.4	10.3	

第37表　鉄製品観察表(2)

（II区）

挿図番号	出土区	層位	登録番号	種別	法量 (cm)	重量(g)	備考
47-31	E22	II	1007	楔	長さ5.7、先端幅0.8、厚さ0.2	8.8	
47-32	I17	II	11896	鋏	長さ9.5、先端幅1.0、厚さ0.3	22.8	
47-33	H21	II	998	鎌	長さ23.5、先端幅1.3、厚さ0.3	106.4	

第38表　銅製品観察表(1)

（I区）

挿図番号	出土区	層位	登録番号	種別	法量 (cm)	重量(g)	備考
47-34	E26	II	2420	釘	長さ7.4、頭幅1.1	5.4	
47-35	D29	II	3242	装飾金具	高さ0.9、長径1.4	0.3	
47-36	E27	II	3484	釣針	長さ3.4、長径0.1、短径0.1	0.4	

（II区）

挿図番号	出土区	層位	登録番号	種別	法量 (cm)	重量(g)	備考
47-37	H19	III	2207	円盤状金具	長径26.9、内径4.5、厚さ0.7	0.9	
47-38	F21	II	1414	簪	長さ12.8、脚長12.6、厚さ0.2	5.9	
47-39	H20	II	2273	縁金具	長さ3.8、幅1.9	6.1	唐草文様
47-40	J20	II	1552	鍵穴状金具	長さ4.8、幅2.4、厚さ0.1	2.8	
47-41	I21	II	990	不明	長さ56.0、幅5.5	1.4	
47-42	I21	III	7852	不明	長さ54.8、幅9.0	2.1	
47-43	F23	II	7311	小柄	長さ41.0、幅1.4、厚さ5.5	5.1	
47-44	H23	II	689	小柄	長さ9.8、幅1.4、厚さ0.5	30.9	文様有り
47-45	K5	III	20330	釣針状金具	長さ32.8、幅3.8、厚さ1.1	0.9	
47-46	SK3	III	21376	円盤状金具	径30.2、内径4.5	2.0	文様有り

第39表　煙管雁首観察表(1)

（I区）

挿図番号	出土区	層位	登録番号	法量 (cm)				材質	形状特徴	成形・調整・装飾	備考
				長さ	火皿径	接合部径	重量(g)				
47-47	G26	II	2540	4.4	1.6	1.0	7.0	真鍮	肩付		
47-48	D26	II	2675	—	1.6	—	(3.3)	真鍮			火皿のみ現存
47-49	E27	II	3230	5.4	1.5	0.9	5.7	真鍮			殴打痕
47-50	E27	II	3345	5.3	1.3	1.2	12.2	真鍮			
47-51	E28	II	4051	5.8	1.6	0.7	9.2	真鍮			
47-52	E27	II	4885	(4.2)	1.5	0.3	(2.5)	真鍮		火皿に小穴	羅宇接合部一部欠損

（II区）

挿図番号	出土区	層位	登録番号	法量 (cm)				材質	形状特徴	成形・調整・装飾	備考
				長さ	火皿径	接合部径	重量(g)				
47-53	H23	II	641	(7.1)	1.6	0.9	(5.5)	真鍮	補強帯付		殴打痕
47-54	I22	II	964	6.4	1.4	0.8	5.6	真鍮			
48-55	I21	II	965	6.9	1.6	0.9	8.1	真鍮			
48-56	I21	II	968	5.	61.7	1.6	12.0	真鍮	肩付		
48-57	I21	II	992	(6.4)	—	1.1	(5.8)	真鍮	接合部補強		火皿欠損
48-58	G21	II	1383	—	1.4	—	(1.1)	真鍮			火皿のみ現存
48-59	J21	II	1005	(6.8)	—	1.2	(3.8)	真鍮			火皿欠損、殴打痕
48-60	F21	II	1413	6.5	1.3	1.1	(4.6)	真鍮			羅宇残存、接合部一部欠損
48-61	J19	II	1555	4.3	1.5	1.2	(7.1)	真鍮			火皿一部欠損
48-62	H20	II	1676	7.0	—	1.1	(7.1)	真鍮			火皿欠損
48-63	G20	II	1871	(7.3)	—	0.9	(5.1)	真鍮			火皿欠損
48-64	I20	II	2104	7.6	1.8	1.1	8.7	真鍮			殴打痕、火皿一部欠損
48-65	I19	II	2201	—	1.6	—	(1.6)	真鍮			火皿のみ現存
48-66	J17	II	2235	(5.0)	—	0.9	(1.7)	真鍮			火皿欠損、殴打痕
48-67	H19	II	2358	—	1.5	—	(2.0)	真鍮			火皿のみ現存
48-68	I19	II	2359	—	1.7	—	(2.2	真鍮			火皿のみ現存
48-69	I18	II	2412	(4.8)	1.6	0.8	(4.2)	真鍮			羅宇接合部一部欠損

第40表　煙管雁首観察表(2)

(III区)

挿図番号	出土区	層位	登録番号	法量 (cm)				材質	形状特徴	成形・調整・装飾	備考
				長さ	火皿径	接合部径	重量(g)				
48-70	M6	II	一括	(5.3)	—	0.9	(3.4)	真鍮			火皿欠損、殴打痕
48-71	L5	II	一括	—	1.4	—	(1.7)	真鍮			火皿のみ現存
48-72	M9	II	一括	(7.9)	1.5	1.3	7.2	真鍮		火皿に小穴有	り羅字残存、殴打痕
48-73	L4	II	一括	4.8	1.7	1.1	6.0	真鍮			
48-74	L4	II	一括	5.8	1.6	—	10.3	真鍮			
48-75	M6	II	一括	4.9	1.4	(0.9)	6.9	真鍮			
48-76	M6	II	一括	4.4	0.4	0.6	4.1	真鍮			
48-77	K7	II	一括	6.5	1.7	1.0	11.8	真鍮			羅字残存、「大仏」銘
48-78	K7	II	一括	7.0	1.4	0.8	5.0	真鍮			
49-79	K7	II	一括	(4.0)	1.6	0.8	(5.0)	真鍮			接合部一部欠損
49-80	L7	II	一括	5.9	1.7	0.8	(5.3)	真鍮			一部欠損
49-81	M5	II	一括	4.0	1.3	0.9	6.0	真鍮	肩付		
49-82	L5	III	20710	7.0	1.5	1.0	5.6	真鍮			殴打痕
49-83	K7	II	一括	—	1.5	—	(2.3)	真鍮			火皿のみ現存
49-84	M6	II	一括	6.0	1.4	0.9	(7.2)	真鍮			火皿一部欠損、小穴
49-85	L9	III	13108	(5.1)	1.7	1.0	(4.8	真鍮	肩付	肩に筋2本	接合部一部欠損
49-86	K10	III	21439	6.5	1.5	0.8	6.5	真鍮			

第41表　煙管吸口観察表(1)

(I区)

挿図番号	出土区	層位	登録番号	法量 (cm)				材質	形状特徴	成形・調整・装飾	備考
				長さ	火皿径	接合部径	重量(g)				
49-87	E26	II	2131	(3.4)	1.0	(0.5)	2.2	真鍮			
49-88	E26	II	2500	(4.7)	0.5	0.4	20.9	真鍮			欠損
49-89	F26	II	2533	6.1	1.0	0.4	3.9	真鍮			殴打痕
49-90	F26	II	2586	(4.1)	0.7	0.8	4.1	真鍮			
49-91	E25	II	2608	5.9	0.8	0.3	3.4	真鍮			小穴
49-92	F25	II	2748	6.3	1.1	0.3	8.9	真鍮		文様	断面八角形
49-93	F25	II	2946	6.0	0.9	0.5	3.8	真鍮			
49-94	F26	II	2989	4.8	1.0	0.4	2.5	真鍮			
49-95	D28	II	3130	6.8	0.9	0.4	7.4	真鍮			
49-96	D28	II	3131	6.1	1.0	0.2	3.7	真鍮			
49-97	G27	II	3134	7.0	1.1	0.2	7.4	真鍮			
49-98	G26	II	3143	6.0	1.0	0.4	3.9	真鍮			
49-99	E27	II	3166	6.5	0.8	0.3	5.8	真鍮			
49-100	D27	II	3181	5.7	0.9	0.4	4.7	真鍮			羅字残存、一部欠損
49-101	E28	II	3309	7.5	1.0	0.3	6.6	真鍮			殴打痕
49-102	E27	II	3364	5.3	1.3	0.3	6.2	真鍮			
49-103	E27	II	3634	8.5	0.8	0.5	4.0	真鍮			
49-104	E29	II	3972	7.4	8.8	—	6.8	真鍮			断面八角形
49-105	C29	II	4181	6.2	(0.7)	0.4	2.2	真鍮			
49-106	E25	III	4597	3.1	0.5	0.4	0.7	真鍮			欠損
49-107	E25	III	4594	6.5	(0.7)	0.4	3.6	真鍮			
49-108	E25	III	4656	6.2	1.0	0.4	3.0	真鍮			
49-109	E25	III	4713	(5.3)	1.4	0.4	2.8	真鍮			
49-110	F25	III	4985	5.2	(0.6)	(0.4)	2.5	真鍮			潰れ
49-111	F26	III	12988	7.0	1.0	0.4	4.1	真鍮			

(II区)

挿図番号	出土区	層位	登録番号	法量 (cm)				材質	形状特徴	成形・調整・装飾	備考
				長さ	火皿径	接合部径	重量(g)				
49-112	J18	II	一括	5.5	1.0	0.4	3.2	真鍮			

第42表　煙管吸口観察表(2)

(II区)

挿図番号	出土区	層位	登録番号	法量(cm) 長さ	火皿径	接合部径	重量(g)	材質	形状特徴	成形・調整・装飾	備考
49-113	G23	II	322	5.2	0.9	0.3	1.6	真鍮			小穴
49-114	I21	II	988	6.4	1.2	0.3	2.5	真鍮			殴打痕
49-115	F23	II	1002	6.1	1.0	0.5	3.5	真鍮			
49-116	G21	II	1387	5.7	—	(0.4)	3.3	真鍮			欠損
49-117	G21	II	1475	(2.2)	0.4	0.4	0.3	真鍮			欠損
49-118	G20	II	1477	8.4	0.8	0.4	4.2	真鍮			
49-119	H20	II	1604	5.6	1.1	0.3	5.5	真鍮			
49-120	J19	II	1858	(6.0)	9.1	0.3	1.9	真鍮			欠損
49-121	J19	II	1862	(2.2)	0.8	0.8	1.6	真鍮			
49-122	H19	II	1877	6.7	1.2	0.4	2.2	真鍮			
50-123	H19	II	1844	7.1	1.0	0.4	7.1	真鍮			
50-124	H18	II	1883	5.6	1.0	0.3	2.2	真鍮			欠損
50-125	I19	II	1911	5.2	0.9	0.3	1.4	真鍮			欠損
50-126	G19	II	1922	5.8	1.1	0.4	3.6	真鍮			殴打痕
50-127	G19	II	1936	(2.2)	0.8	0.8	1.2	真鍮		横線	
50-128	J20	II	1970	6.7	(0.9)	0.4	3.4	真鍮			
50-129	H19	II	2212	6.7	2.1	0.4	7.3	真鍮			
50-130	K18	II	2275	6.0	0.8	0.2	3.0	真鍮			
50-131	G20	II	2279	7.3	0.5	0.7	3.5	真鍮			
50-132	F20	III	8141	5.3	(1.3)	(0.2)	1.7	真鍮			小穴
50-133	F21	IV	13428	(3.1)	0.4	0.3	0.6	真鍮			欠損、接合部不明

(III区)

挿図番号	出土区	層位	登録番号	法量(cm) 長さ	火皿径	接合部径	重量(g)	材質	形状特徴	成形・調整・装飾	備考
50-134	L4	II	一括	6.0	1.0	0.4	3.3	真鍮			殴打痕
50-135	M4	II	一括	5.5	0.8	0.4	1.5	真鍮			
50-136	M6	II	一括	6.2	(0.9)	(0.4)	4.8	真鍮			
50-137	K7	II	一括	(6.7)	1.0	0.3	3.1	真鍮			割れ
50-138	N7	II	一括	5.9	0.9	0.4	2.3	真鍮			
50-139	M6	II	一括	5.6	(0.9)	0.5	3.0	真鍮			
50-140	M6	II	一括	4.5	0.9	0.4	1.6	真鍮			
50-141	M6	II	一括	6.5	0.9	0.3	4.1	真鍮			
50-142	L7	II	一括	4.3	0.9	0.4	1.3	真鍮			
50-143	M6	II	一括	(2.8)	(0.7)	(0.6)	0.6	真鍮			欠損
50-144	K7	II	一括	(2.8)	(1.3)	(0.9)	1.8	真鍮		横線	小穴
50-145	L6	II	一括	(3.7)	(0.8)	(0.7)	2.5	真鍮		横線	
50-146	L4	II	一括	(2.5)	(1.1)	(0.7)	0.9	真鍮			小穴
50-147	L5	II	一括	2.5	0.8	0.8	4.5	真鍮			
50-148	L7	III	20144	3.2	1.0	0.3	3.0	真鍮			羅宇残存
50-149	N4	III	一括	7.1	8.7	0.3	6.3	真鍮			
50-150	K7	III	20008	6.2	(0.9)	0.4	2.5	真鍮			
50-151	L7	III	20528	6.7	1.0	0.4	3.7	真鍮			
50-152	M4	III	21044	5.8	1.0	0.4	2.3	真鍮			

第43表　鉛玉観察表(1)

(I区)

挿図番号	出土区	層位	登録番号	直径	重量
-153	D28	II	3179	12.2mm	9.8g
50-154	E27	II	3425	12.2mm	9.9g
-155	F27	II	3463	12.0mm	4.5g

挿図番号	出土区	層位	登録番号	直径	重量
-156	E28	II	3796	10.7mm	6.2g
50-157	G27	III	4855	12.1mm	9.6g
-158	D27	IV	一括	11.2mm	7.9g

第44表　鉛玉観察表(2)

(II区)

挿図番号	出土区	層位	登録番号	直径	重量
-159	H24	I	119	12.5mm	9.6g
-160	H22	II	657	11.9mm	9.4g
50-161	I 22	II	1063	11.5mm	7.9g
50-162	H21	II	1701	12.9mm	10.5g
-163	I 19	II	1910	13.3mm	10.9g
-164	G19	II	1930	12.3mm	9.3g
-165	H19	II	2221	12.2mm	9.7g
-166	H20	II	2271	12.1mm	9.1g
-167	H19	II	4339	13.0mm	11.5g
-168	J 19	II	4515	12.1mm	9.1g
50-169	I 20	III	8264	12.2mm	9.9g
-170	I 19	III	8322	11.5mm	7.8g
-171	J 20	III	8871	12.3mm	9.9g
-172	G20	III	10229	11.8mm	8.8g
-173	G19	III	10651	12.4mm	9.3g

(III区)

挿図番号	出土区	層位	登録番号	直径	重量
50-174	L 4	II	一括	11.7mm	9.0g
-175	M 4	II	一括	11.8mm	9.3g
-176	K 6	II	一括	12.2mm	10.1g
-177	M 6	II	一括	13.6mm	10.1g
-178	O 4	II	一括	12.2mm	9.2g
-179	M 6	II	一括	12.4mm	10.0g
-180	K 7	III	20023	11.8mm	8.4g
-181	SK 3	III	21449	12.5mm	9.8g

第45表　銭貨観察表(1)

挿図番号	出土区	層位	登録番号	名称	直径	厚さ	重量	材質	制作年	西暦	備考
50-182	E26	II	一括	桐1銭青銅貨	22.9mm	1.1mm	3.2g	青銅	大正8年	1919年	I区

第46表　銭貨観察表(2)

挿図番号	出土区	層位	登録番号	名称	直径	内径	厚さ	重量	材質	制作年	西暦	備考
50-183	F29	II	4042	文久永寶（真文）	27.3mm	6.0mm	1.3mm	3.8g	銅	文久3年	1863年	I区
50-184	J 21	I	表面採集	文久永寶（草文）	26.6mm	8.0mm	1.1mm	3.1g	銅	文久3年	1863年	II区
50-185	K10	I	表面採集	文久永寶（草文）	26.6mm	6.0mm	1.1mm	3.0g	銅	文久3年	1863年	III区

第47表　銭貨観察表(3)

(II区)

挿図番号	出土区	層位	登録番号	種別	直径 長・短	重量	備考
50-186	H23	II	678	雁首銭	1.9mm×1.7mm	2.1g	
51-187	J 19	II	1903	雁首銭	2.1mm×1.6mm	1.3g	
51-188	I 23	III	2386	雁首銭	2.0mm×1.8mm	2.7g	

第48表　銭貨観察表(4)

(I区)

挿図番号	出土区	層位	登録番号	種別	直径	内径	厚さ	重量	材質	初鋳年	西暦	備考
51-189	D29	I	表面採集	古寛永	24.2mm	5.5mm	1.3mm	3.5g	銅	寛永13年	1636年	試掘
51-190	E29	I	表面採集	新寛永	22.4mm	7.0mm	0.9mm	1.6g	銅	延宝元年	1673年	
51-191	E26	II	一括	古寛永	24.2mm	5.5mm	1.1mm	2.2g	銅	寛永13年	1636年	試掘
51-192	E26	II	2421	新寛永	24.6mm	6.5mm	1.0mm	3.0g	銅	延宝元年	1673年	
51-193	E26	II	2427	新寛永	23.1mm	7.0mm	1.0mm	2.2g	銅	延宝元年	1673年	
51-194	E25	II	2441	新寛永	22.8mm	6.5mm	0.9mm	2.2g	銅	延宝元年	1673年	
51-195	E26	II	2495	文銭	25.1mm	6.5mm	1.3mm	3.6g	銅	寛文8年	1668年	背「文」
51-196	F26	II	2461	新寛永	23.5mm	7.0mm	1.0mm	1.8g	銅	延宝元年	1673年	
51-197	E25	II	2594	古寛永	24.2mm	6.0mm	1.1mm	2.8g	銅	寛永13年	1636年	
51-198	E26	II	2712	古寛永	24.5mm	6.0mm	1.0mm	3.1g	銅	寛永13年	1636年	
51-199	F25	II	2932	古寛永	24.9mm	6.0mm	1.2mm	3.3g	銅	寛永13年	1636年	
51-200	E25	II	3015	古寛永	24.5mm	5.5mm	1.1mm	3.0g	銅	寛永13年	1636年	
51-201	G27	II	3138	古寛永	24.3mm	6.0mm	1.1mm	2.5g	銅	寛永13年	1636年	
51-202	G26	II	3141	古寛永	25.3mm	6.5mm	1.2mm	3.0g	銅	寛永13年	1636年	
51-203	D27	II	3175	新寛永	22.7mm	6.0mm	0.9mm	2.0g	銅	延宝元年	1673年	
51-204	E27	II	3297	古寛永	24.3mm	6.0mm	1.2mm	3.1g	銅	寛永13年	1636年	
51-205	E28	II	3316	新寛永	23.0mm	6.0mm	1.1mm	2.8g	銅	延宝元年	1673年	
51-206	E28	II	3360	古寛永	24.0mm	6.0mm	1.1mm	2.5g	銅	寛永13年	1636年	
51-207	D27	II	3397	古寛永	25.0mm	5.5mm	1.5mm	3.7g	銅	寛永13年	1636年	
51-208	F28	II	3404	古寛永	25.0mm	6.0mm	1.3mm	3.1g	銅	寛永13年	1636年	
51-209	E29	II	3414	新寛永	24.5mm	6.5mm	1.0mm	2.9g	銅	延宝元年	1673年	

第49表　銭貨観察表(5)

（I区）

挿図番号	出土区	層位	登録番号	種別	直径	内径	厚さ	重量	材質	初鋳年	西暦	備考
51-210	E27	II	3822	新寛永	24.5mm	6.5mm	1.0mm	2.3g	銅	延宝元年	1673年	
51-211	E29	II	4079	新寛永	22.4mm	7.0mm	1.0mm	2.0g	銅	延宝元年	1673年	
51-212	F26	III	5409	古寛永	24.9mm	5.5mm	1.4mm	3.1g	銅	寛永13年	1636年	
51-213	F26	III	5420	古寛永	24.1mm	5.5mm	1.2mm	3.6g	銅	寛永13年	1636年	

（II区）

挿図番号	出土区	層位	登録番号	種別	直径	内径	厚さ	重量	材質	初鋳年	西暦	備考
51-214	H23	II	495	文銭	—	—	1.1mm	(0.9g)	銅	寛文8年	1668年	背「文」
51-215	H24	II	77	新寛永	23.9mm	6.5mm	1.0mm	1.9g	銅	延宝元年	1673年	
51-216	H22	II	218	新寛永	23.2mm	7.0mm	1.0mm	2.4g	銅	延宝元年	1673年	
51-217	H24	II	616	古寛永	24.2mm	5.5mm	1.0mm	2.3g	銅	寛永13年	1636年	
51-218	H24	II	676	新寛永	23.3mm	6.5mm	0.9mm	1.3g	銅	延宝元年	1673年	
52-219	H24	II	679	新寛永	24.3mm	6.5mm	1.1mm	2.0g	銅	延宝元年	1673年	
52-220	I22	II	680	古寛永	23.0mm	6.5mm	1.0mm	2.1g	銅	寛永13年	1636年	
52-221	H23	II	848	新寛永	24.0mm	6.0mm	1.1mm	2.2g	銅	延宝元年	1673年	
52-222	H22	II	882	新寛永	22.5mm	7.0mm	0.9mm	1.7g	銅	延宝元年	1673年	
52-223	F22	II	948	新寛永	22.8mm	6.0mm	1.2mm	2.3g	銅	延宝元年	1673年	
52-224	F23	II	972	新寛永	22.9mm	7.0mm	0.9mm	2.0g	銅	延宝元年	1673年	
52-225	G20	II	1328	新寛永	—	6.0mm	1.1mm	(1.7g)	銅	延宝元年	1673年	破砕
52-226	H20	II	1471	古寛永	25.0mm	5.5mm	1.5mm	2.8g	銅	寛永13年	1636年	
52-227	J19	II	1554	新寛永	24.0mm	6.0mm	1.0mm	2.3g	銅	延宝元年	1673年	
52-228	I20	II	1746	古寛永	—	—	0.9mm	(1.1g)	銅	寛永13年	1636年	欠損
52-229	J20	II	1755	新寛永	24.6mm	6.5mm	1.0mm	2.5g	銅	延宝元年	1673年	
52-230	G19	II	1841	新寛永	22.4mm	6.0mm	1.1mm	2.3g	銅	延宝元年	1673年	
52-231	J20	II	1857	新寛永	24.4mm	6.0mm	1.0mm	2.0g	銅	延宝元年	1673年	
52-232	I19	II	1969	新寛永	24.3mm	6.5mm	1.0mm	1.9g	銅	延宝元年	1673年	
52-233	I20	II	1983	古寛永	25.4mm	6.5mm	1.2mm	2.5g	銅	寛永13年	1636年	
52-234	J17	II	2232	文銭	25.2mm	6.0mm	1.1mm	2.5g	銅	寛文8年	1668年	背「文」
52-235	I19	II	1991	古寛永	23.9mm	6.0mm	1.1mm	2.1g	銅	寛永13年	1636年	
52-236	J18	II	2226	古寛永	24.6mm	6.0mm	1.4mm	3.3g	銅	寛永13年	1636年	
52-237	J17	II	2234	新寛永	24.1mm	6.5mm	0.8mm	1.9g	銅	延宝元年	1673年	
52-238	J17	II	2325	新寛永	24.4mm	6.5mm	0.9mm	2.0g	銅	延宝元年	1673年	
52-239	J17	II	2327	古寛永	24.5mm	6.0mm	1.3mm	3.0g	銅	寛永13年	1636年	
52-240	SD1	II	701	古寛永	23.6mm	6.0mm	1.3mm	2.9g	銅	寛永13年	1636年	

（III区）

挿図番号	出土区	層位	登録番号	種別	直径	内径	厚さ	重量	材質	初鋳年	西暦	備考
52-241	N7	II	一括	古寛永	22.6mm	6.5mm	1.1mm	1.9g	銅	寛永13年	1636年	
52-242	N7	II	一括	新寛永	24.0mm	6.0mm	1.2mm	2.3g	銅	延宝元年	1673年	外圧により湾曲
52-243	O4	II	一括	文銭	26.1mm	6.0mm	1.4mm	3.4g	銅	寛文8年	1668年	背「文」
52-244	N7	II	一括	古寛永	—	—	0.9mm	(0.4g)	銅	寛永13年	1636年	残存率1/3
52-245	M6	II	一括	新寛永	22.9mm	6.5mm	1.2mm	2.4g	銅	延宝元年	1673年	
52-246	M6	II	一括	新寛永	23.1mm	6.0mm	1.3mm	2.5g	銅	延宝元年	1673年	
52-247	M6	II	一括	新寛永	22.8mm	6.0mm	1.1mm	2.1g	銅	延宝元年	1673年	
52-248	M8	II	一括	新寛永	23.6mm	5.5mm	1.2mm	1.5g	銅	延宝元年	1673年	「寶」欠
52-249	O4	II	21197	新寛永	23.6mm	7.0mm	1.1mm	2.2g	銅	延宝元年	1673年	
52-250	L3	III	21320	古寛永	25.2mm	6.5mm	1.1mm	2.4g	銅	寛永13年	1636年	
52-251	SK1	III	21145	新寛永	24.2mm	6.5mm	0.9mm	1.8g	銅	延宝元年	1673年	

第50表　銭貨観察表(6)

（I区）

挿図番号	出土区	層位	登録番号	分類	真・篆	直径	内径	厚さ	重量	材質	初鋳年	西暦	備考
53-252	E28	II	一括	元豊通寶	篆	23.5mm	6.5mm	1.2mm	2.8g	銅	北宋　元豊元年	1078年	
53-253	E27	II	3864	皇宋通寶	真	22.3mm	6.0mm	1.1mm	1.3g	銅	北宋　宝元2年	1039年	

第51表　銭貨観察表(7)

（I区）

挿図番号	出土区	層位	登録番号	分類	真・篆	直径	内径	厚さ	重量	材質	初鋳年	西暦	備考
53-254	E25	III	4819	開元通寶	—	24.8mm	7.5mm	1.1mm	2.5g	銅	唐　武德4年	621年	
53-255	F26	III	4847	元豊通寶	—	24.0mm	7.0mm	1.1mm	2.3g	銅	北宋　元豊元年	1078年	
53-256	E28	IV	14825	嘉祐通寶	真	23.5mm	7.0mm	1.2mm	2.4g	銅	北宋　嘉祐元年	1056年	
53-257	E28	IV	14846	元豊通寶	篆	22.8mm	6.8mm	1.1mm	2.2g	銅	北宋　元豊元年	1078年	

（II区）

挿図番号	出土区	層位	登録番号	分類	真・篆	直径	内径	厚さ	重量	材質	初鋳年	西暦	備考
53-258	H24	II	50	熙寧元寶	篆	23.4mm	(7.0mm)	0.9mm	1.4g	銅	北宋　熙寧元年	1068年	
53-259	G21	II	1389	(開)元通寶	—	22.5mm	6.0mm	0.8mm	1.3g	銅	唐　武德4年	621年	
53-260	H20	II	1470	聖宋元寶	真	22.9mm	6.5mm	1.0mm	2.2g	銅	北宋　建中靖国元年	1101年	
53-261	F21	II	1489	永楽通寶	—	23.1mm	(6.0mm)	1.2mm	(1.3g)	銅	明　永楽6年	1408年	
53-262	G17	II	1647	(開)元通(寶)	—	21.1	mm5.0mm	1.0mm	0.9g	銅	唐　武德4年	621年	
53-263	H19	II	2216	開元通寶	—	22.7mm	7.0mm	0.9mm	1.4g	銅	唐　武德4年	621年	
53-264	J17	II	2369	元豊通寶	篆	24.1mm	6.5mm	1.1mm	2.3g	銅	北宋　元豊元年	1078年	
53-265	I18	II	4240	熙寧元寶	篆	24.4mm	7.0mm	1.1mm	2.2g	銅	北宋　熙寧元年	1068年	
53-266	H23	III	7342	開元通寶	—	23.3mm	6.5mm	1.0mm	1.9g	銅	唐　武德4年	621年	
53-267	F20	III	8137	唐国通寶	篆	24.6mm	6.0mm	1.0mm	1.8g	銅	南唐　交泰元年	985年	
53-268	F22	III	8527	元祐通寶	篆	21.3mm	7.0mm	0.8mm	1.0g	銅	北宋　元祐元年	1086年	
53-269	J20	III	8873	永楽通寶	—	(25.7mm)	(6.5mm)	1.1mm	(1.6g)	銅	明　永楽6年	1408年	破砕
53-270	H23	III	9322	天聖元寶	真	25.1mm	6.5mm	1.3mm	2.8g	銅	北宋　天聖元年	1023年	
53-271	G19	III	9966	元豊通寶	篆	22.4mm	6.0mm	1.0mm	2.0g	銅	北宋　元豊元年	1078年	
53-272	I18	III	10799	熙寧元寶	真	23.7mm	6.0mm	1.2mm	2.8g	銅	北宋　熙寧元年	1068年	
53-273	I18	III	11251	元豊通寶	真	24.0mm	(6.5mm)	1.3mm	(1.7g)	銅	北宋　元豊元年	1078年	
53-274	G20	III	11791	皇宋通寶	篆	23.0mm	(7.0mm)	1.2mm	(1.9g)	銅	北宋　宝元2年	1039年	
53-275	I18	III	12084	朝鮮通寶	楷	23.2mm	6.0mm	1.2mm	2.3g	銅	李朝　世宗5年	1423年	
53-276	I20	III	12688	開元通寶	—	23.0mm	7.5mm	0.8mm	1.4g	銅	唐　武德4年	621年	
53-277	G20	IV	11585	政和通寶	真	23.5mm	(6.5mm)	1.3mm	1.8g	銅	北宋　政和元年	1111年	
53-278	F20	IV	13209-1	祥符元寶	—	24.0mm	6.0mm	1.1mm	2.6g	銅	北宋　大中祥符元年	1008年	
53-279	F20	IV	13209-2	元符通寶	真	24.2mm	6.0mm	1.0mm	2.6g	銅	北宋　元符元年	1098年	
53-280	F20	IV	13209-3	祥符元寶	—	23.5mm	6.5mm	1.0mm	(1.9g)	銅	北宋　大中祥符元年	1008年	
53-281	F20	IV	13209-4	祥符元寶	—	23.5mm	5.0mm	1.3mm	2.1g	銅	北宋　大中祥符元年	1008年	
53-282	F20	IV	13210	端平元寶	—	23.0mm	6.0mm	0.9mm	1.9g	銅	南宋　端平元年	1234年	
53-283	H24	IV	13824	熙寧元寶	真	24.0mm	7.5mm	1.2mm	2.1g	銅	北宋　熙寧元年	1068年	
53-284	G21	IV	14154	永楽通寶	—	23.8mm	5.5mm	1.3mm	(1.4g)	銅	明　永楽6年	1408年	
53-285	H21	IV	14238	開元通寶	—	24.7mm	6.5mm	1.2mm	(1.7g)	銅	唐　武德4年	621年	
53-286	H25	IV	14343	祥符通寶	—	24.2mm	6.5mm	1.2mm	(2.0g)	銅	北宋　大中祥符2年	1009年	
54-287	I18	IV	15286	咸平元寶	—	24.4mm	5.5mm	1.0mm	(1.9g)	銅	北宋　咸平元年	998年	
54-288	F19	IV	13997	紹聖元寶	篆	22.4mm	7.5mm	0.9mm	1.8g	銅	北宋　紹聖元年	1094年	

（III区）

挿図番号	出土区	層位	登録番号	分類	真・篆	直径	内径	厚さ	重量	材質	初鋳年	西暦	備考
54-289	—	—	—	政和通寶	真	23.9mm	6.5mm	1.1mm	(1.7g)	銅	北宋　政和元年	1111年	
54-290	M8	II	一括	嘉祐通寶	真	23.7mm	7.0mm	0.9mm	(1.5g)	銅	北宋　嘉祐元年	1056年	
54-291	K6	III	20901	開元通寶	—	24.5mm	7.0mm	1.0mm	1.9g	銅	唐　武德4年	621年	
54-292	M4	III	21016	洪武通寶	—	24.3mm	6.0mm	1.5mm	3.5g	銅	明　洪武元年	1368年	
54-293	N5	III	21295	元祐通寶	真	24.2mm	7.0mm	1.0mm	1.7g	銅	北宋　元祐元年	1086年	

第52表　銭貨観察表(8)

挿図番号	出土区	層位	登録番号	分類	真・篆	直径	内径	厚さ	重量	材質	初鋳年	西暦	備考
54-294	H20	III	11960	不明	—	20.3mm	7.5mm	0.6mm	(0.6g)	銅	—	—	摩滅
54-295	I19	III	12787	不明	—	20.6mm	7.0mm	0.8mm	(0.8g)	銅	—	—	摩滅
54-296	H23	IV	15650	不明	—	—	(5.5mm)	0.6mm	(0.7g)	銅	—	—	摩滅

（小塩　康真）

第6節　石　　製　　品

1．器種の概要と記述の形式

石鏃20点、磨製石鏃1点、有抉石器1点、敲石3点、打製石斧2点、磨製石斧1点、石錐1点、砥石8点、石核3点の他、紡錘車1点、石製玉1点を確認した。器種ごとの分類及び法量の計測法については以下のとおりである。

「石鏃」は図化した20点について次のとおり分類した。石材はチャート15点、流紋岩質溶岩（下呂石）4点、黒曜岩1点であった。形態に関しては基部に着目して、次のように分類する。

Ⅰ類　基部に抉りの入るもので、下記のａ～ｅに細分した。

Ⅰａ類　丸みを帯びた深い抉り込みが入るもの

Ⅰｂ類　「く」の字状の抉り込みが入るもの

Ⅰｄ類　凹状のわずかな抉り込みが入るもの

Ⅰｅ類　深く鋭角的な抉り込みが入るもの

Ⅱ類　いゆる平基鏃であり、基部が直線状をなすもの

Ⅲ類　いわゆる円基鏃であり、基部側が丸みを帯びて突出するもの

Ⅳ類　いわゆる有茎鏃であり、基部に茎をもつもの

各部の法量の計測法は第55図に示した。また、機能部の刺突能力を知る手ががりとして先端角と先端部の厚さを求め、計測表に示した。算出方法は石鏃の先端角（θ）を2等分する方向へ法線をおろし、先端から5㎜の位置を決めた。その点で法線と直交する線上での石鏃の幅（w）を計測した。三角関数を用いて、

$$\tan\frac{\theta}{2}=\frac{w/2}{5}$$

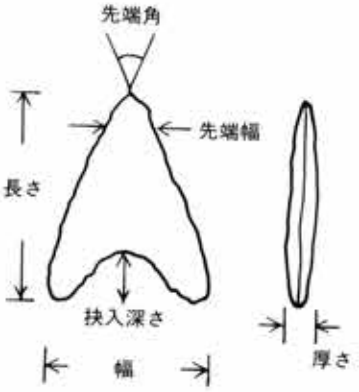
から先端角（θ）を算出した。また、同じ点で厚さを計測し先端部の厚さとした。磨製石鏃も同様に算出した。

「有抉石器」は主要剥離面が見られる面を裏面とし、刃部を下にして基部から刃部までの最大寸を長さとし、刃部の水平方向の最大寸を幅とした。

「敲石」は敲打部位のある面を正面として縦長になるように置き、縦寸・横寸の最大値をそれぞれ長さ、幅とした。

「石斧」「石錐」は主要剥離面が見られる面を裏面とし、刃部を下にして頭部から刃部までの最大寸を長さとし、水平方向の最大寸を幅とした。

「砥石」は機能面を正面にし、運動方向が上下方向になるようにした。研磨痕が見られる面を砥面とした。砥面が複数の場合は作業



第55図　石鏃の計測法模式図

が顕著に見られる面を正面とした。縦長になるように置き、縦寸・横寸の最大値をそれぞれ長さ、幅とした。

「石核」は最も顕著な作業面を正面とし、打面が上になるようにした。その面での縦寸・横寸・奥行き寸の最大値をそれぞれ長さ、幅、厚さとした。

「紡錘車」は回転方向に対する側面のうち、孔が見られる方を正面とした。円形のため最大径を長さとした。

「石製玉」は窪みの見られる面を正面とし、球の最大径を長さとした。

2．各遺構面の遺物

a、Ⅰ・Ⅱ区第1遺構面

石鏃（1～5）

1は側縁部をやや深く調整され先端部が細長くなっている。2は脚部が少し湾曲している。3は基部に半円形の深い抉りが見られる。5は茎の断面が円形で、端部は鋭く尖っている。

磨製石鏃（21）

刃部先端は鋭角的ではないが、全体に薄く側縁部がシャープに調整されている。刺突能力は高いものと考えられる。基部のやや内側には研磨によってあけられた径2㎜の孔の痕が見られる。

有抉石器（22）

刃部を有し切る・掻くなどの機能が想定される石器である。刃部と基部の境に左右から細かい調整が加えられ、深い抉りが見られる。刃部は素材の縁辺の一部を利用し細かい調整はあまり見られない。

石錐（29）

石材は黒雲母が目立つ流紋岩質溶岩（下呂石）である。主要剥離面の一側縁を折り取り、錐部を棒状に加工している。機能部断面形はほぼ台形であるため、主な調整は裏面からのものである。

砥石（30、31）

30は手持ち砥石と思われる。正面中央の砥面には研磨痕が顕著に見られる。31は置砥石である。正面の一段高くなった部分に砥面があり、3方向以上の研磨痕が見られる。

b、Ⅰ・Ⅱ区第2遺構面

石鏃（6～12）

6は側縁部中程で少し抉りを入れ先端部を長細く調整してある。7は石材に黒曜岩が使われている。先端部は背面から腹面方向への折損が見られる。8は主要剥離面が大きく残る。10は脚部が外側に広がる形で、抉りの最深部は丸みがある。11は茎部の断面が扁平である。12は茎部の両側の抉りが小さく、茎部の断面は菱形に近い。

打製石斧（26、27）

26は全体を長方形に整えた石斧である。素材の面を多く利用し、左側縁に大きな剥離を作り出している。両側縁の抉りはわずかである。刃部が折損しているため、刃部の調整は不明である。27は全体の形状が楕円形に近い石斧である。鋭利な刃部をもち、裏面を外側にして湾曲している。左側縁がシャープになるような調整が見られる。

砥石（32～35）

32は手持ち砥石である。棒状の石器の転用の可能性も考えられる。右側面に細長い砥面が見られる。33は置砥石である。正面の砥面は多方向の研磨痕が見られる。34は手持ち砥石である。正面は素材面の傾斜を利用して砥面を3面使用している。35は置き砥石である。4方向以上の研磨痕が見られる。

石核（38）

良質で緻密なチャート製である。賽子状の分割礫を素材とする。打面、作業面ともに節理面で、打面は1面である。貝殻状の小さな剥片を剥離している。

石製玉（42）

石材にアプライトを利用した石製の玉である。整形、研磨によりほぼ球形に調整されている。1ヶ所に窪みが見られ、不完全な穿孔の痕と思われる。

c、I・II区第3遺構面

石鏃（13～18）

13は側縁部、抉入部ともにほぼ直線的な調整が見られる。15は未製品とも思われる。16は大型の石鏃で、茎部の抉りは浅く端部は尖らせてある。茎部の断面は扁平である。17の基部に表面から裏面方向への折損が見られる。18は茎部の断面が浅い菱形で、端部は尖っている。

砥石（36）

置砥石である。正面、裏面ともに使用されている。それぞれ2方向以上の研磨痕が見られる。

石核（39、40）

39は分割礫を素材とし打面を2面もつ。いずれも節理面ないし、風化した節理面である。90度の打面転移が見られるが、剥離面との切り合いが見られないため先後関係は不明である。40は分割礫を素材としている。小さな剥片を剥離している。

d、III区第II層

紡錘車（41）

穿孔が貫通していない未製品である。残存する部分の最大孔径は7.0㎜で、研磨の痕が見られる。

e、III区第1遺構面

石鏃（19、20）

19は側縁部に凸状の部分が見られる。20は機能部に近い部分まで厚みがあり、重心が先端部よりになっている。茎部の断面は扁平である。

敲石（23～25）

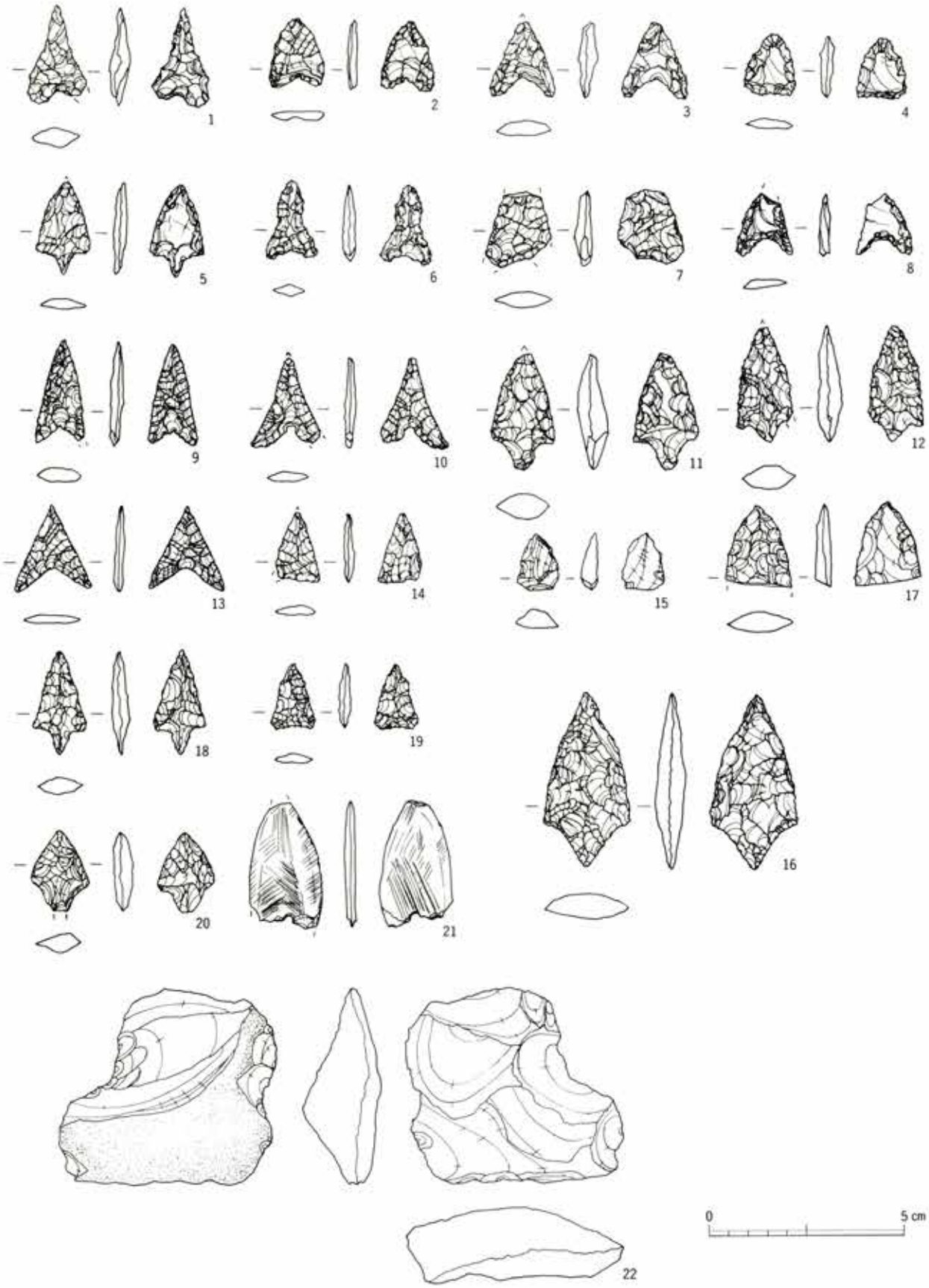
23は正面中央部に深さ2㎜の敲打痕をもつ。24は正面中央部に深さ1㎜の小さめの敲打痕をもつ。25は正面中央部に深さ3㎜以内の敲打痕を複数もつ。裏面中央部にも深さ2㎜の敲打痕をもつ。

磨製石斧（28）

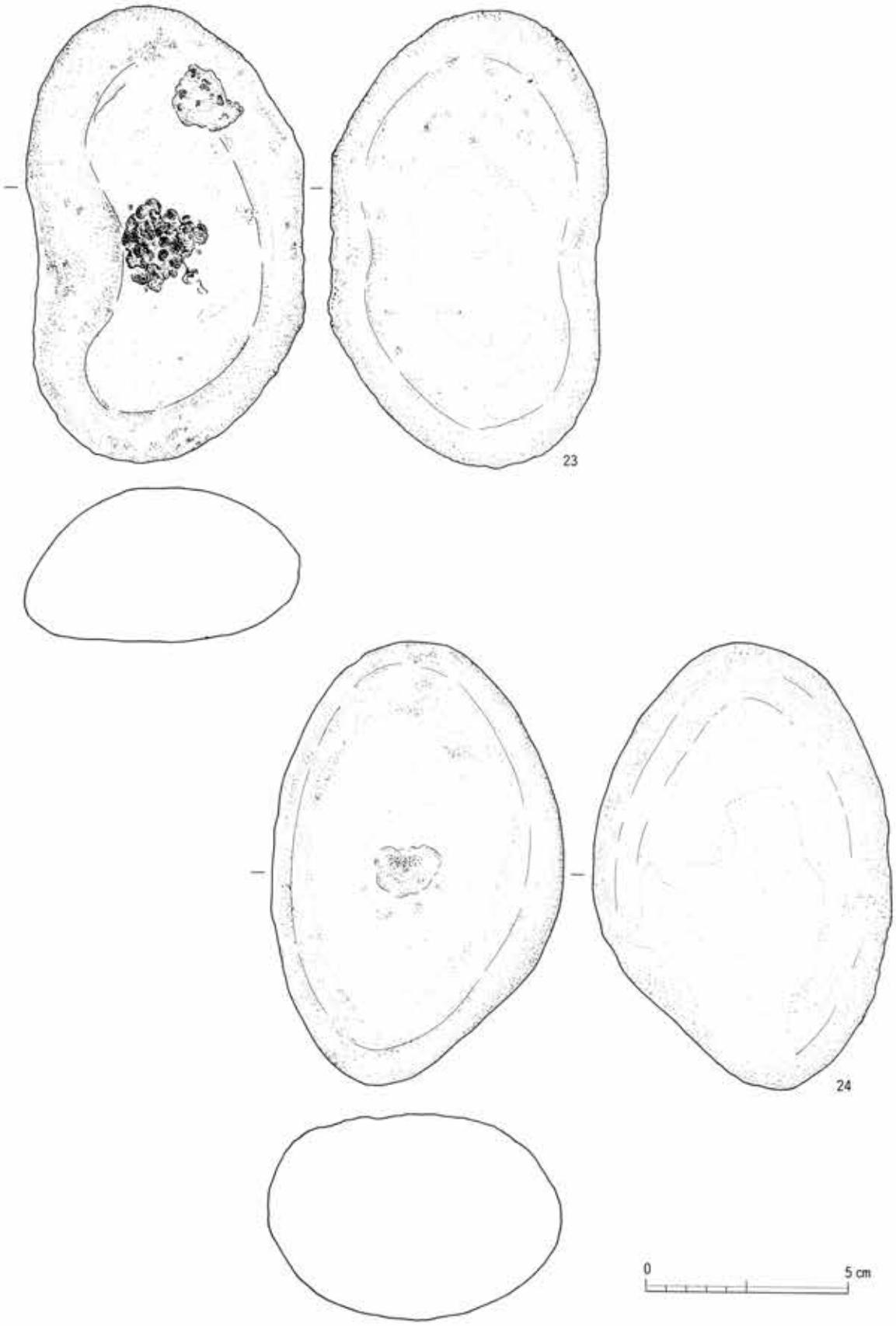
蛤刃石斧である。基部よりも刃部の幅が狭い。刃縁には縦方向の擦痕が顕著に見られる。

砥石（37）

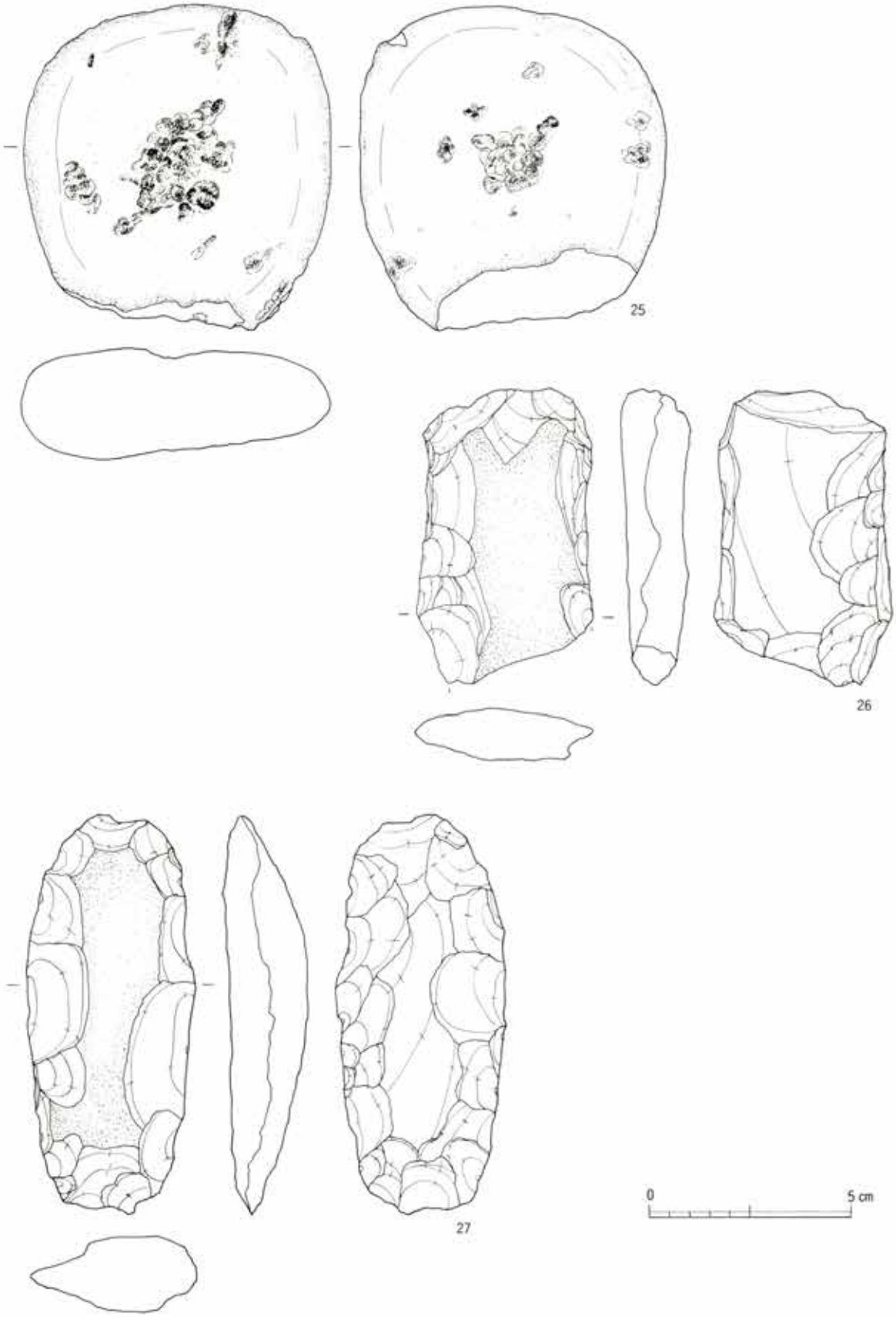
素材の形状を利用した手持ち砥石である。



第56図　出土遺物(31)

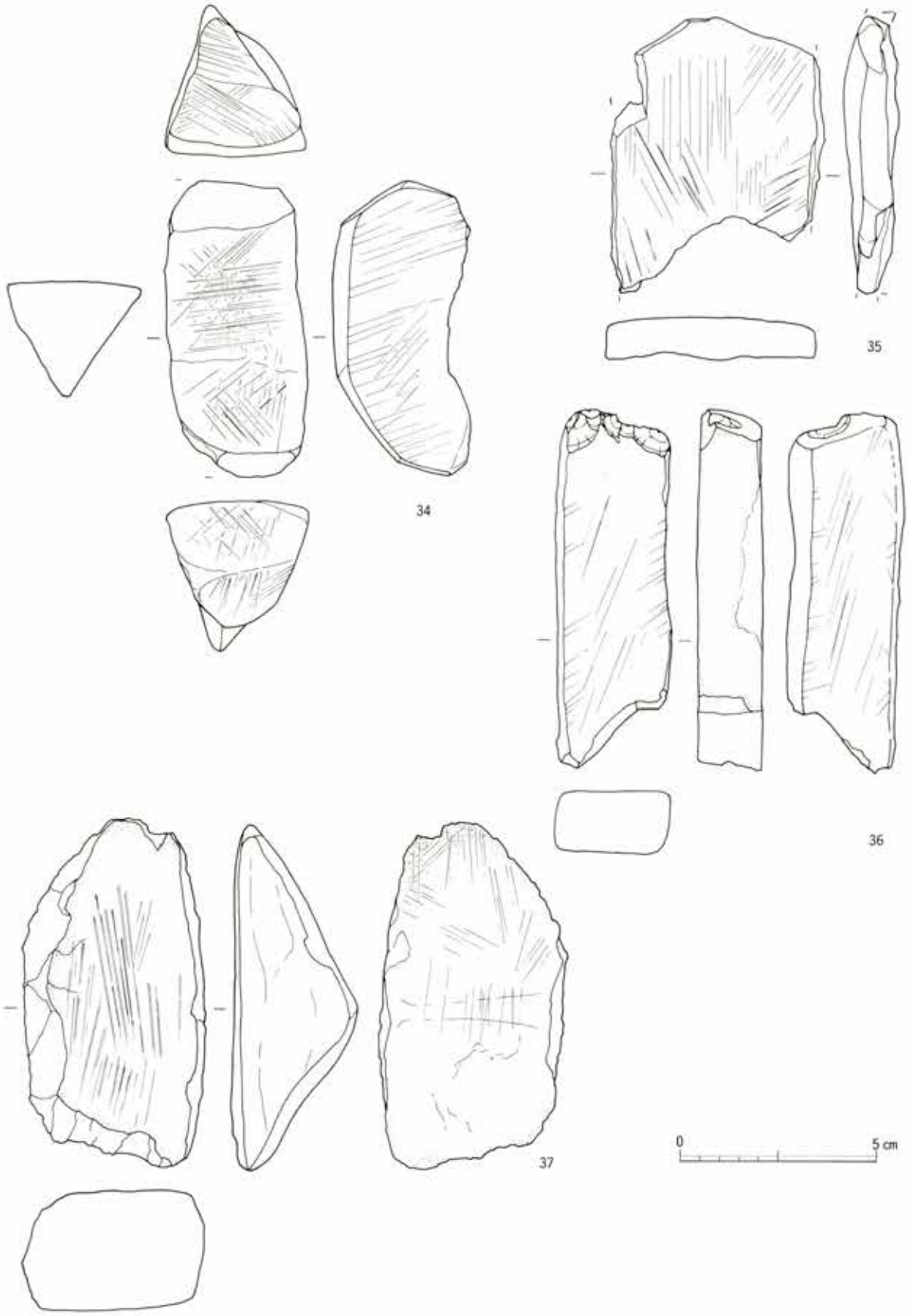


第57図　出土遺物(32)

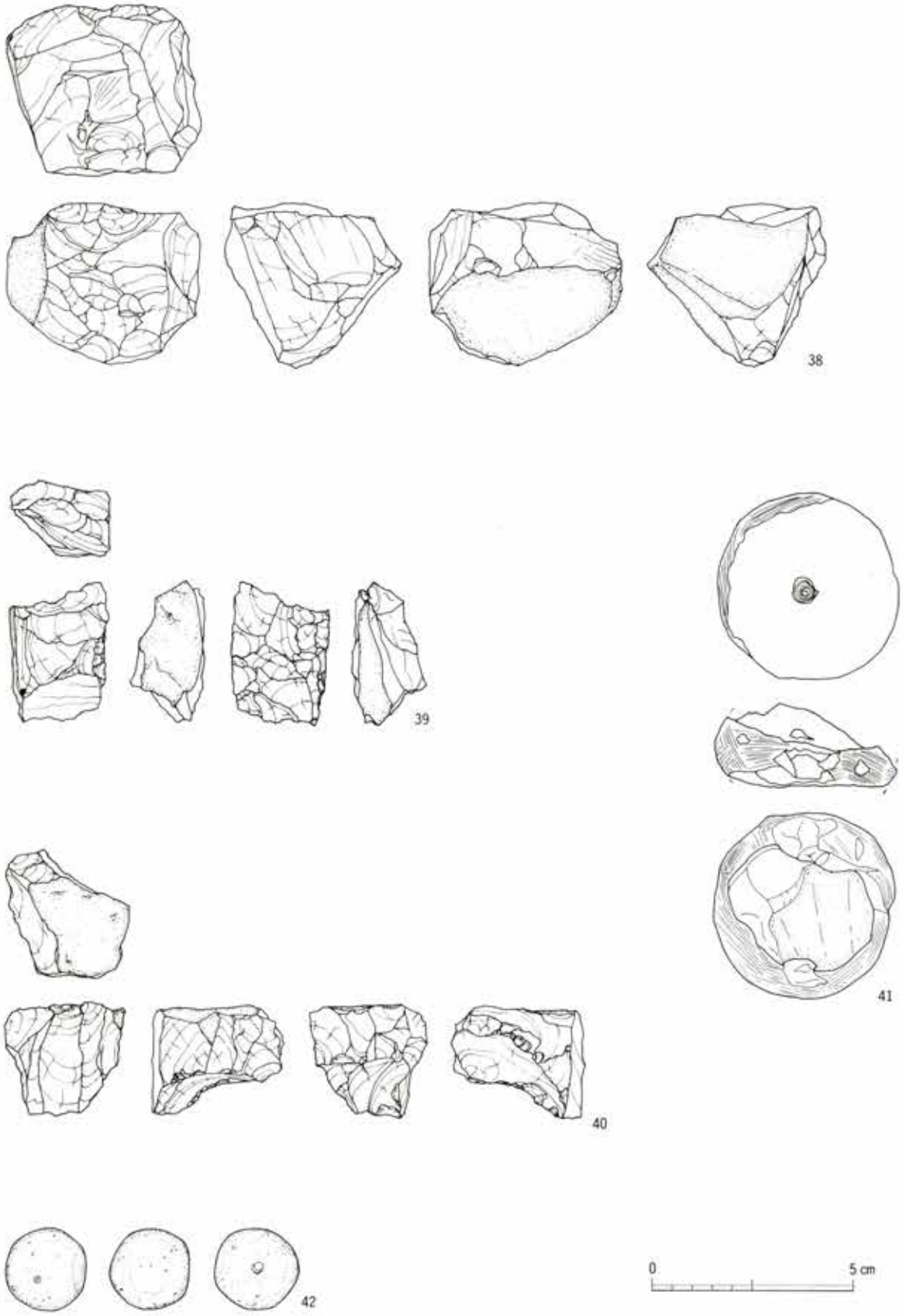


第58図 出土遺物(33)

第59図　出土遺物(34)



第60図 出土遺物(35)



第61図　出土遺物㊱

第53表　石鏃計測表

挿図番号	地区 層位	石材	法量 長さmm	幅mm	厚さmm	質量g	抉深(mm)	先端角(°)	先端部の厚さmm	平面形による分類	備考
第56図 1	II区I21 II	チャート	26	15	5	1.0	2.0	39	2.0	Ia類	
2	II区J17 II	チャート	19	14	2	0.6	2.5	77	2.0	Ib類	
3	II区J18 II	流紋岩質溶岩(下呂石)	20	17	4	0.8	5.0	70	3.0	Ib類	
4	I区E29 II	チャート	16	13	3	0.7	0.5	87	3.0	II類	
5	II区G21 II	チャート	24	14	3	0.7	−5.0	67	2.0	IV類	
6	II区F21 III	チャート	21	14	3	0.5	2.0	62	2.0	Ia類	
7	II区H24 III	黒曜岩	(20)	17	4	(1.2)	1.0	100	3.0	Ia類	折損あり
8	I区E25 III	チャート	(17)	14	2	(0.4)	4.0	84	1.8	Ib類	折損あり
9	I区C29 III	チャート	27	13	4	0.9	3.5	48	1.7	Ib類	
10	II区F20 III	チャート	(24)	(18)	3	(0.6)	5.0	46	1.5	Ie類	折損あり
11	II区G17 III	流紋岩質溶岩(下呂石)	30	17	7	2.8	−7.5	74	4.0	IV類	
12	II区G21 III	チャート	30	(15)	6	(2.3)	−4.0	66	3.0	IV類	折損あり
13	II区F20 IV	チャート	22	20	2	0.6	5.5	53	1.5	Ib類	
14	I区E25 IV	流紋岩質溶岩(下呂石)	19	(11)	2	(0.4)	—	53	1.3	II類	折損あり
15	I区E27 IV	チャート	15	11	5	0.7	—	77	2.5	II類	
16	I区D26 IV	チャート	46	23	7	6.0	−11.0	62	3.0	IV類	
17	I区D26 IV	流紋岩質溶岩(下呂石)	(22)	(17)	5	(1.7)	—	84	3.0	IV類	折損あり
18	II区J20 IV	チャート	27	14	4	1.1	−6.0	48	2.5	IV類	
19	III区L5 III	チャート	(17)	(11)	3	(0.5)	1.0	62	2.0	II類	折損あり
20	III区L10 III	チャート	21	15	5	1.4	—	77	4.5	IV類	

第54表　磨製石鏃計測表

挿図番号	地区 層位	石材	法量 長さmm	幅mm	厚さmm	質量g	孔径(mm)	先端角(°)	先端部の厚さmm	備考
第56図 21	II区G21 II	凝灰岩	33	19	3	(2.0)	2.0	84	2.1	刃部と基部に折損あり

第55表　有抉石器計測表

挿図番号	地区 層位	石材	法量 長さmm	幅mm	厚さmm	質量g	備考
第56図 22	II区G24 II	泥岩	58	53	20	52.5	

第56表　敲石計測表

挿図番号	地区 層位	石材	法量 長さmm	幅mm	厚さmm	質量g	敲打部位	備考
第57図 23	III区L4 III	安山岩	116	69	39	423.7	正面中央部	
24	III区L3 III	安山岩	112	74	53	660.0	正面中央部	
第58図 25	III区L4 III	砂岩	(83)	79	28	(259.0)	正面裏面各中央部	折損あり

第57表　打製石斧計測表

挿図番号	地区層位	石材	法量				備考
			長さmm	幅mm	厚さmm	質量g	
第58図 26	II区G19 III	泥岩	(76)	45	14	(81.8)	折損あり
27	II区I19 III	砂岩	102	44	20	96.0	

第58表　磨製石斧計測表

挿図番号	地区層位	石材	法量				備考
			長さmm	幅mm	厚さmm	質量g	
第59図 28	III区L4 III	安山岩	(83)	44	34	(198.0)	折損あり、磨製蛤刃石斧

第59表　石錐計測表

挿図番号	地区層位	種別	石材	法量				備考
				長さmm	幅mm	厚さmm	質量g	
第59図 29	I区F26 II	石錐	流紋岩質溶岩（下呂石）	27	12	3	1.4	

第60表　砥石計測表

挿図番号	地区層位	石材	法量				砥面数	備考
			長さmm	幅mm	厚さmm	質量g		
第59図 30	I区E28 II	砂岩	101	30	26	109.6	2	折損あり
31	II区H21 II	凝灰岩	(59)	47	5	(14.2)	1	折損あり
32	I区D25 III	砂岩	(89)	27	28	(74.2)	6	折損あり
33	II区F20 III	泥岩	70	36	17	55.0	3	折損あり
第60図 34	II区H19 III	砂岩	78	35	30	90.4	4	
35	II区I20 III	泥岩	(72)	53	17	(56.9)	1	折損あり
36	I区E29 IV	安山岩	(93)	30	17	(90.1)	2	折損あり
37	III区N4 III	凝灰岩	91	48	32	144.8	3	

第61表　石器類計測表

挿図番号	地区層位	種別	石材	法量				備考
				長さmm	幅mm	厚さmm	質量g	
第61図 38	I区E27 III	石核	チャート	42	44	42	96.8	
39	II区H17 III	石核	チャート	36	19	18	17.4	
40	II区I20 III	石核	チャート	33	31	31	26.1	
41	III区L5 II	紡錘車	石英斑岩	46	—	21	37.9	孔径7.0mm、上部折損
42	I区E28 III	石製玉	アプライト	21	—	—	10.3	

（大橋　弘志）

第５章　自然科学分析

第１節　西屋敷遺跡の花粉分析

１．はじめに

岐阜県関市の池尻・広見地区において試掘調査が行われ、Ｉ区Ｃ29から採取された試料を用いて、池尻・広見地区周辺の古植生を復元する目的で花粉分析を行った。

２．試料と方法

花粉化石群集の検討は、泥炭と黒色土の２試料について行った。泥炭は、砂が卓越する草本質泥炭層より採取した試料で、Ｉ区Ｃ29の第９トレンチの南端から約４ｍ北よりの地点の西壁より採取した。黒色土はII区Ｇ23の第２トレンチより採取したシルト質粘土である。この泥炭と黒色土の年代に関しては、放射性炭素年代測定により今後明らかになると考える。また、参考として、Ｃ29の第９トレンチの南端から約15m北よりの地点（仮地点名Ａ）の西壁より９試料を採取し、分析を行った。Ａ地点の堆積物の記載を以下に示すと、Ｉ層（試料１）は赤褐色粘土質シルトでレキ（最大径30㎜）をまばらに含む。II層（試料２）は暗褐色粘土質シルトでレキ（最大径20㎜）をまばらに含む。III層（試料３）は赤褐色粘土質シルト～シルト質粘土でレキ（最大径20㎜）を少し含み、炭片も含む。また、植物根が目立ち、山茶碗（13世紀）が出土している。IV層（試料４）は暗褐色粘土質シルト～シルト質粘土でレキ（最大径15㎜）をまばらに含み、植物根が目立ち、山茶碗（13世紀）が出土している。Ｖ層は２層に細分され、Ｖａ層（試料５）は黒褐色粘土でレキ（最大径50㎜）をまばらに含み、植物根も混じる。Ｖｂ層（試料６）は黒色粘土でレキ（最大径10㎜）を少し含み、植物遺体もまばらに含む。VI層（試料７）は黒色粘土でレキ（最大径10㎜）をまばらに含む。VII層は砂レキ層で多数の角レキ（最大径60㎜）からなる。VIII層（試料８）は黒色粘土でレキ（最大径20㎜）を少し含む。IX層（試料９）は黒灰色レキ混じり粘土でレキ（最大径30㎜）を多く含む。Ｘ層は灰白色レキ混じり粘土でレキ（最大径20㎜）を多く含む。なお、泥炭を採取した草本質泥炭層は、層位的には、このＡ地点のＶ層の直下に相当する。

花粉化石の抽出は、試料２～５ｇ程度を10％水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、篩選別による植物遺体などの除去および傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.15に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとに、樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉・シダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として、各分類群の出現率を百分率で算出した。ただし、クワ科、バラ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分

第62表　池尻・広見地区　Ⅰ区C29（A地点）の花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9
樹木										
マキ属	*Podocarpus*	2	-	-	-	4	-	2	3	-
モミ属	*Abies*	1	5	8	2	21	2	2	7	13
ツガ属	*Tsuga*	9	15	26	1	51	6	5	7	53
トウヒ属	*Picea*	-	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	382	473	100	29	74	6	11	23	12
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	10	16	8	1	35	-	1	5	10
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	4	1	15	8	30	23	45	91	45
スギ属	*Cryptomeria*	240	85	9	18	37	27	7	3	1
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.－C.	18	4	1	12	1	65	7	7	5
ヤナギ属	*Salix*	-	-	1	1	-	-	-	1	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	-	1	1	-	-	-	1	-
ノグルミ属	*Platycarya*	-	-	1	-	-	-	-	-	-
サワグルミ属	*Pterocarya*	-	-	-	2	-	-	-	1	-
クルミ属	*Juglans*	1	-	-	-	-	-	-	-	1
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya*-*Juglans*	-	1	-	2	4	2	-	4	7
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus* - *Ostrya*	10	12	27	18	21	11	4	36	18
ハシバミ属	*Corylus*	1	-	-	1	-	-	-	-	20
カバノキ属	*Betula*	5	7	10	8	4	7	-	2	3
ハンノキ属	*Alnus*	13	26	14	9	7	5	9	37	1298
ブナ属	*Fagus*	5	4	22	7	14	7	-	12	27
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	28	31	39	31	16	105	98	57	199
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	9	20	10	41	41	57	14	116	1
クリ属	*Castanea*	4	13	5	4	10	9	19	4	-
シイノキ属	*Castanopsis*	11	14	2	6	10	21	12	13	1
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus* - *Zelkova*	5	1	7	4	1	8	7	9	21
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis*-*Aphananthe*	1	1	1	2	-	1	1	11	12
ヤドリギ属	*Viscum*	-	-	-	-	-	1	1	2	-
フサザクラ属	*Euptelea*	-	-	1	-	-	-	-	-	-
カツラ属	*Cercidiphyllum*	-	-	-	1	-	1	-	2	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	1	-	-	-	-	-	-
キハダ属	*Phellodendron*	-	-	-	-	-	-	-	-	1
アカメガシワ属	*Mallotus*	1	1	1	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	*Rhus*	3	-	-	1	-	-	-	1	-
モチノキ属	*Ilex*	2	1	5	8	5	1	-	-	4
ニシキギ科	Celastraceae	-	-	-	1	-	-	-	-	-
カエデ属	*Acer*	2	-	1	1	-	2	-	3	12
トチノキ属	*Aesculus*	-	2	-	2	-	2	2	2	-
ブドウ属	*Vitis*	-	-	-	2	-	-	-	-	-
ツタ属	*Parthenocissus*	-	-	-	-	-	-	-	2	-
ヒサカキ属近似種	cf. *Eurya*	-	1	-	1	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	-	-	1	-	1	-
ツツジ科	Ericaceae	4	2	8	1	-	-	-	-	-
ハイノキ属	*Symplocos*	-	-	-	1	-	-	-	2	1
エゴノキ属	*Styrax*	1	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	20
トネリコ属	*Fraxinus*	-	-	-	-	-	-	-	-	45
クサギ属	*Clerodendron*	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ガマズミ属	*Viburnum*	-	-	-	-	-	-	-	-	1
タニウツギ属	*Weigela*	-	-	1	-	-	-	-	-	-
草本										
ガマ属	*Typha*	-	-	-	-	-	-	-	-	1
オモダカ属	*Sagittaria*	-	-	-	1	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	1230	866	1199	470	382	190	71	88	85
カヤツリグサ科	Cyperaceae	56	5	17	21	17	39	7	16	6
ホシクサ属	*Eriocaulon*	-	-	-	7	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	*Monochoria*	-	1	1	1	2	1	-	-	-
ユリ科	Liliaceae	-	-	-	-	1	1	1	21	-
クワ科	Moraceae	1	11	22	17	-	6	1	2	-
ギシギシ属	*Rumex*	-	-	-	-	-	1	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	5	-	1	-	3	1	-	15	21
タデ属イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ソバ属	*Fagopyrum*	5	3	10	-	-	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	1	2	2	1	-	1	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	16	1	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	3
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	1	1	2	-	-	-	-	2
タケニグサ属	*Macleaya*	-	1	1	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	105	26	7	13	1	-	1	1	-
キジムシロ属近似種	cf. *Potentilla*	2	-	1	-	-	-	-	1	-
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	-	1	-	-	-	-	-	-	-
他のバラ科	other Rosacene	1	1	-	2	-	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	9	14	2	-	-	49	1	13	9
フウロソウ属	*Geranium*	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ツリフネソウ属	*Impatiens*	-	-	-	-	-	1	-	-	-
キカシグサ属	*Rotala*	-	-	-	6	-	-	-	1	-
アリノトウグサ属	*Haloragis*	8	11	68	79	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	2	-	3	1	1	3	3	13	2
シソ科	Labiatae	1	2	-	-	-	1	-	-	1
ナス属近似種	cf. *Solanum*	-	1	3	2	-	-	-	-	2
キツネノマゴ属	*Justicia*	4	1	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	*Patrinia*	-	-	-	-	2	1	1	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	4	9	14	15	13	49	6	20	14
他のキク亜科	other Tubuliflorae	34	20	19	9	24	12	9	11	47
タンポポ亜科	Liguliflorae	81	37	69	24	21	1	8	6	2
シダ植物										
サンショウモ	*Salvinia natans* (L.) All.	1	-	-	-	-	-	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	17	7	17	11	6	7	12	15	64
三条型胞子	Trilete spore	6	13	21	20	8	16	58	4	2
樹木花粉	Arboreal pollen	772	736	325	228	386	370	248	467	1832
草本花粉	Nonarboreal pollen	1565	1013	1440	672	468	356	111	208	196
シダ植物胞子	Spores	24	20	38	31	14	23	70	19	66
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	2361	1769	1803	931	868	749	429	694	2094
不明花粉	Unknown pollen	31	20	22	15	20	14	20	43	39

第63表　G23黒色土とC29泥炭の花粉化石一覧表

和名	学名	G23 黒色土	C29 泥炭
樹木			
マキ属	*Podocarpus*	5	-
モミ属	*Abies*	17	4
ツガ属	*Tsuga*	52	1
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	90	1
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	4	3
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	46	2
スギ属	*Cryptomeria*	38	10
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	4	12
サワグルミ属	*Pterocarya*	1	-
クルミ属	*Juglans*	1	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	5	1
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	61	3
カバノキ属	*Betula*	13	2
ハンノキ属	*Alnus*	20	-
ブナ属	*Fagus*	20	2
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	80	147
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	96	72
クリ属	*Castanea*	16	14
シイノキ属	*Castanopsis*	16	5
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	14	5
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	2	1
シラキ属	*Sapium*	-	1
モチノキ属	*Ilex*	7	-
ヒサカキ属近似種	cf. *Eurya*	1	1
ハイノキ属	*Symplocos*	-	1
草本			
オモダカ属	*Sagittaria*	1	1
イネ科	Gramineae	1260	21
カヤツリグサ科	Cyperaceae	60	4
ホシクサ属	*Eriocaulon*	3	-
ミズアオイ属	*Monochoria*	4	-
ユリ科	Liliaceae	5	-
アヤメ科	Iridaceae	2	-
クワ科	Moraceae	9	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	5	-
ソバ属	*Fagopyrum*	2	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	-
キンポウゲ科	Ranunculaceae	1	-
アブラナ科	Cruciferae	2	-
ウメバチソウ属近似種	cf. *Parnassia*	-	1
マメ科	Leguminosae	1	5
アリノトウグサ属	*Haloragis*	20	-
セリ科	Umbelliferae	-	2
ヨモギ属	*Artemisia*	14	2
他のキク亜科	other Tubuliflorae	33	2
タンポポ亜科	Liguliflorae	22	-
シダ植物			
単条型胞子	Monolete spore	23	2
三条型胞子	Trilete spore	19	1
樹木花粉	Arboreal pollen	609	288
草本花粉	Nonarboreal pollen	1446	39
シダ植物胞子	Spores	42	3
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	2097	330
不明花粉	Unknown pollen	46	9

類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

３．花粉化石群集の記載

［Ｃ29泥炭の花粉化石群集］

出現した分類群数は、樹木花粉19、草本花粉９、形態分類で示したシダ植物胞子２である。樹木花粉の占める割合は、おおむね90％と高率である。その中で、コナラ属コナラ亜属が50％程度で多産する。次いで、コナラ属アカガシ亜属が25％で出現する。他に、モミ属、スギ属、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、クマシデ属―アサダ属、クリ属、シイノキ属、ニレ属―ケヤキ属などが５％未満で出現する。草本花粉では、オモダカ属、イネ科、カヤツリグサ科、クワ科、ウメバチソウ属近似種、マメ科などが低率で出現する。

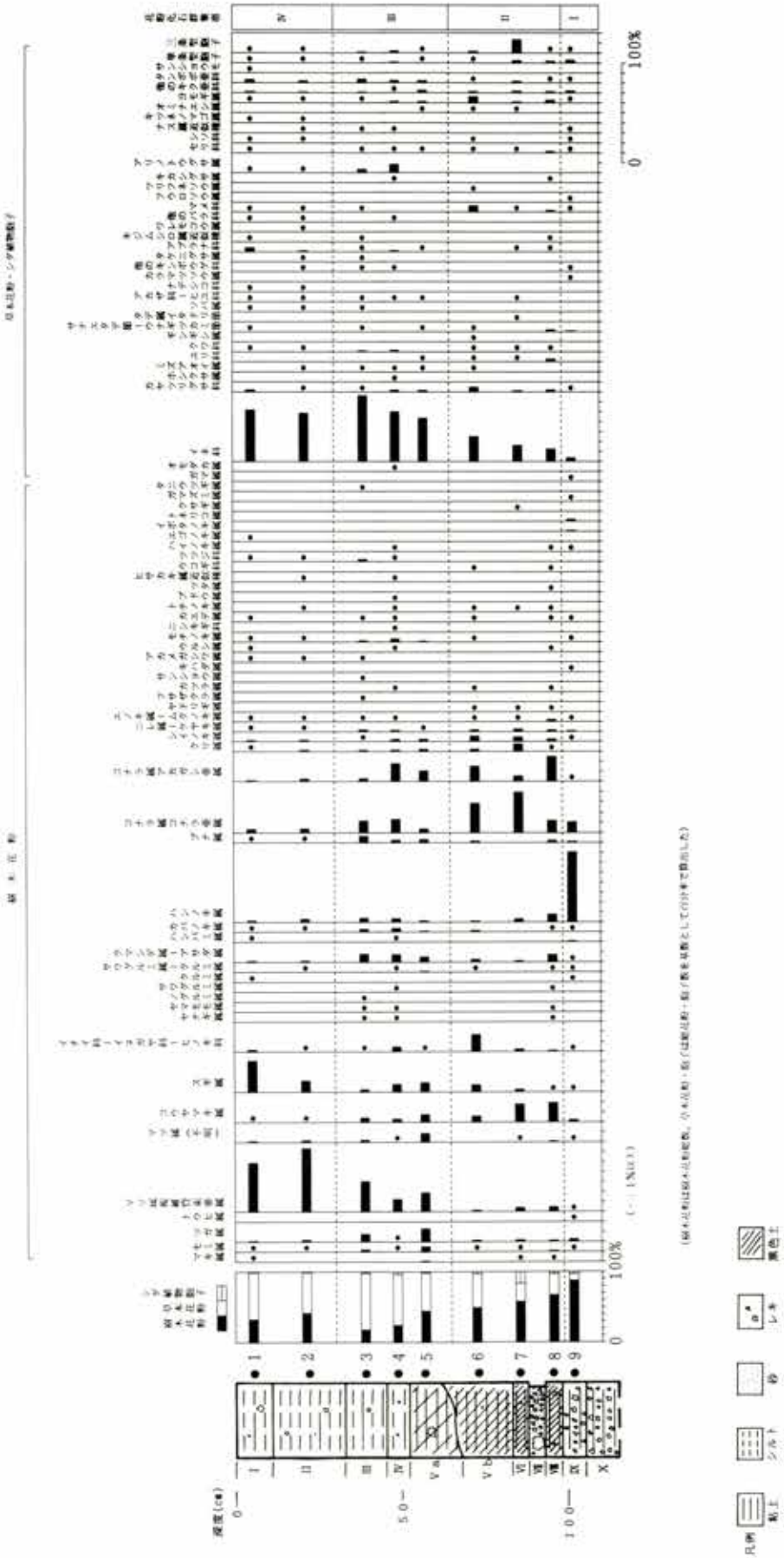
［Ｇ23黒色土の花粉化石群集］

出現した分類群数は、樹木花粉21、草本花粉19、形態分類で示したシダ植物胞子２である。樹木花粉の占める割合は、30％程度と低率である。その中で、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属といった分類群が15％前後で比較的多産する。他に、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属、クマシデ属―アサダ属なども６～10％程度で比較的目立った出現をする。草本花粉では、イネ科が60％程度で圧倒的に多産する。他に、オモダカ属、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ソバ属、アリノトウグサ属、他のキク亜科、タンポポ亜科などが低率で出現する。

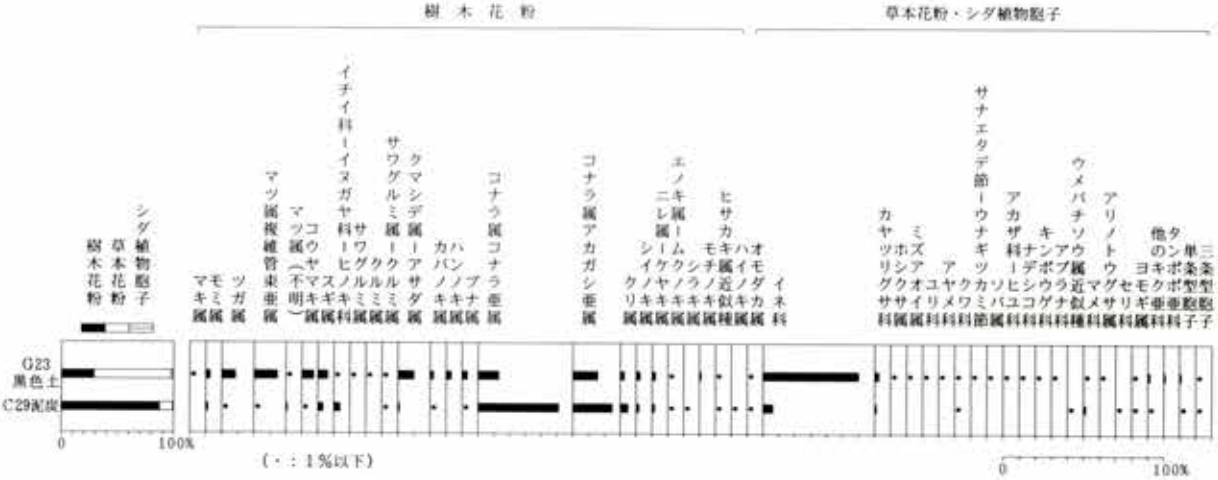
４．考察

Ａ地点の花粉分析の結果を花粉化石一覧表（第62表）および花粉化石分布図（第62図）として示したが、Ａ地点の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より４つの花粉化石群集帯を設定することができる。すなわち、樹木花粉の占める割合が極めて高率で、ハンノキ属が圧倒的に優占するⅠ帯(Ⅸ層)、樹木花粉の占める割合が比較的高率で、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、コウヤマキ属などが目立った出現をするⅡ帯(Ｖｂ層～Ⅷ層)、樹木花粉の占める割合が低率で、マツ属複維管束亜属の増加、コナラ属コナラ亜属の減少、イネ科の高率出現などで特徴づけられるⅢ帯(Ⅲ層～Ｖａ層)、樹木花粉の占める割合が低率で、マツ属複維管束亜属、スギ属といった針葉樹やイネ科が高率出現するⅣ帯（Ⅰ、Ⅱ層）の４つの花粉化石群集帯である。

Ｃ29泥炭の花粉化石群集は、樹木花粉の占める割合が極めて高く、その樹木花粉はコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属といったコナラ属の両亜属で大半が占められるというのが特徴であり、Ａ地点のⅡ帯に類似する。従って、当時は、まだ人による植生への大きな干渉はなく、コナラ亜属(クヌギなど）やアカガシ亜属（アカガシなど）を主としたうっそうとした森林がひろがっていたものと思われる。そこには、スギ属、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科などの針葉樹やクリ属、ニレ属―ケヤキ属などの落葉広葉樹、シイノキ属（スダジイなど）などの常緑広葉樹も混じっていたであろう。一方、草本花粉では、オモダカ属（オモダカなど)、イネ科（ヨシなど)、カヤツリグサ科（スゲ属など)、ウメバチソウ属近似種（ウメバチソウなど)、セリ科（セリなど）などが出現しており、それらが茂る湿原のような環境があったであろう。



第62図　Ⅰ区Ｃ29（Ａ地点）の花粉化石分布図


樹木花粉
草本花粉・シダ植物胞子
樹木花粉
草本花粉
シダ植物胞子
マツ属複維管束亜属
ツガ属
マモリ属
マツ属ヘ不明
コウヤマキ属
イチイ科ーイヌガヤ科ヒノキ属
サワラ属
クルミ属
ミズキ属
クマシデ属ーアサダ属
カバノキ属
ハンノキ属
ブナ属
コナラ属コナラ亜属
コナラ属アカガシ亜属
エノキ属ームクノキ属
ニレ属ーケヤキ属
ヒノキ属
サワラ属
モミ属近似種
ハンノキ属
オニグルミ属
イヌガヤ科
カヤツリグサ科
ミズアオイ科
アリノトウ科
ウメバチソウ属
サナエタデ節
ヒシ属
ヒシ科
ウラジロガシ属
ヒノキ科
ヒノキ科
ヒノキ科

第２節　西屋敷遺跡から出土した大型植物化石

１．はじめに

西屋敷遺跡は岐阜県関市池尻に所在する。今回は、本遺跡付近における栽培・利用状況および周辺植生を推定する目的で大型植物化石の検討を行った。大型植物化石はII～IV層から採取され、時代についてはII層が近世終り～近代、III層が中世～近世初め、IV層が中世と考えられている。

２．出土した大型植物化石

全試料から出土した大型植物化石は木本のみ９分類群である。出土したのはイチョウ、マツ属複維管束亜属、オニグルミ、コナラ属、ウメ、スモモ、モモ、センダン、エゴノキである。これら出土した大型植物化石の一覧を第64表に示した。以下に各層位ごとに出土した大型植物化石の記載をする。

［II層から出土した大型植物化石］

イチョウ、マツ属複維管束亜属、オニグルミ、コナラ属、ウメ、スモモ、モモ、センダン、エゴノキが出土した。モモが最も目立った出土状況を示し、マツ属複維管束亜属、オニグルミ、センダンも比較的目立った出土状況を示した。モモはE27、E28、I22で多産し、炭化ないし一部炭化（半炭化）している核がH21などから出土した。マツ属複維管束亜属はF25、G26で、センダンはE25で比較的多産した。オニグルミはE26で一部炭化（半炭化）しているものがみられた。スモモはF22、F23で出土しており、II層のみから出土した。

［III層から出土した大型植物化石］

イチョウ、マツ属複維管束亜属、オニグルミ、コナラ属、ウメ、モモ、センダン、エゴノキが出土した。モモが目立った出土状況を示し、比較的多産したH21では、げっ歯類による食害を受けたものもみられた。マツ属複維管束亜属はL４で非常に多産した。オニグルミはG20、I18で一部炭化しているものがみられた。ウメは炭化ないし一部炭化したもののみが出土した。

［IV層から出土した大型植物化石］

オニグルミ、モモが出土し、モモは目立った出土状況を示した。モモはF20、F21、G19で比較的多産し、G23で出土したものは炭化していた。マツ属複維管束亜属、センダンといった２、３層で比較的目立った出土状況を示した分類群は、IV層からは全く出土しなかった。

３．考察

［中世の栽培・利用状況および周辺植生］

IV層からはオニグルミとモモのみが出土しているが、栽培植物と考えられるのはモモである。周辺に生育していたものと思われるオニグルミも食用として利用されていたであろう。

［中世～近世初めの栽培・利用状況および周辺植生］

III層から出土したもののうち、栽培植物と考えられるものはイチョウ、ウメ、モモである。他に、オニグルミ、コナラ属も利用されていたであろう。周辺には針葉樹のマツ属複維管束亜属、落葉樹のセンダン、エゴノキが生育していたものと思われる。

［近世終り～近代の栽培・利用状況および周辺植生］

II層から出土したもののうち、栽培植物と考えられるものはイチョウ、ウメ、スモモ、モモである。他に、オニグルミ、コナラ属も利用されていた可能性がある。E26で出土したオニグルミの核は、一部炭化しており、また上部が欠けて破損している。これは人の手が加わった可能性が高いことを示唆する。周辺には針葉樹のマツ属複維管束亜属、落葉樹のセンダン、エゴノキが生育していたものと思われる。

4．おわりに

西屋敷遺跡から出土した大型植物化石のうち、栽培植物と考えられるものはイチョウ、ウメ、スモモ、モモであった。モモは中世以降ひろく利用されていたものと考えられる。また、イチョウ、ウメは少なくとも中世～近世初めに、スモモは少なくとも近世終り～近代には利用されていたものと考えられる。周辺にはマツ属複維管束亜属、オニグルミ、コナラ属、センダン、エゴノキが生育していたものと考えられ、オニグルミ、コナラ属は食用とされていたものと思われる。マツ属複維管束亜属、センダンは中世～近世初め以降に遺跡周辺で普通にみられるようになったものと思われる。

5．大型植物化石の記載

イチョウ　Ginkgo biloba Linn.　種子

出土したものは破片であるが、完形であれば、種子は球形から広楕円形、外種皮は肉質で中に白色の内種皮（いわゆる銀杏）があり、2ないし3本の稜線がある。

マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　毬果

毬果は灰色で卵形、種鱗はくさび形。

オニグルミ　Juglans ailanthifolia Carr.　核、半炭化核

3層のL4から完形が1点出土したが、その他は全て破片であった。核は完形であれば、側面観は卵形から円形、先端は鋭頭、上面観は円形。表面には縦に不規則な隆起があり、明瞭な1本の縫合線が縦に走る。2層のE26、F26から出土した核は人による打撃痕がみられた。

コナラ属　Quercus　果実、炭化果実、炭化子葉

果実、炭化果実ともに破片であり、これ以上の同定には至らない。表面には縦方向の筋が密に入る。炭化子葉も破片である。表面には波状の凹凸がある。

ウメ　Prunus mume Linn.　核、半炭化核、炭化核

核は、側面観は両凸レンズ形、上面観は楕円形。下端にへそがあり、一方の側面には縫合線が発達する。表面には小さく、深い穴が散在する。

第64表（その１）　大型植物化石一覧表（数字は個数、（　）内は半分または破片の数、Ｂはかみあと）

層位	グリッド	分類群	イチョウ	マツ属複維管束亜属	オニグルミ		コナラ属			ウメ			スモモ	モモ			センダン	エゴノキ	
		部位	種子	毬果	核	半炭化核	果実	炭化果実	炭化子葉	核	半炭化核	炭化核	核	核	半炭化核	炭化核	核	種子	
II	G23													1(1)					
II	H25				(1)														
II	C28									(2)									
II	D26			1										1					
II	D28				(1)														
II	E25			5(1)										1(3)				2(36)	
II	E26			1		(1)				B1								(1)	
II	E27				(3)					1				11(5)				(6)	
II	E28			3	(1)		(1)			(1)				7(3)			1		
II	E29			1										1				(2)	
II	F22												(3)						
II	F23												(3)	1				(5)	
II	F25			14(4)	(2)									3(1)				(13)	
II	F26			16	(2)					(1)				2(7)				1(8)	
II	F27			5(3)										1(4)				(3)	
II	G18													1					
II	G19			3										(2)			(1)		
II	G20			2															
II	G21			2	(1)									2				(5)	
II	G24													2(3)					
II	G26			9(1)										5(5)				(13)	
II	G27			2(1)										1(5)				(4)	
II	H17													1(1)					
II	H18													1					
II	H20			(1)														(2)	1
II	H21			1										1	1		(1)		
II	H22													2(5)					
II	H24				(3)									2(1)					
II	I20P1													1					
II	I19		(1)											2	1				
II	I20				(1)									5(1)			(1)	(11)	
II	I22													5(13)			1	(2)	
II	J17													1					
II	J18				(1)									2					
II	J19													4(1)					
II	J20				(1)									1(2)			(1)	(4)	
II	K5				(1)									(1)					
II	L4			1	(1)									1(1)					
II	L5													1					
II	L6			1										1					

第64表（その2）　大型植物化石一覧表（数字は個数、（　）内は半分または破片の数、Bはかみあと）

層位	グリッド	分類群	イチョウ	マツ属複維管束亜属	オニグルミ		コナラ属			ウメ			スモモ	モモ			センダン	エゴノキ
		部位	種子	毬果	核	半炭化核	果実	炭化果実	炭化子葉	核	半炭化核	炭化核	核	核	半炭化核	炭化核	核	種子
II	M7													(2)				
II	N5													1				
II	N7													(1)				
II	O4													1				
II	SD01			1										(1)				
III	C29																1	
III	D25													1				
III	D26													(2)				
III	D29											(2)		(1)				
III	E20													(5)				
III	E21													(1)				
III	E22													(1)				
III	E26													(2)				
III	E27				(1)									2(3)			(1)	
III	E29													(2)				
III	F19													1				
III	F20													4(1)				
III	F21													2(1)				
III	F22											(1)		1				
III	F23			2														
III	F26SL			4										1		1		
III	F25			2										2			(6)	
III	F27													(2)				
III	G17													(1)				
III	G18													4(5)				
III	G19			1										2(1)				
III	G20			2	(1)	(1)								2				(1)
III	G21													3				
III	G22			1										1		1	(2)	
III	G23													4			(2)	
III	G26													(2)				
III	H17													1				
III	H18													4(1)				
III	H19			3(1)	(1)									2(5)			(3)	
III	H20				(1)									(6)				
III	H21													9(5)B1				(2)
III	H22													2				
III	H23													3(1)				
III	H24								(1)					2(1)				
III	H25													1(2)				

第64表（その3）　大型植物化石一覧表（数字は個数、（　）内は半分または破片の数、Bはかみあと）

層位	グリッド	分類群	イチョウ	マツ属複維管束亜属	オニグルミ		コナラ属			ウメ			スモモ	モモ			センダン	エゴノキ
		部位	種子	毬果	核	半炭化核	果実	炭化果実	炭化子葉	核	半炭化核	炭化核	核	核	半炭化核	炭化核	核	種子
Ⅲ	I 17													1				
Ⅲ	I 18				(2)	(1)								(2)				
Ⅲ	I 19													5(3)			(1)	
Ⅲ	I 20				(7)									4				
Ⅲ	I 21		1											3				
Ⅲ	I 23													2(2)				
Ⅲ	J 18													(3)				
Ⅲ	J 19													4(7)				
Ⅲ	J 20													2(11)				
Ⅲ	K5													(1)				
Ⅲ	K6													1				
Ⅲ	K7													1				
Ⅲ	L4			34(9)	1									(1)				
Ⅲ	L5													1				
Ⅲ	L8													2				
Ⅲ	M4				(2)													
Ⅲ	N4				(1)									1				
Ⅲ	N6										(1)							
Ⅳ	D26													(2)				
Ⅳ	E22							(1)	(1)					1				
Ⅳ	E22SL				(1)									1				
Ⅳ	E27													(1)				
Ⅳ	F20													5(5)				
Ⅳ	F21													6(1)				
Ⅳ	F22													2				
Ⅳ	F23SL													1				
Ⅳ	G17													1				
Ⅳ	G19													6(1)				
Ⅳ	G20													1				
Ⅳ	G20SL				(1)													
Ⅳ	G23																1	
Ⅳ	H18													1				
Ⅳ	H19													1				
Ⅳ	H20SL													1				
Ⅳ	H23SL													(2)				
Ⅳ	I 18													1				
Ⅳ	SN10													1				
Ⅳ	I 20													1(2)				
不明	不明													1				

スモモ　Prunus salicina Lindl.　核

核は完形であれば、やや扁平な楕円形。表面は比較的滑らかで、明瞭な穴や溝はない。

モモ　Prunus persica (Linn.) Batsch　核、半炭化核、炭化核

核は、側面観は両凸レンズ形、上面観は楕円形。一方の側面には縫合線が発達する。表面には不規則な流れるような溝と穴がある。

センダン　Melia azedarach Linn. var. subtripinnata Miq.　核

核は楕円形、縦方向に溝が走り、中には各室に1個ずつ種子が入る。

エゴノキ　Styrax japonica Sieb. et Zucc.　種子

種子は黒色ないし褐色で側面観は楕円形。3本ずつ溝と稜があり、溝の方が目立つ。表面はざらつく。

新山雅広（パレオ・ラボ）

第3節　西屋敷遺跡のプラント・オパール

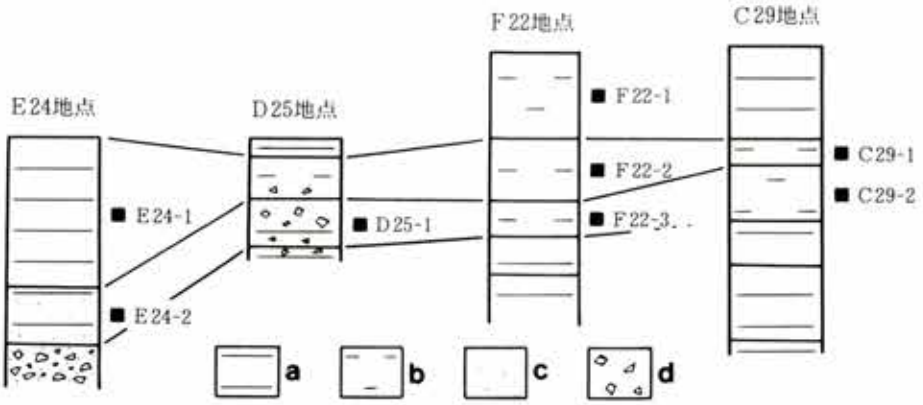
1．試料と分析方法

試料はF22、E24（第6トレンチ）、D25（第6トレンチ）、C29（第9トレンチ）の4地点より採取された8点である（第64図）。各試料について簡単に記すと、F22-1，F22-2は灰色を帯びた黒色シルト（土壌）で、赤褐色酸化鉄の集積がF22-1では多く、F22-2では少し認められる。F22-3は黒色のシルト質粘土～粘土質シルトである。E24-1は粘性の高い黒～黒灰色粘土、E24-2は黒色の砂混じり粘土で、やはり粘性が高くなっている。D25-1は黒～黒灰色のレキ（チャート）混じり粘土である。C29-1は黒色シルト（土壌）、C29-2は黒色の粘土質シルト（土壌）である。

時代については、F22-1が江戸時代、F22-2およびE24-1、C29-1が中世、F22-3、E24-2、D25-1、C29-2が中世より前と出土遺物などから考えられている。

上記した8試料について以下のような手順にしたがってプラント・オパール分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約40μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。



第64図　各地点の試料採取層準
ａ：粘土　ｂ：シルト　ｃ：砂　ｄ：レキ

２．分析結果

同定・計数された各分類群のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各プラント・オパール個数を求め（第65表）、それらの分布を第65図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料１ｇ当りの検出個数である。

検鏡の結果、E24-2とD25-1の２試料を除く６試料よりイネのプラント・オパールが検出され、個数としては約5,000～27,000個である。イネ以外では、ネザサ節型が非常に多く検出されており、最も少ないE24-2でも約350.000個で、F22-2では700.000個を越えている。クマザサ属型もやや多く、次いでウシクサ族が多く検出されている。ヨシ属は、F22地点を除く試料より得られ、反対にシバ属はF22地点においては全試料より検出されている。この他、キビ族はイネ同様E24-2とD25-1の２試料を除く６試料より得られている。

３．稲作について

上記したように、E24-2とD25-1の２試料を除く６試料よりイネのプラント・オパールが検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、福岡市の板付北遺跡では、イネのプラント・オパールが試料１ｇ当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原　1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。西屋敷遺跡の中世より前の時期についてみると、F22-3、C29-2では検出されるが、E24、D25地点では得られていない。また、中世においては、D25地点では分析を行っていないので不明であるが、E24地点でもイネのプラント・オパールが多く検出されている。よって、西屋敷遺跡周辺における稲作は、中世より前の時期においては土地条件のよいところに部分的に行われ、中世には他の地点においても稲作が行われるなど稲作地が拡大し、江戸時代においても同様と推測される。なお、キビ族がイネと同試料より検出されており、これは現在の水田などに普通にみられるタイヌビエといったキビ族の雑草類が稲作地に侵入していたためと推測される。

第65表　試料１ｇ当りのプラント・オパール個数

試料番号	イネ（個／ｇ）	ネザサ節型（個／ｇ）	クマザサ属型（個／ｇ）	他のタケ亜科（個／ｇ）	ササヌカグサ属（個／ｇ）	ヨシ属（個／ｇ）	シバ属（個／ｇ）	キビ族（個／ｇ）	ウシクサ族（個／ｇ）	不明（個／ｇ）
F22-1	26,900	652,300	30,800	3,800	0	0	2,600	3,800	10,300	30,800
F22-2	24,800	706,800	31,700	6,900	0	0	4,100	4,100	17,900	44,100
F22-3	7,200	681,900	30,200	7,200	1,400	0	1,400	1,400	31,700	77,700
E24-1	13,800	541,100	26,200	5,500	0	5,500	1,400	1,400	15,200	40,000
E24-2	0	352,900	24,500	7,000	0	1,700	0	0	3,500	14,000
D25-1	0	355,200	21,300	5,000	0	2,500	0	0	5,000	33,900
C29-1	5,300	501,800	38,600	2,700	0	4,000	0	1,300	21,300	50,600
C29-2	7,600	569,200	41,100	7,600	1,500	3,000	0	1,500	42,600	67,000

４．遺跡周辺のイネ科植物

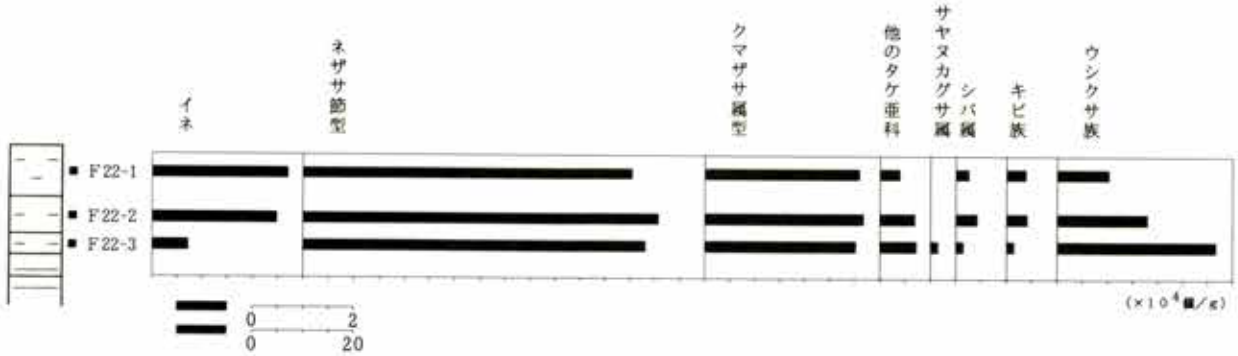
ネザサ節型が多く検出されており、遺跡周辺ではネザサ節型のササ類（ゴキダケ、ケネザサなど）が多く生育する開けた草地的な環境が広がっていたと推測される。また、この草地にはウシクサ族（ススキ、チガヤなど）もみられたであろう。クマザサ属型については森林の下草としての存在が予想され、周辺に成立していたであろう森林（花粉分析参照）の林床にはクマザサ属型のササ類（チマキザサ、チシマザサなど）が生育していたものと思われる。

ヨシ属は湿地的な環境のところに生育していたと予想され、稲作地においてはその周辺の水路などに分布していたと思われる。反対に、シバ属は畦などの比較的乾いたところに生育していたものとみられる。

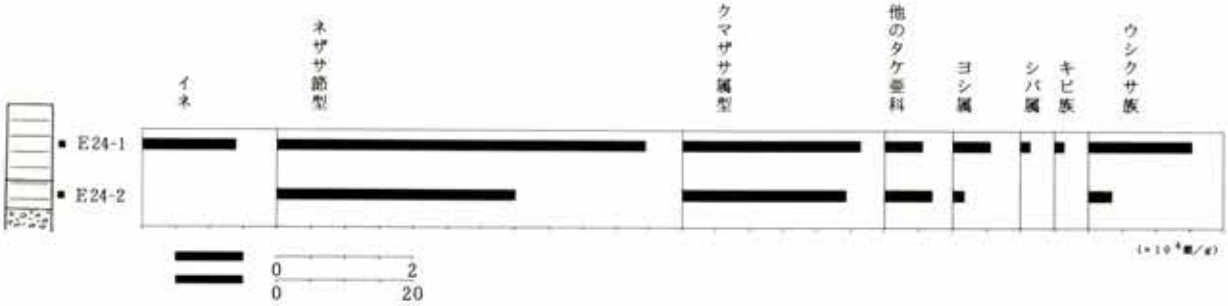
鈴木　茂（パレオ・ラボ）

引用文献

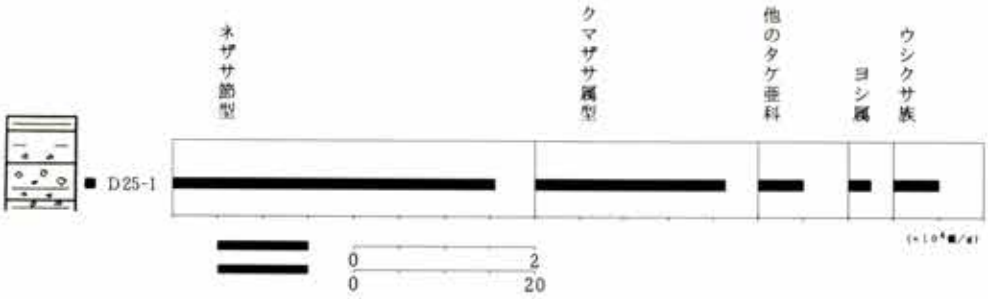
藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用―先史時代の水田址探査―．　考古学　ジャーナル、227、Ｐ.2-7.



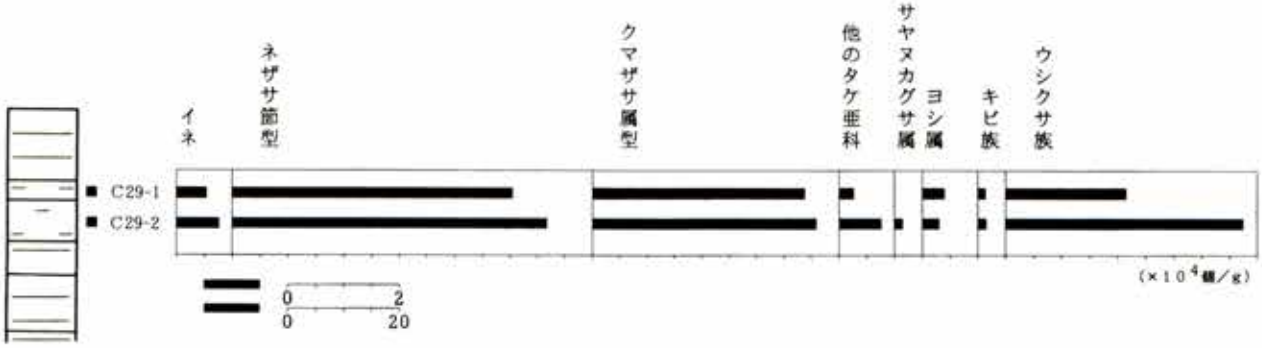
第65図　Ｆ22地点のプラント・オパール分布図



第66図　Ｅ24地点のプラント・オパール分布図



第67図　Ｄ25地点のプラント・オパール分布図



第68図　Ｃ29地点のプラント・オパール分布図

第４節　西屋敷遺跡出土木製品の樹種同定

１．はじめに

岐阜県関市池尻字西屋敷にある西屋敷遺跡から出土した木製品計50点についてその樹種を調べた。本遺跡は、長良川の右岸、標高約55mの低地に位置し、年代は中世～近代と推定される。木製品は、櫛、円盤状木製品、箸、杭である。これらの木製品の樹種を明らかにすることで、遺跡の性格の一部を明らかにすることを目的として、調査した。

２．方法と記載

同定には、木製品から直接、もしくは切り欠いたサンプルから片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面（木口と同義・写真図版ａ）、接線断面（板目と同義・写真図版ｂ）、放射断面（柾目と同義・写真図版ｃ）の３方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版を添付し、同定の証拠とするとともに同定根拠を後述する。結果は、第66表　西屋敷遺跡の樹種同定結果に示す。なお、作成した木材組織プレパラートは、㈱パレオ・ラボで保管されている。

同定根拠

モミ属　Abies sp.　PINACEAE　　写真図版１ａ～１ｃ

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹。樹脂道が、数箇所で観察されたが、放射樹脂道が確認されない事、放射組織の上下端に放射仮道管が確認できないことから、障害樹脂道であると思われる。早材から晩材の移行は緩やかで、年輪界は明瞭。放射組織は柔細胞のみからなり単列。その水平壁には単穿孔が多く数珠状を呈す。分野壁孔はきわめて小型で、１分野に１～４個程度。

以上の形質より、マツ科のモミ属の材と同定した。いずれも、常緑高木の針葉樹である。

アカマツ　Pinus densiflora Sieb. et Zucc.　PINACEAE　　写真図版２ａ～２ｃ

水平・垂直両樹脂道をともに持つ針葉樹。樹脂道の周囲にはエピセリウム細胞が見られる。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。放射組織は、放射柔細胞と放射仮道管と放射樹脂道からなり、単列と紡錘形のものがある。放射組織の上下端に放射仮道管があり、水平壁には鋭角な鋸歯状の肥厚が著しい。分野壁孔は大型の窓状で、１分野に１～２個。

以上の形質から、マツ科のアカマツの材と同定した。常緑高木の針葉樹で、北海道～屋久島の温帯～暖帯にかけて分布する。

スギ　Cryptomerica japonica（L. fil.）D. Don　TAXODIACEAE　　写真図版３ａ～３ｃ

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて接線方向に散在する。放射組織は放射柔細胞のみからなり単列。分野壁孔は、大型のスギ型で、通常一分野あたり２個存在する。

以上の形質により、スギ科のスギの材と同定した。スギは、常緑の針葉樹で、本州～屋久島の温帯

～暖帯、太平洋側に多く存在している。

ヒノキ　Chamaecyparis obtusa（Sieb. et Zucc.）Endl.　CUPRESSACEAE　写真図版４ａ～４ｃ

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部と晩材部の境に接線状に散在しており、水平壁は結節状に肥厚している。放射組織は、放射柔組織のみからなり、単列。分野壁孔は中型のトウヒ～ヒノキ型で、一分野に１～３個。

以上の形質から、ヒノキ科のヒノキの材と同定した。ヒノキは、常緑高木の針葉樹で、福島県～屋久島の温帯に分布する。

クリ　Castanea creneta Sieb. et Zucc.　FAGACEAE　写真図版５ａ～５ｃ

年輪の始めに、やや放射方向に伸びた大型の丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部では、小型で、薄壁の角張った管孔が、火炎状から放射状に配列する。道管の穿孔は単一。木部柔組織は、晩材部で接線状から短接線状。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は、対列状を呈す。

以上の形質より、ブナ科のクリの材と同定した。クリは、北海道～九州までの温帯～暖帯にわたって広く分布する落葉性高木、あるいは中高木である。

イスノキ　Distylium racemosum Sieb. et Zucc.　HAMAMELIDACEAE　写真図版６ａ～６ｃ

小型で丸い道管がほぼ単独で均一に散在する散孔材。年輪界は不明瞭で、木部柔組織は短接線状～接線状で著しい。道管の穿孔は、10本程度の横棒からなる階段状。放射組織は異性で、背は低い。時に放射組織・木部柔組織には、結晶が見られる。放射組織・道管間壁孔は階段状。

以上の形質により、マンサク科のイスノキの材と同定した。イスノキは、常緑の高木で本州（関東南部以西）～琉球の常緑林内に分布する。

	モミ属	アカマツ	スギ	ヒノキ	クリ	イスノキ
櫛						――・
円盤状木製品				―		
札	・					
箸			―	―		
杭		――――――――――――――――――・	―	――	・	

注：―は２点、・は１点を表す。

第69図　製品別樹種同定一覧

3．考察

全体的には、製品毎に非常に偏った用材を使用していることが特徴である(第69図)。櫛は、イスノキのみを使用しており、円盤状木製品にはヒノキを、箸にはスギ、ヒノキを、杭には圧倒的にアカマツが多い。針葉樹材利用が多い事は、中世～近世全般の用材傾向と一致する。

櫛には、細工の細かさ故に材質の緻密なツゲやイスノキといった樹種が使われる。漆塗りの製品も、白木の製品にも用材はイスノキであった。製品の仕上げに関わらず、櫛にはイスノキが使用されていた様である。イスノキは、県内も分布圏に入っているが、常緑林内でしか見られず、県内では多く手に入る樹種ではない。円盤状木製品、札といった板状の製品には、櫛と同様製作上の問題から割裂性の良い針葉樹が使用されることが多く、特にヒノキは、水濡れにも強く、形状の類似している曲物底板等にも高い頻度で使用されている。逆に、札で使用されているモミ属は、軽軟な為曲物のような製品には適さない。耐久性を要求される製品ではないため、モミ属が使用されたのではないだろうか。

杭材は、そのほとんどがアカマツであった。アカマツが多用される傾向は、江戸では近世でも特に後半にその傾向が強い（松葉　1997、パリノ・サーヴェイ株式会社　1996)。アカマツは、材自体の保存性は中位であるが、樹脂分が多い為水濡れに強い特徴がある。そのため、水の影響が強い木樋や杭、継手には選択的に使用される事が多い。本遺跡の杭にはスギ、ヒノキ、クリ等の樹種も混じっているが、補修等も考えられ杭列全体が単一の樹種で構成される事例も逆に少ない。花粉分析の結果から植生としてのアカマツは中世より漸増し江戸時代には高率を保っていたと推定されている（辻他1986)。しかし、一方で江戸城付近の日常生活用具の利用はヒノキ属が多く、本遺跡と同様、アカマツ材が比較的多く確認されている事例は、江東橋二丁目遺跡・汐留遺跡の様な土木・建築材が多い。アカマツ材の燃料材への利用も一部で指摘されているが(丹治　1984)、全体的な様相は未だ判然としていない。

従来の近世の試料は、都市域と想定される地域が多く、本遺跡の様な水田跡でまとまった本数の分析結果は少ない。これらの試料が、全体の様相を把握する上での重要な試料になると考えられる。

松葉礼子（パレオ・ラボ）

引用文献

松葉礼子．1997．江東橋二丁目遺跡出土木製品の樹種同定．江東橋二丁目遺跡―生涯職業能力開発促進センター建設に伴う緊急発掘調査報告書―．雇用促進事業団・墨田区江東橋二丁目遺跡調査団、331-338pp．東京．

パリノ・サーヴェイ株式会社．1996．木樋・井戸・地下式坑構築材の用材選択・変遷．汐留遺跡、3：165-175pp．汐留地区遺跡調査会．東京．

辻　誠一郎・南木睦彦・小杉正人．1986．茂林寺沼及び低地湿原調査報告書　第2集　館林の池沼群と環境の変遷史．館林市教育委員会、110pp．

丹治健蔵．1984．関東河川水運史の研究．法政大学出版局．東京．

第66表　西屋敷遺跡の樹種同定結果

挿図番号	樹種	整理番号	出土区	層位	種別	年代
1	イスノキ	615	D26	II	櫛	中世～近代
2	イスノキ	614	E25	II	櫛	中世～近代
3	イスノキ	474	E28	II	櫛	中世～近代
4	イスノキ	487	K5	II	櫛	中世～近代
5	イスノキ	481	K5	II	櫛	中世～近代
6	ヒノキ	473	F26	II	円盤状木製品	中世～近代
7	ヒノキ科	488	I20	II	円盤状木製品	中世～近代
8	モミ属	480	F25	II	札	中世～近代
9	ヒノキ	571	G26	II	箸	中世～近代
10	スギ	557	F26	II	箸	中世～近代
11	ヒノキ	505	E25	II	箸	中世～近代
12	ヒノキ	606	F25	II	箸	中世～近代
13	スギ	578	L4	II	箸	中世～近代
14	アカマツ	152	SN13	II	杭	中世～近代
15	アカマツ	445	SN16A	II	杭	中世～近代
16	アカマツ	122	SN2D	II	杭	中世～近代
17	アカマツ	167	SN2F	II	杭	中世～近代
18	アカマツ	126	SN2C	II	杭	中世～近代
19	アカマツ	134	SN2B	II	杭	中世～近代
20	アカマツ	141	SN2E	II	杭	中世～近代
21	アカマツ	200	I22	II	杭	中世～近代
22	アカマツ	119	SN4H	II	杭	中世～近代
23	アカマツ	196	SN4	II	杭	中世～近代
24	アカマツ	162	SN4	II	杭	中世～近代
25	アカマツ	157	SN4	II	杭	中世～近代
26	アカマツ	193	SN4	II	杭	中世～近代
27	ヒノキ	158	SN4I	II	杭	中世～近代
28	アカマツ	195	SN4I	II	杭	中世～近代
29	ヒノキ	142	SN5D	II	杭	中世～近代
30	ヒノキ	175	SN5B	II	杭	中世～近代
31	アカマツ	159	SN11A	II	杭	中世～近代
32	アカマツ	169	SN11A	II	杭	中世～近代
33	アカマツ	168	SN10B	II	杭	中世～近代
34	アカマツ	128	SN10C	II	杭	中世～近代
35	アカマツ	147	SN10A	II	杭	中世～近代
36	アカマツ	441	SN10	II	杭	中世～近代
37	アカマツ	236	STR13C	II	杭	中世～近代
38	ヒノキ	233	STR13C5	II	杭	中世～近代
39	アカマツ	245	STR13C2	II	杭	中世～近代
40	アカマツ	239	STR13C3	II	杭	中世～近代
41	アカマツ	454	P01	II	杭	中世～近代
42	アカマツ	368	SK01	II	杭	中世～近代
43	アカマツ	357	SK02	II	杭	中世～近代
44	アカマツ	369	SK01	II	杭	中世～近代
45	クリ	466	SK06	II	杭	中世～近代
46	アカマツ	468	SK06	II	杭	中世～近代
47	スギ	366	SK01	II	杭	中世～近代
48	スギ	363	SK01	II	杭	中世～近代
49	アカマツ	365	SK01	II	杭	中世～近代
50	アカマツ	355	STR12A	II	杭	中世～近代

【付】

放射性炭素年代測定

1．放射性炭素年代測定について

試料はII区G23のV層から採取したものである．

試料は、酸処理を施して不純物を除去し、酸素気流中で燃焼させて二酸化炭素としたものをアンモニア水に通し、塩化カルシウムの水溶液を加えて炭酸カルシウムを生成する．炭酸カルシウムに過塩素酸を加えて発生させた二酸化炭素を450℃の反応管内でリチウムに吸収させた後、真空ポンプで引きながら800℃まで加熱して炭化リチウム（カーバイド）を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した．

測定は、約一ヶ月放置した後、精製したアセチレンを比例計数管（400cc）を用いて、β—線を計数して年代値を算出した．その結果は下記に示す．

なお、年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用した．また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である．試料のβ—線計数率と自然計数率との差が2σ以下の時は、3σに相当する年代を下限の年代値として表示し、試料のβ—線計数率と現在の標準炭素（Modern standard carbon）の計数率との差が2σ以下の時は、Modern　と表示し、^{14}C（Sample）／^{14}C（Modern）の値を付記し、^{14}C（Sample）／^{14}C（Modern）＜1であれば、yrBPの値を付記する．

暦年代の補正は、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代値（yrBP）に対し、過去の宇宙線強度の変動による大気中の^{14}C濃度の変動および半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±30年）を補正して、より正確な年代を求めるものであり、具体的には年代既知の樹木年輪の^{14}C年代の詳細な測定値を用いて補正曲線を作成し、これを用いて暦年代を算出する．補正暦年代の算出にCALIB3.0（Stuiver and Reimer, 1993：IBM-PC用：Reference（Stuiver and Pearson, 1993））を使用した．なお、交点年代値は^{14}C年代値に相当する補正曲線上の年代値であり、1σ年代幅は^{14}C年代誤差に相当する補正曲線上の年代範囲を示す．年代を検討する場合は、68%の確率で1σ年代幅に示すいずれかの年代になる．暦年代の補正は約一万年前からAD 1,950年までが有効であり、該当しないものについては補正暦年代を＊＊＊またはModernと表示する．また、AD 1,955＊はModernを意味する．

2．放射性炭素年代測定結果

測定No.	試　料	^{14}C年代値	補正暦年代	
PLD-178	土壌有機物	2,150 ± 120 yrBP （BC 200年）	交点年代値	BC 180年
			1σ年代幅	BC 370 to 30 BC 20 to 10

引用文献

Stuiver, M. and Reimer, P.J. (1993) Extended ^{14}C database and revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program.

以　上

山形　秀樹（パレオ・ラボ）

第6章 ま と め

今回の調査では水田遺構の検出と時代を決定できる遺物の検出がねらいであると共に池尻地区西側における一空間の復元にある。本章では遺構と遺物の分析を行い、本遺跡の性格、意義について改めて考えてみたい。

今回の西屋敷遺跡の調査では中世から近世の水田遺構が検出された。中世の遺構面は盛土による水田区画が 近世の遺構面では杭による畦畔による区画がそれぞれ検出され、両者の遺構はほぼ同位置で検出されている。何れの水田区画も自然地形に即した構造と結論することができよう。当地域における文献史料は乏しく、中・近世の状況は、断片的にしか把握し得ない状況の中で、今回の調査成果は貴重な資料と言える。併せて岐阜県下の本格的な水田遺構の調査は数例を数えるのみであることを付記しておく。

なお、今回確認された各地区の遺構面は、土層の堆積が10cm程度と薄いこと、遺物の流れ込みが著しいこと、崖錐の影響、攪乱を多分に受けていること等から、第一義的に伴う遺物が限定されず時期決定に困難な状況にある。しかし出土遺物量は細片ながら膨大な量に及び統計的に分析する結果、大略統一された時期が確定できたものと考える。

第1節 遺構について

本遺跡の水田遺構に関わる検出面に該当する調査は、Ⅰ・Ⅱ区の第2遺構面、第3遺構面及びⅢ区第1遺構面、第2遺構面である。それより下層の遺構については確認されていない。

以下、私見も交えて時代別に遺構の変遷について述べる。

古代

古代における水田遺構は確認されていないが、自然科学分析結果によると、水田が点在していたことが指摘されている。しかし文献史料においても未確認であることから、不明とせざるを得ないが、当地域における自然条件等から考えても水田は広範囲に及んでいた可能性は低いと見られる。

中世

Ⅰ・Ⅱ区の第3遺構面はⅢ区の第2遺構面と対応し、時代は鎌倉時代後期から室町時代後期に比定され、中世の水田遺構と考えられる。本遺構面の水田構造は、盛土による畦畔の造成で（土留め杭の使用の可能性が考えられるが明らかではない。）、水田区画及び畦畔の方向性等から立地状況に即して形成された水田区画と考えられる。各地区によって畦畔の方向が異なるのは、水田の傾斜、水の流通を考慮し造成されたものと考えられる。すなわち当地域における自然地形の条件の中で水田経営を行っていたものと考えられる。

近世

Ⅰ・Ⅱ区の第2遺構面はⅢ区の第1遺構面と対応し、時代は室町時代後期から江戸時代に比定され、おおよそ近世の水田遺構と考えられる。Ⅲ区における水田域と微高地との境界は、明治期の字絵図と一致することから、基本的に字絵図と同様な水田区画が想定される。本遺構面と上面との相違点は、杭による土留めが行われ、堅固な畦畔が造成されたことが指摘できる。杭はⅠ・Ⅱ区においては686点、

Ⅲ区にては376点、総計1062点に及ぶ。杭には丸杭が使用され、他からの転用は認められない。樹種は松材を始めとする針葉樹が用いられ、杭先は鉈等による加工が施されている。打ち込まれた角度はほぼ垂直で２本で一対を成す場合も存する。横板は確認されていない。盛土は施されたものと考えるが、Ⅰ区にて確認した以外はトレンチ断面でも確認し得なかった。杭の方向は各調査区によって異なり、立地状況に応じた方向性であると考えられる。水田の傾斜、水の循環等の要因であろう。畦畔の位置は、中世の畦畔とほぼ同位置で検出されていることから、大きな変化は認められないが、杭の使用により、明確な区画が確定され、水田全域に水を流通させることを可能にしたものと考えられよう。Ⅲ区では新田開発に伴う土坑が確認されている。明らかに微高地と見られる位置に杭が施され、土坑内には穴を塞ぐように石が存在しており、杭を補強する意味も兼ね備えていた可能性が指摘できよう。その際、種々の遺物の細片が土坑内に混入している。

本遺跡の灌漑施設については本調査では明らかにできなかったが、傾斜地を利用した水田構造であることや自然地形を利用した立地条件からすると、水田から水田へオーバー・フローし水を流す方法を取っていたものと考えられる。Ⅰ・Ⅱ区では畦畔が等高線に沿うように形成されており、水田に水が均一に張れるようにしたものと考えられる。Ⅲ区では溜池を設け、それを水源として、そこから引水する方法を用いていたものと考えられる。

以上により、当地域における水田の変遷について考察すると、古代においては、点在して水田が営まれていた可能性はあるものの、広範囲に及んでいた可能性は低いと思われる。中世には盛土による畦畔が区画され、水田が営まれていた。それが当地域における原初形態を形成し、それに基づき、近世へと移行する。近世においては、盛土のみではなく杭による土留めが施され、水の流通を確実なものにした。更には、新田開発に伴い、微高地も水田として造成されたのであろう。近・現代においては圃場整備、及び用水の敷設により水の供給が保証されるに至る。

本遺跡の所在する地域には、ムゲツ氏の氏寺と見られる弥勒寺、武儀郡衙と見られる弥勒寺東遺跡、池尻大塚古墳を始めとする古墳群が多数存在しており、古代における重要な拠点であることが知られている。これまで当遺跡の古代から現代に至る遺構の変遷を中心に述べてきた中では、直接それらとの関わりは見出せなかった。また、古代における同地区西側の開発は立地状況や生産性等から鑑みて先進地域とは言い難いと考えられる。広見地区においては、条里遺構が確認されているが、本遺跡の畦畔の方向性からは確認されなかった。おそらく施行されていなかったものと判断される。

なお、遺跡周辺には縄文集落、古墳、古窯の存在は言うまでもなく、中世村落の存在までも示唆するものであり、今後周辺遺跡との関わりや発掘調査によって、本遺跡の性格や精度が更に深化するものと考える。また、細部においては検討の余地を残すこととなった。敢えて個々の問題点は指摘しないが、今後の課題としたい。

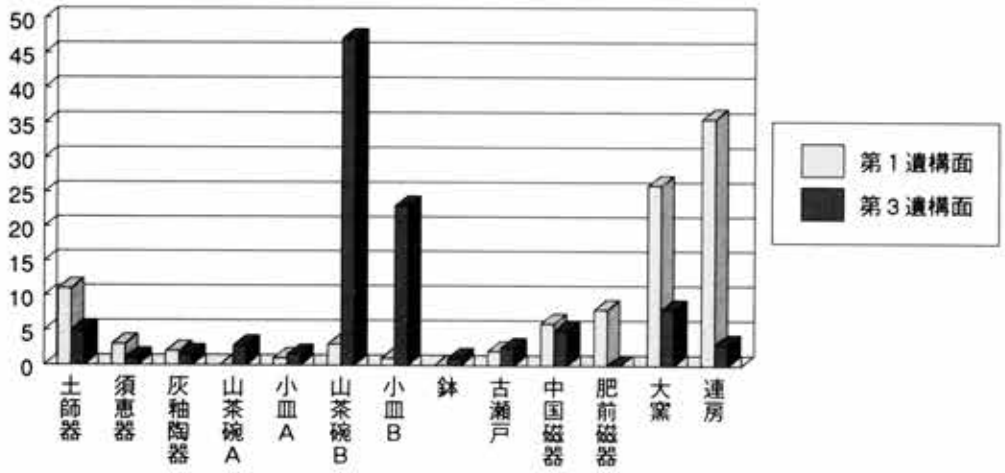
（小塩　康真）

第2節　遺物について

本遺跡の遺物は中世以降の水田遺構面にほぼ万遍なく散布した状態で出土した。金属製品、石製品を除くと、そのほとんどが復原の可能性の少ない破片での出土である。水田耕作に直接関わるものは杭のみで、大半は器を中心とした日常生活用品である。十分使用されて内面が平滑になった山茶碗や、煤や芯の痕がついた灯明皿が多数出土した。また、近世の陶器片に混じって大量の煙管・銭貨も出土している。調査の結果、区域内では住居跡の存在は確認できず、これらの遺物は他の地域からの流れ込みか、何らかの理由で廃棄されたものと考えなければならない。また、花粉分析による古植生の推定によれば、ある時期を境に周辺地域はそれまで生い茂っていた針葉樹や落葉樹の森林と低湿地の環境から、マツ属やイネ科の花粉が出現する環境に変わっている。この時期に水田の開墾が進み耕地面積が拡大し、それに伴って山地の近くまで人の手が入ったと考えられる。その結果、乱伐で水系が大きく変化し、洪水などによって他の遺物散布地域から運ばれてきた遺物も少なくないであろう。Ⅰ・Ⅱ区では石鏃や石斧が出土していることからおそらく縄文期の集落が近くに存在し、磨製の石鏃や砥石などの出土から弥生期の集落も存在したと考えられる。高坏などの須恵器も出土していることから近くに古墳が存在した可能性もある。また、窯壁の一部も出土していることから、須恵器から灰釉陶器の時期の古窯が近くに存在したものと思われる。

1、年代観について

ここでは図化した429点の土器類を遺跡全体のサンプルユニットと考え、各地区・各遺構面(各層位)ごとに器種の構成比率を求めて分析を行った。データは遺構面での遺物の点数をカウントし、その遺構面の合計数に対する割合を百分率で表しそれぞれ棒状のグラフにした。

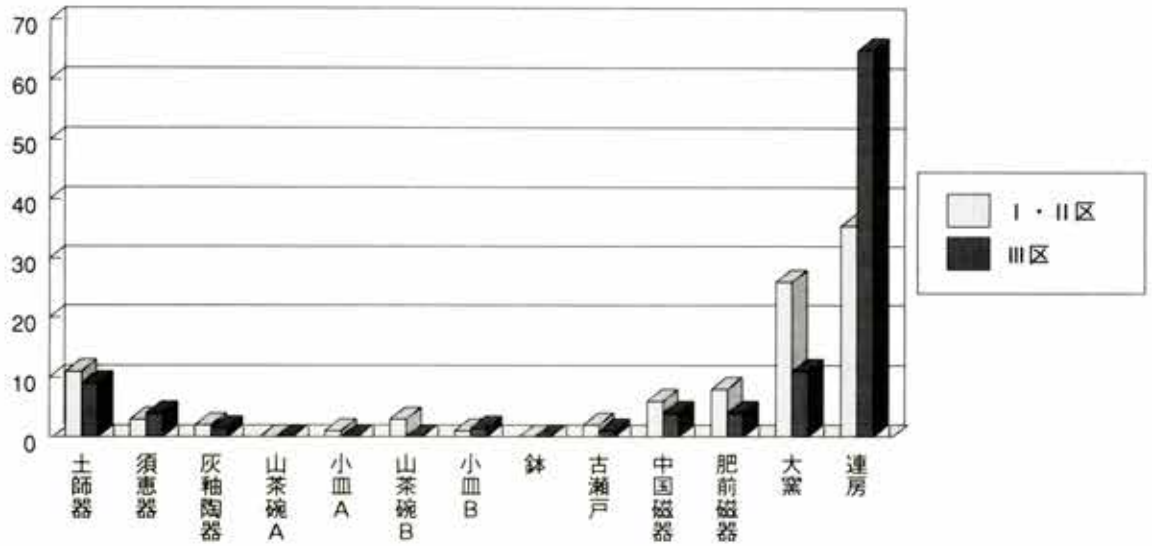


第70図　Ⅰ・Ⅱ区における遺構面別の器種構成比率

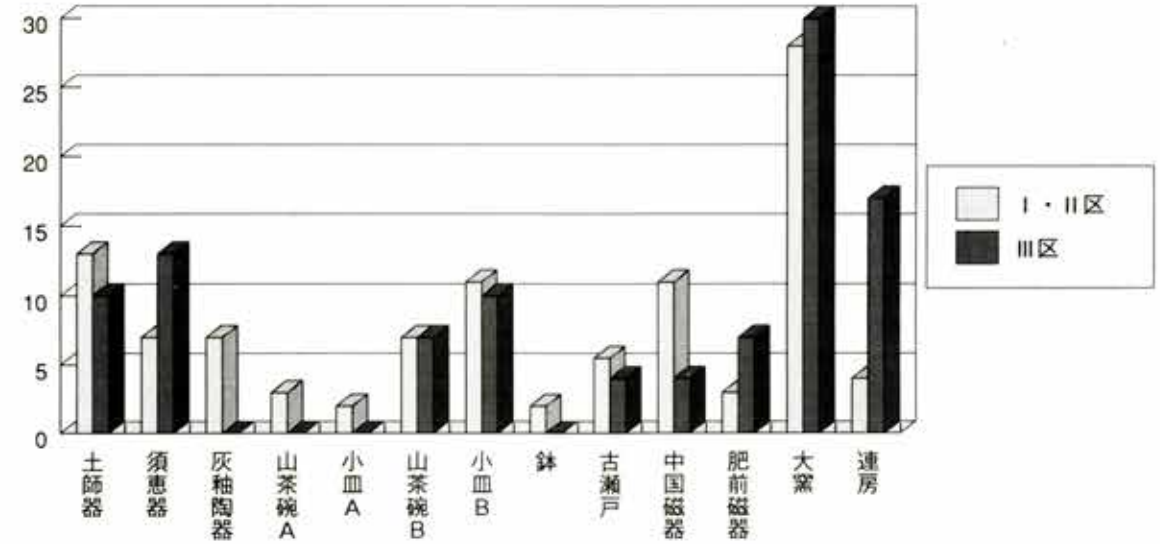
まず、各遺構面の年代を器種の構成比率から見てみたい。第70図はⅠ・Ⅱ区における第1遺構面と第3遺構面の器種の構成比率の比較である。第1遺構面では連房、大窯の順に中世後半から近世までの器種の比率が極めて高い。肥前磁器や中国磁器も見られることから広域な流通があったと考えられ、この遺構面は中世後半から近世全般にまたがる時期であろう。第3遺構面は山茶碗B・小皿Bの割合

が著しく高い。大窯もわずかに多いことから中世から中世後半の遺構面と考えられる。土師器の皿はほとんどが灯明皿であるが、Ⅰ・Ⅱ区から出土したものの中に未使用と思われる小型の皿がいくつか見られる。儀礼に使用したと考えるならば、中世の寺社との関連も否定できない。

次にⅠ・Ⅱ区と少し離れたⅢ区の比較をするために、第Ⅱ層の器種構成比率を第71図に示した。中世までの器種については大きな差は見られないが、大窯、連房についてはⅠ・Ⅱ区の場合類似した比率で見られるのに対し、Ⅲ区では連房の比率が著しく高くなる。また、同様に第Ⅲ層の器種構成比率も第72図に示した。Ⅰ・Ⅱ区は大窯に比べ連房が極端に少なくなっているが、Ⅲ区では大窯の比率が最も高く、連房がそれに続く。従って、Ⅲ区は江戸時代を通して生活が営まれていた地域に近い場所であったと考えられる。また、Ⅰ・Ⅱ区は中世の遺構面での山茶碗、中世後半から近世にかけての遺



第71図　第Ⅱ層における地区別の器種構成比率



第72図　第Ⅲ層における地区別の器種構成比率

構面からの大窯が器種の中心となるため、Ⅰ・Ⅱ区の周辺地域では中世から人々の生活の営みが連綿と続いていたことをうかがわせる。

2、水田遺構面の遺物

一般に住居跡等の遺構の年代を知るための方法論として、その遺構から出土した遺物のうち最も新しい時期の遺物を年代の指標とする場合が多い。しかし、水田遺構では古代から近世までの遺物が同一層に出現する。第3遺構面（中世遺構面）の遺物を例にとっても古代の須恵器から中世の山茶碗、近世の連房まで1000年間以上の遺物がわずか10数cmの中にパックされていることになる。本節では統計学上の「有意差」という考え方から、その遺構面で最も有意なデータだけを資料として各遺構面の年代を見てきた。しかしながら少数の器種は本当に偶然紛れ込んだもので、エラーとして無視し除外してもよいものなのか。地中に散在する遺物はひとつひとつが様々な情報を含んでいるはずである。

調査前のこの地域はよく整備された水田であった。20世紀末の現在の時点まで地中の遺物は安定した状態であったはずである。長い年月の間、遺物はその時代のその時点では静かに水田耕作が営まれ、安定した状態で保たれていたであろう。ところが、時として氾濫などの自然の力に加えて人為的な圃場整備によって遺物はカオス的な混乱の状態に入る。そして、長い時間を経て再び安定した状態に戻る。こうして安定と混乱を繰り返しながら平衡を保ってきたという複雑系の考え方で遺跡を検証することはできないであろうか。一般の遺跡のように遺物・遺構から年代をとらえていく一対一対応型の考え方はこうした水田遺構には当てはまらない。遺物が地中という3次元空間をまるで生体のごとく移動する水田遺構の場合、むしろ複雑系の立場からとらえていくべきではないだろうか。今後の研究に期待したい。

（大橋　弘志）

図　　版

I 区第 2 遺構面完掘状況（東から）

I 区第 2 遺構面完掘状況（北から）

I 区第 2 遺構面完掘状況（南東から）

I 区第 2 遺構面完掘状況（南から）

II 区第 2 遺構面完掘状況（南から）

II 区第 2 遺構面完掘状況（西から）

I 区第 3 遺構面完掘状況（南から）

I 区第 3 遺構面完掘状況（南東から）

図版 2

I 区第 3 遺構面完掘状況（東から）

I 区第 3 遺構面完掘状況（北から）

II 区第 3 遺構面完掘状況（西から）

II 区第 3 遺構面完掘状況（東から）

II 区第 3 遺構面完掘状況（西から）

II 区第 3 遺構面完掘状況（北から）

III 区第 2 遺構面完掘状況（東から）

III 区第 2 遺構面完掘状況（東から）

III区第 2 遺構面完掘状況（南から）

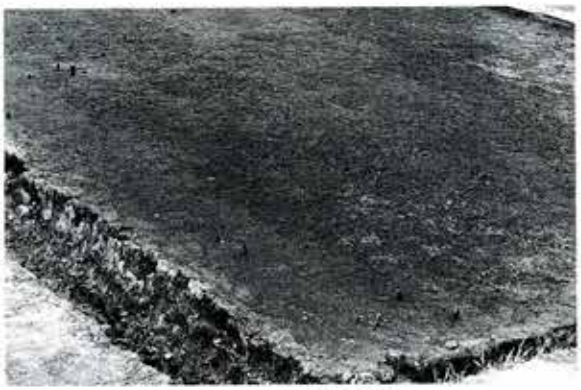
III区第 2 遺構面完掘状況（西から）

SD 1 完掘状況

SD 2 完掘状況

SN 4 、SN 9 検出状況

SN 4 検出状況



SN 8 、SN 9 検出状況

SN 4 東壁セクション

図版 4

II区第 1 トレンチ

III区SN 2 検出状況

I 区畦畔検出状況

I 区SL 2 検出状況

I 区足跡群検出状況

I 区足跡群完掘状況

III区SK 1 検出状況

III区SK 1 完掘状況

III区SK 2 検出状況

III区SK 6 完掘状況

III区SK 1 ～ 3 完掘状況

III区水田域、微高地との境界検出状況

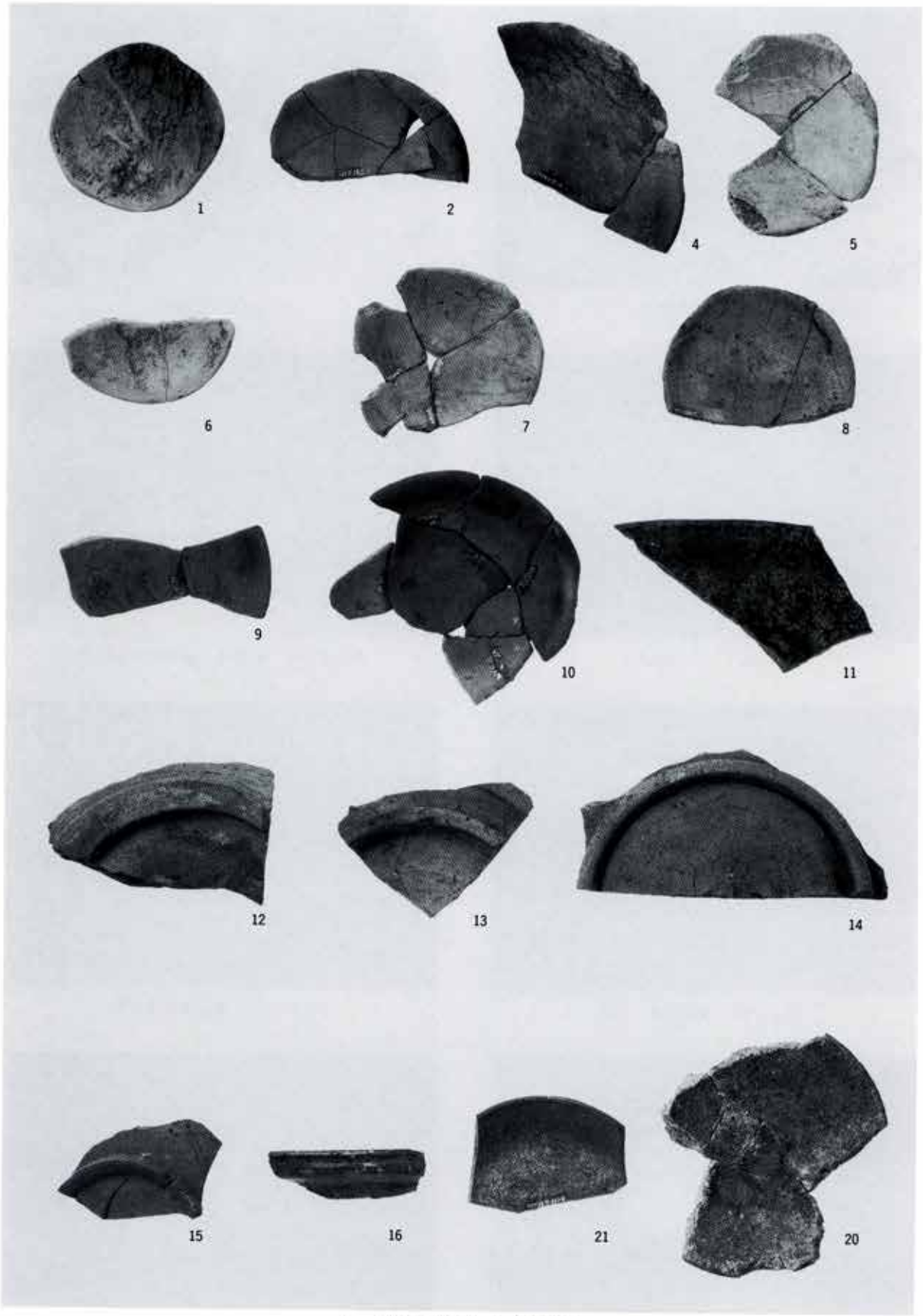
I 区 F 26区III層遺物出土状況

I 区 G 26区 II 層遺物出土状況

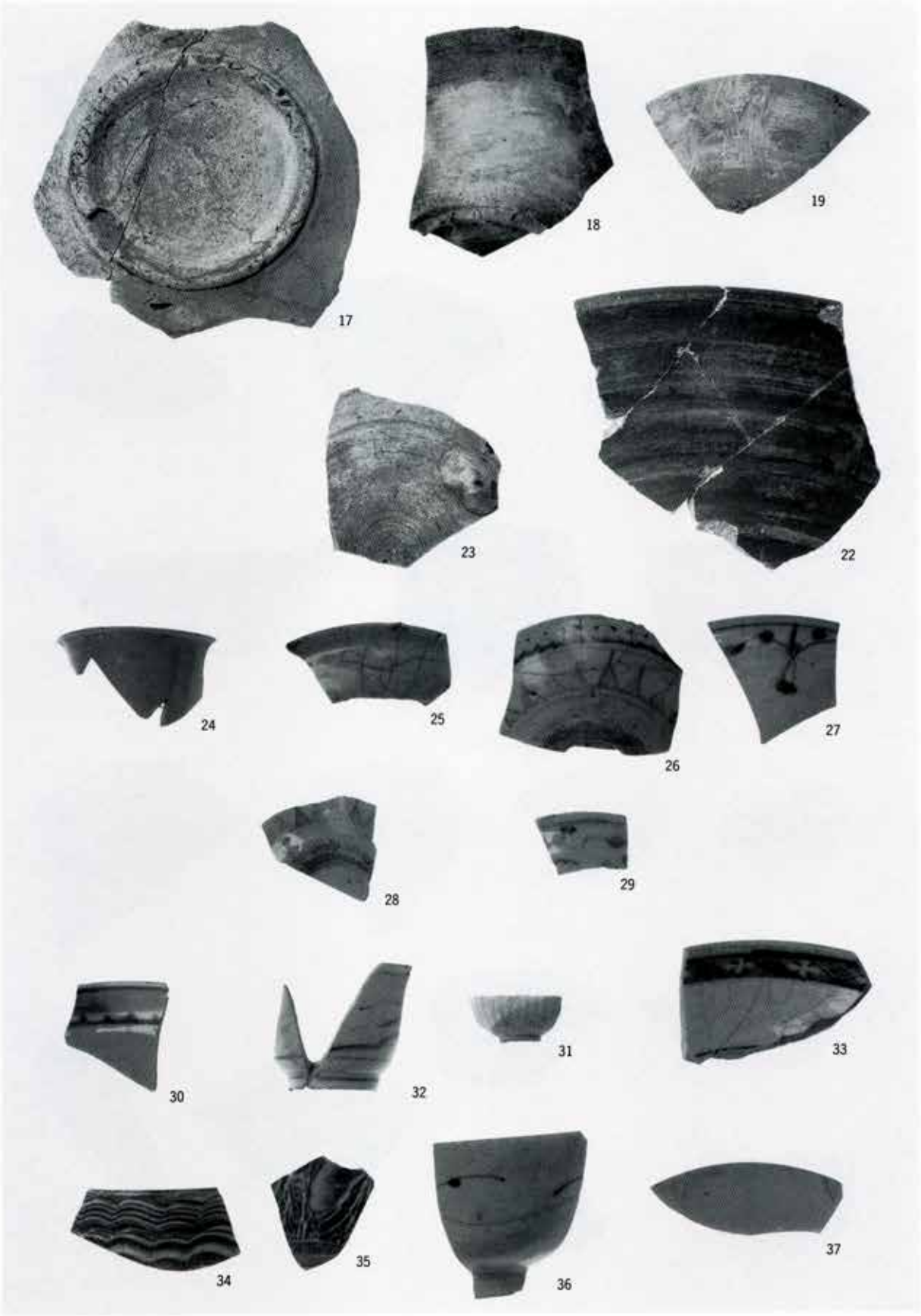
I 区 F 27区IV層遺物出土状況

II 区 H 20区III層遺物出土状況

図版 6

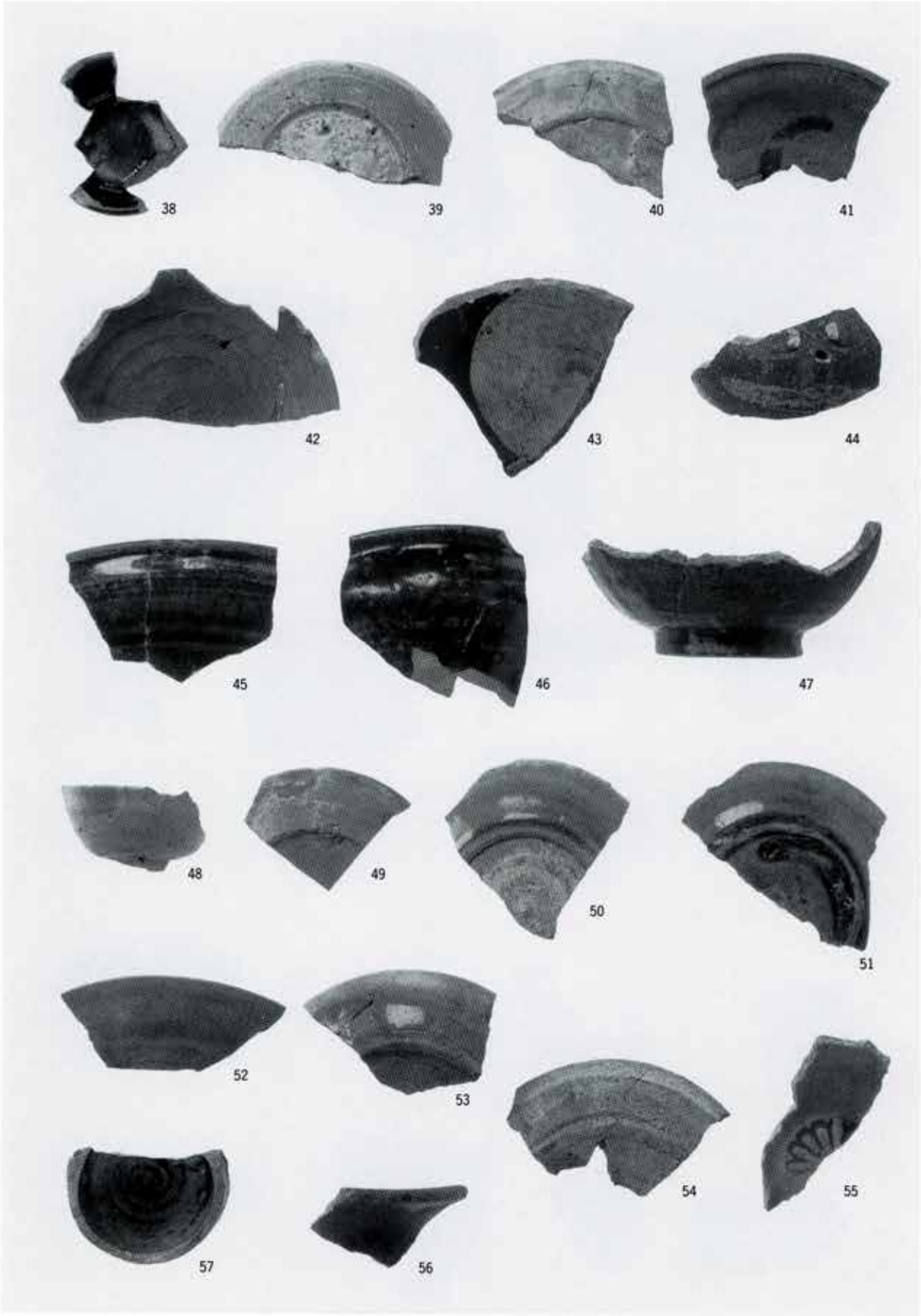


Ⅰ・Ⅱ区第１遺構面の土器類(1)

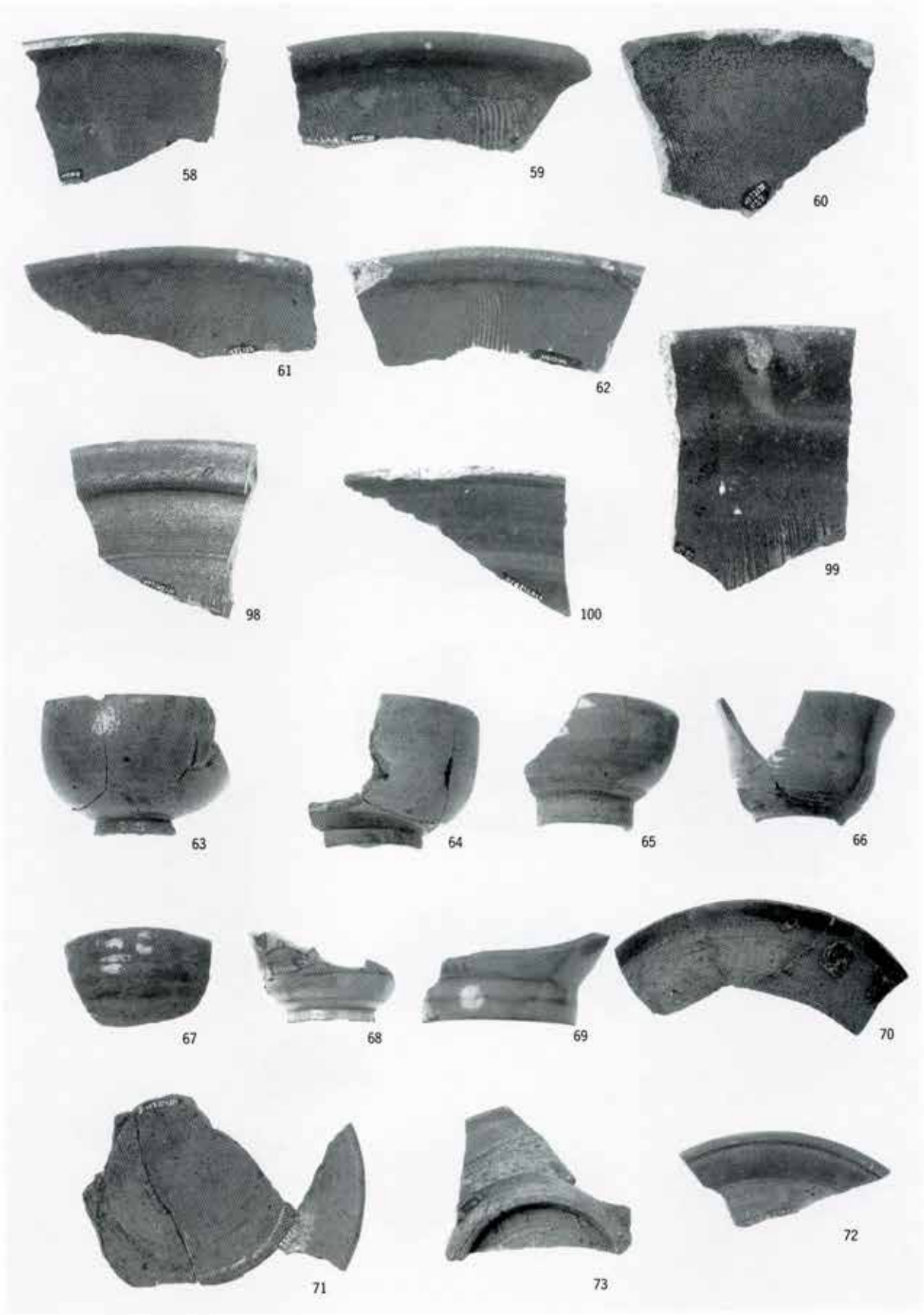


Ⅰ・Ⅱ区第１遺構面の土器類(2)

図版 8

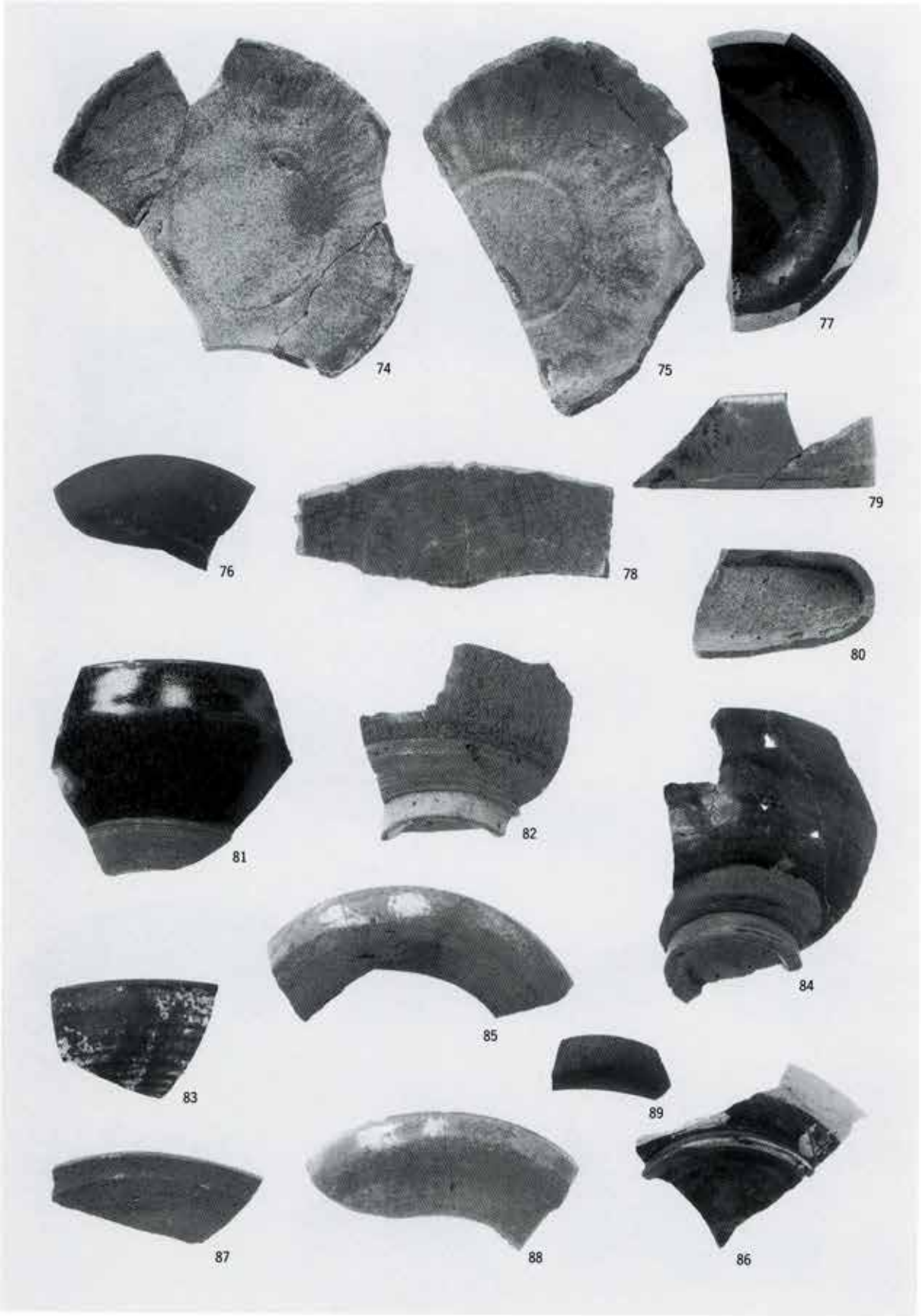


Ⅰ・Ⅱ区第 1 遺構面の土器類(3)

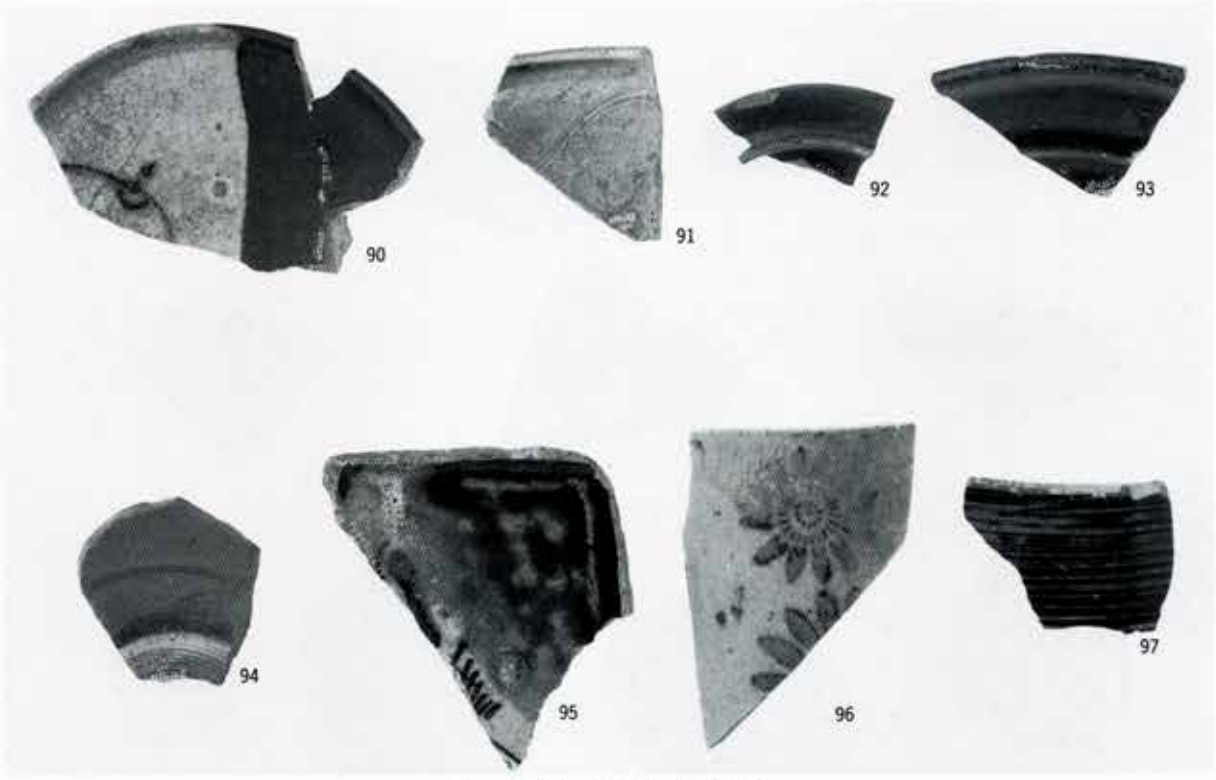


Ⅰ・Ⅱ区第１遺構面の土器類(4)

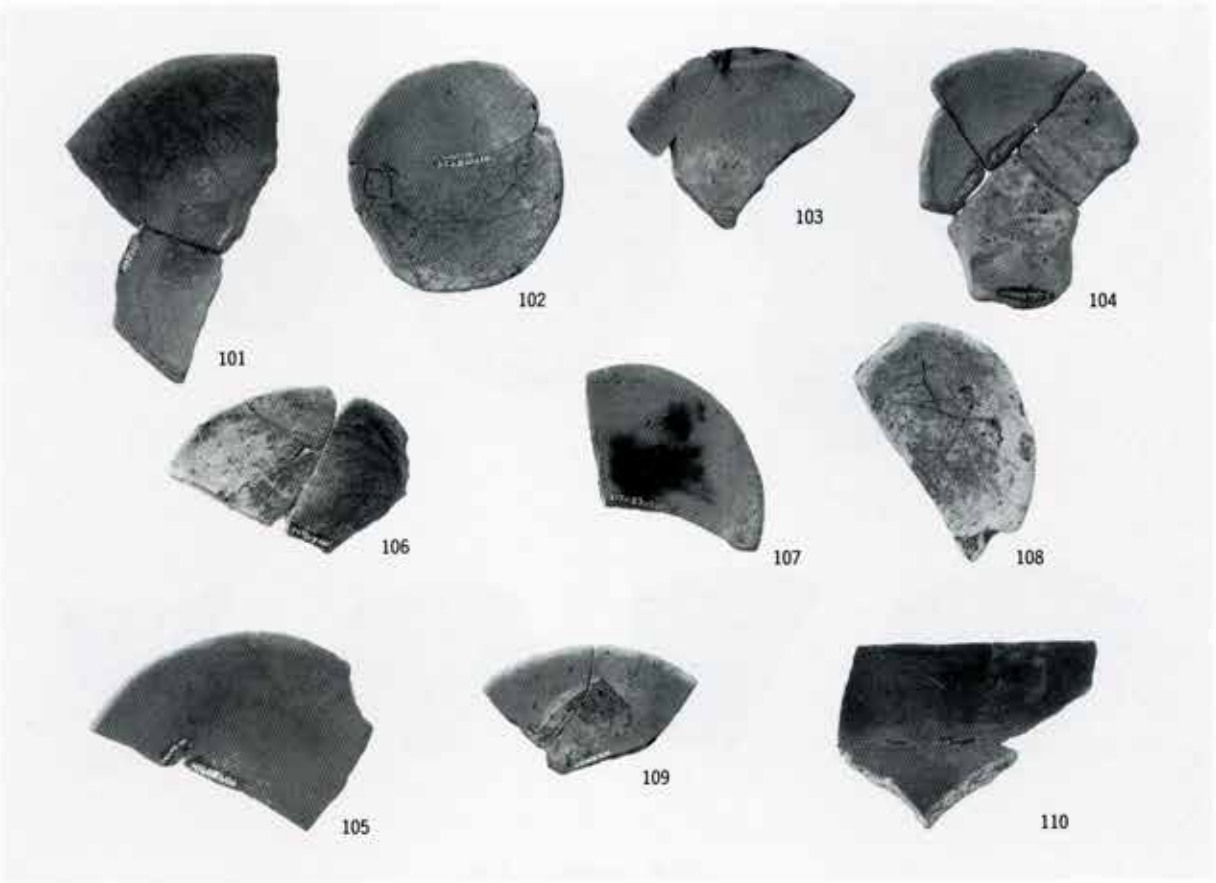
図版10



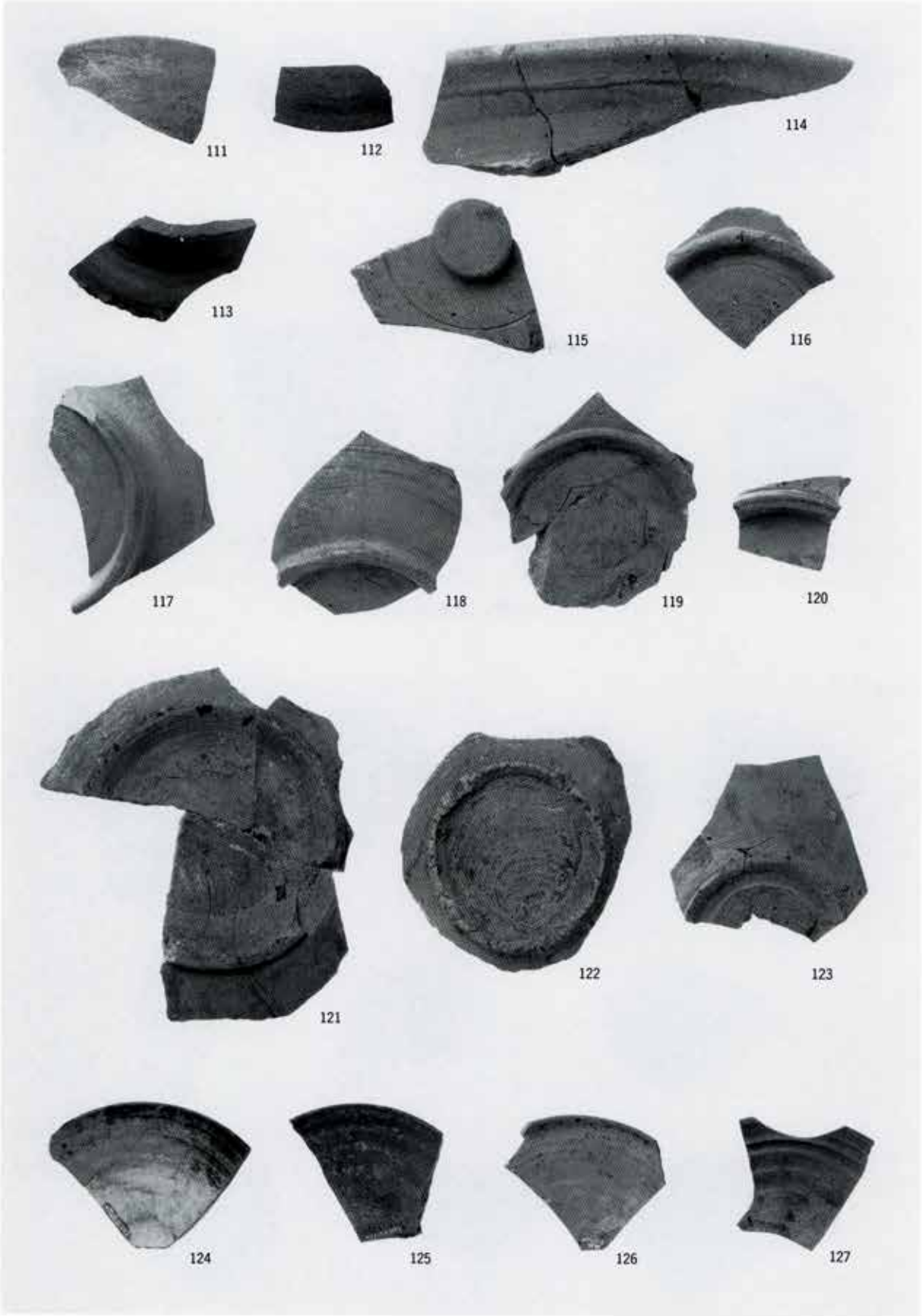
Ⅰ・Ⅱ区第１遺構面の土器類(5)



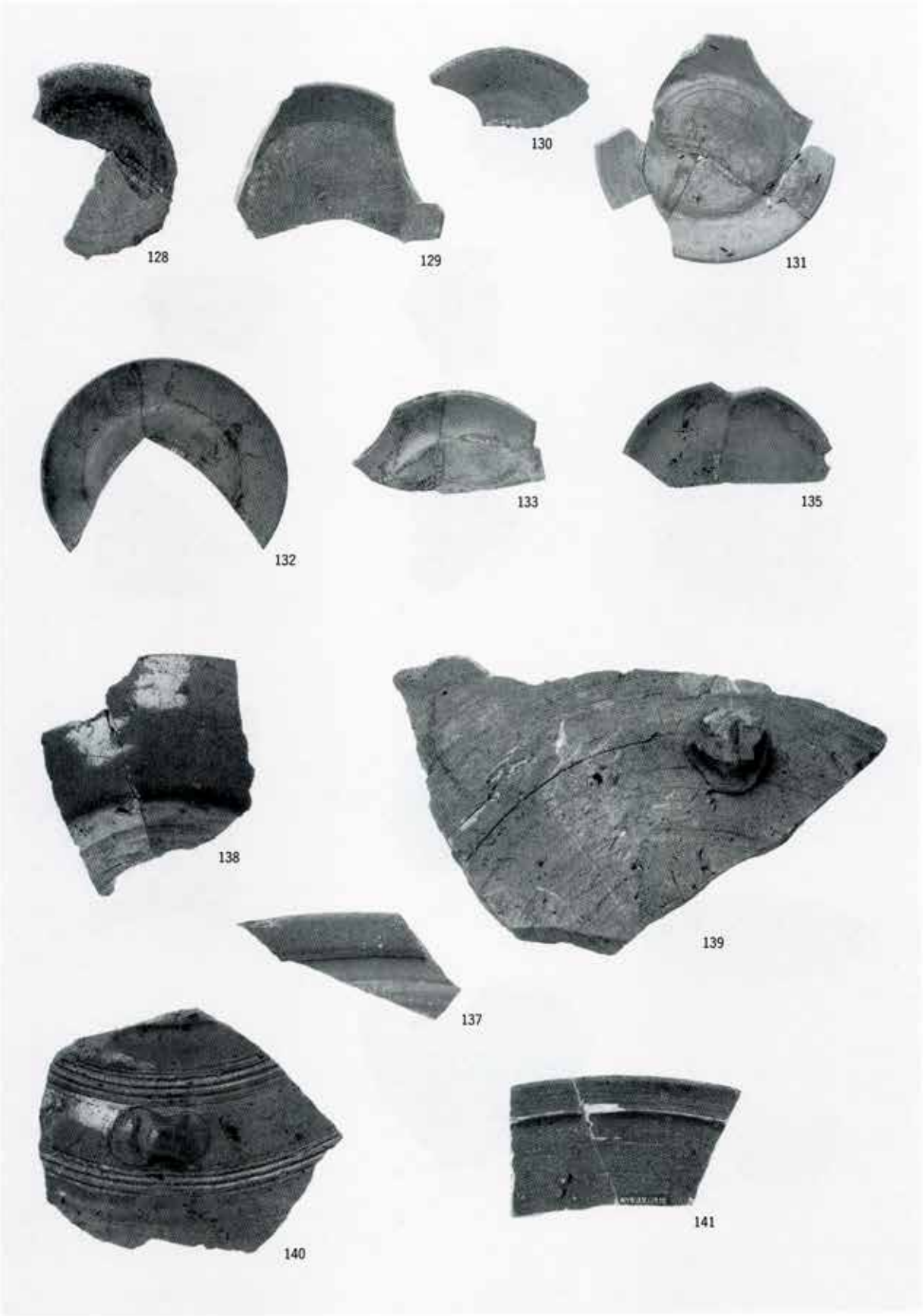
Ⅰ・Ⅱ区第１遺構面の土器類(6)



Ⅰ・Ⅱ区第２遺構面の土器類(1)

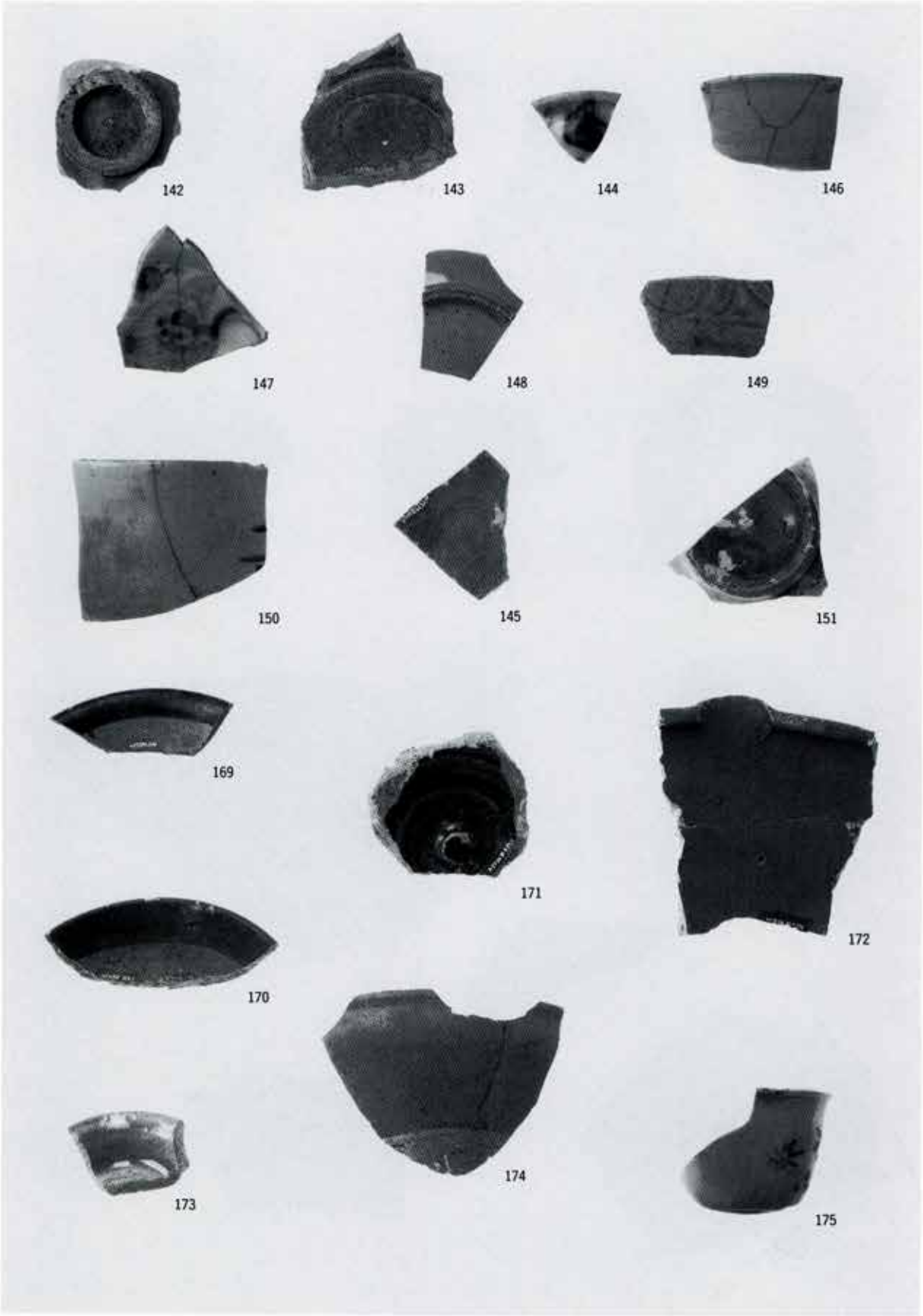


Ⅰ・Ⅱ区第２遺構面の土器類(2)



Ⅰ・Ⅱ区第２遺構面の土器類(3)

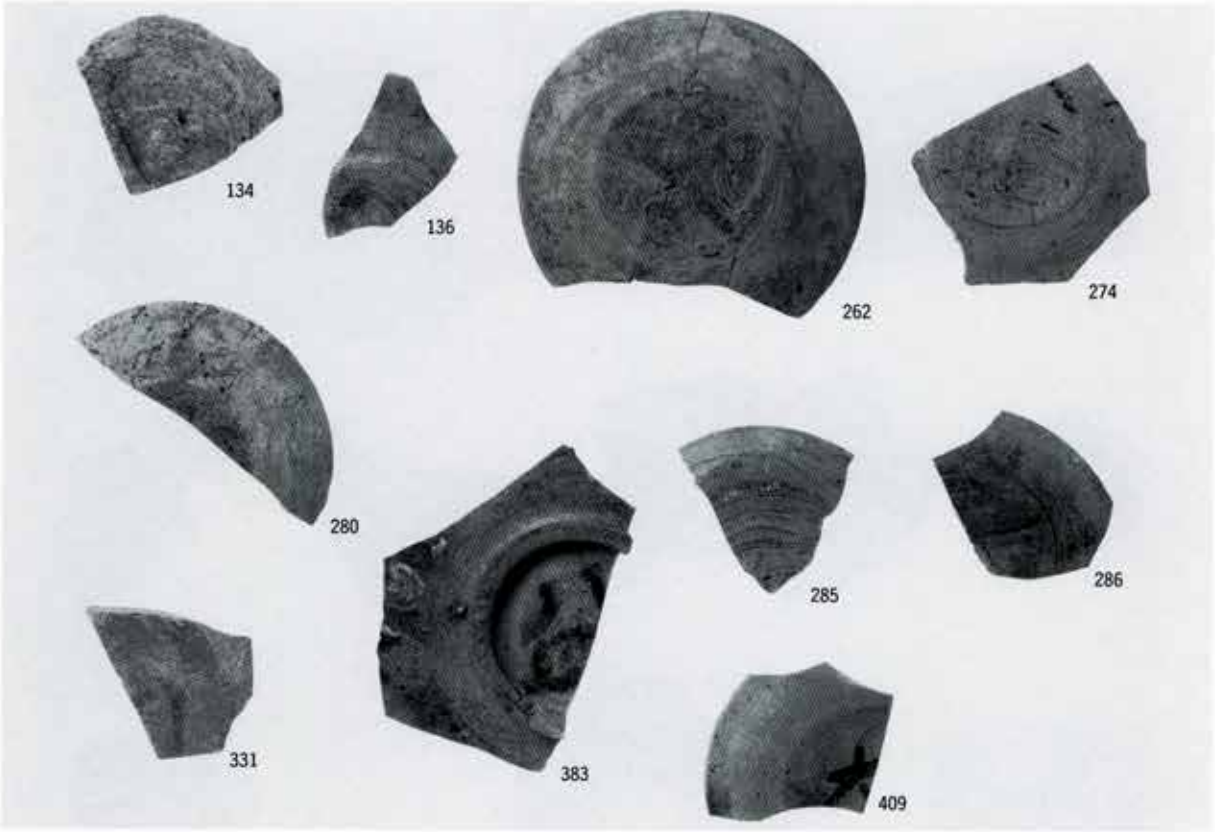
図版14



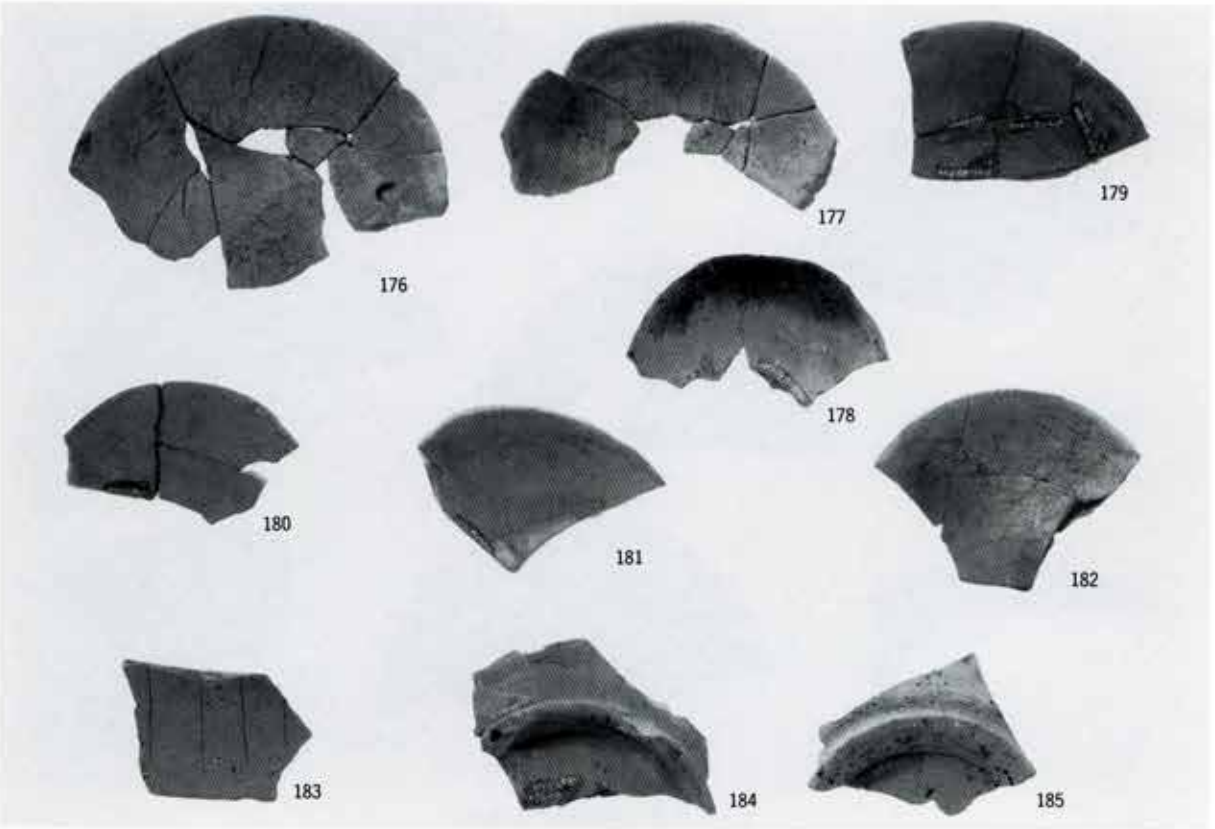
Ⅰ・Ⅱ区第２遺構面の土器類(4)

Ⅰ・Ⅱ区第２遺構面の土器類(5)

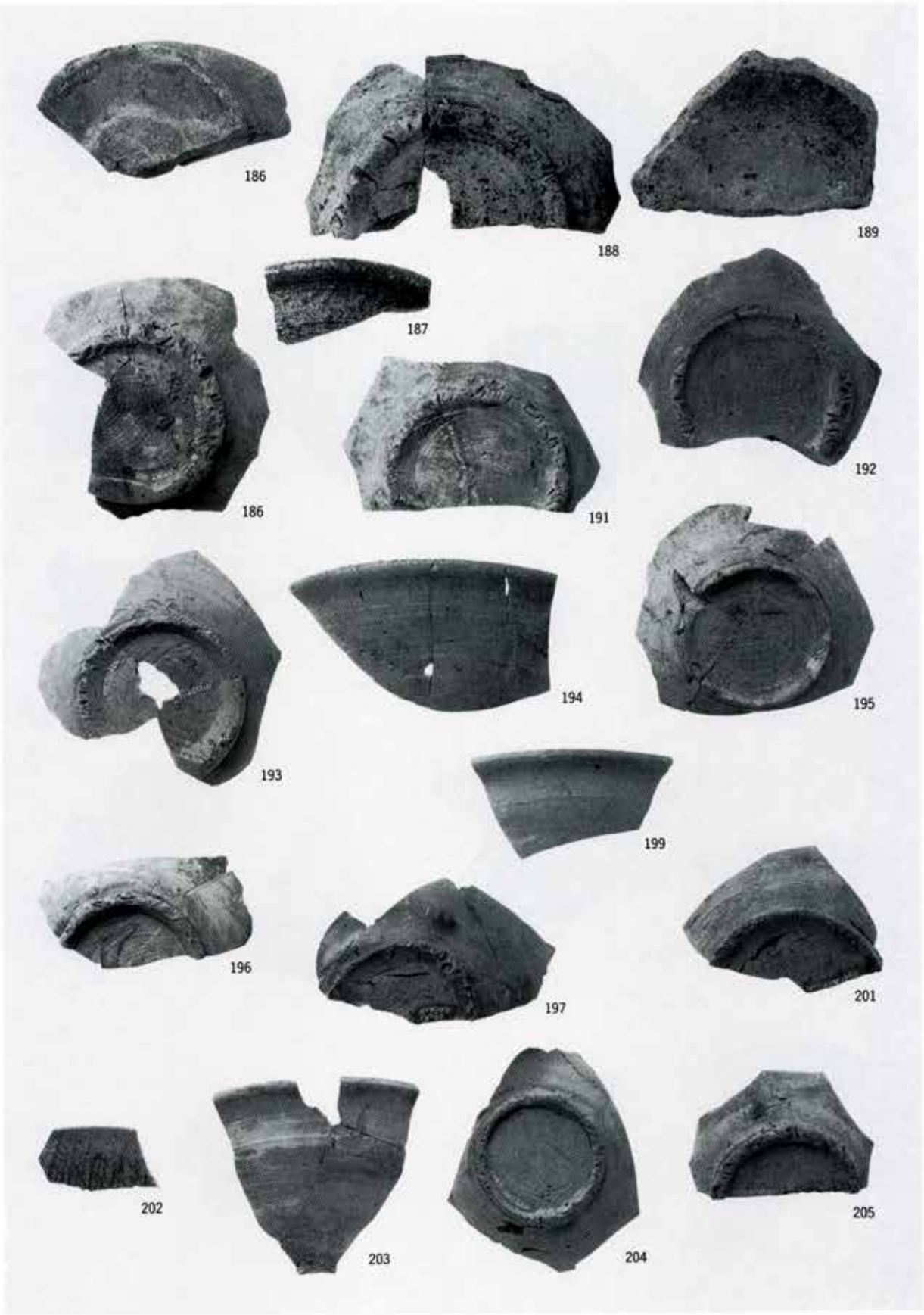
図版16



墨書土器類

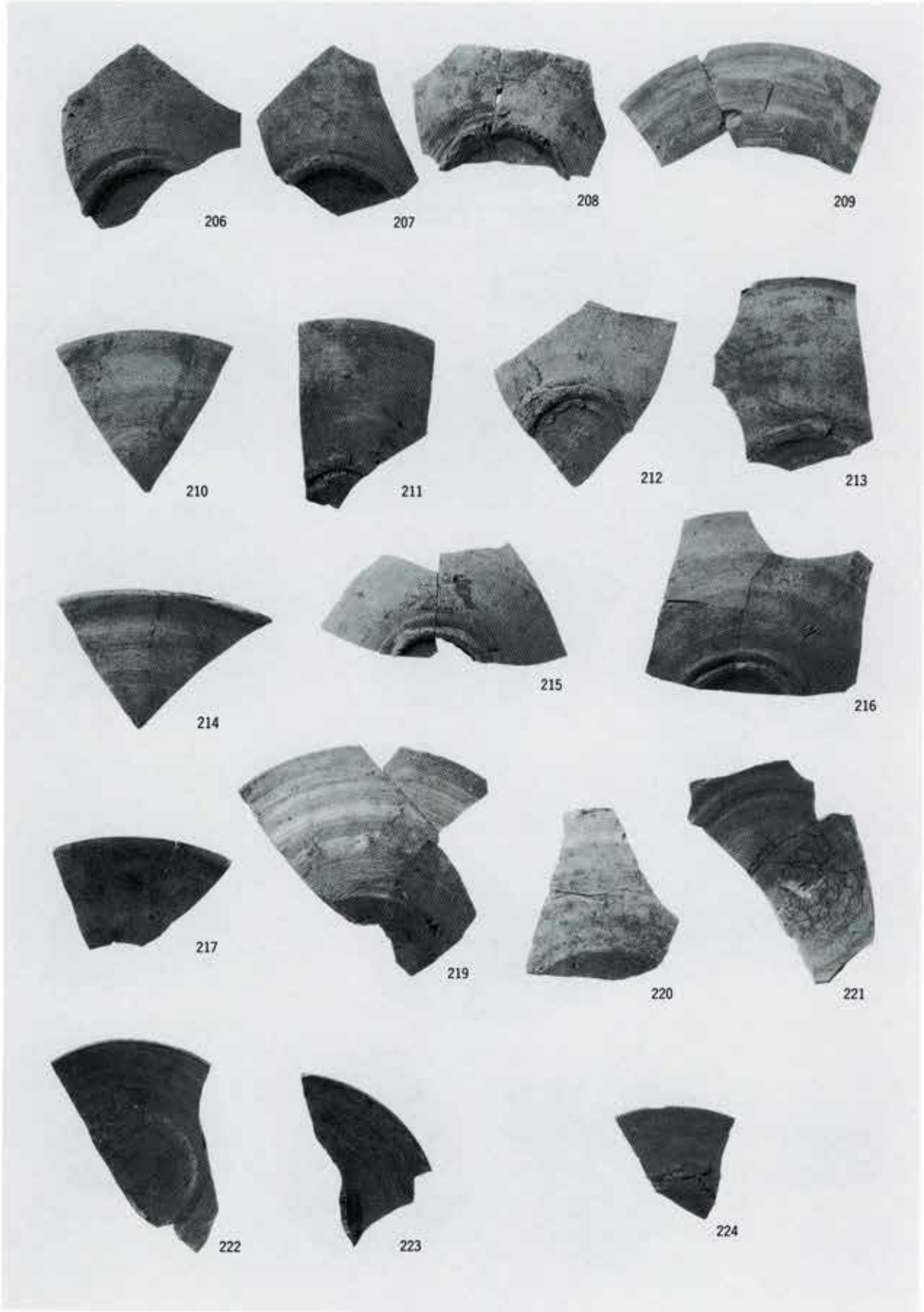


Ⅰ・Ⅱ区第３遺構面の土器類(1)

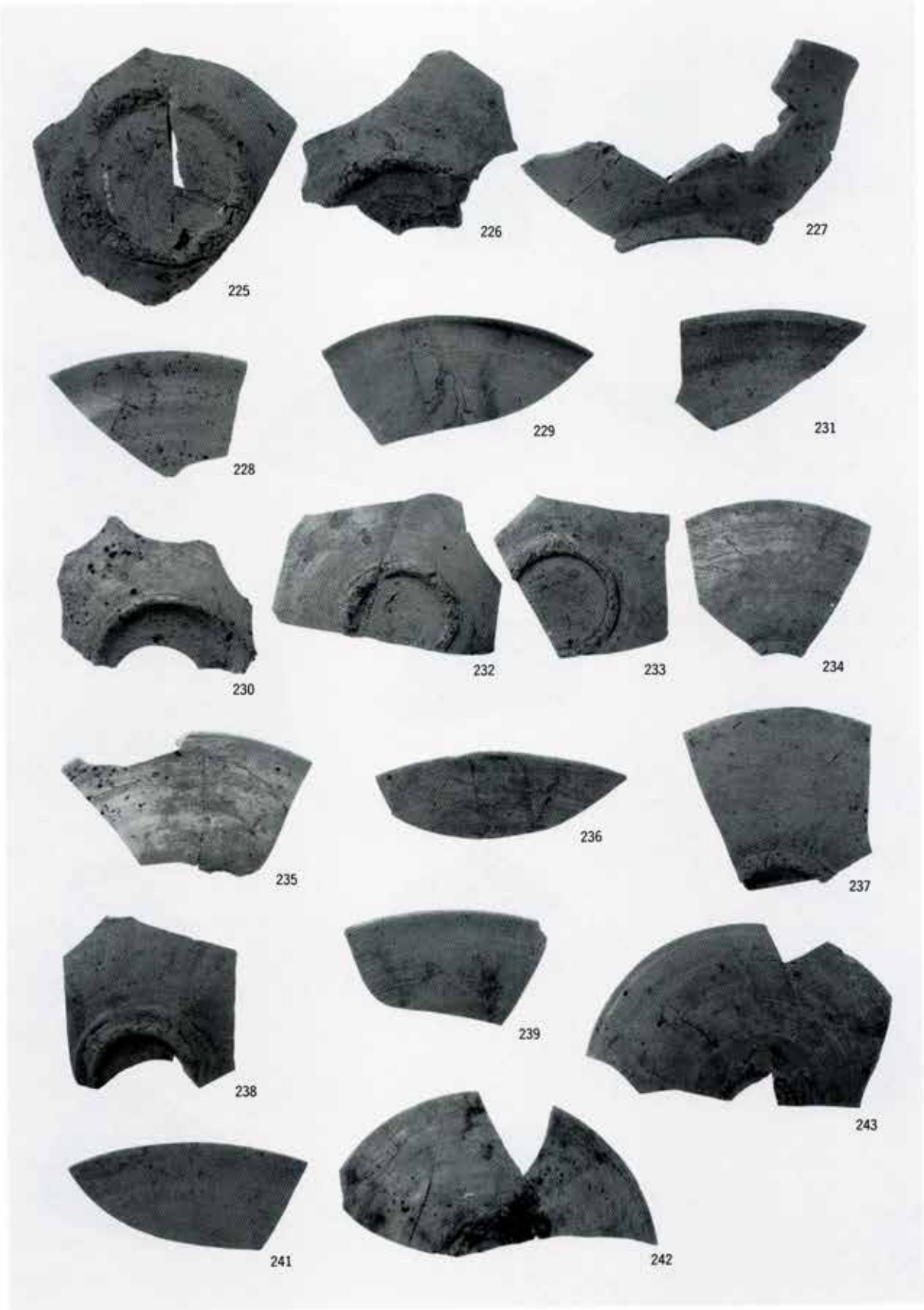


Ⅰ・Ⅱ区第３遺構面の土器類(2)

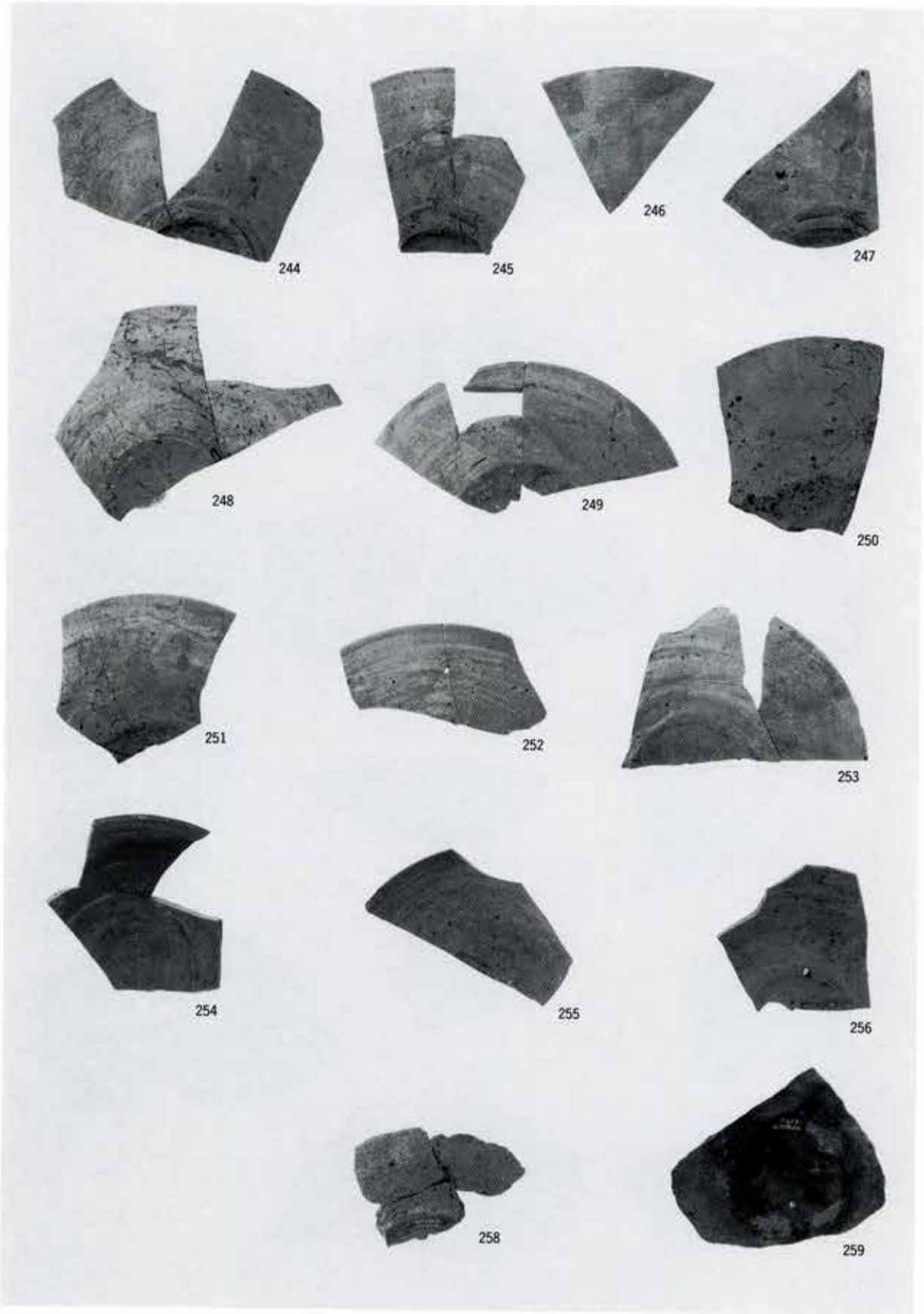
図版18



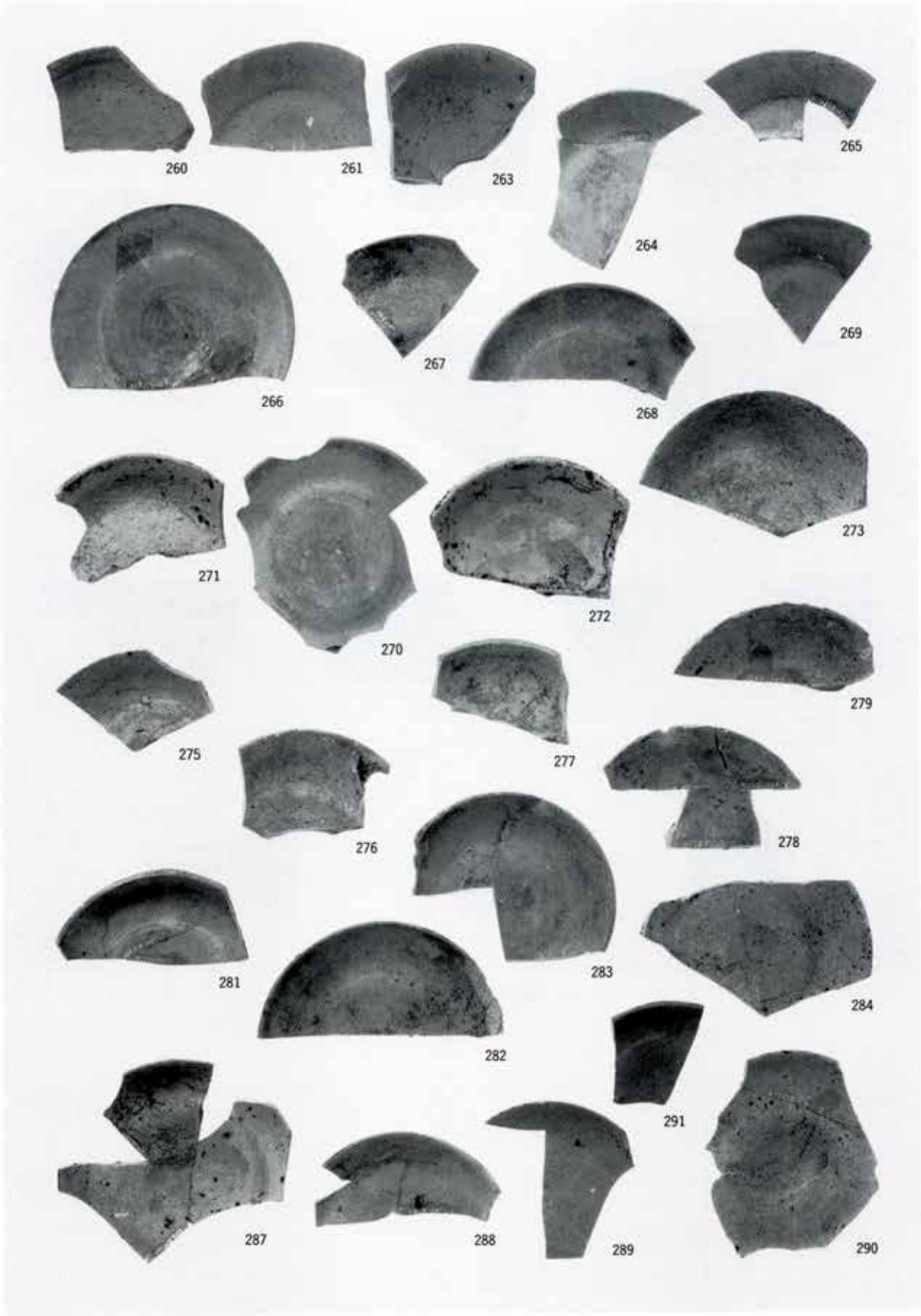
Ⅰ・Ⅱ区第３遺構面の土器類(3)



Ⅰ・Ⅱ区第３遺構面の土器類(4)

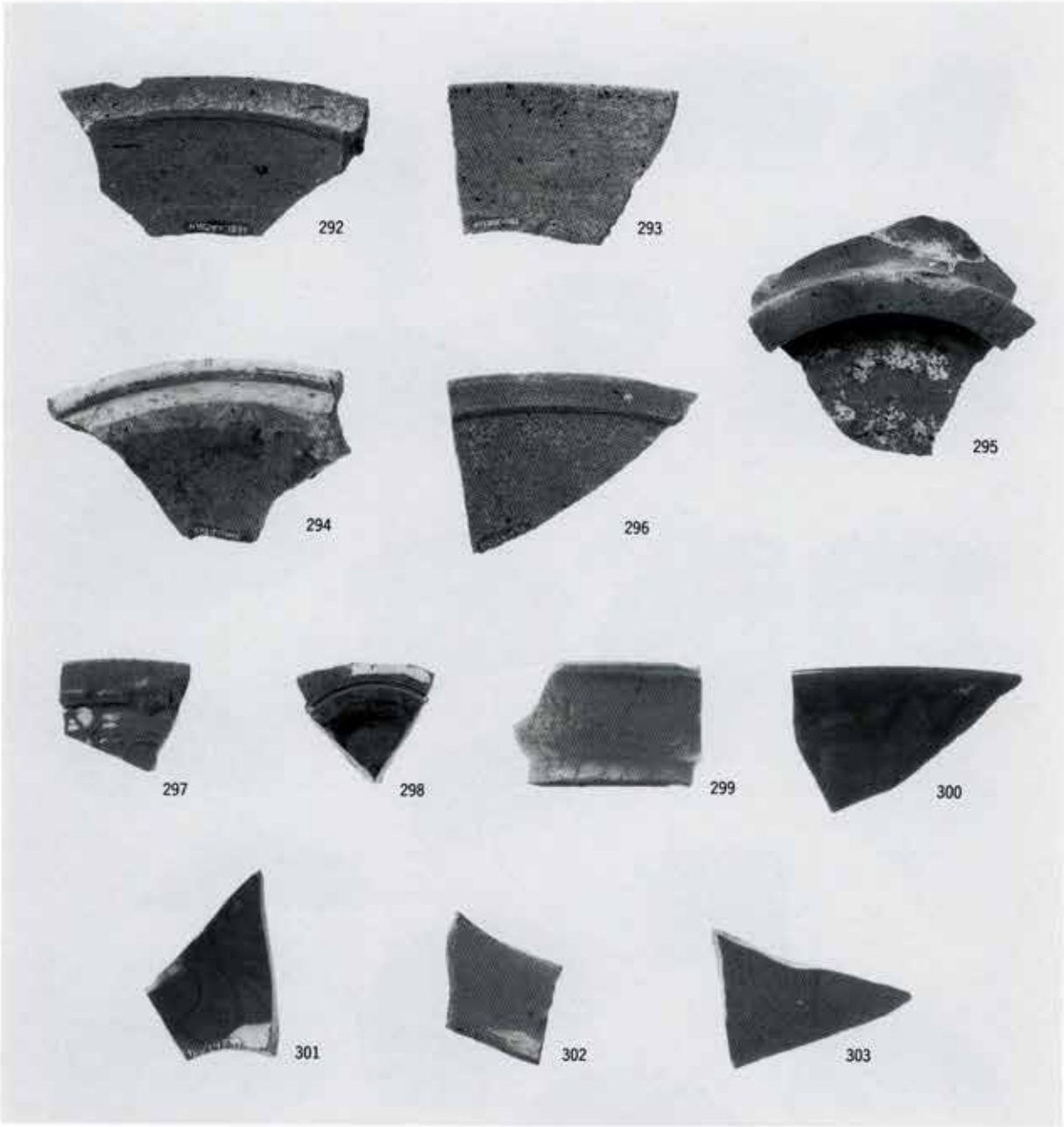


Ⅰ・Ⅱ区第３遺構面の土器類(5)

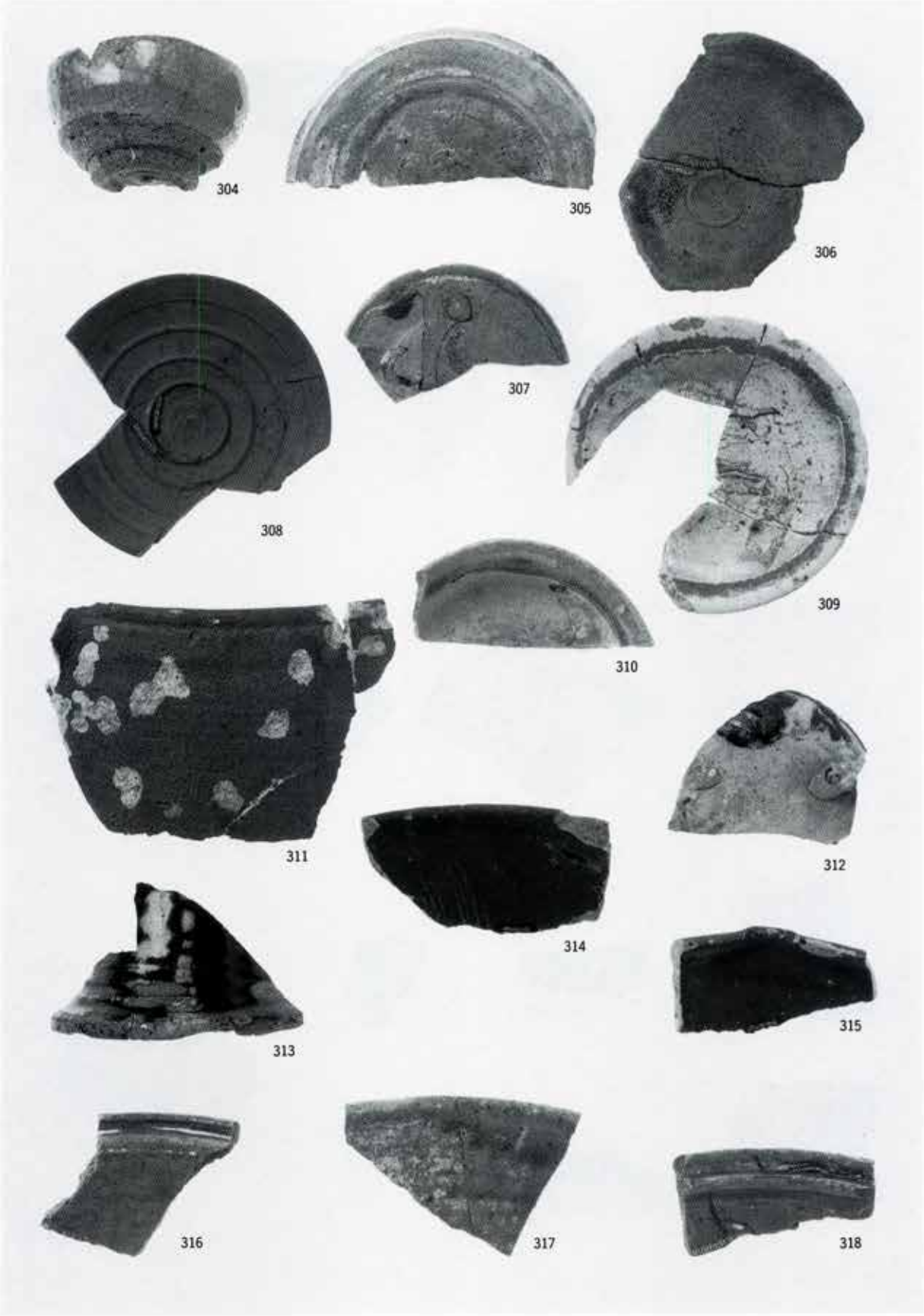


Ⅰ・Ⅱ区第３遺構面の土器類(6)

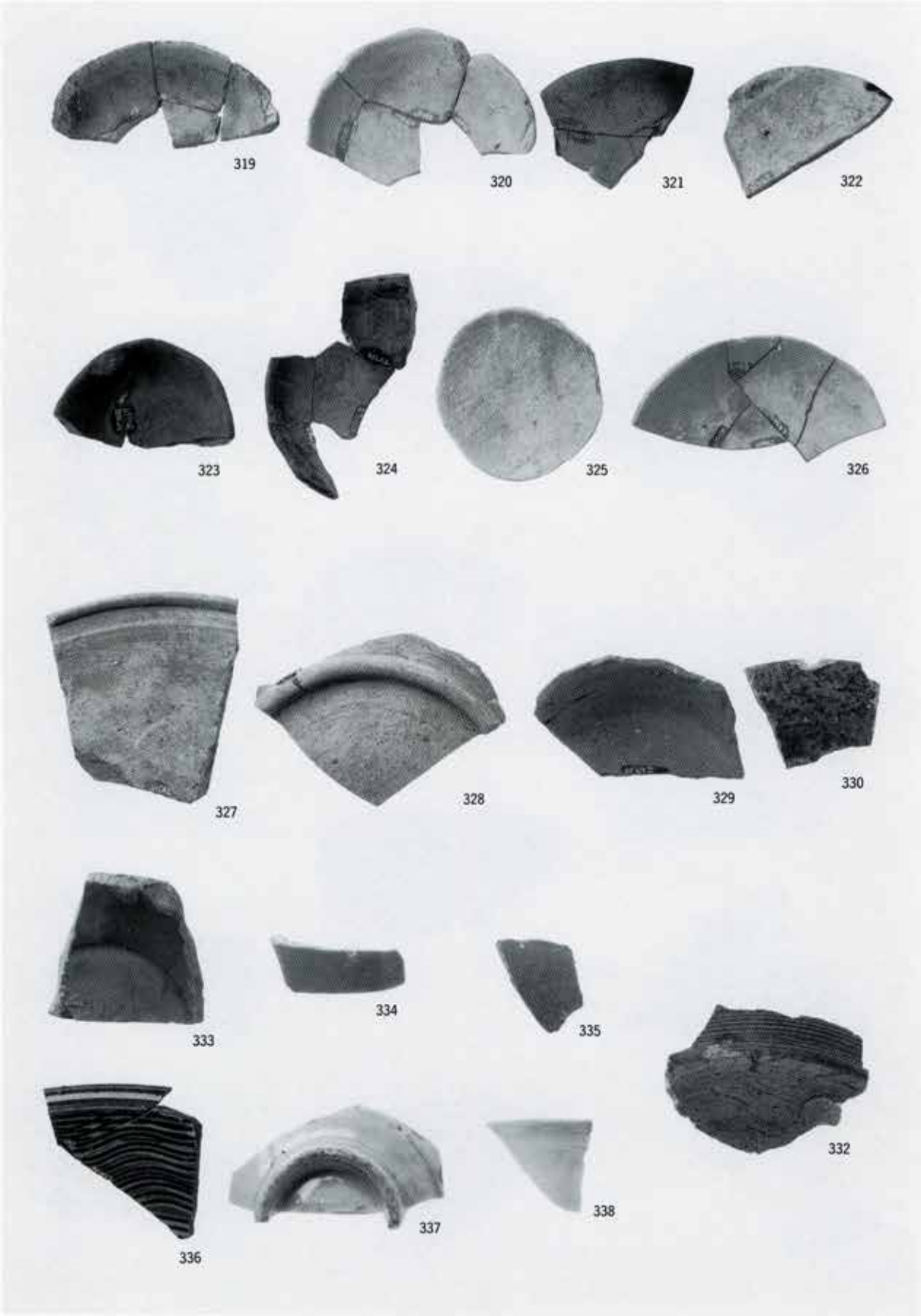
図版22



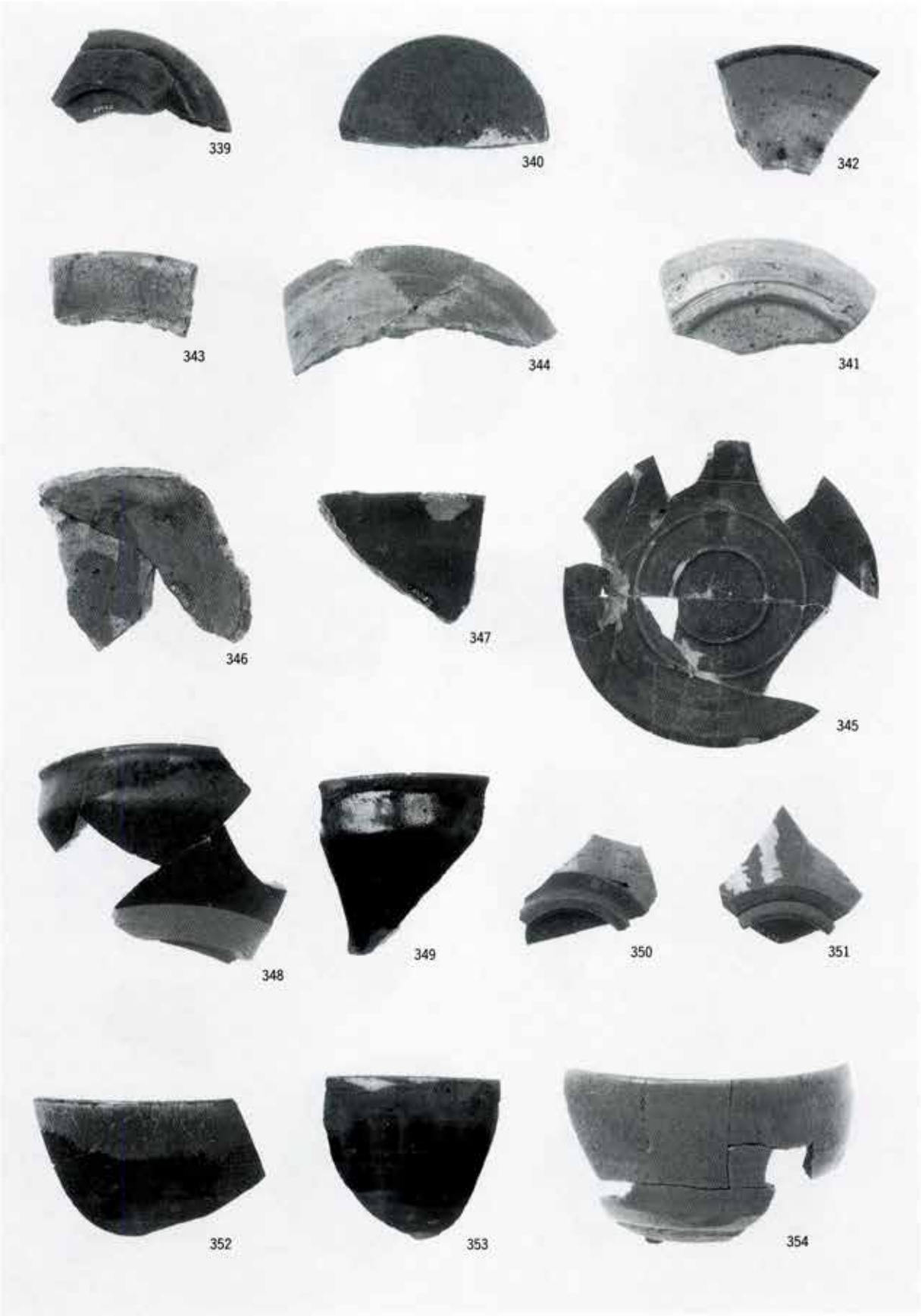
Ⅰ・Ⅱ区第３遺構面の土器類(7)



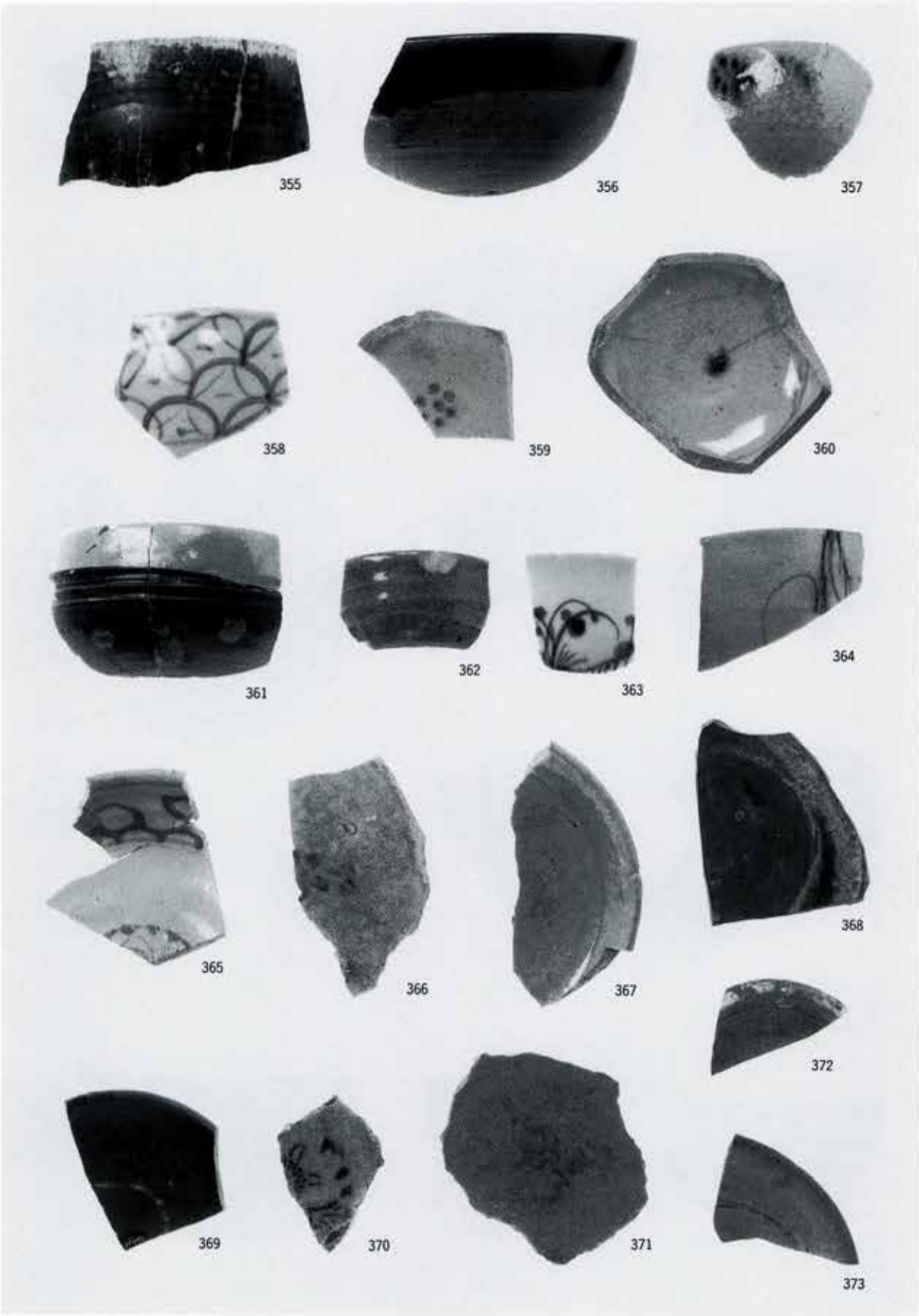
Ⅰ・Ⅱ区第３遺構面の土器類(8)



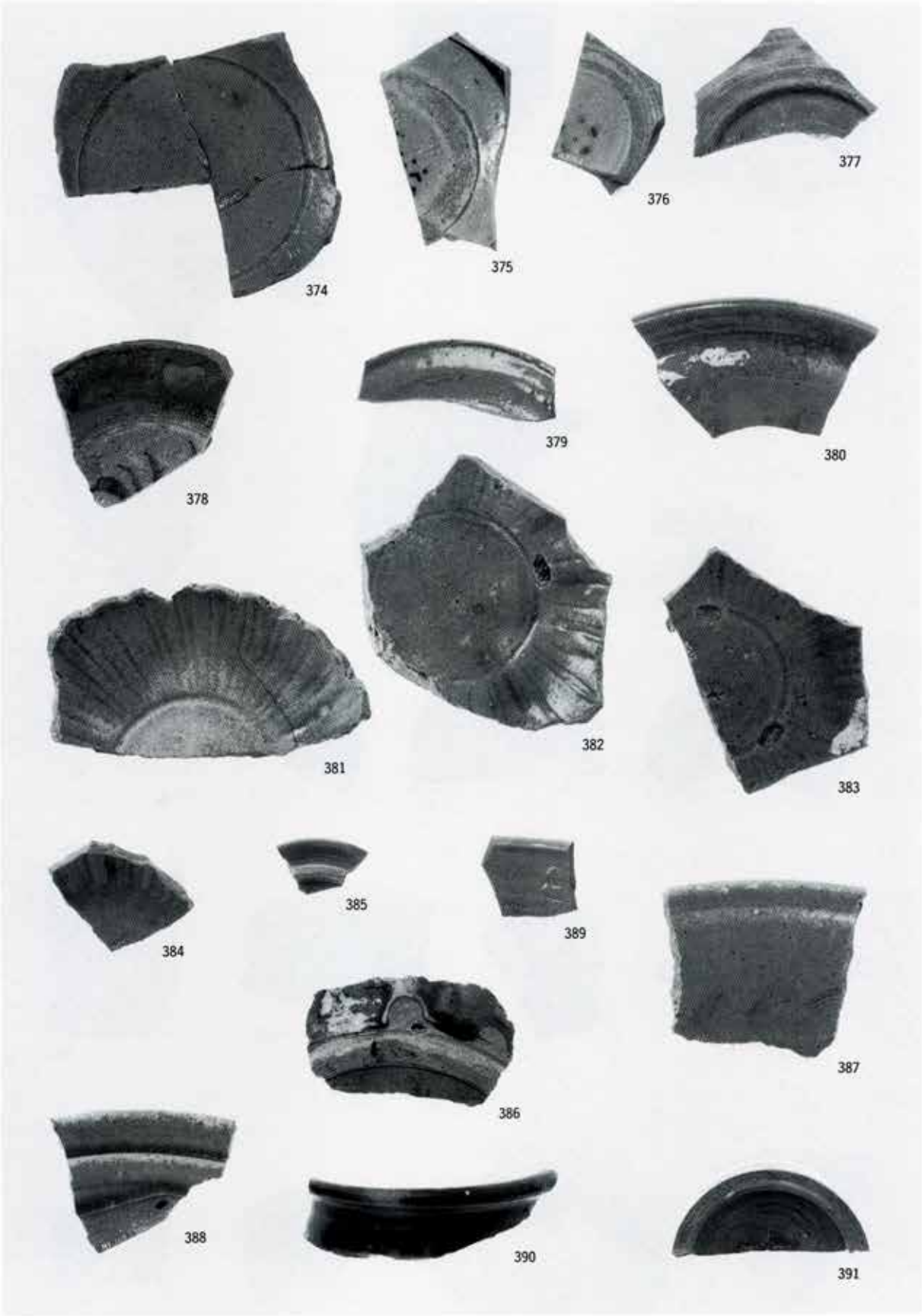
III区第II層の土器類(1)



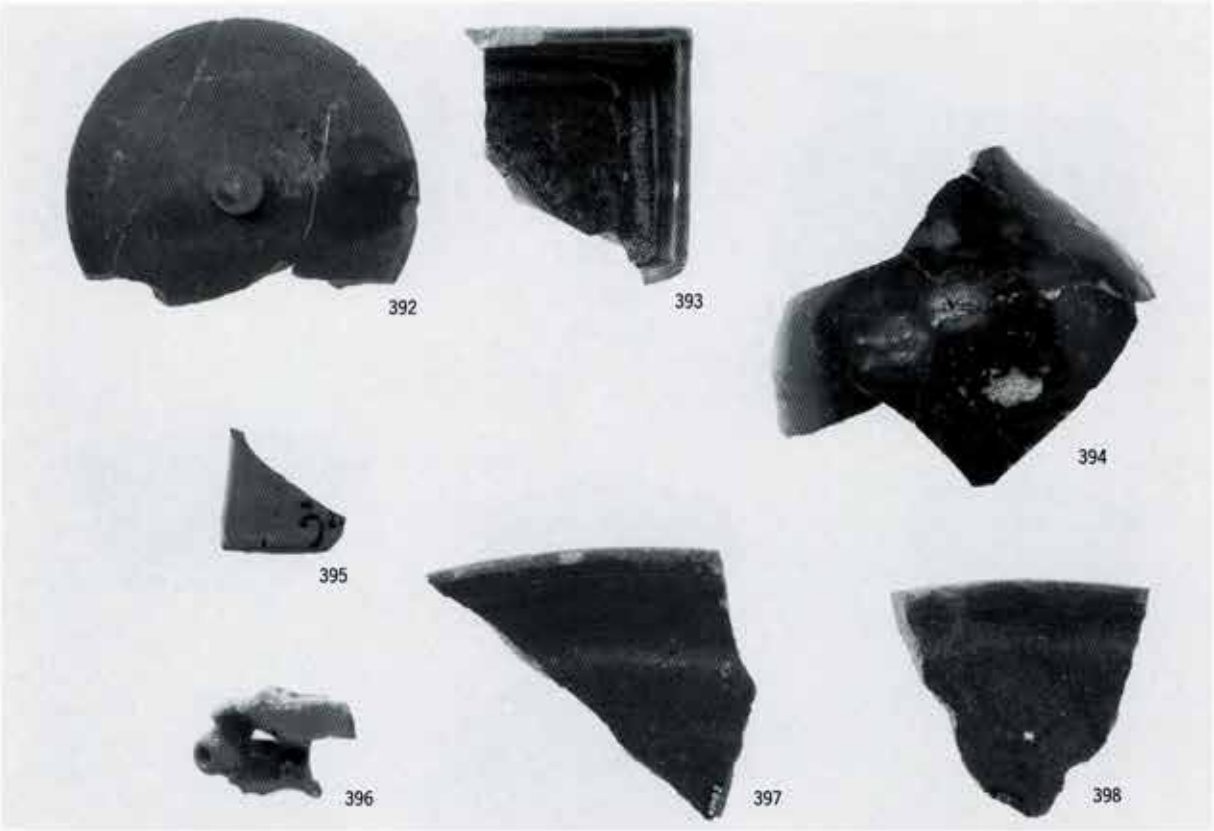
III区第II層の土器類(2)



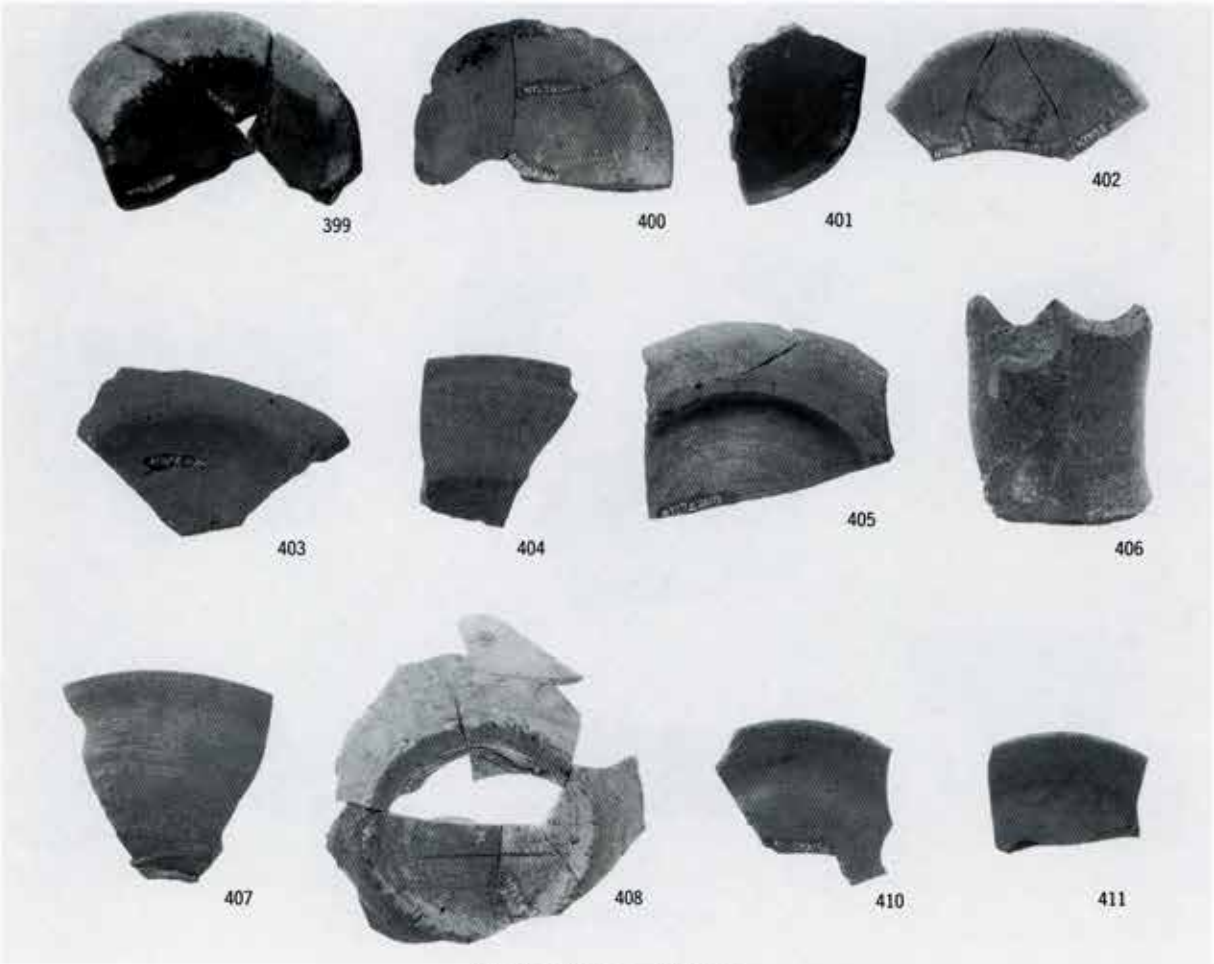
III区第II層の土器類(3)



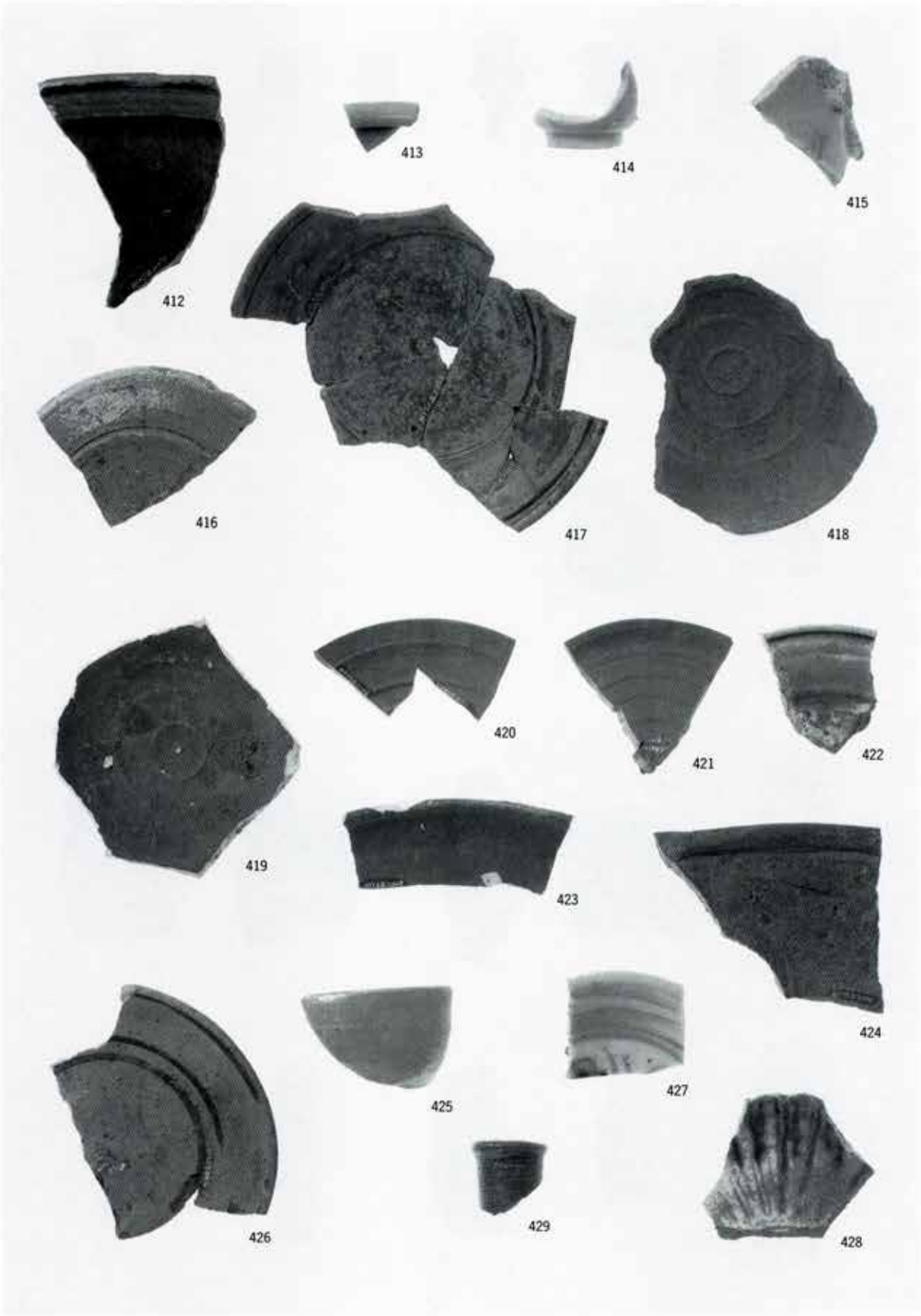
III区第II層の土器類(4)



III区第II層の土器類(5)

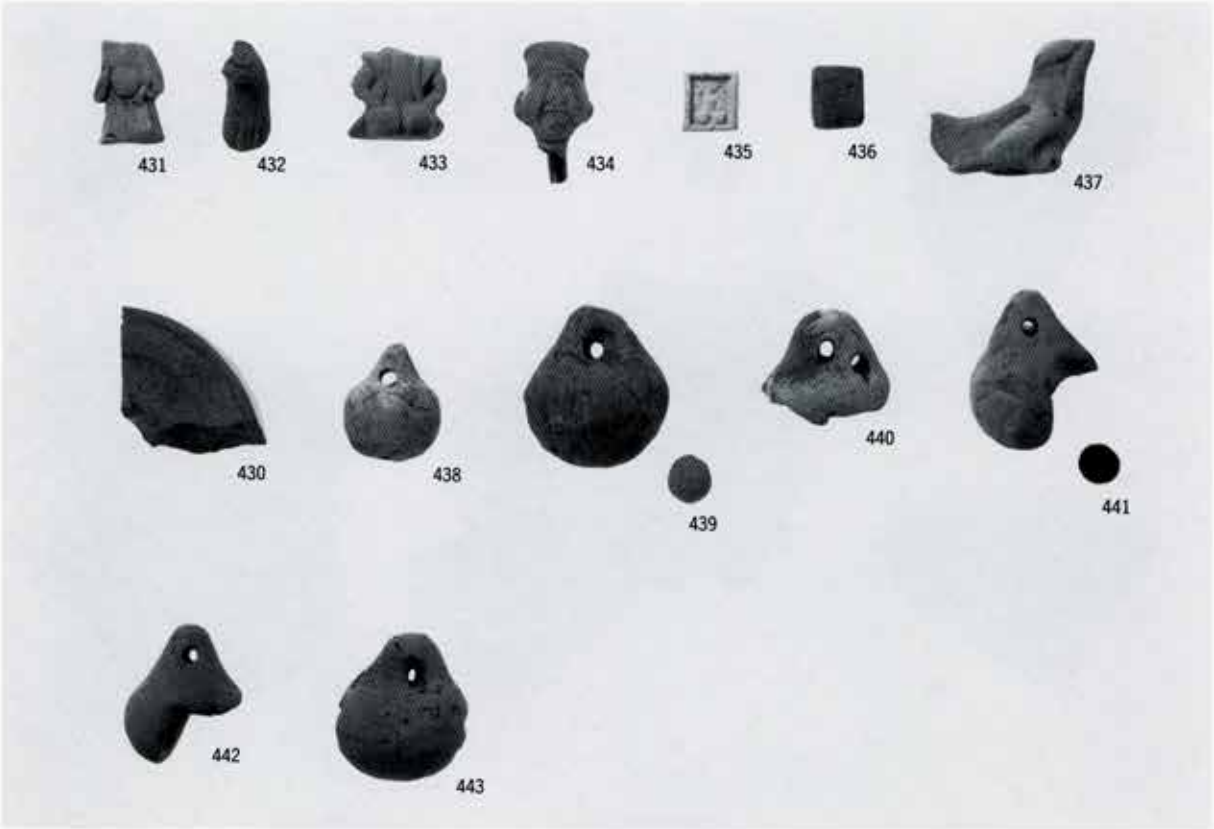


III区第1遺構面の土器類(1)

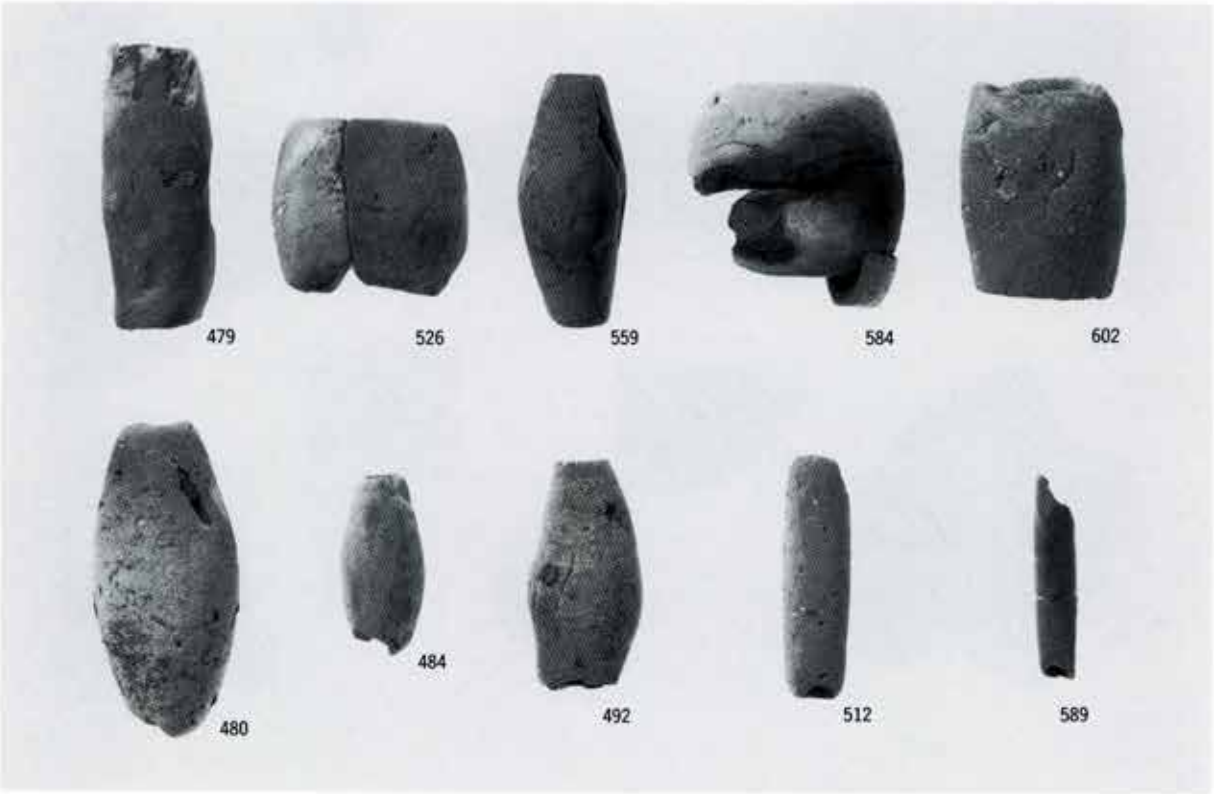


III区第1遺構面の土器類(2)

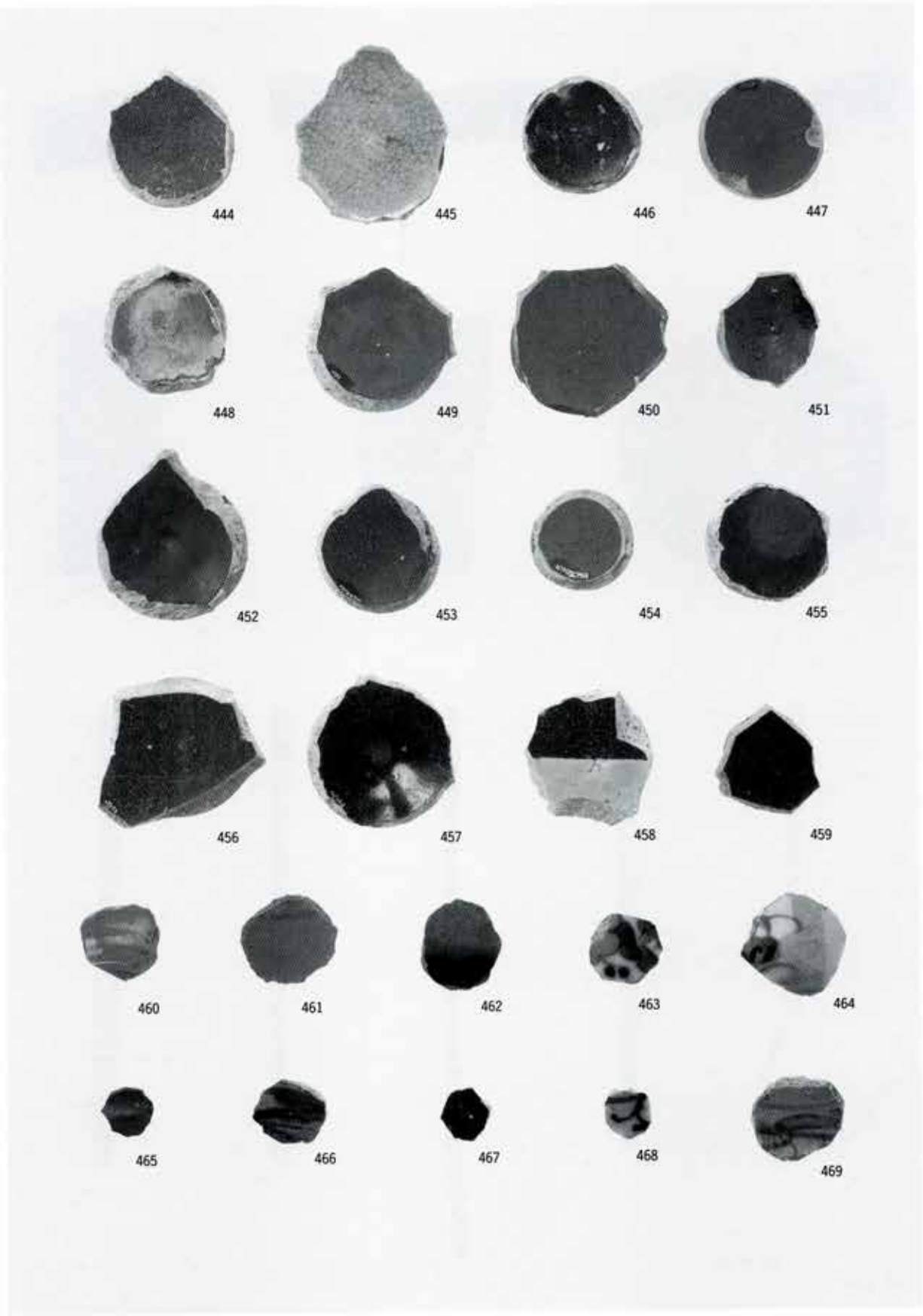
図版30


431
432
433
434
435
436
437
430
438
439
440
441
442
443

土製品

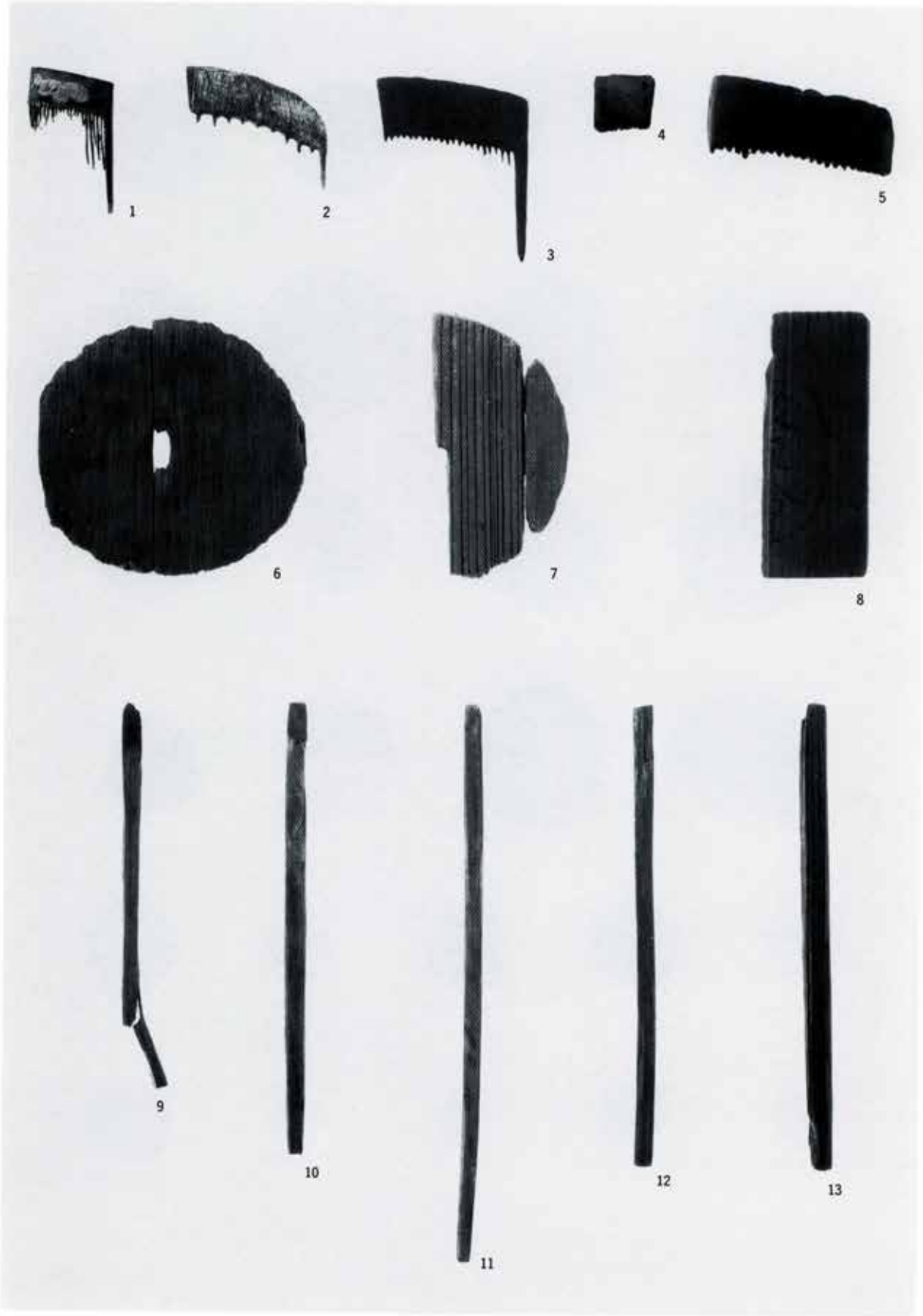

479
526
559
584
602
480
484
492
512
589

土錘


444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469

陶製加工品

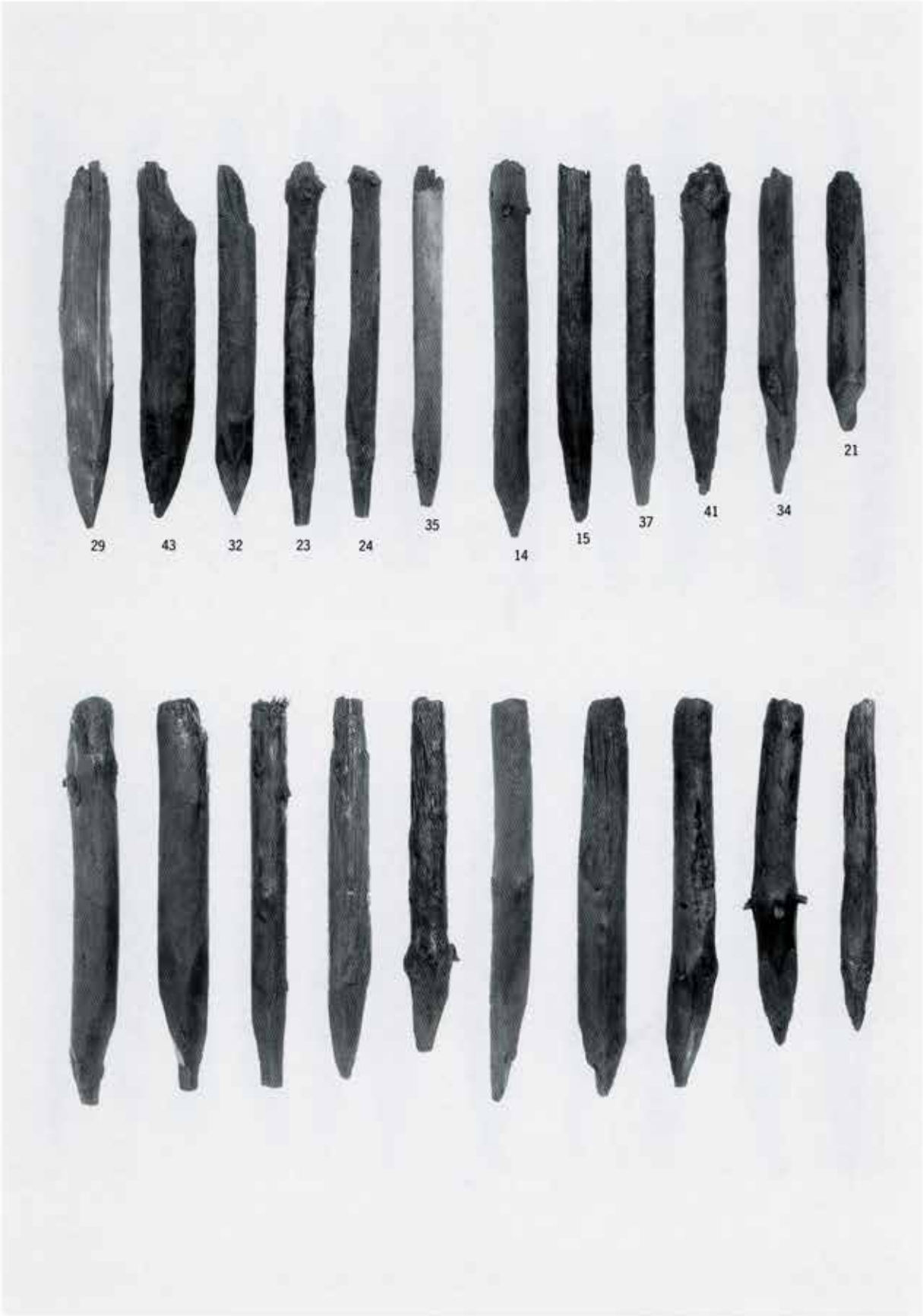
図版32



木製品

杭(1)

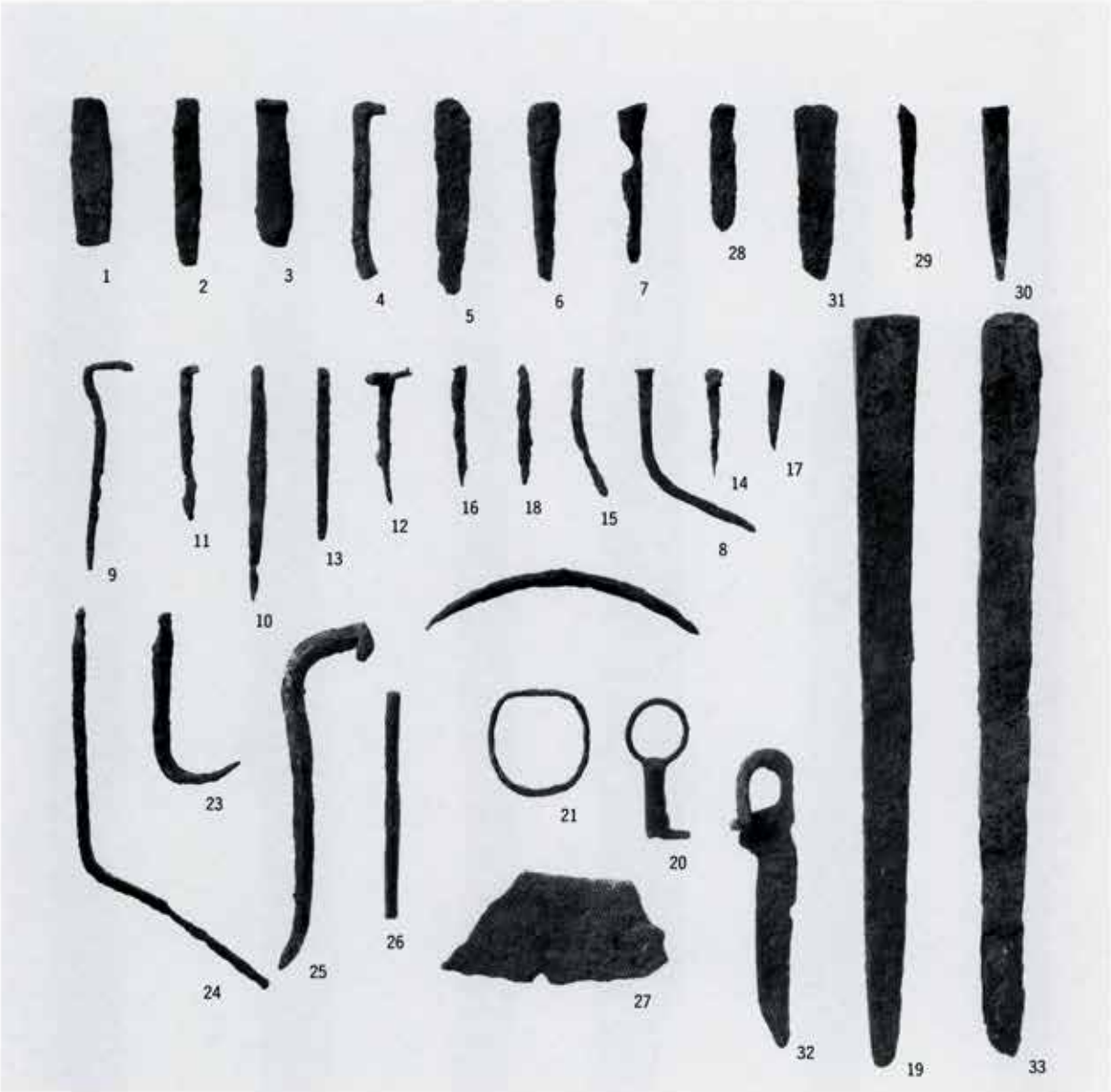
図版34



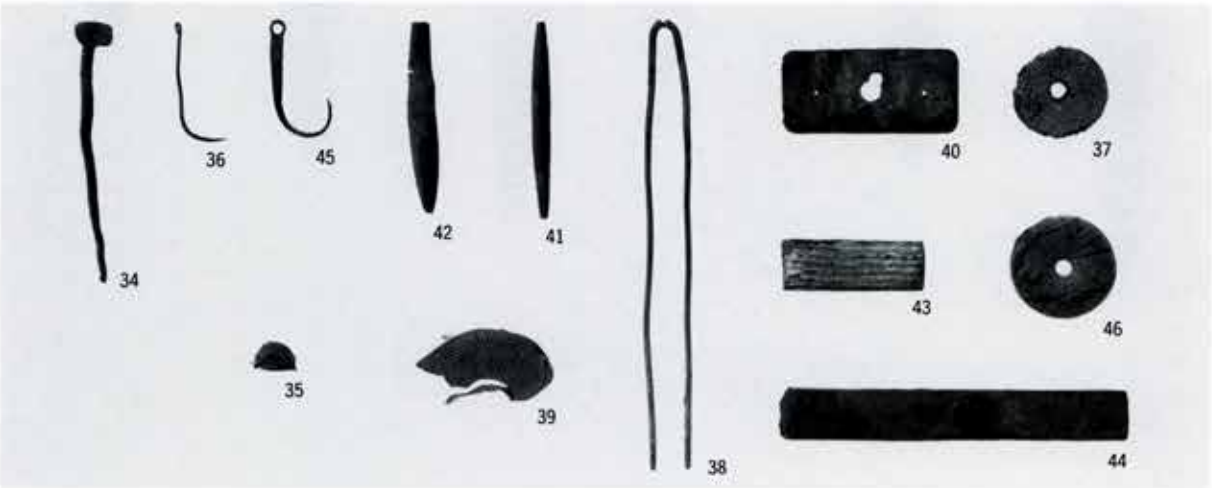
杭(2)

杭(3)

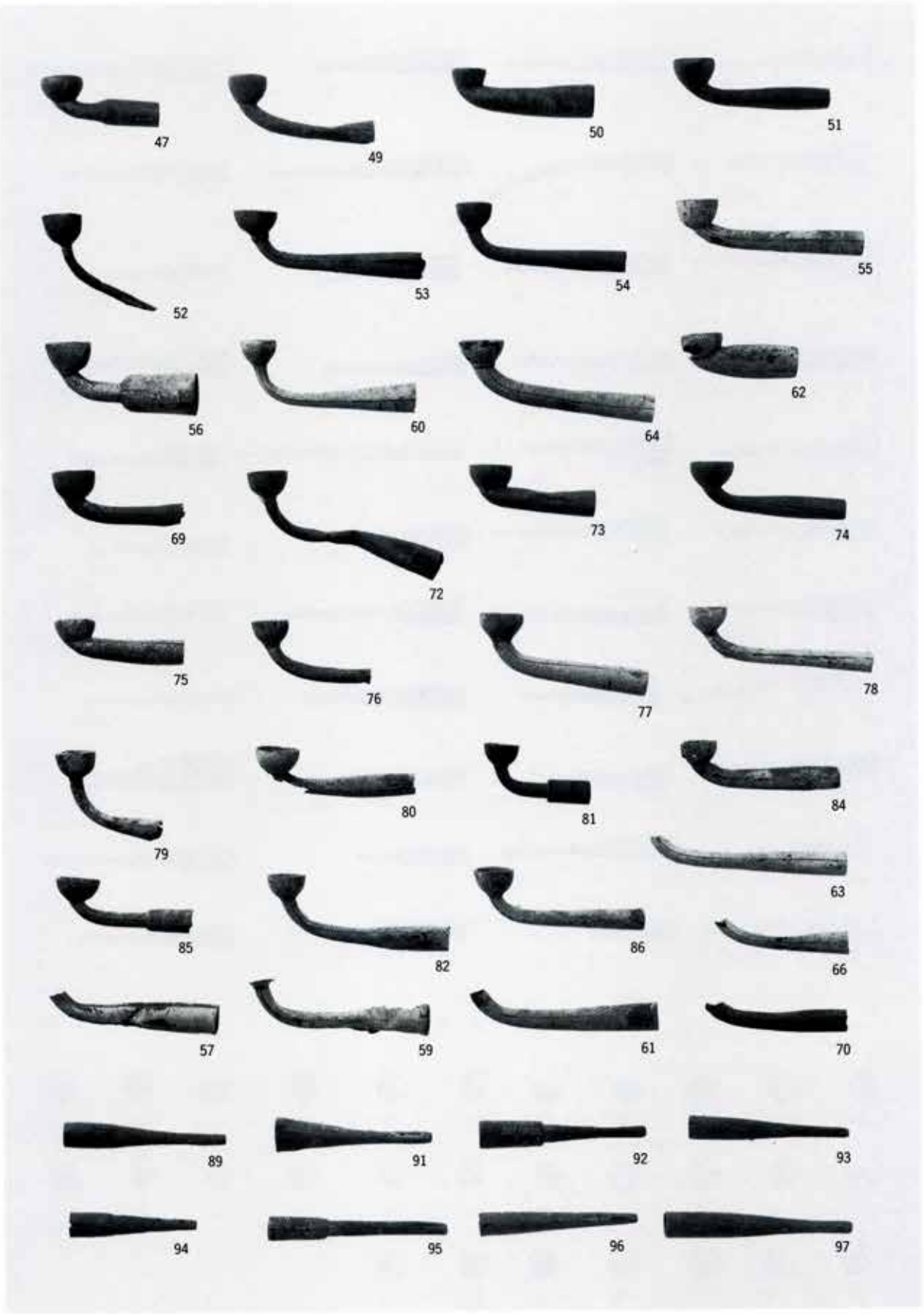
図版36


1
2
3
4
5
6
7
28
31
29
30
9
11
10
13
12
16
18
15
14
8
17
23
24
25
26
21
20
27
32
19
33

鉄製品

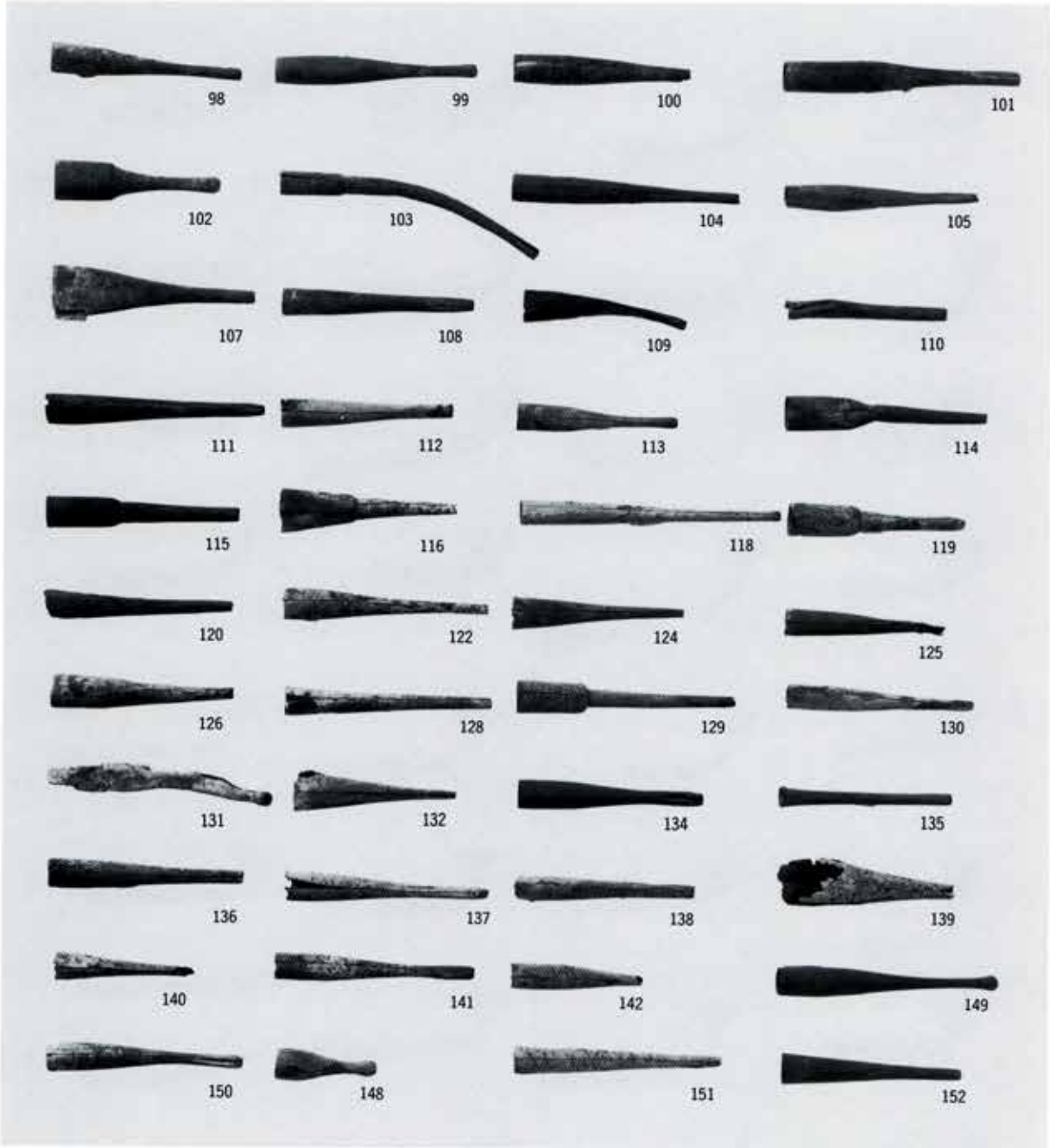

34
36
45
42
41
40
37
43
46
35
39
38
44

銅製品

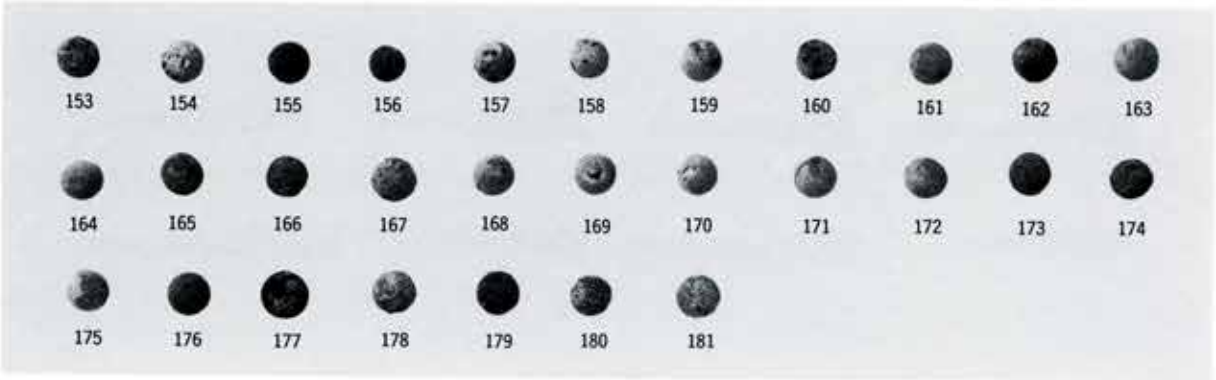

47
49
50
51
52
53
54
55
56
60
64
62
69
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
84
63
85
82
86
66
57
59
61
70
89
91
92
93
94
95
96
97

煙 管

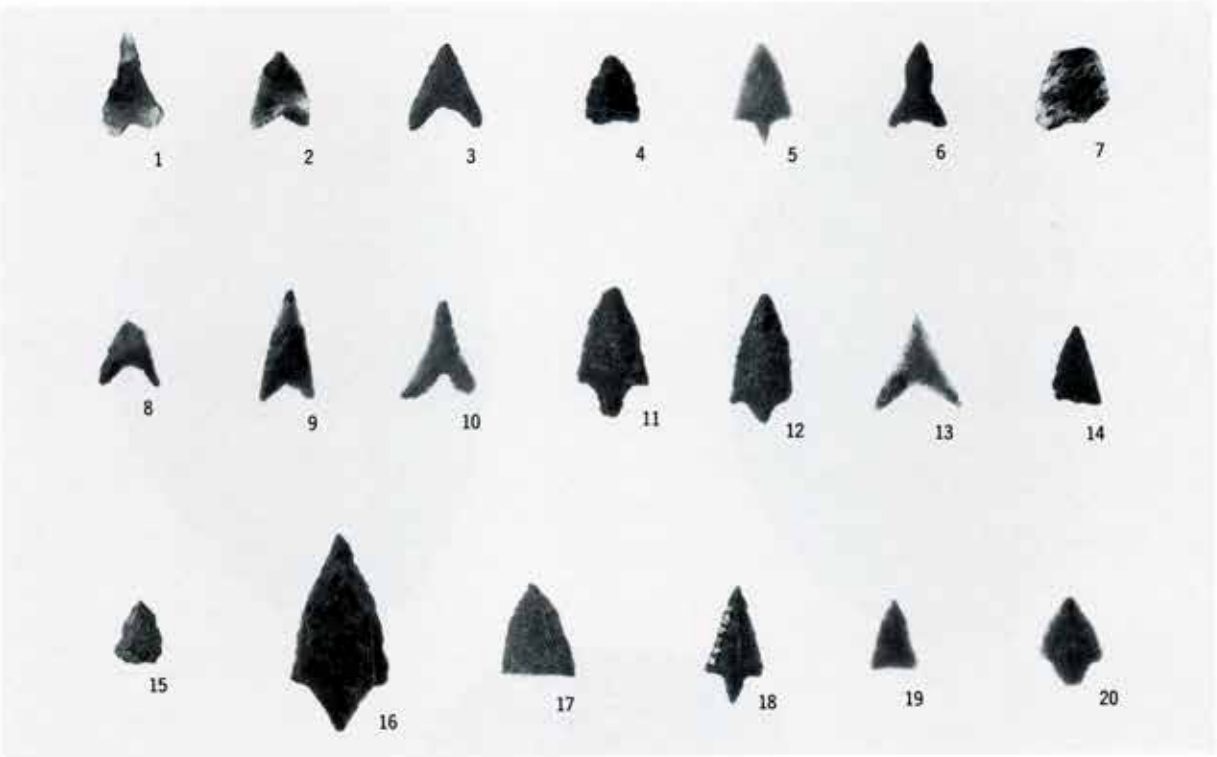
図版38


98
99
100
101
102
103
104
105
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
118
119
120
122
124
125
126
128
129
130
131
132
134
135
136
137
138
139
140
141
142
149
150
148
151
152

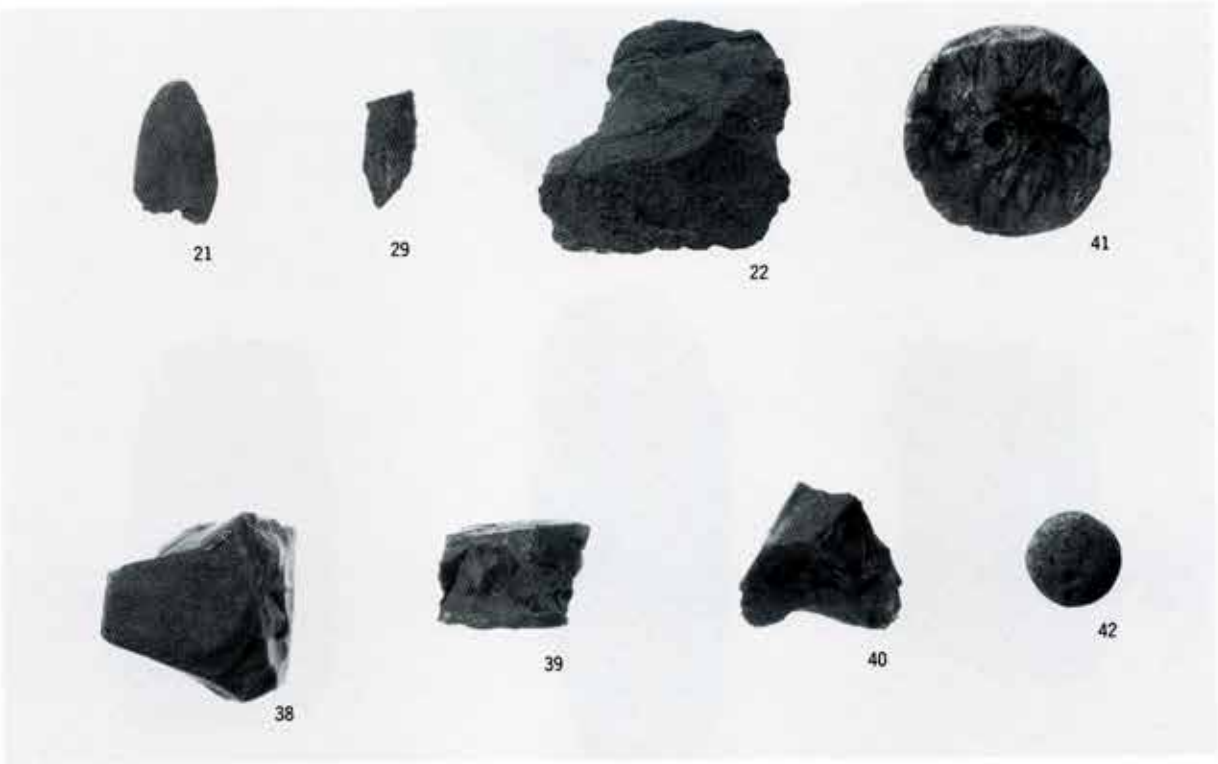
煙　管


153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181

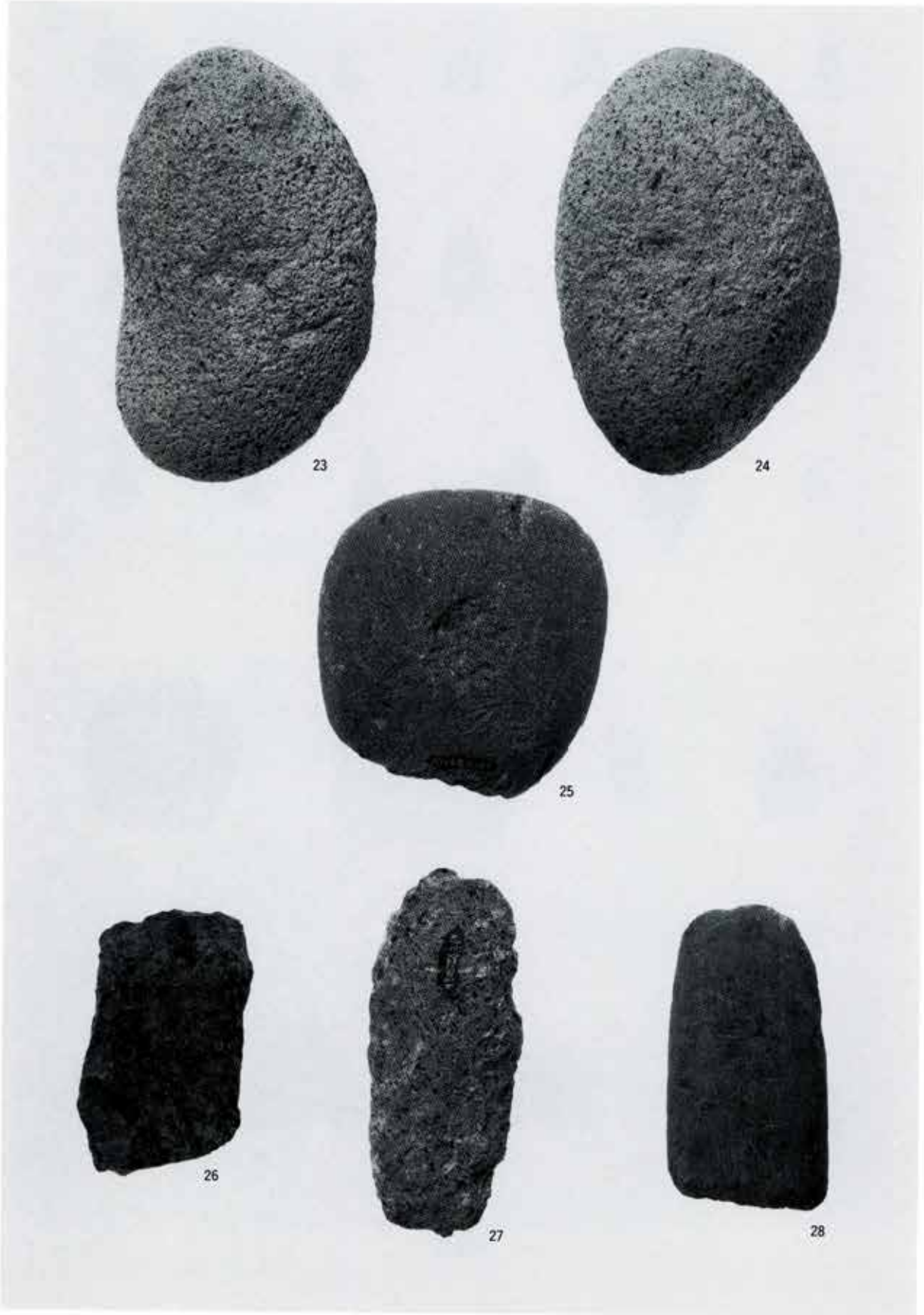
鉛　玉



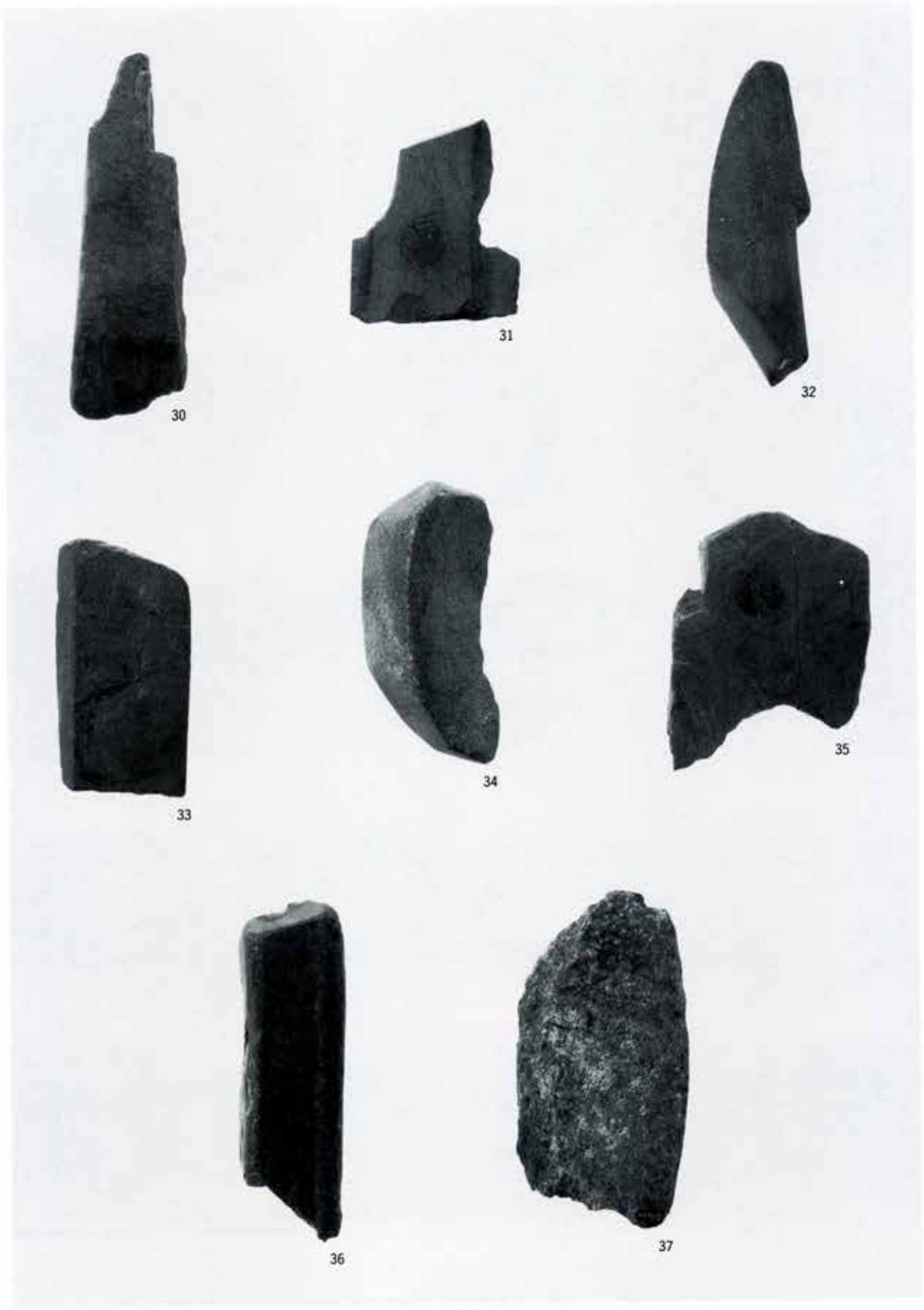
石鏃



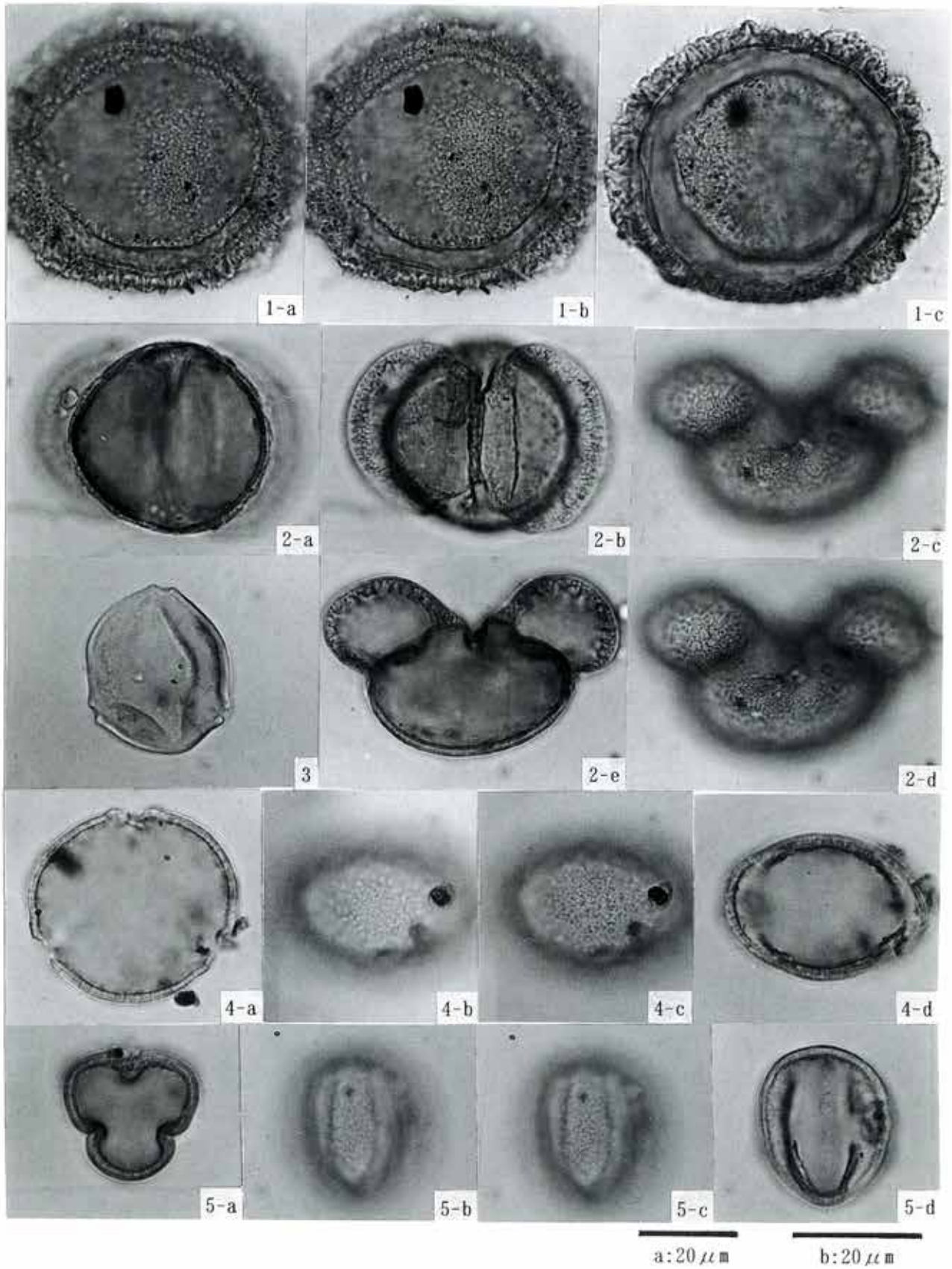
石製品



敲石、石斧

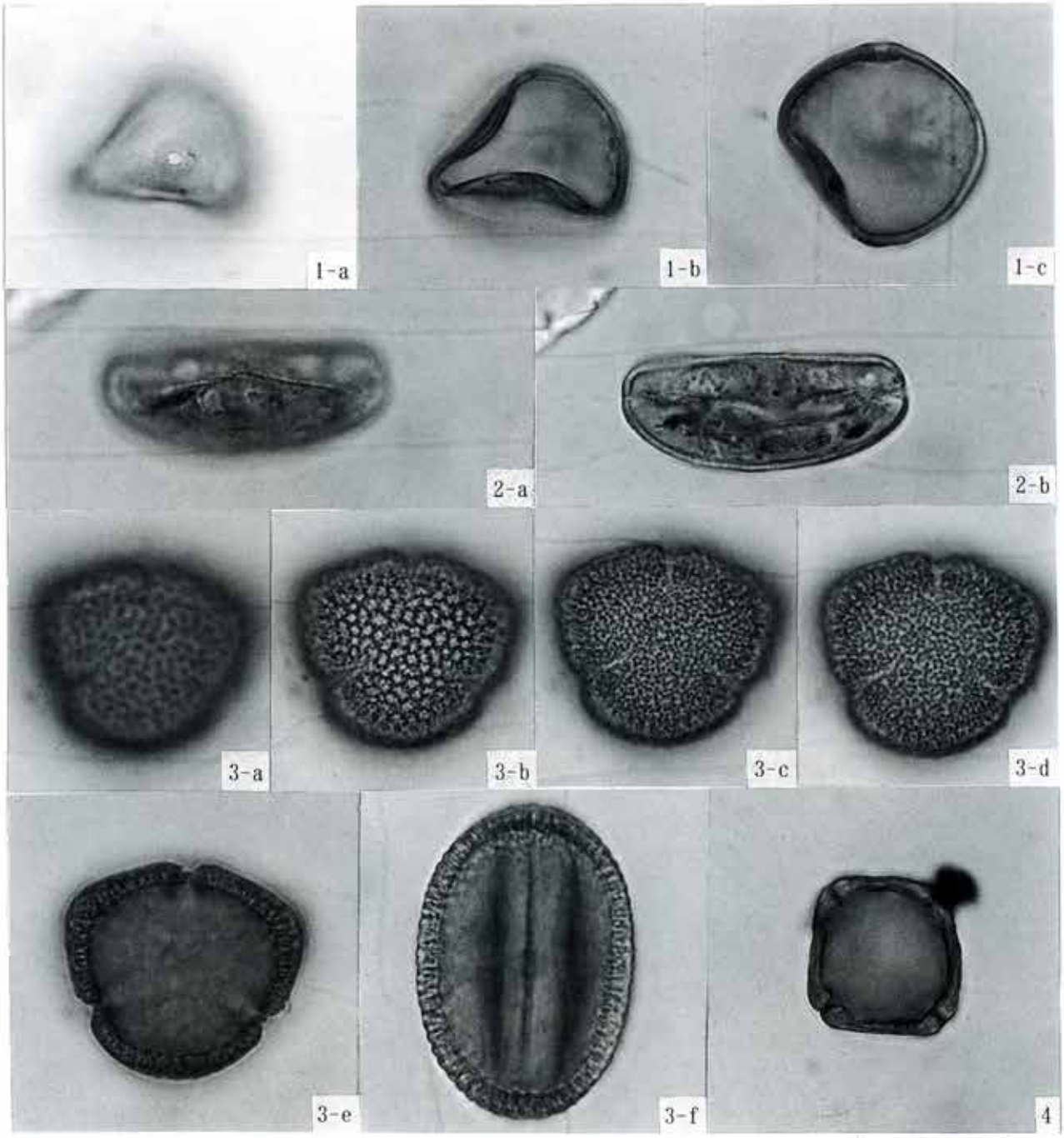


砥石



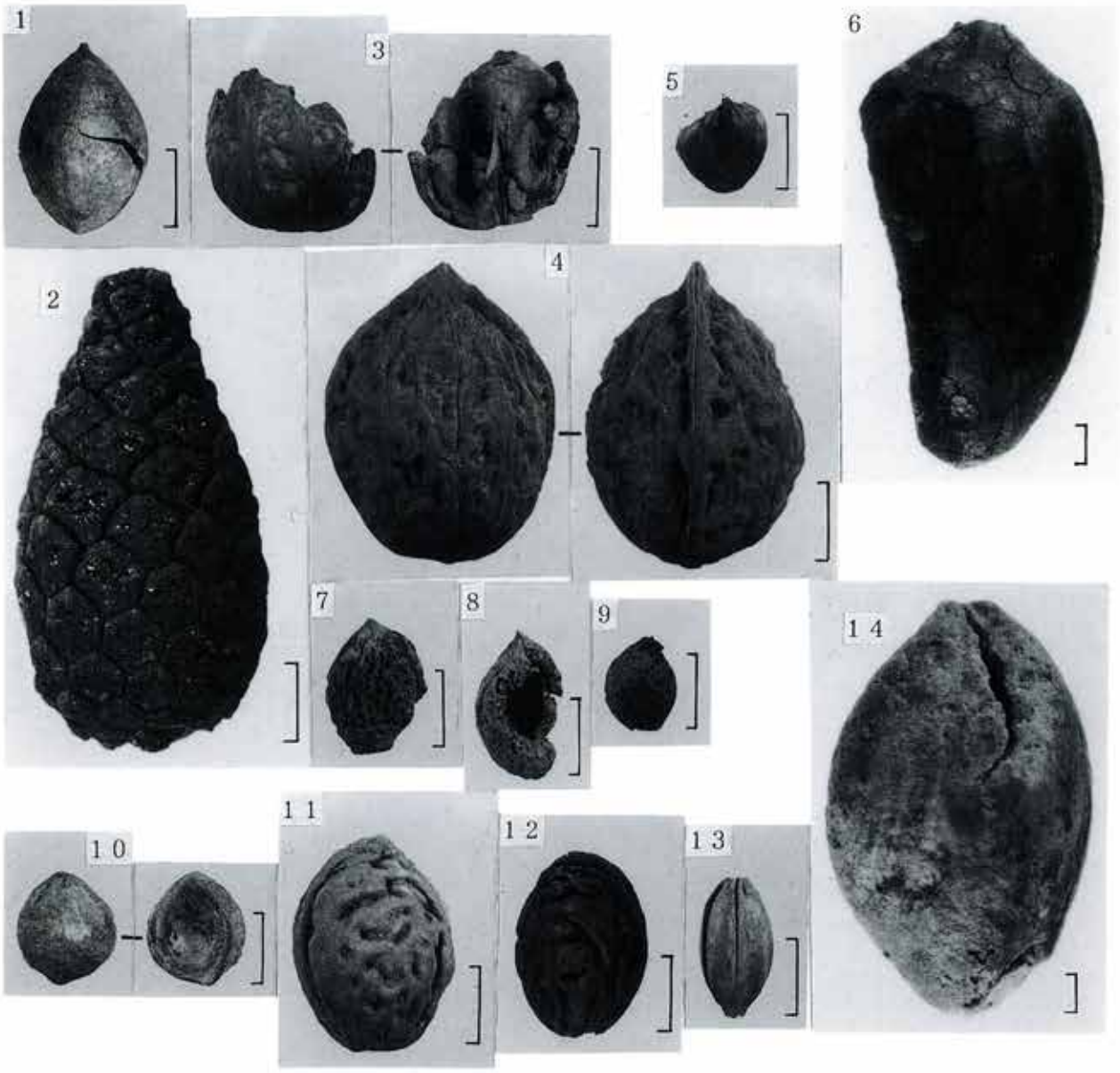
図版1　池尻・広見地区から産出した花粉化石

1：ツガ属、G23黒色土、PAL. MN　750
2：マツ属複維管束亜属、G23黒色土、PAL. MN　749
3：クマシデ属―アサダ属、G23黒色土、PAL. MN　753
4：コナラ属コナラ亜属、C29泥炭、PAL. MN　747
5：コナラ属アカガシ亜属、C29泥炭、PAL. MN　748
（スケール　a：1、2　b：3、4、5）



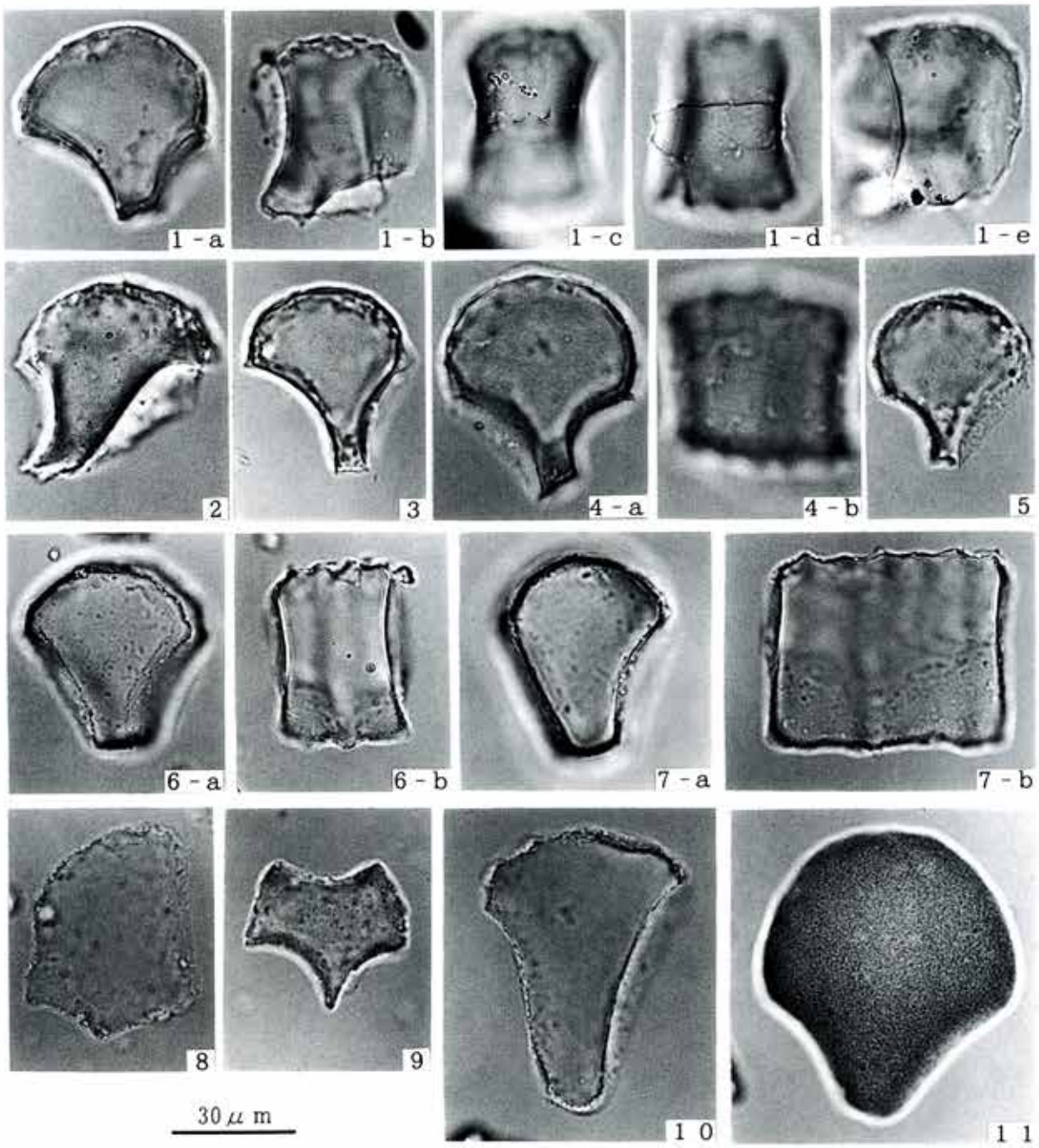
20 μm

図版２　池尻・広見地区から産出した花粉化石
１：イネ科、G23黒色土、PAL. MN　751
２：ミズアオイ属、G23黒色土、PAL. MN　754
３：ソバ属、G23黒色土、PAL. MN　755
４：アリノトウグサ属、G23黒色土、PAL. MN　752



図版3　出土した大型植物化石（スケールは1～5、7～13が1cm、6、14が1mm）

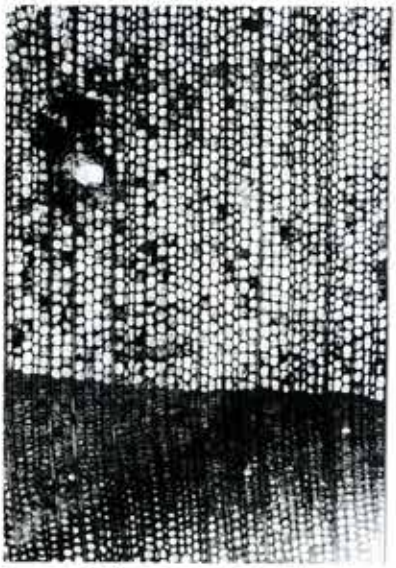
1．イチョウ、種子(III層、121)　2．マツ属複維管束亜属、毬果(III層、L4)　3．オニグルミ、半炭化核(II層、E26)
4．オニグルミ、核(III層、L4)　5．コナラ属、果実(II層、E28)　6．コナラ属、炭化子葉(IV層、E22)
7．ウメ、核(II層、E27)　8．ウメ、核(II層、E26)　9．ウメ、炭化核(III層、F22)　10．スモモ、核(II層、F22)
11．モモ、核(II層、E27)　12．モモ炭化核(IV層、G23)　13．センダン、核(II層、E25)　14．エゴノキ、種子(II層、H20)



図版4　西屋敷遺跡のプラント・オパール

1～5：イネ（1－a、2、3、4－a、5：断面、1－b、1－c、4－b：側面、
1－d：表面、1－e：裏面）
1：F22－2、2：F22－1、3：E24－1、4：F22－3、5：C29－2
6、7：ネザサ節型（6－a、7－a：断面、6－b、7－b：側面）　6：F22－1、7：F22－3
8：クマザサ属型（断面）　F22－2　9：シバ属（9：断面）　F22－2
10：ウシクサ族（断面）　C29－2　11：ヨシ属（断面）　E24－1

図版１　西屋敷遺跡　出土木材顕微鏡写真　　Bar:



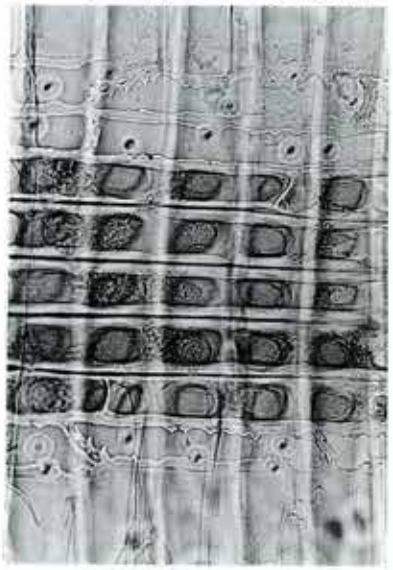
１ａモミ属　bar: 1 ㎜

No.39　１ｂ　同　bar:0.4㎜

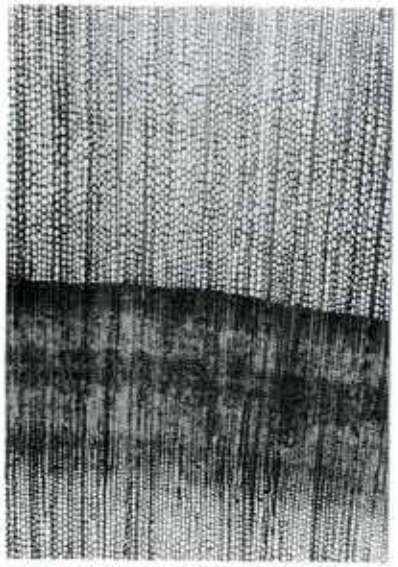
１ｃ　同　bar:0.1㎜

２ａアカマツ　bar: 1 ㎜

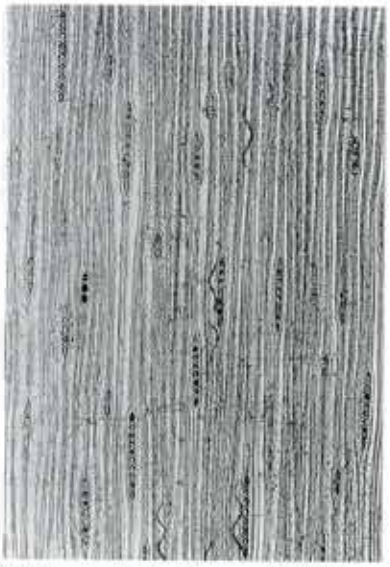
No. 4　２ｂ　同　bar:0.4㎜



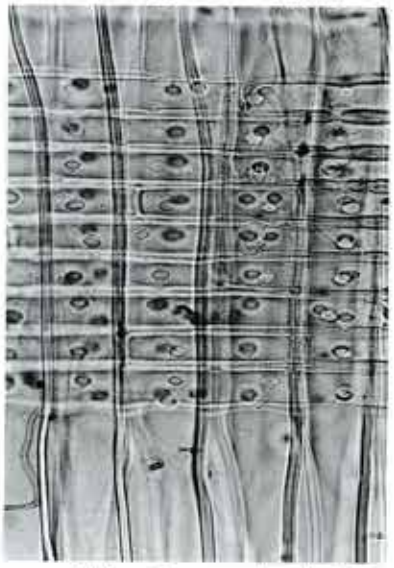
２ｃ　同　bar:0.1㎜



３ａスギ　bar: 1 ㎜

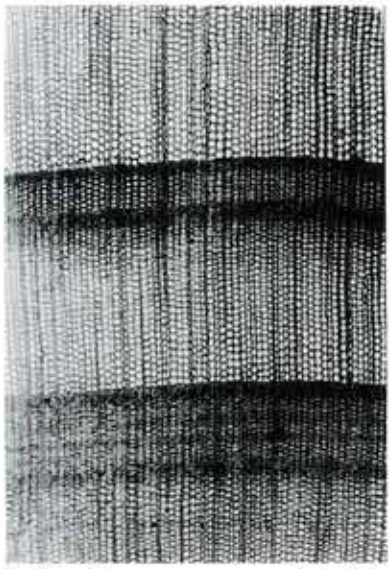


No.22　３ｂ　同　bar:0.4㎜

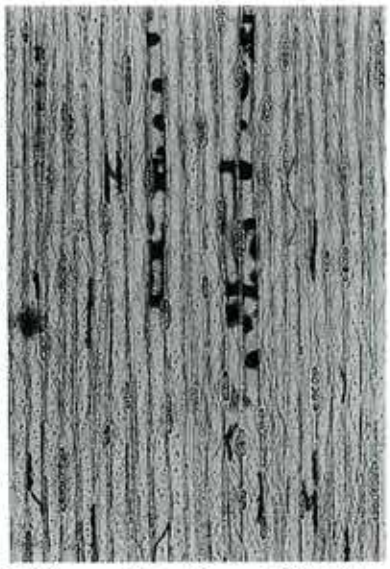


３ｃ　同　bar:0.1㎜

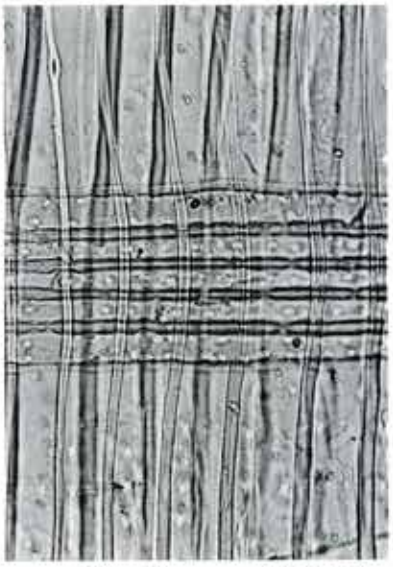
図版２　西屋敷遺跡　出土木材顕微鏡写真　　Bar:



4 a ヒノキ　bar: 1 mm

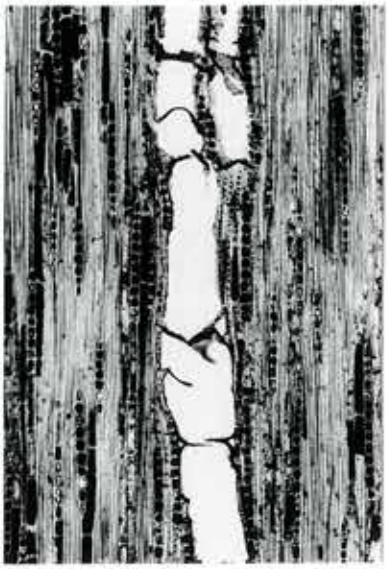


No.18　4 b　同　bar:0.4mm

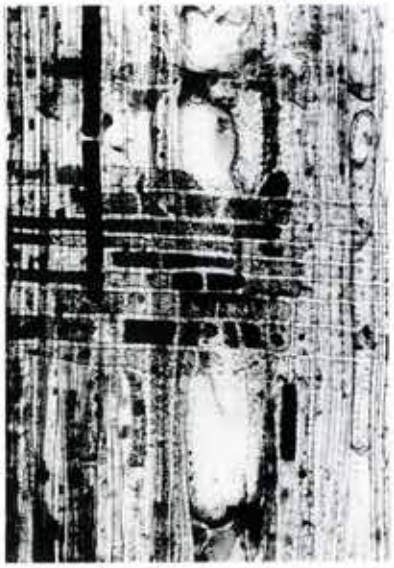


4 c　同　bar:0.1mm

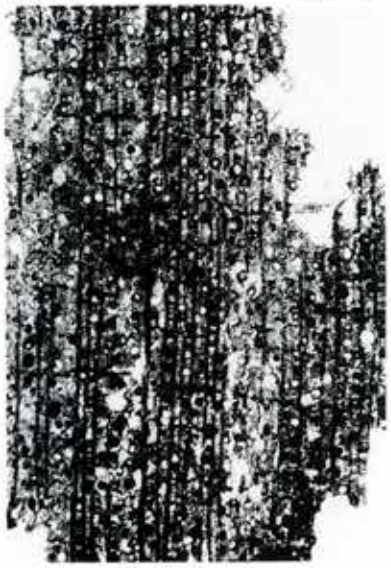
5 a クリ　bar: 1 mm



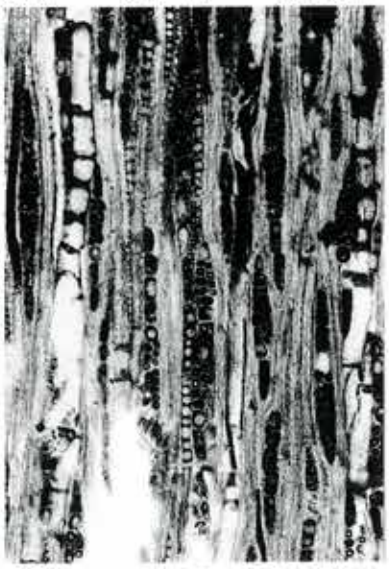
No.44　5 b　同　bar:0.4mm



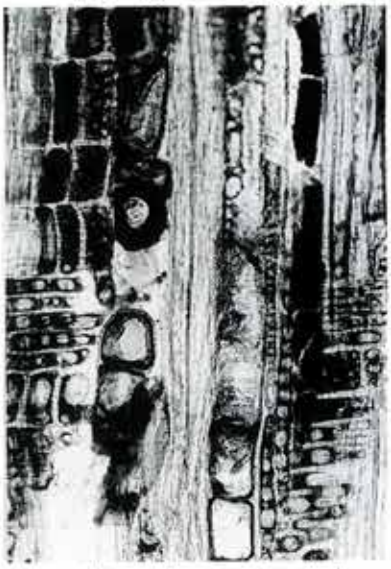
5 c　同　bar:0.1mm



6 a イスノキ　bar: 1 mm



No. 9　6 b　同　bar:0.4mm



6 c　同　bar:0.1mm

報告書抄録

ふりがな	にしやしきいせき
書名	**西屋敷遺跡**
副書名	東海環状自動車道建設工事に伴う緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター　調査報告書
シリーズ番号	第38集
編著者名	大橋弘志、小塩康真、武藤美和子
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター
所在地	〒500-8708　岐阜県岐阜市司町1（岐阜総合庁舎内）Tel058(264)1111(814)
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在名	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西屋敷遺跡（にしやしき）	岐阜県関市（ぎふけんせきし） 池尻西屋敷（いけじりにしやしき）	21205	08795	35° 30′ 50″	136° 53′ 50″	19960507 ～ 19970305	13,000㎡	東海環状自動車道建設工事に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西屋敷遺跡	水田跡	鎌倉時代 ～ 江戸時代	水田	土師器 須恵器 灰釉陶器 山茶碗 古瀬戸陶器 中国磁器 瀬戸美濃陶磁器 杭 櫛 銭貨 煙管 石器	中世水田遺構、近世水田遺構の検出

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第38集

西　屋　敷　遺　跡

東海環状自動車道建設工事に伴う緊急発掘調査報告書

1998年３月25日　印刷
1998年３月31日　刊行

編集・発行　財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市司町１（岐阜総合庁舎内）
印　　刷　西　濃　印　刷　株　式　会　社